
異世界を舞台にした冒険者と人外の迷宮物

suparagu8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界を舞台にした冒険者と人外の迷宮物

【Nコード】

N7090W

【作者名】

suparagug

【あらすじ】

異世界を舞台に、色々な人外や冒険者の生き様を描いたり、人外tueeeしたり、冒険者tueeeしたりするかもしれない話です。

迷宮探索もあります。冒険者たちががんばって迷宮を攻略したりもするよ。

現在はまったり進行、ちよびちよび進みます。

深い迷宮の底に潜むモノはなにか、冒険者とはなにか、

潜むモノは何を見て、何を決めたのか。

ネタには常に困っています。

厨二心をふんだんにちりばめてます。あしからず。

期待せず、ほどよい気分で読んでください。

10／6 23..10 とりあえずこれしか書けませんでした、
上げておきます。

少々間が空いてしまい申し訳ありませんでした。

何回書いても、全く慣れる気配がしないのはどういうことなのか。

この世界について(前書き)

よくある迷宮ものです。
適度な気持ちでお楽しみください

この世界について

・まず始めに

魔惨迷宮には一つの伝説が存在する。

「彼方に潜みし悠遠の、時を過ごせし強大な

信念の獣が、心の強き者を待っている」

いつからかそう伝わっている。

この伝説の真偽を求め、幾人もの冒険者が、迷宮の深部へと潜っていった。

しかし未だ誰も、この伝説の真偽を、いやそもそもこの伝説が何を指し示しているのか、その答えに辿り着いた者はいなかった。

曰く、最高位モンスターが始原の宝物を守護している。

曰く、絶滅寸前の竜族が、最後の相手を待っている。

曰く、かつての魔族の軍団長が、人間への復讐の牙を研いでいる。

曰く、伝説の存在（それがどんな伝説かは誰も知らないが）が勇者を待っている。

数多の時が過ぎ。しかしこの伝説は、所詮伝説であると見なされる

ようになった。
なにもないし、なにも見つからない、糸口さえも見えず、過ぎた時は400年。

時は、新暦1608年。太平とは言えぬが、ほどほどに生命の栄えている時代。

新しき神話が、既に当然の神話として伝えられ、信仰されている時代。

精霊種が亜人種がそして人が。力を合わせ、時に敵対し、しかしなお発展する時代

これはそんな時代が舞台である。

・神話

この世に神はある。

世界に満ちる「大いなる力」こそはその現れである。

そは偉大なる者。そは至高の存在。絶対傍観者、全ての始まりたる

内奥の頂。

無そのものであり、しかし有であるもの。一にして多。多にして一。絶対矛盾。しかし確かに存在する万物の愛。玄妙なる原初の力そのものであり。

意志を持ちながら意志をもたない。絶対なる高み。

即ちそのものの充満からこぼれ落ちた「力」こそがこの世界を形作り。

生命を形作った。無限にして有限。

信じぬことは自由であるが、しかし確かに存在する。極限の流動。やがて万物が、やがて法則が、やがて生命が、生まれ出でる。

神は見るだけだ、人は救わない。神は在るだけだ。

しかしそこから零れたものが偶然、形を作った。

そして、神と仮称できるその源よりも遙か低位で、より手前に位置する一つの空間。そこに世界は形作られた。

これを絶対神という。

かの者は遙か高み。

人を認識することなどできはしない程の高み。

人間が肉眼において細菌を認識できないのと同じように。

彼はそこにあるだけだ。

彼からこぼれ落ち続ける「力」は今も世界を取り囲み、人間を助けてはくれるけども。

しかし人間にとっても彼は遠すぎる。

生命の機会を与えてくれたことに感謝はするが。それは遙か昔日の先祖への祈りと同程度には軽い。

この世界において、神とは絶対神のことではない。

神とは直接人間に関与できる。より身近な、より親しい存在のことを通常指す。

多神たち。人の住む界よりも一つ上の界に位置する。形と限界を持つ存在。

絶対神の力を概念的に象徴する、力持つ存在。

彼らは傲慢であった。一つ下の界に住む生命を操り、動かし、遊び、墮落させ。

時に、惑わし、殺し合いさせた。希に人は神に反抗しようと企んだこともあるが、

それさえも稚児の遊びとして、弄んだ。

大いなる百の神。

しかし彼らは、旧神としてこの世を去ることになった。

いかに強大とは言え有限の存在。

一つ下の位階であり、階列に位置する人間では到底叶わないとは言え。

しかし滅びることも十分にあり得る存在であった。

旧暦6753年 一人の者が立った。勇者を母に魔王を父に持つ新

しき皇帝『有角姫』

人間界を統一したその少女は、自らに従う九人の、人と精霊人（九烈士という）と共に

傲慢にして強大な旧き神々へと闘争を挑んだ。

人の魂とは「力」により構成される。

「力」とは絶対神の欠片の欠片。

意志を持つ生命が、覚悟と修養を極め、ただ一心に願ひ、考え、戦い、想うことにより、人はより高い位階へとその意識を、その肉体を置くことが出来る。

なぜなら「魂」は人の持つ「力」であり、上方の世界への入り口であつたのだから。

こうして『有角姫』とその仲間たちは、人の界よりも上界に住まう神と伍することができるようになった。

しかし戦いは捗らない。同じ帝国の部下、仲間、民衆が旧来より人に秩序を与え、人を見守ってくださった神々と戦うことなど出来ないと訴え反抗したのだ。

『有角姫』は憤った。そして『有角姫』は人とともに戦うことを諦めた。

そして彼女たちはそのときに人間と争っていた存在——所謂魔王軍の元へと向かった。

亜人に魔獣、魔族に怪物。しかし彼らは『有角姫』と手を組んだ。

それは彼女に惚れ込み、また神への恨みを持っていたものが沢山い

たからだった。

こうして広大な魔王の領地を周回し、優秀な戦力を彼女は集めた。

最終的に彼女とともに戦った闇の住人を『魔軍三六将』と言う。

地上に墜ちた元神やら、堕天使、意志持つ精霊から鬼王に魔王。竜さえも加わった。この『魔軍三六将』と『九烈士』を従え、『有角姫』は神の住む世界へと侵攻した。人を道具と見なすものとはいえ、命と意識を持つ者。戦いは凄惨を極めた。

後に天上戦争と呼ばれるこの戦い。

時に竜が地に墜ち。小鬼が自らの兵器とともに爆散した。騎士の片腕が落ち。

蜥蜴人の尾が断たれ。竜人の喉は潰された。

しかし意志と総合力に勝った『有角姫』たちはやがて三日三晩続いた、それこそ熾烈を極める最終決戦に勝利を納めた。

この後、神は一人残らず殲滅された。

幼神や老神の区別なく、肉片の一片も残さず消し飛ばされる勢いであった。ただそれを構成していた力と肉片は地上へと落ちていった。これが後に魔物を生み出し、混沌の迷宮を各地に生み出すこととなるのだが、それはここではおいておこう。

『有角姫』たちは地上に帰ってきた。天上は彼らの居場所ではない。彼らは地上の全生命に神の死を伝え、自分たちは世界の奥深くに潜り眠りに着くことにした。

一部のものは地上を彷徨することにした。

人々は嘆き、憎み、憤った。そして諦め、開き直り、生きることにした。

『有角姫』を初代とした帝国は新たな神を置くこととした。
反逆の神、闘争の神『有角姫』ネーベンハウス神の誕生である。
彼女を至高として、『九烈士』を新神とした。

『魔軍三六将』は神達の僕とされた。新暦の始まりである。

以降帝国は1000年の長きにわたり存続し、人々は旧き神を忘れ、
新たな神を崇め祈り奉ることが当然となった。

期せずして新たな神々となったことに彼らは苦笑しながらも、
世界のどこかで、今も続くこの世界の営みを見ていることであろう。

・冒険者

あるときその迷宮は現れた。

深く、危険で、異種の生物や怪物、即ち後に魔物と呼称されること
になるものたちの巣——異界の迷宮ダンジョンの出現である。

莫大な力を持った旧神の肉体やその欠片は地に墜ちた後、それに適
応し、根付き、新たな生命を作り上げ、墜ちた地を怪物の住まう迷
宮としたのだ。

地上に墜ちた旧神、旧神に仕えていた天使や堕天使は、人間の住ま
うこの世界へと深い憎悪を抱いている。

いつの日か天上に帰り、この世界を崩壊に導くという強い望みを抱
いている彼らは、

無限に続く憎しみをその手に、力を蓄え、武器を作り、魔物を鍛え、
時に魔族や人間さえも取り込んで各地の迷宮を要塞と化した。

新暦1022年に迷宮近くに存在したある都市が攻め滅ぼされた。

命ある者は家畜へと落とされた。あらゆる生命の尊厳への冒瀆が遊技として為された。

100万の肉人形は、やがて100万の肉塊へと変貌した。

これが帝国首都崩壊である。

32代皇帝以下高官軍部問わず全てが灰燼に帰したこの事件に世界は震撼した。

それを為したダンジョンへの恐怖。

そしてその他のダンジョンへの危機感が高まるのは時間の問題であった。

帝国は崩壊し、諸侯が独自に国を立ち上げた。

都市は独立し、種族は連帯した。国家も連携し、そのときの魔王領さえもそれに手を貸した。

亜人が魔獣が、騎士が神官が、耳長族が小人が、連帯し、協力した。

世界は探索され、脅威は分析される。

これら異界の迷宮は27個存在することが判明した。

迷宮は管理されなければならない。

世界はこれを一級の脅威と認定し、取り囲み監視することにした。時に迎撃する迷宮軍と戦い、時に攻略を始め、時に失敗した。

そして27個の迷宮都市が完成した。

迷宮を監視し、情報を分析し、攻略し防備する。

危険な都市である。

都市において冒険者は誕生した。

軍による攻略には限界があったのだ。

練度の問題。能力の問題。規模の問題である。

迷宮は強靱だ。強力だ。

生半可な兵士や儀式家では容易く一蹴され、骨の髄までしゃぶられることとなる魔窟だ。

数で押そうにも、迷宮は狭く、入り組んでいて、なによりも奸智極まる罫や敵の策戦が無数に存在した。

このことから国による攻略は危険であり、また向いてもいないということが判明した。

少数精鋭の連帯。

思えば神々と戦った新神たちも、最初是一个の生命であった。

そうして今この世界を生きる者たちも、

生命の可能性を信じ、自らの実力に自信をもった存在を訓練し、研磨し、

それを鋭利な刃として迷宮の探索を行わせることにしたのだ。

迷宮から出てくる敵への備えとして軍が駐屯し、人が集まり、商いが行われ。

迷宮に潜む魔物の肉体を素材とした道具屋や鍛冶屋が集まり。

武器屋が出来、自らの戦いの技量に自信のあるものが迷宮の攻略に乗り出した。

それは始まりであった。

地図を作り、仕掛けを解き、時に宝物庫から神秘の武具を発見し、情報を交換し、

敵を倒して部位を売り、時に殺され、捕まり、敵の栄養となる。
そういった日常の。

そこには危険がある。栄誉がある。富がある。
旧神の膨大な力は、危険を再生産し続けている。迷宮は伸張し、管理する者が策謀を働かせる。

そこには危険がある。名誉がある。富がある。
光に集う蛾のように、荒くれ者や腕自慢、日陰者や命知らずが我先にと迷宮へと集まるようになる。

そして定住する者も現れ、住居が建ち並び、インフラは整備され。
冒険者は職業として正式に認知され、組合が出来、酒場が溢れ、人々はまた集まる。

そう、ここは危険と栄誉が背中合わせに存在する迷宮都市。
無謀にも迷宮へと日々侵入するものを、人は冒険者と呼ぶ。

冒険者

1

海の底のように深い、岩の海の底。

一匹の巨大な生命が眠りに着いていた。

夢に見るのは遠い昔のこと。

そこには戦いがあり、友情があった。

あらゆる生命の尊厳を賭けた、と自負した戦いがあった。

巨大な生命は、表面積100?にも及ぶ自らの甲羅の中に意識を眠らせ。

岩の如きその脚も、鋼の如きその体も、今は死んでいるかのように眠らされている。

夢に見るのは遠い昔のこと、遠い遠い昔のこと。

無音、鼓動の一音さえこの巨大な生命が眠る室には響かない。

彼はなぜ眠るのか、

地底の一室には光も届かない。

2

冒険者バル・ファルケンが第八迷宮都市・魔惨迷宮において名の知れたシーカーである。

個人単位、数人単位の武を極限まで研ぎ澄ませる試みが、迷宮攻略と同義であったこの600年間。

迷宮探索のためのノウハウの蓄積、攻略法の蓄積、定石の研究。

職業、戦闘スタイル、魔法、魔導の選択、用法、連携技術。

魔具や武装の方向性、異能研究、魔物の生態、罨、迷宮自体。

そういった迷宮攻略術の600年の研鑽された知識・技法その全てに精通した、正に冒険者の中の冒険者という存在である。

年齢は50、冒険者として肉体的に油の乗った時期は過ぎているものの、その知識、経験、技量においてはまず間違いなく

魔惨迷宮において最も信頼できる前衛アタッカーの一人である。

白の混じった髪をを短く刈り揃え、太く蓄えた髭を歪ませ、その熊の如き体型を揺らして

好々爺然とした笑みを浮かべ、魔惨迷宮の高位冒険者御用達の酒場で給仕の尻を撫でながら

若い冒険者に助言を与える姿は、魔惨において探索を行っているものが、誰しも必ず目にする光景であろう。

そのバル・ファルケンが迷宮で未帰還者認定された事実は、多大な衝撃を関係者一同に与えた。

魔惨迷宮全56層の内、50層地点で、高位冒険者グループ『海色の天理』に目撃をされたのを最後に消息を絶ったのだ。

予定帰還時刻を240時間越えた時、ようやく現実を受け入れたといった様相で、

迷宮管理組合は、最高位冒険者バル・ファルケンⅡノースの未帰還者認定を発表し、この事件は迷宮全体に周知された。

ただしその未帰還を早くも知っていた冒険者の間では不安を抑え、情報収集、分析、対策、予測、ありとあらゆる研究が始まっていた。

「宝具」を幾本も所有し、儀式小家とも呼ばれる魔導さえも使いこなす最高位冒険者が、帰還しなかったと言うことには
勿論理由があるのだ。それは当人ではないので完全に知ることは当然ではしない。

しかしその理由を探る試みを絶やしてはいけなかった。

死と隣り合わせである冒険者という稼業、あのバル・ファルケンをも飲み込む大きな脅威を迷宮側が思いつき、用意したというのならそれを考え、予測し、警戒に努めなければならない。

そのことが偉大な冒険者への弔いにもなるし、多くの情報を冒険者にもたらしてきた彼が最後に、

彼自身が帰還しないということによってもたらした最後の情報であったのだから。

「だから主が出てきたんだってば！」

「いや新しい罠では」

「強力な魔物の新造か、もしくはあらたな特殊部隊をあちらが編成したか」

「そ、それって練度の高い対冒険者用の部隊が出たってことですよね……」

「もしかしたら新たな宝物を装った可能性もあるのう」

「迷宮配置ではありませんか？ 隠し部屋、あるいは隠し通路による強襲戦法」

「中ボスみてえなやつがいたんじゃないの？」

「毒かもしれませんね」

「解毒に関しての名手ですよバル老は……」

しかし議論は糾合する。

答えは見つからないまま、冒険者の合間を無数の錯綜した思案が駆け巡る。

初心者から、最低位、低位、中位、高位、最高位、南方の迷宮都市

風に言うのならば

FからAまでのランクの冒険者を問わず、あらゆるダンジョンにおいて今回の事件のことが話題に挙がり、

人間の想像の限りを尽くしたあらゆる種類の『犯人』像が語られた。しかし結局、警戒に留まるのだ。

なぜ彼は帰ってこなかったのか、それは誰にも解らなかった。

3

最高位冒険者ロード・エーサーベインはその日バル・ファルケンの死因を調べるため、40階にあるポーターからバル・ファルケンの死んだ50階へと向かっていった。

速やかな情報の収集は、冒険者の命綱である。

金の長髪をたなびかせ、薄暗い灯のみを頼りに、暗闇を駆け続ける。身に付ける武具は腰に帯びている量産型『貯蓄；刻印型』の魔導長剣と、背には黄金に輝く家宝の刃。

銀色に輝く「力」によって構成された軽鎧は、灯を受けて鈍く輝いている。

シュン、ザンツ、ザザツ。

音になる。その数瞬の後、人型の天使系魔物、鬼系魔物、粘状系魔物の死体が

ロード・エーサーベインの往く路にその屍体を晒した。

居合い系闘法であるのか、何時その刃を抜いたのか、それさえも分からない一種の絶技が惜しげもなく振るわれる。

「……弱いな」

そう不満気に呟いたエーサーベインの貌には冷笑と苛立ちが現れていた。

高慢と実力の高さを比例させているかのようなその傲慢な性格は、冒険者仲間の間ではいたく不評である。

そしてまた、エーサーベインも多くの冒険者を自分以下として見下していた。

実力こそ全て、高貴にして優秀な自己を越える戦闘力は迷宮の最高位冒険者の間においても殆ど散見されない

そう常日頃から考えていたエーサーベインをもつてしても、その実力が本物であることに疑いを挟まない冒険者。

それが先頃話題になっているバル・ファルケンⅡノース最高位冒険者である。

ロード・エーサーベインはその死を信じていない。いや信じたくないのだ。

だからエーサーベインは誰よりも早く駆ける。

その死の報を虚偽とする為に、もしくはその死を確信するために、彼は走る。

歳は離れていたが、この都市における数少ない友人の為に、この高慢な冒険者は走り続けていた。

脚を止める。47層の三番階段だ。

すぐさま48層へと駆け降りるロード・エーサーベインの瞳には熱情と激情、曇りなき怒りのみが存在していた。

「ふんっ！！」

シャッ、シャッ！と蛇の鳴くような剣閃音が、屍体を製造する。

刃は、細身とはいえ鍛えられ上げた自慢の筋を、最も矛盾なく使って放たれる。

ザンッ！ ザンッ！ シャンッ！ シャッ！ キャシャンッ！
夥しい刃剣の連打、無駄なく、雑なく、淀みなく、ともすれば美しい剣の軌跡が、

戦慄すべき速度で放たれ続ける。

蛇首を二つ持ち、屈強な人間の肉体を持ち、背に白い羽を持った魔物の集団は、

その戦闘法でもある集団の槍撃も、魔導…詠唱式を使う間もなく、世界に満ちる「大いなる力」の流れへと帰っていく。

階段を降りてすぐに待ち伏せるかのように、列を組んでいた30人程の蛇頭天使の群れは、幼児が瞬きをする間に全滅の憂き目にあっていった。

一切の障害を許さない、とでも言うような、疾走剣戟により、通路を占拠していた迷宮の住人を

「力」に返して、それでも休むことなく、黄金騎士エーサーベインは走り続ける。

『黄金剣マクシムス』先祖伝来の鋭い刃を持った神器は未だに抜き放たれていない。

この調子で進めば、30分で最後にバル・ファルケンがその姿を目撃された迷宮50層へと辿り着くであろう。

そういった速度で、進み続けるエーサーベイン。

この48層は一応の最前線ではあるものの、要所要所にこちらら仕掛けた罠があり、補給設備まで設置されていて、

どちらかというと冒険者側の階層であり、その上、大まかではあるが、ほぼすべてのフロアが探索され尽くした階層でもあった。

エーサーベインが足を止める必要はどこにもなく、このまま行けば黄金剣を振るう機会もない、筈であった。

48層西南にある階段から東北東の方向へ通路を驀進^{ばくしん}するエーサーベインは、

一つの違和感を感知した。

それは彼の冒険者として培った直感が訴える、強烈なまでの違和感であった。

壁の色。壁の匂い。壁の形。

走りながら分析する。

どんな情報でさえも、バル・ファルケンの事件とは無関係とは思えなかった。

もしかしたら50階から上に戻る途中でなにかに襲われたのかも知れない、あるいは巻き込まれたのかも知れない。

そういった意識と、怒りによる天才をもった一流の冒険者が極限まで感覚を研ぎ澄ませ、

一切の違和感も逃さないという態度で、辺りを視ていたからこそ、発見できた違和感であったのだろう。

エーサーベインは立ち止まり、振り返る。

そしてまた走り出す、違和を感じた地点に戻るためだ。

――見つけた。

そこは本当に小さな違いであった。

迷宮の薄暗い通路の細い横道。

その先の行き止まりの壁、その一部分の範囲が他の壁と少々違った材質で出来ていたのだ。

それは例えるなら、建材により作られた壁の一部に、元々そこにあった岩石を削り磨いて壁らしく装っている場所がある。

そういった体裁であった。

48層へ人類が辿り着くようになってはや50年。

ここは未だに前線であり、細やかな探索には向いておらず、また灯

りもこの通路の奥には届いていなかった。

なによりも、奇妙なほどに、その壁は、そうあるのが当然といった風情を醸し出していたのだ。

それらの要因の複合が、50年の時をもってしてもこの違和感の壁を発見させなかったのであろう。

些細な違和感だ。

こういった細やかな迷宮内の仕掛けは大抵完全に冒険者が知り尽くした階層において

前線に向かうような冒険者でなく、細部を探索するような冒険者達が見つけるようなものだ。

しかしエーサーベインにとって、常時であつたら見逃していた、あるいは報告だけにとどめたであろうこの小さな壁の違和感も。

今回に限ってはそんな些末なものには見えなかった。

もしかしたらこれは魔法を使った仕掛けかも知れない、あるいは魔導を使った仕掛けか。

ここを秘密の入り口として、奇襲や移動に魔物が使っていないとも限らない。

なによりもこの先に、あの敬愛すべき友人であるバル老の亡骸が雑然と置き捨てられている姿を想像したら。

エーサーベインは迷わなかった。

背に背負う『黄金剣』を抜く。

神器『マクシムス』

魔導を用いて作られた魔具「魔導器」

魔法を用いて作られた魔具「魔法器」

その両方の魔具の技術を使って作られた器。

それこそが「神器」

黄金に輝くその長剣を顔横で、刃を寝かせて構える。

刃先にあるのは当然、壁。

大氣中に満ちる大いなる「力」
それに干渉する術を魔法と言う。
別名を儀式大家。

生命が皆所持しているもの「魂」
それを器とし、その内に蓄えられた大いなる「力」
それに干渉する術を魔導と言う。
別名を儀式小家。

前者は後者よりも難しく。その術者の数は後者とは比較にならない程に少ない。

儀式大家は世界の「力」を使う術である。それを概念として定義付け、世界に満ちる絶対神の血流とでも言うべきその力を理解し、体感し、共感し、それがなんであるか視ることができて始めてその力を借り、操作し、偏向できる。

それに対し儀式小家の力とは、自らの内にあるもの。
つまりは自らの肉体の延長であるのだ。

当然、その難易度は、外よりも簡単、ということになる。
(とはいえ、その操作にさえも才というものが必要になるのだが)

この基本的な原理を利用して、個体に応用したものが魔具と言える。
う。

いま、エーサーベインが構える刃は、儀式大家の魔具技術である刻印法により、所定の方式に従い外に満ちる大いなる「力」を、
予め刻印によって定められている定義に従い、操作し集力し始めていた。

『光』の概念を、刻印に従い集める。 刃は黄金を越える光を湛え

始める。

迷宮に満ちていた中途半端な闇は、光によって払われた。突如に現れた眩い光源に迷宮も動揺しているように見える。

次に、構える剣に内蔵された器に、その「光の力」が貯蓄をされる。儀式小家の魔具技術である貯蓄法である。

本来は、人間の内なる「力」を外に保管し溜めておく目的で使われる。

力は集められ、溜められる。

エーサーベインは儀式大家、つまりは魔法を使うことは出来ない。彼に出来るのは自らの内。限られた器にある「力」のみだ。

もちろん瞑想は欠かしていない、その器は瞑想により大きく高められている。

だが、儀式小家では出力に限りがある。威力に限界があるのだ。

儀式大家には限界はない。力は全ての源から溢れ出るため、時間が経つか、場所を変えれば、幾らでも

しかも比べものにならないほどの多様性と威力をもって「力」を使うことが出来るのだ。

だから予め儀式大家でもある鍛冶屋に刻印を刻ませる。

それはそのままでは細やかなコントロールも出来ず、定められた力しか発動できない『魔法器』に過ぎない。

そこで一度その力を貯蓄する。

エーサーベインは目を瞑る。

黄金剣の器に力は充分に満ちた。腰をより深く沈める。

黄金剣に彫られた刻印と交差するように彫られた紋章を意識する。魔具において最もありふれた、そして何よりも汎用性の高い技術。儀式小家の魔具技術、紋章法。

内側の力を物体に記された紋章に沿わせ流し込むことにより

その紋章に従って所定の効果が発現し、発動する技術。
内側の力をそのまま詠唱と想像により構築する詠唱法よりも簡素で
便利な、

儀式小家の基本技術。

魂を想う、器を意識する。力を引き出す。

黄金剣に刻まれた紋章に「力」が流し込まれる。

そしてまた、エーサーベインの身に付けていた鎧と籠手に刻まれて
いた溝——紋章にも光が宿る。

莫大な力を、一度蓄え、その上で指向性を持たせ、より精密に「力」
の収束を操作する。

光は集まり、溜められ、再び放たれる。

「——起動！」

エーサーベインの叫びとともに光の奔流が、剣より迸る。

光線。熱線。皎々と光輝を膨らませ、一条の指向が、壁へと走る。

刹那

爆音が、階層に鳴り響く、崩れる音。

階層全体を、いや迷宮全体を揺らす轟音。

辺りは粉塵に包まれている。

未だに光を残している黄金剣を握りしめ。

右腰に帯びている魔導長剣の柄に手を掛け、

目前、先ほど自らが大量をぶつけた小通路（神器の一撃により既に
小とは言えぬ程に幅が削り広げられているが）

の先。違和感の元であった変質壁があった場所を睨む。

「――あたりかつ！」

そこには穴があった、光線の熱により融かされ空けられた穴が。しかしその先、遙か先、そこは穴ではなかった。

開けた場所。つまりは部屋。隠し部屋だ。

判断。推察、思考、決断。

一連のプロセスを1秒で済ませ、エーサーベインは駆け出す。

先ほど止めた前進を、再びやり直すかのように、未知の穴蔵へと突撃する。

意識する――足、紋章、力を内より引き出し紋章へと送る――紋章は光る、効果の発現――加速の力を発現する。

意識――足、紋章、導力――発動、効果発現――加速――二重。

さて、どうなるか

3

そのとき。巨大な生命は、数百年ぶりに意識を再起動させた。

深い深い、地の底に近い、闇の中の一室。
太古の皇帝の墳墓の如き、一室に鎮座するその巨体は、力を感じた。
なかなか見事な収束された「力」が、この部屋に向かって放たれた
ことを感知したのだ。
警戒、警戒、肉体は固まりきっている。
今は何時だ、此処はどこだ、何が起こった。
部屋に空気が流れ込んでいる。
つまりは、侵入者だ。それに思い当たる。
来る。侵入者だ。
蒼色の巨体を、まるで青銅の塊にしか見えない、その肉体を警戒さ
せる。

4

走り込む、警戒しながらの驀進。
自らが黄金剣により空けた穴が続き、やがて開ける。

「……っ」

息を飲む、そこは広大、そこは空間。
城、一つの小さな城が、丸々一つ入りそうな、広大な空間。
部屋に灯りはない、暗い。
右手に黄金剣を握ったまま、左腰に身に付けた小さなカンテラ（導
器・貯蓄・紋章）に刻まれた紋章を意識する。
意識——カンテラ、紋章、極々小・導力——発動、効果——カンテ
ラに灯りが点る。
結構な光量だ。一度起動用の紋章を発動させる必要があるが、後は、

予め貯蓄しておいた「力」を燃料として、

自動で起動し続ける、中位以上の冒険者の必須アイテム、『灯器』

(超ロングセラー商品)

左にカンテラを握り(エーサーベインのは小カンテラ型)

改めて、右手の握りを強くする。

広大な空間。遺跡だろうか。

カンテラの灯りは、向こうがわの壁にギリギリ届くかどうか、というところである。

入ってきた穴の先にある向こう側の壁には、先ほど放った光線が造った穴がまだ続いている。

歩く、歩く、慎重に、止まる、地面が切れている、下を見る、また地面がある。

気づく、階段のように段差が続いていることに。

室の最外周が最も高く、そこから内周に向かって段々に低くなっている。

エーサーベインの造った穴は結構上の方、つまり外周の段の一つに見るからに無理矢理に空けられていた。

ゆっくり、しかし迅速に、警戒を忘れず、室の中央、最も低い場所に向かって降りていく。

エーサーベインは直観していた。

なにかがある、と。この室の空気、その汚れ具合。

それはこの室が今回の事件とは全く関係ないと、エーサーベインの経験に訴えていたが、

しかし、エーサーベインはこの偶然、彼の能力が限界まで発揮されたからこそ見つけることのできたこの室を捨て、

48階層に戻るつもりは全くなかった。

先ほどの轟音。敵も、味方も、すぐに駆けつけてくるだろう。

冒険者としての本能が、励起していた。何かがある。

彼は、高慢であり、矜持は高すぎるきらいもあったが。

しかし、やはり冒険者であった。

新発見、栄誉、宝物。

期待。

罨、敵方の秘密兵器、いや、なにかもっと底知れない……。不安。

それでも、進む、今だけは、バル・ファルケンのことも横に置き、室の中を下に降り進む。

コツコツ、と足の音だけが響く。

カツンツ、と音を立てて止まる。

最も低い場所だ、カンテラの灯りを強める。

室全てを照らし出す光源が、部屋の中央、最も低い位置に現れる。

「ほう」

と、感嘆をあげる。最も低いエーサーベインの立つ場所から、四方八方全ての方向にある。

今自分が降りてきた段差は、全く、1カ所の乱れもなく、精緻極まらない寸法をもって、造られている。

その段差全てに、見事な紋様、紋章、文字、宝石、そういったものが記し、刻まれている。

「やはり、旧暦の古代遺跡か？」

エーサーベインは自分の出てきた穴を見る、こう見ると大分、上の方だ。

そしてもう一つ、その穴の延長線上にある反対側の段差も見ろ。
綺麗に穴が空いている。

二つの穴。

この流麗な細工が施された、室に与えた大きな破壊。

「むう」

もったいない、と顔をしかめる。

エーサーベインは美を愛する、根っからの貴族であった。

意識を周囲にそらすのやめる。

剣の握りを強める。

改めて、室の中央を眺める。

そこには岩塊があった。

いや鉄塊か、色は青銅の如き青の鈍さを持ち合わせている。

巨大。小さな館ほどの大きさ。

高さは、エーサーベイン二人分というところか。

約4 m。形は異物だ。

上部、一辺の長さはそれぞれ10 mと7 mが二辺ずつ、
この岩塊を真上から見たなら、多分丸みを帯びた長方形といったところか。

つまり巨大なのだ。

周囲を回り、細部を確認する。

固まってはいるが、この巨大な塊には、隙間がある。

みっちり詰まっているわけではないようだ。

「……これは足、か？」

同じような形に折りたたまれているから最初は気づかなかったが、気づく、三本の足？もう片側にも、三本の足。

「なんだ？」

——石像？いや金属細工？こんなにも巨大な？

——これが古代文明の遺跡だとするなら、旧神のシンボルか？あ
るいはこういう形の棺兼宝物庫か？

思考を走らせる。そしてまた細部の確認を進める。

「……ん？」

カンテラを掲げる。刃に込める力を強める。

ある部分に差し掛かって、巨大な塊の形に意味が見えたような気がしたのだ。

「これは、はさみ……か？」

片側に鋏と脚、片側に鋏と脚。

「蟹」

蟹の形をしていると見た方が良く、とエーサーベインは考える。

鋏があるということは、顔、つまり口と眼があるはずだ、と。

エーサーベインはカンテラを掲げて、上部を見上げる。

眼がある。小さな、黒っぽいような、見事に彫り込まれてる。

——古代人の趣味はわからんな

そして次の瞬間、エーサーベインは戦慄する。

無意識の内に、脚に刻んである、加速と跳躍の紋章を発動し、体力と腕力上昇の紋章もついでに起動させる。

大きく飛び退くエーサーベイン。

彼は見たのだ。

この蟹の、蟹の石像の、瞳が。

動いた、命の意志を灯している、と。

「モンスター魔物かつ！」

これは、この巨大な鉄塊は、生きている。

この部屋を守護している。怪物の類、である。

エーサーベインはそう判断して、無意識が先行して行っていた肉体強化を意識的にもう一度行う。

カンテラを最大光量にして、地面に置く。

この暗い室で、光源を失うことは命を左右する。

とはいえカンテラの強度は、一流冒険者の全力攻撃を叩き込んでも壊れないような超高級品である。

灯りの心配はない。

エーサーベインは、大きく飛び退き、蟹の怪物がいる中央と距離を置く。

中程の段差に、立ち、右手の剣を握りしめる。
左手には銀に輝く魔導剣。銀の鎧は強化され、眼に刻まれた紋章を
発動させる。

魂が、器が、悲鳴を上げる、一気に力を引き出したことによる弊害
だ。

だが、器にある「力」の残量にまだ問題はない。

黄金剣は刻印に従い、力を集め始める。

輝く

銀の魔導剣は紋章を発動する。

貯蓄型の魔導器だ、一度発動させれば、持ち主が力を注ぎ込み続け
る必要もない。

鈍く、輝く

このとき、エーサーベインの心には慢心があった。

最高位冒険者として、迷宮にその覇を轟かせ、黒竜人さえも打ち倒
したことのある己が、

この見るからに鈍重で、攻撃のパターンも限られてそうな相手に、
負けることがあるだろうか、と。

またこの段差も、こちらに利している。勝てることはなくとも負け
ることは絶対にならないだろう。

ともあれ、まず一当たりして、できうるなら撃破してみせよう、と
まで考えていた。

この後、彼はこの慢心のツケを払うことになるのだが。
それは知るよしもないことであった。

戦闘の始まりは、エーサーベインの神器であった。
巨体の怪物、岩藏の奥で永き眠りに着いていたこの蟹の怪物の隙を
ついた形であった。

エーサーベインの黄金剣は、一条の光線を放つ。
威力の奔流が、剣から溢れて目標に進む。

爆音、激突音

「はっ」

——やったか?!

ロード・エーサーベインは考える。

この光線を受け、無事なはずがない、と。

あの迷宮騎士ロード・エクサリオスの持つ、『神盾』さえも貫通し。
竜の肌さえも焼いた、神の名を持つに相応しい武器だぞ、と。

煙が濛々と上がる

沈黙

「……あまり、この美しい部屋を壊したくないのだがな」

余裕を思わせる響きの音がどこからか響く。

煙の先からだ。エーサーベインがそれを疑問に思う前に、煙が晴れる。

「なん……だ……とっ……！」

驚きの余り眩くのは、一人の冒険者

そこにあつたのは無傷の敵。

いや、少し傷が付いたか、という程度に汚れた蟹が一匹。平然とした姿で鎮座していた。

先ほどとまるで変わらない姿……いや、少し違う姿で、そこに在った。

違い——蟹が立ち上がっていたのだ。

鋏は悠然と闇を搔く。

緑青の甲羅はカンテラの光に濡れて、不気味な光沢を放っていた。

堂々と、泰然と、まるでなにもなかったかのように、蟹は王者の風格を漂わせていた。

絶対強者の殺意。

身が竦む。

最高位冒険者エーサーベインは恐怖した。

本人は認めないだろう、しかしこのとき彼は確かに恐怖したのだった。

しかしエーサーベインはそれを認めることが出来なかった。このとき、彼の取るべき行動は逃亡の他に最善がなかったであろうに。

彼は、自負から、目の前の恐るべき怪物に、猛然と挑みかかったのだ。

強化された速度。紋章の輝きを放つ脚と腕。冒険者エーサーベインは跳ぶ。

蟹に近づき、左に構える魔導剣を振るう。彼が先ほど見せた居合いによく似た闘法だ。

サンツ、と綺麗な音が鳴る。

響きに合わせて、常人ならば見ることも叶わぬ刃が振るわれる。体勢、速度、威力、なにもかもが完全な一撃。

恐怖や動揺の微塵も見えぬ、見事な一撃。

蟹の脚、その関節を狙った、研ぎ澄まされた一斬。

魔導剣は紋章の光を最高の強さで輝かせている。

この状態ならば、鉄さえも触れるだけで切れるだろう。それほどの切れ味だ。

だが

ガイッ、と鈍い音が響く。

刃は止められた。

入ったことは入ったが、しかし切り進むことなく途中で止まっていた。

刃が入ったところで停止していた。

つまり、もう一回、もしくは何回、あるいは何十回、今の一撃を、全く同じ箇所、連続で叩き込まなければ、この蟹に致命傷さえ、与えられない。

その絶望すべき事実を、エーサーベインは理解した。

刃を抜く。

右に構える黄金剣をもう一度振るおうとする。

――腹。そこに至近距離で叩き込む。

攻撃の失敗にも関わらず、すぐに次の行動に移るその判断力。さすがにエーサーベインは最高位冒険者であった。

しかし、蟹はそれを許しはしなかった。

度重なる攻撃に対する怒り、そしてエーサーベインの狙うその攻撃は、さすがの蟹も勘弁願いたかったのだ。

蟹は思う

小五月蠅い猿だ、と。

「その驕り、ひねり潰してやろう」

蟹は言葉を放つ。

勿論これは蟹本来の発声器官を使っている訳ではない。

魔導を利用している。彼の口内に記された紋章に彼が自らの器に蓄えられている「力」を注ぎ込み、彼の意志を言葉へと転換したのだ。

エーサーベインは腹の下に潜り込もうと、姿勢低く突撃する。

しかしそこに腹はなかった。

デカイ図体の蟹だ、目算を見誤ることなどあるはずがない。

「――っな！」

エーサーベインは見た、想像もしていなかった速度で、瞬く間に移動し、自らと距離を離れた蟹の姿を。

巨大さに似合わない軽快な速度。

巨大な質量を駆使した、俊敏さ。

すでに最外周、今の一瞬で、部屋の真ん中から部屋の最も高い外側に位置していた。

一瞬の移動。

想像の埒外の速度に、エーサーベインは言葉もない。

絶句、そして逃走態勢。

決して安くないカンテラを捨て置いたまま。

眼を、身体の正面を蟹に向けたまま、後ろに大きく跳び次いで、入ってきた穴へと逃げる。

蟹は、笑う。いや嗤うが正しいか。

敵の強さも分からない、無謀な傲慢者を、このまま返すつもりは彼の甲羅の内に微塵も存在しなかった。

そして見る。

蟹が、恐るべき速度で、こちらに横進してくる姿を。

鋏を頂点に溜め。脅威の速度で、弾丸のようにこちらに突撃してくる。

生きた館。機動要塞。

質量の暴力。

エーサーベインは後ろに跳ぶ瞬間、追いつかれることを悟り、当然のように横へと跳ぶ先を変える。

着地、の地点に待ち受けるのは振り下ろされる鋏の一撃。

地を碎き、段差が爆発を起こしたかのように礫を飛ばす。

奇跡的な体勢、左腕一本で、鋏を読んでいたエーサーベインはすぐに跳ぶ。

強化された腕力。

ことここに至って、未だ右腰に提げ直していた銀の魔導剣を抜き、その紋章を空中で最大発動する。

蟹は移動を続け、鋏による再撃。

巨大な暴力の連打。

着地寸前、脚の紋章を最大限に開放する。

彼の魂の器に蓄えられた残力の半分を使った奇跡的な紋章行使。飛翔と脚力強化と速度加護の多重最大起動。

そして、エーサーベインは、空気を蹴った。

空中をもう一度、跳ぶ。

鋏の軌道からの回避。

そして先ほど起動して左に構えていた魔導剣を、跳躍の頂点でそのまま蟹の眼に向かって投げる。

蟹は持ち直した左鋏でそれを防ぐ。

一瞬の隙。

降りる間際にもう一度、今度は、右に構えていた黄金剣を発動する。貯蓄された力が、目眩ましに放たれる。

蟹への駄目押し。

そして着地。

疾走。逃走。

「やるなあ、人間、世界最高レベルではないか？」

蟹は呟く。

見事に逃がしてしまった。

あれがなんなのか分からない。

しかし、仕返しは当然あるのだろう。

そして此処はどこで、今は何時なのか。

なにもわからない。

——ただまあ久方ぶりに起きたのだ、精々、しっかりと生きるとしよう。

そんなことを考えながら、蟹は、エーサーベインの逃げていった穴を眺め。

暗闇に中、ただ煌めくカンテラの光に、なじませるように鋏を閉じる

ガキンッ！

冒険者（後書き）

列伝

『有角姫』 ネーベンハウス

タンタロス山嶺シーベネシアの出身

勇者 エリユニサ（『銀の川』）

魔王 『黒の雨』を両親に持つ。

齢10にして立ち、幾多の陰謀、苦難を乗り越え
幾多の暴力と陰謀により人間界を統一した紛う事なき英雄。

だが彼女の目標はこの世界を操り分断し、魔王と勇者。魔族と人間の対立項を作り出し

この世界を一つの遊技盤と見ている天上の旧神にあった。

愛刀『細雪』を片手に旧神に着いた人間界を見捨て、魔王領へと出奔。

以降10年を掛けてとりえるかぎりの勢力増強。策戦立案。あらゆる備えに尽力した。

最後には天上で主神を見事討ち取ることになる。

新暦においては『至高神』ネーベンハウスとして崇拝されている。
本人は行方不明である。

準備、前置き、話の進まない話

1

蟹は、ぼうとしている。

自らの住処の惨状を見て、溜息を吐くしかない。（但し出てくるものは泡である）

あるのは瓦礫、瓦礫、土埃。

目にとまるのはランタンと、碎けて煌めいている宝石の欠片か。

ともあれどうしようかと、蟹は考える。

起きてしまった、侵入されてしまった。

このままではまた面倒なことになるだろう。

そうはわかっていても、しかし何処か億劫だ。

1000年近くの冬眠。つまり引きこもりの弊害であった。

鉄は錆び付き、身体の一部はギシギシと重い。

関節は余りにも動かしていなかったせいで、痛いを通り越して、笑えてくる。

ブクブクと軽く泡を吹く程の痛みだ。

さて、ここはどこか。

かつて自らが寝床と選んだ王墓である。

ではこんな地底に侵入したあの戦士はなにものか。
しかも恐ろしく腕の立つ者だった。

そのうえ盗掘なのに上からではなく、横からきた。

もしや恐ろしい高さの活断層でもできて、この王墓へと容易にしかも横から侵入できるようになったのか。

蟹は寝過ぎた。

彼はダンジョンについても何も知らないし。

また少人数の連携により多くの魔物を狩ってきた冒険者という職業を知らなかった。

彼が眠りに入る前、人類の平均的な戦闘能力はそう高いものではなかった。

一部の戦士たち、大家たちがあつたのみだ。

しかし、今の人類は、600年の迷宮攻略を経て、冒険者という者に限り、多くの蓄積と闘争の果てにかつての戦士など比べものにならない程の実力を付けていた。

それさえも知らず、この暢気なところのある蟹は、ぼうとしていた。――さて、さて、どうしようか、ここで眠るのは勘弁したいものだな。

蟹は穴を見る。

穴。

穴とは何か、というのは実のところ一つの美学考察の題材たり得る命題ではあるが、

しかし別に蟹はここでそんな考察を始めたりはしない。

「外か」

外に出てみようか、いや出てみたい。
そう考える。

この蟹はつまるところ退屈なのだ。

ブクブク、ブクブク。

ただ彼が一つの事実に気づくのに、そう時間はかからなかった。

一人程度の高さの穴に、4 mの巨体が入る、わけがないという事実に

ブクブク、ブクブク。

2

魔惨迷宮では、までもや衝撃の情報が駆け巡っていた。

かの最高位冒険者『黄金剣』ロード・エーサーベインの敗北である。

10年前、迷宮軍が40階の中継基地に仕掛けてきた一大反抗。

その折り、敵方の総大将であり、最高位の怪物であり、

モンスター

多くの冒険者の命を容易く奪ってきた迷宮騎士ロード・エクサリオ
スをその神盾『イージス』ごと貫き

撃退した、この迷宮における紛う事なき英雄である。

冒険者としての評判こそ、その性格のためか決して高くはないもの
の。

実力、それも単純な戦闘力に關して言えば、そのシンプルで力強い戦闘法と合わせ間違いない、冒険者の最高位に相応しいものであった。

そのエーサーベインが敗北した。それも北方の名工の鍛えた銀の魔導剣（量産型）という決して安くない導器をも犠牲にし、自らの器に収めていた「力」の大半を消費して、40階に現れたという。

まるで命からがら逃げ帰った、それこそ脱兎の如く。そんな風体であった。

先のバル・ファルケンⅡノースの未帰還に続いての最高位冒険者の敗退である。

早くも高位、中位冒険者を中心として、各所の盛り場で不安が囁かれている。

魔惨迷宮、迷宮管理組合、組合長ハンナⅡウルフは溜息を窓に向かって吐く。

黒壇の厳めしい机も、重圧を感じさせる膨大な量の書も。

バチバチ、と音を立てる、暖炉の火も。

今は、空虚に見えるし、聞こえる。

沈黙。痛い程の。

空気が風船の膨らみすぎた瞬間のように、痛みを恐れる沈痛に包まれる。

「……それで」

齡32にで組合長に地位に就き、以降10年、何事もなく、むしろ確実に探索は前進していると確信していたこのハンナにとって

今回の二つの事件は、胃が痛くなり過ぎる類のものであった。

出来ることなら今回のエーサーベインの件。徹底した情報統制を敷き、面に出したくはなかった。

迷宮からの収奪物と、冒険者の準備費が、都市の主要産業である。

つまり、高位、中位冒険者という、いわゆるメイン冒険者層が、

冒険に不安を覚え、その探索に二の足を踏むこの事態は決して望ましいものではなかった。

その不安は市民や、下位、最下位、初心者にも波及し、また不安は治安の悪化を生む。

娼館では早くも、緊張により暴力を振るう客の増加を招いているらしい。

バル・ファルケンⅡノースを失ったのが未だに信じられないというのに。

未だにあの髭男が、ひょっこり帰ってくると、そう心の何処かで信じている内に、

ハンナは目前の気障男の敗北の報を聞くことになったのだ。

ハンナは溜息を吐き、窓を見るのをやめ、振り向く。

黒壇の机の上には、灯器。

それなりの光量で揺らめいている。

その先にある顔、見るからに消耗を隠せない悄然とした顔は、噂の男、ロード・エーサーベインに違いなかった。

「それだけだ雌狐」

そうなの、それだけなの……ふざけんなよ？ とでも言いたげな苛

立たしげな顔。

それを隠そうともせずに、ハンナは顔を歪める、

齢42ではあるものの10は若く見える赤毛の女傑は溜息を吐く。

「その蟹はアンタの黄金剣の最大出力さえもものともせず、アンタの最高の剣撃でもちよつと深い切り傷を与える程度、だったと」

「ああ、一切違わん、俺はおめおめと逃げ帰ってきた負け犬だ」

「馬鹿言わないで、せめて生きててよかったわよ、……ぞつとしな
い話ね」

ハンナはエーサー・ベインのここまで肅然とした態度など、エーサー・ベインが迷宮都市に来てからの15年で始めて見た。
らしくない態度だ。しかし天才貴族の初めての敗北。
しかも話を聞く限り、圧倒的な大差での敗北。
——……こうなるか

「で」

勝てるの？と声には出さずハンナは尋ねる。

「勝てる」

「で？」

「勝つには、しかし戦力が問題だ、そして策戦の問題でもあり、装備の問題でもあり、儀式の問題でもある」

「それがあれば絶対に勝てるの？」

「勝負に絶対などない。くだらん皮肉はやめてもらおうか雌狐」

エーサーベインは冷静に見えて冷静ではない。

その心には屈辱と、憤怒、恐怖の念がこびり付いている。

ハンナ・ウルフは長い経験から知っていた。

実力者が命を落とすのはこういった精神状態のときである、と。

「至高神に誓って、あるいは正義神に誓って、私の目を見て勝てる

というのなら、いいわ、戦力は融通しましょう
軍に掛け合ってもいい、よそから戦力も借りましょう。但しそれは、
貴方の情報が、判断が真実で、あるいは相手の戦力がそれ以上増え
ない時に限るのではないかしら？」

つぐ と息を飲む音。

それは錯覚ではない。

エーサーベインも最高位冒険者である。

心の隅に冷静さを忘れていない。

そうでなければ、最前線でこれほど長く探索を続けることなどでき
なかったであろうから。

しばしの沈黙。

顔を歪め、憎しみと恐れの入りがじつた複雑な表情を、隠そうとも
せず。

しかし、しばらくして感情は抑えられる。

飲み込むように、考え直すように、そうしてエーサーベインは溜息
を吐いて、

ポツン、と呟く。

「正直なところ、わからん」

暖炉の暖かさは、しかし何処か寒い。

エーサーベインは、息を落ち着け。

そして続けた。

「攻撃は利いてはいた。本当に些細だがな」

自嘲。そして顔を挙げハンナの燃えるような美貌の上にある、冷た
くも慈愛を感じさせる瞳に、自らの心を素直に合わせる。

「……前衛を厳選し、壁を構築し、それこそ儀式大家による防護を掛けて。

前衛も皆、儀式小家を使い、導器と法器、神器をもって。属性ではだめだ、斬撃も阻まれる。あれは衝撃だな。

後衛には、儀式大家や神秘大家を配置する。機巧があればなおいいな。

装備に関しては、魔法書や魔導書、神防具を揃えておきたい」

一息つく、そしてまた息を飲み、もう一度言葉をつくる。

「それだけあれば、負けはしない、と思う。ただ貴様の言うとおり、これ以上の隠し球がなければの話だ」

そうして語ることにより、安定を得たのか、少し落ち着いた様子で、ハンナを見るエーサーベイン。

「……厄介ね」

「ああ」

「とりあえずあんたは休んでいいわよ。私は最高会議に向かうから」
「都市会議か？」

「ええ、神殿のデブ親父やら、都市長の禿、軍団長に、学府頭、商業連盟のお偉方。そいつらを前に、あんたの語った情報をもう一度語って、

頭の固い、あのお馬鹿さんたちの質問に答える糞みたいな作業ね」

「楽しそうじゃないか」

「ええ最低に楽しいわよ」

ハンナは机に着き、書類をまとめ始める。

エーサーベインは、踵を返し、扉に手を掛ける。

「……雌狐」

「なに」

「すまなかった」

「……はっ、らしくないわよ」

ロード・エーサーベインは齡17でこの都市にやってきた。

高い実力を誇るが、高慢で、その上、冒険者について全くの無知だった青年。

そんなエーサーベインの実力を買い、彼を助け、多くのことを教え、そして仲間に加えたグループがかつてあった。

『命知らずの赤狐』

ハンナⅡウルフと、バル・ファルケンⅡノースもかつてそこに居てエーサーベインもかつてにそこにいた、これは、それだけのことだった。

3

「つまるところ、魔導と魔法は3つずつの基本の行使法があります」

禿頭の教師が講義をしている。

研究者や冒険者に知識を授け、技術を習得させ、その修養を勧める、教育研究機関『学府』

当然のことだが魔惨迷宮にもそれはある。

一人の少女が真剣な顔でそれを聞いている。

冒険者見習いとも言うべき冒険者のメインーランچェットである。
ルーキー

その隣、

『知恵』の神に祈りを捧げるような体勢で、うつらうつらとしている青年を訝しげに見ながら

この若い才能は、真摯に講壇の向こうにいる、教授の話を聞いている。

「まず儀式小家……誰か！」

後方、一人の少年が手を挙げる。

「一に紋章、二に詠唱もしくは想像、三に儀式、これらの法が存在します」

教授は大きく大きく頷き、説明を始める。

「紋章とは、物質に特定の紋様を刻む技術だ。これは三法の内最も簡略である」

息を切り、歩く。

「なぜなら、既に力をどう動かし、発現させ、どのような効果を起こすか、全て決まっているからだ。

詠唱法のように、自ら考え、脳に克明に想像を構築する必要などないからな」

そして黒板に、文字を書く、物体Ⅱ武具、機巧、手足、その他万物

「必要なのは力を引き出し、力を紋様へと合わせることだけだ。次に」

メイニーは手を挙げる。

「では説明を頼む」

「はい」

大きく笑顔を浮かべ、席を立つ。

「詠唱法は、力を引き出した後、それを自由に想像し、望むままの形に変え、外に発現する法です。

想像力の訓練、適性に左右されるため大変に難しいです。

次に、儀式法は、紋章で幾つかの手順を簡略化しつつ、想像と詠唱を身振りなどの記号を合わせ、莫大な量の「力」をそれらに流し込むことによって発現します、その効果は大きく、威力も強大なものです。

これをさして小家儀式、儀式小家という名が魔導にはついています」
禿頭教師は満面の笑みを浮かべる。

「完璧だ」

えへん！ と胸を張る少女。

「では、魔法の説明は出来るかね？」

もちろんです！ といったげに少女は口を再び開く。

「魔法の三種は、刻印、信仰Ⅱ想像、儀式の三法です。

外にある力、源たる絶対神の力を見て、理解して、掴むことはとても難しいことです。

なので、魔法を使える人間は本当に少ないです」

言葉を切る。息を吐き、教師を見る。

教師は頷く。メイニーは続ける。

「刻印は、物質か肉体に記して、外の大きい力、雲の如きそれを掴むことの難易度を簡略にしてくれます。

予め、その「力」が何処にあり、どんな形で、どんな方向で、どうやって見て、借りればいいのか、それらが圧縮して記されているおかげで

半分くらい自動で外の力を集めて、すごい効果を発現することができます！ 外の無色にして有色の力を、切り分け、好きな色、つまり概念に変えて、魔導では不可能なこともすごい簡単にできると聞きました」

「他は？」

教師は穏やかに先を促す。

「詠唱想像はとっても難しいらしいです、一から、世界にある力に立ち向かい、概念付けて、動かすからです。

効果の発現も、細かく自分で決めて考えて、定めないといけないて聞きました。

例えるなら、道なき道に、道を作って、そこに馬車まで走らせるようなもの、だそうです」

「法師ネッケルトの『基礎魔学概論』の一説だ。よく勉強してるな……よし！ 最後まで行ってみようか」

「はい！ ……ええと、魔法最後の法は、儀式法、でもこれは小家の儀式とは比べものになりません。

無数の刻印でショートカットと道を作って作って、紋章と儀式小家も合わせて描き込んで魔方陣を作って、

そしてその上で、この上なく純粹で、この上なく不純に、多くの外の力を掴み、自らの持てる内の「力」も注いで、

その上、何かの対価、物体を供物として捧げて、ようやく成功させることのできる術法、これこそが儀式大家。そう書かれていました」

「供物という媒体がなければならぬ、その高密度を力として捧げることにより、ようやく成功できる超術。

うん、あらかたいいね、まあこの辺りは、この先の授業で体験したり、肌で感じたりしながら、細かくやるから今日はこの程度でいいかな」

メイニーは席に着く。

教室の雰囲気が弛緩する。

勉強に慣れていない存在も多いのだ。

と、メイニーの隣の眠り男も目を覚ます。

メイニーは頬を膨ませながら、眼を覚ました男に文句を言う

「ロッドさん……またねてましたね」

じと目、どこか可愛らしいが、こうなるとしつこいんす、と目を覚ましたばかりのロッドが苦笑する。

「さて、今日の単元は終わりましたが、まだ終えるには少し早い時間ですね」

禿頭は教室を見渡し、ロッドに目をとめる。

目が合う。

「ではロッド。魔具の基本を要点だけまとめて説明してくれ？」

にこりとした、笑み。

うげえ、と顔を露骨にしかめるロッド。

とはいえ此処で拒否をすると、隣のお姫様がさらにうるさい、と諦めたように説明を始める。

「んと……えーと、たしかあ、そう……んっ、ん……魔具は二つに分けられるんすよ、

それで、……ええと一つは導器、魔導器、魔導、儀式小家の補助道具っす。

刻印型。これは刻印された肉体以外の物質っすね。内力を流し込むだけで発動できる便利なもんす。

結構な数の人が、内力の想像は無理でも、それを引き出して、肉体の近くに放出するくらいはできますからね。

俺ら冒険者の基本アイテムッスよ。後は貯蓄型。これは人間の魂に力が蓄えられるように、物質に器を作ってそこに力を溜められるんすよね。

たしかあ……つくるには、儀式大家で物質の構成を弄るんでしたっけ。

そいで後は『道』俺ら冒険者の必須アイテム2ッスね。杖なんすよ大概。貯蓄型に力を流し込んだり、貯蓄型から力を吸い取ったり。人と人が力を移動させたり、貯蓄型と貯蓄型の力を移動したりするすよね」

もういいかな、という顔で教授を伺うロッド。

しかしそこにあるのは険しい笑顔という矛盾存在。

「ええっと、もう一つは法器っす。魔法器、魔法、儀式大家の補助道具っすね。

えっと一つは「補助」まあまんまっすね、刻印の小さい版、心得、想像のプロセスが頭の中に浮かぶ紋章とか書いてあったりして、他にも、これから想像しようとする力の概念とかに関係する物品のアクセサリーとかっすね。大抵耳飾りとか、首とか腕とか指の飾りっす。

次は……えと『刻印』っすね外の力の情報をまとめてある物品だったり、外の力を理解しやすくなる紋様だったり、それそのものが特定のプロセスを行うように定めてあって外の力と反応するようになってものっすね。杖とか。あと魔法書とか、こういうのが一杯書いてあるんすよね。

なんというかヒント集と解凍集と、取説が一緒になってるみたいな。んで最後に『鍵』結構デカイやつっすね。刻めるだけの情報が、刻印が、つまり上の刻印の効果が一杯書いてあるんす。そのうえ儀式に必要なそれのような紋様とか情報も書いてあって、大抵、儀式大家の時に使うものっすね。これ恐ろしく高いんすよね」

そこまでいって、阿呆そうな顔を、緩ませたまま「えと、もういいすか」と言う。

禿頭教授は頭を掻いて、よしっ、と呟き。

「さて来週は『神の金属』『マッフ機巧』『神器理論』の三本立てです、ぜひ予習しておくようにでは、終了！」

生徒達は席を立ち始める。

あるものは酒場に、ある者は家に、ある者は迷宮に、ある者は研究

室に。

混沌とした場には奇妙な活気があった。

ロッドはほっと息を吐いて、横にいるメイニーを見る。

ロッドさん、すごいです！　と言いたげな顔でこちらを見ている。
きらきら。

「ロッドさん、すごいです！」

「期待通りっすね、まあ基本ツスよ、俺は腐っても中位冒険者っすからね、

これくらい知ってないと危険なんすよ」

どこかとぼけた口調で、短く切り取られた短髪を揺らすロッド。

右の耳飾りは、一応魔具で、そうと分からぬようロッドの耳を揺らしている。

「ほえー、ロッドさんもやっぱり冒険者なんですねえ」

「やっぱりってなんすか。もう」

えへへ、と笑うメイニーに、毒気を抜かれたロッドは、
しょうがないなあ、と頭を掻いて、席を立つ。

「さて飯でも食いたいですね」

「いいですね！　私、味来亭にいきたいです」

「ああ、B定食いいっすね」

冒険者の日常は続く。

4

下水道には猫が住む。

それは全ての迷宮都市に伝わる、奇妙な逸話である。

曰く、猫が居る。

曰く、猫が住む。

曰く、その猫は耳が二つであり、その癖、愛らしい

曰く、猫は姿を隠している。猫は嫌らしく嗤って、人の子にプレゼントを渡す。

曰く、猫に深入りしてはならない。

曰く、猫の住む下水道は定期的に変わる。

魔惨迷宮にもその噂は伝わっている。

しかし豚人のロレントオはそれが噂ではない、と知っている。

相棒の鬼族の戦士と、翼人の神官を置いて、彼は彼らにも秘密にしているこの下水道のある地点に居る。

迷宮の如き複雑怪奇の下水世界。

縦に横に、斜めに後ろに、下水は通じる。どこにでも通じている。いやそれは錯覚に過ぎない。

複雑を極めていようと、下水の先にはゴールがある。終わりがあ

貧民街スラムの住人の中でも最底辺の者たちは下水に逃げる。

そこは臭く、暗いが、温かく自由で、鼠しよくりようも豊富であるからだ。

札付きの悪。面を歩けない者たちの秘密の道、裏世界の者たちの会合。

下水にはもう一つの世界がある。

それは臭く、暗く、そびえたつ糞のような世界である。

そこに光は届かない。

そこに清浄はありえない。

秘密の娼館。窃盗団やら暴力団の秘密のアジト。

常に女性の悲鳴が、喘ぎが、絶望の匂いを纏わせて、陰鬱に響く、都市の裏世界。

それこそが下水。

真つ当な人間は近づいてはいけない。

最貧民は壁なのだ。その先にあるのは、暗く恐ろしい闇だけだ。

真つ当とは言えないが、決して悪の世界の住人ではない豚人のロレントオ。

高位に位置する冒険者の彼は、ここに用があるのだ。

それは天国の如き至天の娼館ではない、便所の如き至獄の娼館でもない。

彼がここに来るのは、知る人ぞ知る、ある店に用があるのだ。

下水世界。

地下三階、第三東北域、E17区画。

一切の下水が流れ込まず、一切の下水がどこにも行かない。

建築工事の段階でどこも繋がらないことが決定された。

複雑な下水区画。

地下を降り、降り、そして動いて、目印を探し、曲がり、登って、歩いて、撒いて、曲がって、

そして降りて歩いた先の行き止まり。

そこで顔を上げるがよい。

そこにあるのはマンホール。

石を三回、決まった間隔。

そして開くは、秘密の商店。

猫のようで猫ではない、ちょっと猫。
そんな存在が運営する店。

「にゃっ、にゃあ」

この店は、世界でも数少ない、神器製作と修理を専門とする店。

『猫耳亭』

「にゃ、にゃっ、にゃっ」

金を数えるのは、閉じた下水で、金を稼ぐ謎生物。

フード、全身を覆うコート、脚にはスーツ。

顔にはマスク。しかし口元は空いている。

そのほかに外気に晒されているのは、

ぴくぴくっ と動いている猫の耳。

俗称ネコミミ。

それを言うところのマスクコートネコミミさんは怒り出すので注意だ。

対面に居て、猫人の商店主が、いま渡したばかりの金を数えるのを、
ただただ眺めるのは、大柄の垂人。

全長2 m程の高さの屈強な肉体。

上半身を覆う軽鎧から溢れるのは見事な体毛。

高位冒険者、豚人のロレントォだ。

そして豚人は、下水で、謎の猫人と、向かい合って、地面に座っている。

金を数える猫人の後ろには、大きなテント。

奇妙な光景だ。

馬が喋れば人は驚く、それに準じるその光景を、しかし見るものは
誰も居ない。

「おーけーですにゃ」

にしし、と嫌らしく嗤う口元

猫人の筈なのに、髭がない。

抜いているのか、体質なのか、しかしロレントォはそのことを聞くつもりには全くなれない。

はい！交換の品ですにゃ、と言って、テントの手前の鍵付きチェストから浄銀に輝く大剣が取り出される。

「っへへ、あっし、自分で自分を褒める程おちぶれちゃあいせんが、どうですかにゃ？見事ですにゃ？」

「おう」

剣を受け取る。

ロレントォが剣を見る、一片の曇りなく剣は、清々しい銀、冬の朝を思わせる清浄を煌めかせている。

思わず唸る。

相変わらず凄まじい技量だ。

愛刀は、明らかに前よりも自らの手に馴染んでいた。馴染みすぎるほどだ。

手先と柄の境界が消失し、あるのはただ己の魂と、銀に輝く刃のみ。

第1級聖遺物、ふとそんな言葉を思う。

「凄まじいな」

ロレントォは素直に感想を伝える。

皎々とランタンが8つテントの周囲に存在している。

『マッフ機巧』のランタンと冗談めかして言われたが、

強ち冗談ではないのかも知れない。

ロレントォは、この店（とはいっても何も流れていないだけで、ただの下水の一区画なのだが）に来るたび

底知れない恐怖を覚える。ここには長居してはいけない。
ふとそう思う。

「にゃあ！ たまにはお茶でもいかがですかにゃ？」

マスクの下、何を思っているのか。

口元にはニヤリと、嫌らしい笑みが張り付いている。

「えんりよしたいところだ」

とはいっても聞いては居ない、既にテーブルは用意され、その上にはティーカップとソーサー、ポット、レース。
クッキーは甘い匂いをまき散らせ、紅茶は香しい。

「全部自分でよういしたにゃ！」

茶会が始まる。

豚人ロレントオこと『銀鬼』ロレントオはしかし本来ここまで、下手に出るほうではないし、
通常は、なにに対しても自信を持ち、引かず、怖じ気づくことのない、不屈の精神を持っている。

特定条件下の戦闘能力では、最高位冒険者に匹敵することから、高位冒険者でありながら二つ名として『銀鬼』を呼ばれている。
根っからの武闘派でありながら、リーダーシップにも優れ、迷宮の知識にも長け、戦闘スタイルも巧みだ。

その勇猛果敢も、しかしこのフード上の耳のみをピクピク動かすマスコートの前では発揮されない。

「へえ、最近はそんなにやのが上で流行ってるんだにゃ」

「ああ、一時期どいつもこいつも、そればっか食ってたな」

これはもう定番になりつつある儀式。

取引を終えた後、猫コートこと店主が、ロレントオを引き留め、お茶をする。

とりとめもない日常の事件から、最近の流行、国際情勢、迷宮の噂、事件についてロレントオが語るといふものだ。

ロレントオ自身はこれを取引の一種と考えることによって情報を無料で渡しているわけではない、と誤魔化している。

これも賃料に含めている、と考えることで諦めているとも言える。

「にゃにゃにゃあ！ばっかだにゃあ、そいつ」

「おおう、みんなの笑いの者よ」

とはいえ完全にロレントオの無料払いというわけではない。

他の客がもたらしたらしい情報を、店主が喋ってくれるのだ。

店主は時々なんでも知っているように見えることがある。

底知れないのだ。

『マッフ機巧』らしきランタンといい、その物腰。

なによりも、ロレントオの一番の武器である。超直観といってもよい天性の直観が伝えるのだ。

ここには何かある。あの一番奥の大きなテントの奥、そこには『なにか』がある。

そしてそれは決して、自らの手に入ることはない。

それを知れば危険、それを観るのは危険、それを考えるのは危険。

ふと。

店主の、マスクに隠れて見えない、その眼差しがこちらを冷徹の観察しているように見えた。

嗤っていない、笑っていない。

「にゃ！他にはにゃにかないのかにゃ？」

「っ……そ、そうだな、これはメインというか一番の話題なんだが。あのバル・ファルケンⅡノースが未帰還者になったんだよ」

この情報には、ロレントォも背筋を凍らせたものだ。

あのバル・ファルケン最高位冒険者の未帰還。

一体なにがあったのか、なにを見たのか、見えぬ恐怖への想像は尽きない。

なによりも、自分たち亜人種に対しても分け隔てなく接し、時に助け、時に応援してくれた。

気の良い人格者であった彼への哀悼は終わらない。

——惜しい者をなくした。

『死』と『混沌』に祈りを捧げる。

「確かその人って最高位冒険者、だにゃ？」

「ああ、腕利きで、単独潜行の連続200回成功も達成していた腕利きのマッパーでもある」

「惜しい人を亡くしにゃか？」

「……俺はそう思うよ、バル老には俺たち亜人仲間も世話になった。気持ちの良い戦士だったからな」

「そうにゃ、親しい人が死ぬにゃは悲しいことだにゃ」

ロレントォは驚く

珍しく、店主が、素直な感情を見せたように見えたからだ。
店主にも生はあった、これからもある。
それは当然のことだ。

「ああ、後もう一つ、ロード・エーサーベインの敗北だな」

話題を変えるように呟く

「その人もたしか最高位冒険者だにゃ？」

「ああそうだ、いけすかねえ野郎だが実力は本物だよ
こいつの敗走のせえでなあ、今ちよつとアマちゃん冒険者どもがぐ
らついてやがるんだよ」

「なにに負けたにゃ？」

「布告によると蟹の化け物らしいな、すんげーでつかいんだと」

「デカイ蟹」

途端、空気が冷えたように感じる。

ロレントオは、気づく、目のネコミミフードの放つ気配が豹変していることに。

凍えるような冷厳さ、真冬の大霊峰に身を落としたかのような、戦慄。

「……あ、ああ」

声が震える。

目が、店主の目が、マスクで見えない筈の目が言っている。

——続きを言え、と。

「でっかい蟹で、噂によると『黄金剣』——エーサーベインの神器の一撃だが、それが全く効かなかったらしい。眉唾ものの話だが、あいつの最高の剣撃で小さな刀傷が出来ただけだとかなんとか」

「他には」

「い、いやそれだけだよ、ほ、他には知らねえよ、本当だ」

怯えるように、いやこの瞬間、確かにロレントオは怯えていた。

壮健かつ精強なその肉体を、丸めるように小さく強ばらせ、

目前のマスク。その見えぬ眼から伝わる冷たさを恐れた。

いつもは嫌らしいチェシャ猫笑いかドヤ笑いしか表されていない口元も。

今は、真っ直ぐに、なにもおかしいものはないと言いたげである。

「そうか」

店主は、そう呟いた後。

考えたいことがある、と言いロレントオに帰宅を促す。

ロレントオにとっても此処に居たい理由は存在せず。

その促しを、これ幸いといった喜色満面の笑みで請け。

「おお、それじゃ、あんたも元気で、また今度」

と言って、速やかに外の下水へと帰って行った。

それに構わず、猫は沈思に耽る。

「蟹か。……蟹、蟹、蟹」

囁き、呟き、念じる。

ぼそぼそと、確認するように、考える。

蟹の復活。このご時世に蟹の復活。

猫店主にとって、これは冗談では済まない事態だ。

彼が最後に眠りに着いた時に、迷宮と冒険者を巡る今のような状況はなかった。

蟹は、温厚だ。

しかし、降りかかる火の粉は払うだろう。

迷宮や冒険者に、多くの被害が出るかも知れない。

猫店主は今の世界の情勢や状況をそんなに悪いものとは思っていない。

しかし寝起きたばかりの蟹に細やかな判断を期待するのも酷というもの。

「なんとかしなければ……にゃ」

下水の奥の奥。そこには秘密の下水区画がある。

一匹の猫が、浅く嗤って貴方をお出迎え。

みんなおいでよ秘密の商店、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

そんなある日の下水であった。

準備、前置き、話の進まない話（後書き）

・『九烈士』

『有角姫』ネーベンハウスに付き従った、人族と精霊族の勇士9人。いわゆる『英雄進撃』という『有角姫』の勢力旗揚げから、その伸張く建国の破竹の勢いに関わり、作り出す原動力ともなった、腹臣の将である。

その後、『有角姫』が天上に喧嘩を売った後に『正義』『神官』などと内輪揉めも起こしたりしたが、最後には九烈士全員が『有角姫』に従って旧神と戦うことになる。

天上戦争の後、新暦において、九烈士は皆、神として信仰されている

『正義』『知恵』『混沌』『秩序』『闘争』『平和』『誠実』『物質』『法』

の九神である。神学者によって神の属性の偏りが指摘されるも解決の目処は立っていない。

列伝

『神官』アジヨリナ

モレサス神聖神殿直轄領モレサリアの出身

齢8の時に、神との交信に成功した。

史上最年少の大巫女。

神に最も愛されし才能とまで謳われた。旧神信仰界の寵児。

ネーベンハウスの『英雄進撃』に神の意として付き従い。

齡23の時には、モレサス神聖神殿の長として新帝国への神殿領移譲を指揮した。

後にネーベンハウスと敵対するも、彼女を止めること叶わず敗北。彼女の意識に一体どんな変化があったのか、その史料は一切残っていないが、

旧神から転向。以降『天上戦争』においては最も旧神を殺めることとなる。

その数は9柱。これはたった一人で殺した神の数としては最多である。

神の僕。天使。戦士といった神直属の配下まで含めるとその数は1000を下らないという。

新暦においては『秩序』アジヨリナとして信仰される。

本人は地殻の下。地獄にも似た世界の底で。神を殺したことによる呪い、咎の責め苦を受け続けている、とされている。

『無貌』チャルデルラス

出身不明

乞食とも言われる人物。

その経歴は不明だが、絶対神研究の学者兼神官であった説が有力。

またアサンデル王国において『無神論』『汎神論』他17箇条の異端宣告により

刎頸された人物の話が記録されているが、その人物との経歴の類似が指摘される。

神秘主義者であり、神秘理論の大家。また術式としての神秘法に最も精通していたとされる。

偽神である『旧神』への断罪に燃えていたとされ。

一切の多神を否定し、常に神と無。忘我的な瞑想に一意専心していたらしい。

新暦においては『混沌』チャルデルラスとして冒険者やならず者に信仰される。

友達っていいね

さて、一つの話はここからようやく本題に入る。
大蟹と神話、迷宮と冒険者を巡る物語の本題に。

1

大蟹の名はデンザロス。

正式名称はデンザロス・デンザロス・ペンタレシア。

大蟹デンザロスは鋏を使って、侵入者の空けた穴を掘り進めていた。
ざっ、ざっ、ざく。

奴隷が穴を掘るように、ゆっくりと、

それでいて貴族が、狩猟を楽しむように。

久方ぶりに、身体を動かすことの楽しさ、

穴の先を見る、という目標に向けて土に触ること。

そのことに素朴な幸福を思うデンザロスは、やはり大地に生きる者であった。

穴の外には、斥候がいる。

報告を受けた迷宮組合が厳選した、斥候隊。

彼らがそこで見たものは

報告通りの姿の大蟹が、土を掘り、迷宮の壁を砕き、迷宮を進み続

けているという事実。

彼らはその恐怖の姿をを、ただ見て、ただ記し、ただ報告する。

「対象の怪物は、48階層の迷宮を進撃中」と

「楽しいものだ」

そう呟く蟹は、しかし気づいていない。

侵入者エーサーベインの造った穴を、もうすでに掘り終わり。

デンザロスが、楽しみにしていた穴の先、つまりは迷宮にその鋏を振り下ろしているということに。

2

魔惨迷宮の主である。『墮神』ナー・ナーンは48層の迷宮が掘り進められているという報を受け激怒した。

かつて天上世界に座を構えた旧神の一柱でありながら、旧暦時代に政局争いに敗北し、

この下界、人草という矮小なる生命が傲慢にも覇を唱えている世界に追放された彼は、

天上から降り注いだ、神の残骸、神の僕の無数の死骸を集め、またその体内に残っていた莫大な量の「力」を操作して、ここにコツコツと地下都市を築いた。

そこで地上の魔族やら、人族を拉致し、配合し、交配し、新たな生命作り上げる実験を行った。

そしてまた、「力」を使って、天使を造り、この世界に絶対の憎悪を抱いている優秀な生物を僕として生産した。これらの彼の造った迷宮の住人こそが、冒険者が魔物と呼ぶものである。

交配生命や魔物の研究を進め、より優秀な魔物の製造を常に行いつつ。

地下で食料を作り、インフラを整備し、「力」を循環させ、また生命を増やす。

旧神の僕であった天使や、自らと同じような境遇の墜ちた神（『墮神』）たちと連携し、

この世界の生命を全て駆逐するか、奴隷に落とし、新神などと嘯いているあの背信者どもを抹殺するのが最終目標である。

月並みな言い方をすれば『世界征服』

とはいえ迷宮側の目標達成計画の進捗は決して満足できるような状況ではないが。

ナーンは怒りに身を震わせる。

自らの領土を、破壊し、我がもの顔で迷宮を破壊し続ける、愚かな侵入者の存在が原因だ。

（侵入者とは言うものの、ナーンがここに迷宮を築く前からその遺跡で眠りに着いていたのだが）

ともあれ自らの領土への侵入には、思い知らせてやらなければならない。

「例えそれが、なんであつてもだ」

強く言い切るのは、青い肌をした身長3 m程の大男。頭には四本の大角。

背には八本の触手を備え、黒い長髪はよく手入れをされているのか、輝かんばかりの暖炉の火に照らされ、黒曜石のような深い艶を帯びている。

迷宮最下層、玉座の間。

座るナーンの体軀の前には、4人の迷宮騎士。

ナーン直属の部下である。

彼は、迷宮を破壊する蟹の討伐を命じたところである。それぞれ姿形の違う、四色の騎士。

「では、いつてくれるな、ロード・エクサリオス」

「は」

命に代えましても、と続ける彼女を見る、ナーンの目は冷たい。ナーンにとってのかつての右腕。

側近中の側近であった、ロード・エクサリオスは、しかし既にその寵愛を失って久しい。

10年前の失態。

ロード・エーサーベインに致命傷を与えられた一戦以来、エクサリオスに対してのナーンの視線は常に厳しかった。

主の気持ち为例えどのような状況であっても、寵愛がなくとも、エクサリオスの主に対する忠誠にただの一つの陰りもなかった。

不断の意志。純粋な信仰にも似た忠義の思いを、自らを疎んじている主に捧げるその姿は、例えようもなく気高く美しかった。

魔惨迷宮 第三精鋭侵略軍 軍長 ロード・エクサリオスの出陣である。

「負けられないな、この戦い」

と、口にするものの、その美貌には陰りが見えていた。不安。

命令に従うことには一切の逡巡はない。

「主」に従うのは当然のことである。

問題は、そう問題、敵である。

街の草、迷宮の監視が伝えるところの情報、その不安の親である。ロード・エーサーベイン敗北。

自らが指揮をし、後に主の失意を招くことになった一大反抗作戦失敗の要因。

その主要因といってもよいあの憎き人の子を、エクサリオスが忘れたことなど、

この10年間、ただの一度もありえない。

憎い、そして殺したい。

そう願いつけた自らの汚点そのもの、あの10年前より、幾度も刃を交え、魔導を応酬した。

技をぶつけ合い、肉体の闘法を刻み合った。

そんな、憎きエーサーベインではあるが、その実力は本物である。そこに疑いはない。

実力が本物でない相手に、10年前のような失態を犯す筈がないし、それから何度も刃をぶつけ合って、相手が無事なわけがない。

エーサーベインの実力を最も高く評価している存在は、間違いなくこのエクサリオスであっただろう。

そのことが不安の源泉になる。

——あの、エーサーベインが、手も足も出ずに敗北した相手。と

金の長髪、人間と魔族の合いの子であるもの特有の、神秘的な美。流麗という詞の似合うスレンダーながらどこか華美を感じる佇まい。頭上にある二本の角（微塵の捻れもないエクサリオスの些細な自慢）を撫でながら

2 m近いその巨軀を、屈め、思案に沈む。

現在52層、後4層で目標の階層に到着する。

とはいえ、すぐに仕掛けるつもりはない。

近くに陣を構え、情報を集め、作戦を練った上での任務遂行こそ、望ましい。

通常の迷宮での戦闘は、人数で行うものではない。

幅は広いところでも5 m。

連携をもって上手く戦うことを前提に4人から多くても8人前後での戦闘が最良である。

48層は通常の迷宮域である。

中央にかつて警備詰め所として使っていた20 m四方の部屋、それが一番大きい部屋だが、そこに誘き出すべきか。

高さは6 m、しかし蟹の移動も可能にしてしまう。

蟹がいた遺跡らしき部屋で戦うべきか、しかしそれでは少人数の意味がない。

いっそ、掘り進めている最中の蟹に直接仕掛けるべきか。

エクサリオスは迷う。所思は尽きず、作案は無数に湧くが、しかし最善がわからない。

応援を頼むべきなのかも知れないが、これは自らの請け負った任務。そういった意識はあるし、他の3騎士も忙しいようだ。

一人は迷宮の行政、一人は最前線の指揮。

最後の一人、あの太りきったヒキガエルのような騎士は、最近研究室と自ら命名したあのおどましい部屋に籠もりきりだ。

多分、なにか面白い玩具でも、入手したのだろう。

さてはて、どうするか、行軍しながら、エクサリオスは、無数の仕方在必死に考える。

——負けられる戦いなどありはしない
しかしそれでも、難しいものだな、とエクサリオスは苦笑した。

3

デンザロスは掘るのをやめる。

気づいたのだ、無駄なことをしていることに。

掘れども掘れども終わりが来ないことに気づいたのは、迷宮の半ば近くにまで進んでからであった。

そこで、理解した、穴の先にあったのは、建築物で、そしてそれはこの身が入らない程に狭い、と。

そこで疲れをどっと感じ。結局王墓に戻ってきてしまった。

外に出るにはどうすればいいのか、そう新たな疑問を土産として。

――しかし、今が朝か夜か、わからないな

そう考え、王墓の中央を整地しなおし、そこに脚と鋏を畳み、ぼうとしている。

カンテラの灯りは、ちよつと前に消えた。

光なき、広大な王墓。

ちろちろ、と穴から薄い薄い、灯りの明がちらつく。

その光源とも言えぬ些細な、零れ光りを見ているデンザロス。

「暇だ」

「そうにゃ」

返ってくる声がある。

穴を見る。

影がある。

蟹は立ち上がる。

機敏な即応は歴戦を感じさせる。デンザロスの対応。

青銅の巨漢にすぐわぬ脅威の初速で穴に立っていた影に突撃し、鋏を突きつける。

影がすこしでも前に出ていたら、その顔面が朱く弾け飛んでいただろう。

「やめるにゃ」

一抹の恐怖、寸毫の動揺もみせず、目もとを覆うマスクの下、口元に、にやりと笑みを浮かべ

「あっし、肉弾戦はあんまり得意じゃないにゃ」

「何だお前は」

蟹の眼には警戒と、極小の興趣の念

「むう」

どこか面白がるように、猫はふざけて喋る

「ひつどいにゃー、ひつどい言い様にゃー」

影は、灯りを点す。

そこにいたのはフードとコートとスーツとマスクに身を包んだ怪しさのみで構成されている存在だ。

猫の耳がコートのうえでピクピクと動いている。

尻尾は下のパンツに納められているのか、外には出ていない。

蟹の偉容。

一つの小さな館に匹敵する、巨怪を前に、しかし下水に居を構える猫の店主は微塵の恐れも、畏れも抱いていないようであった。

口元に張り付いているのはチェシャ猫の如きニヤニヤ笑い、神経を逆なですることに特化したようなその笑みに

しかし蟹も特に感情を動かさない。

「小さき者よ、何の用だ」

敵めしい声。

敵意はないが、しかし下らない用件ならば、このまま鋏で押しつぶ

そう、という意志が見え隠れする。

訂正しよう、その不適な態度と笑みは、一定の効果を上げていたようだ。

「あつしにゃ、デンザロス、ルーにゃ」

「ルー……………」

幾ばくかの尋思、なにかを思い出し考える間。
そして改めて

「ルー？ ……………ルー ……ああ！ リュー！」

蟹はなにかを思い出した素振りを見せ。そして探るように、
小さな目を、不審なコート姿に向ける。

（目が小さいとは言っても、蟹にとって小さいのであって、人間にとってはバックラーくらいの大きさはあるが）

「……………うそをつくな」

「なんでちよっと間があったにゃ？ ……というか嘘なんかじゃないにゃ」

「私の知っているルーは、あの猫もどきは、「にゃ」などという奇怪な語尾で喋りはしない」

沈黙。冷ややかな風。カンテラの灯りはしかし揺れない。

蟹は、苛立ちを感じ始め、猫は、苦笑を覚える。

それもそうか、とコートを脱ぎ、マスクを外し、フードを降ろす。

「どうにゃ！」

「おおルー、俺には分かっていたぞ、一目見たときからお前だと」

「存在そのものを思い出すのにも、随分な時間がかかった気がするんだにゃ……」

気のせい気のせい、そうかにゃ。

ともあれ蟹は猫もどきと出会う。

蟹は猫の姿を改めて眺める。

髪は金。身長は120cmほど、頭頂部には茶色と斑の猫の耳。

そして当然のように人の耳のあるべき場所にある、長耳。

それは見事な長耳であった。長耳族でも此処までの形のよい耳はないだろう。エルフ

眼は大きく瞳は円ら、どこか小動物を思わせる愛らしさ。

童女のような可愛らしさを持った小ぶりの鼻と口。

しかし身体に眼を向けるとそこにあるのは、成熟したとは言えないが、

童女にはあり得ない程度に成長した胸部に腰、健康的な太股。

その身体は茶色の体毛に毛深く覆われており、尻部の上には猫そのものの尾が飛び出てる。

猫人の体軀と耳と尻尾に、精霊種の耳長人の瑰麗かつ淨妙を極めた彫刻のような美と長い耳。

それらが破綻なく組み合わさっている、奇跡のような組み合わせのハーフ。

それがデンザロスが久しぶりあったこの「にゃ」語尾の人物だ

（デンザロスの記憶が確かなら、昔日は普通に喋っていたはずであるが）

名前はリユーレアー。

古い友人である。

通称はルー。リユーと約していたのだが、言いにくいので自然とルーで定着した。

「上着を脱ぐのも久しぶりにゃあ」

そういいながら、デンザロスの鋭い鋏、脚を伝い、デンザロスの甲羅の上に座る。

ぺしぺし

「ほれほれ、はやくうごけにゃ！」

4

ルーのわがままに付き合い、王墓を高速で周回するデンザロス、二匹は久方ぶりに会う、友人同士の会話を親しむ。

「にゃあ、きもちいいにゃあ」

都市において姿を晒せば、奇異の目で見られ、その上、良からぬ者たちが現れることは、

ルーの姿において必至の未来予想である。

彼女は彫刻の如き流麗さと子供のような愛らしさという本来なら相反する二つの要素を奇跡的に合わせて持っているため。

彼女をペットにしたいと考える下衆の出現に事欠くことはないだろう。

そのため、ルーはあの下水の一区画から滅多に出ることはなく、コートとマスクは手放せない。

（その姿を晒してはならないのには、もうひとつ大きな理由もあるのだが）

「なあ、ところで」

「あい、わかってるにゃ、説明にゃ？」

大蟹の、1000年もの長きに渡る睡眠の、空けた穴を埋めるように。

ルーは、猫笑いで、風を感じながら、現状について説明を始める。

迷宮のこと、迷宮都市、冒険者のこと。

蟹にとって初めての、どこか心躍る、歴史物語。

旧神の後を継ごうとするものたち。蠢く闇。

迷宮の与えた被害の大きさ。

冒険者という命知らず。輝く光。生命の努力、その可能性。

挫けず、ひたむきに、時に欲望のままに、

時に協同し、しぶとく、いやらしく、それでも前に進み続ける泥臭い命の努力。

それが冒険者。

「……おもしろいな」

「そうにゃあ、おもしろいにゃあ」

いつしか報告は終わり、蟹のジェットコースターも止まる。
あるのはランタンの光。

青い光、赤い光、ルーが甲羅の上に置いた、灯火。

「生命とは、かくも遅しいか」

そう言って蟹は、先頃、戦ったばかりの黄金の剣を振るった騎士を
思う。

人間の極限とも言うべき技の冴えと練熟。
一瞬の判断、逃走のための行動選択の妙。

「そうか、……いや、そうだったな、人は、人とはかくも素晴らし
い、分かっていたつもりだが、忘れていた」

蟹の黒い瞳にあるのは、どこか優しげな、しかし驚嘆と尊崇の念が
入り交じった想い。

——そう、人の、生命の可能性とは、かくも素晴らしい。

「でにゃ、ものはなしにゃんだが」

尻尾を揺らし、耳を動かし、その温かそうな茶色の体毛を振るわせ
ながら、

その童女のような顔をひきしめ、ルーは語ろうとする。

「わかっている」

そのことばが音になる前に、しかし本来の、音ともいえぬ音が無理矢理、言葉へと変換している蟹のことばが音として被される。

蟹は、ルーが言葉を放つ前に、再び音を言葉とする。

「……人の、人の努力のみでの解決を、……いや、この世界に生きるものが自分でどうにかしようとするその姿。

それを見守りたいのではないか？ 姫は」

そうであろう？と、その肉体が人であったのなら、間違いなく微笑んでいたであろう調子の声で囁く

（意志を読み取り、変換する、発声紋章術の構成の巧みさが表れている）

「言いそうなことだ、そしてまた共感できる」

ルーは、そう言ってくれると嬉しい、とでも言いたげに、微笑んで、そして幾ばくかの間の後に、

胸の奥から言葉を、ぽつり、ぽつり、紡ぎ出す。真摯というべき表情で。

「……私も、この世界の現状が嫌いじゃない、自分の力で人が乗り越えるべき壁だと思っている。

ここで、私たちが、迷宮を、攻略して。民草に平和が訪れたとしても、それは彼らの勝ち取った平和じゃない。

与えられた平和に安堵する民、平和を与え、全能感に浸る支配者、その構図は、旧神のそれと何が違う？

……私たちは、旧神の踵を踏むつもりは微塵もないし、これから踏むことも絶対にありえない、

少なくとも私はそう誓っている……、……にゃ」

「違うない」

青く輝く大蟹は、頷くように甲羅を振るわせ、鋏を閉じる。

磯の匂いではなく、金属と土、埃と命の香りを放つ甲羅の上、4つ耳の猫は、嫌みなく、綺麗に笑った。

5

「話を理解してくれてうれしいにゃ」

「なに冒険者、おもしろい生き様じゃないか、努力と選択の極致、うむ結構」

「それでにゃ」

「ああ」

「これからどうするにゃ？」

冒険者たちも、お前をこのままにしてはおかないだろう、とルールは言葉を続ける。

先ほどの話は一つの前置きであり、立場の確認に過ぎない。

しかし、現実的な処策はなにも決まっていはいないのだ。方針さえもだ。

ここでルーが、情報を持ってこなかったならば、蟹は迷宮を掘り進み続け、上を目指し、そこにある都市を恐慌に陥れただろう。多くの冒険者をその手に掛けただろう、無知とは残虐性の母とも言えるのだ。

決して残虐でもないが、デンザロスは身に降りかかる火の粉は、躊躇なく払う存在でもある。

しかし冒険者の目的、存在を知ったからには、デンザロスも無闇矢鱈に彼らの世界に混乱を及ぼせるつもりなどなく、それどころか応援する父の如き気持ちさえ抱く。

大蟹は高潔だ。他の矜持を尊重する。闘争も嫌いではないが、目的もなくそれに邁進する程に好戦的ではない。

となれば、ここに、この王墓に、この1000年のゆりかごにこのまま居座れば、

無用の混乱と被害を冒険者達とこの都市に及ぼすことになってしまうだろう。

それは望むところではない。

その上――

「退屈であることが問題だ」

「あっしがここに來たのは、その辺りをどうにかするためじゃ」

待ってました言わんばかりに、値千金の笑顔（胡散臭い笑顔でもある）を見せて、答える。

ルーにとっては、デンザロスの現状の理解が先決であった。

次に、姫の想いと、自分たちが現状どう世界で生きているか、どう

いったスタンスでこの世界と向き合っているか、それをデンザロスにもとってもらえるかということ（つまりは相互理解）が重要であった。

その辺りのことが解決した以上、次に行うのは、彼をここから外に出し、

無用の混乱被害を生み出さないようにする第三の目的の実行である。

何度も言うが蟹がここにいれば、冒険者は来るし、迷宮側も来るだろう。

否応がなしに、彼らとの争いになるか、あるいは彼らの争いに巻き込まれる事態になるだろう。

それは好ましい事態ではない、不要な事件であり、予め取り除かれるべき問題だ。

ルーはそう考えるし、蟹も同意している。

ならば蟹がここにいる必要は、一ミクロンもありはしない。

速やかな脱出、問題解決が望まれる。

不要な遺恨は、不要な憎悪は、買わないし売らない、それこそが肝要。

「とりあえず脱出にゃ」

「ふむ」

蟹は、黙考す。

解——それを否定する要素は何処にもない。

「うむ結構」

「えらそうにゃ」

「それで？」

ルーは分かっている、とデンザロスに向かって頷く。

ネコミミが揺れる。茶の体毛と黄金の長髪のコントラストが美しく映える。

（見る者は蟹しかないが）

「あっしがどうにかするにゃ」

「ほう、やってくれるか」

「もちろんにゃ」

というか、あっしがいなけりゃ、天井を掘ることなんてできないにゃ、と続ける。

蟹は反論する（斜めに掘っていけばいつか上に！）ものの

崩落するし、時間かかりすぎにゃ、そのうえ何処掘ればいいのかわからないあんたにゃ無理にゃ。

との言葉であえなく論破される。

「三日にゃ」

「大分かかるなあ」

「色々準備が必要にゃ、警戒しながらの準備にゃ、裏道も駆使して出来る限り急ぐから文句いうにゃ、

それにあっしが肉弾戦じゃあ殆どなにもできないのもホントにゃ」

——それこそ、前衛の冒険者なら高位辺りから勝てるかどうかあやしいにゃ、

あっし儀式小家しか使えないから詠唱中に斬られてバタンにゃ

と呟くルーに、デンザロスは掛ける声もない。

それを尻目に、一本の脚を、滑り台に見立て、しゃーっと地面に滑

り降りる猫。

「ま、座してまつにゃ、座してことが成るんにゃ」

楽だろう？と流し目。

猫は再び、デンザロスの鋏を足場として甲羅へと飛ぶ

——大きな背中にゃ

そんなことを思いながら、広大な王墓跡に幾つか音を鳴り響かせる
ルー。

「方法は？」

「『鎧』にゃ」

「ああ…… あれか…… 持ってきてるのか？」

「もちにゃ、というかあれを傍から離すわけにゃいにゃ」

苦い思い出の象徴でもあるだろうに、だがあえてその咎の象徴を、
身に付け、傍に置き続けることでなにもかも忘れることを良しとし
ないつもりなのだろう。

自らを縛るような、その行為、しかしそれさえも飲み込み、耐え、
慣らして生きるその生き様は、
まさに今、一つの命として今を生きていることの証なのかもしれな
い。

蟹は、そう考えていることを臆面にも出さず。

（なんせ蟹である。表情など眼や仕草以外ではそう知れることもな
い）

問いかける。

「ぶち抜くつもりか？」

「一気にゃ、人のいないところをゴールに、上に道を造るにゃ」

「そうか、ありがとう」

「礼はいらんにゃ、自分のためでもあるにゃ」

この王墓からの地表への脱出は、三日後の夜に決行となった。

「三日間というのは長いにゃ、人も、迷宮も、色々な準備や行動をおこすにゃ。

でも、わかってるにゃ？」

当然と言った素振り、鋏を両方、天に掲げ、ジャキンツと鳴らす。

「わかっている、極力関わらず、被害は軽微が理想。そのまま居ては毒にしかならん身ということは十分に承知しているよ」

ならば結構と言いたげに、胸と毛を揺らし、にやりと笑うルー。

さて、しなければならぬ仕事は終わった。という空気が二人の間に漂う

僅かにあつた緊張と緊迫が霧散する。

「さて、ルー」

「なんにゃ、デンザロス」

「今は夜か？」

「夜にゃ、真っ暗にゃ、絶好の密談日和にゃ」

「では聞かせてくれないか？あれから1000年、迷宮以外では何が変わった？」

「そうにゃぜひ聞くにゃ、耳の穴かっぽじるといいにゃ」

思い出話に、華が咲く、そこにあるのは昔懐かしい友との純粋な語らいの時間。

時が経つのは早いもの。

それでも1000年は長いもの。
話は積もり、種は尽きぬ。

旧友同士の醸す暖かな空気を土壤に、笑いの花は咲き誇る。

「馬鹿だなあ『騎士』の奴……で、その話、承けることにしたのか？」

「んにゃ、そこまで馬鹿じゃなかったにゃ、でもその時の決め台詞が「貴方の触手になんか、決して負けはしないっ！」でこれがまた傑作なことに……」

「ほう……、『霧』はそんなところに」

「「俺は晴れない霧になる、それでこの湖の名物になるんだ」だそうにゃ」

「『木人』が地元の村で神木扱いされて動けにゃいにゃ、ずっと同じ姿勢で腰もいたそうにゃ」

「切られるよりはなんぼもましだろうが、しかしそれは………うん」

「姫さまは相変わらずにゃ、今も世界をぶらりと回ってるにゃ、大陸中の名物を食い尽くすつもりにゃ」

「会うのか？」

「たまに、ホントにたまにゃ、10年20年にいちどつてとここにゃ」

「ふむ、一度、会いたいものだな」

「あうといいにゃ、あれで結構、友達おもいにゃ、よろこぶにゃ」

一晩、迷宮に笑いの花が咲いた。

友達っていいね（後書き）

『魔軍三六将』

『有角姫』に惚れ込んだ、あるいは神に並々ならぬ憾みを抱いていた魔王領の住人たち。（魔王領外の人外も含む）

三六将全てが、卓越した技量を持った戦士か、凄まじいまでの儀式仕手か、並々ならぬ技を持った超獣であり、

後の『天上戦争』においては『有角姫』『九烈士』とともに天上で神とその配下たちと戦った。

戦後は、神の僕もしくは英雄、悪魔、神官、準神として神話にその位置を入れた。

列伝

『小鬼』ヴァウマッフ

タレンコイア ティンダロス連邦出身。

小鬼族随一の機巧師であり、多くの戦闘機械、補助機械を発明した。彼の作成した機械が、後の世界の生活上に極大な影響を与えたことは、あまりにも有名。

天上戦争において、天山攻略において神々の猛撃に遭い戦死。味方を庇っての死とも伝わる。

そのマッフ機巧は仲間に受け継がれ、多くの戦略的貢献を果たした。

新暦においては、『機巧準神』として科学者や技術者に信仰されている。

人間世界の庶民にも幅広く信仰を許容されている数少ない魔将である。

『獅子王』レオハルケン

魔王領 インザアーク出身

全長3mを誇る巨大な獅子型魔獣。

気高く誇り高い、勇壮な魔獣であり、その高慢さは地軍一とされる。元々は魔王領のインザアーク平野部において、王として魔獣ヒエラルキーの頂点に立っていた。

訪れた『有角姫』との一騎打ちにあえなく破れ、その美、その気高さに心酔。

対天上軍である地軍（地上軍）に参加。

天上戦争においては、

言葉は使えず、簡単な儀式小家しか持たず体躯のみで戦う存在ではあったが、その技巧と速度を持って敵を攪乱し続けた。

また『有角姫』の乗騎としても働き、天山攻略において

『軍神』ク・エルド・エルクの喉を咬みちぎった。

新暦においては主神『至高神』の乗騎であったことから『神の僕』として尊崇されている。

レオハルケン自体は、今もどこかの草原で眠りに着いていると言われる。

一日目、またもや進まない話（前書き）

今回も準備回、後半文章を練りきれなかった気もするので、後で改稿するかもしれません。

主人公は今回もお休み

設定を書くのって難しいですね。

本当は、匂わせるように、もっとさりげなく自然に書けるようになりたいです。

一日目、またもや進まない話

1

迷宮での探索を生業とする冒険者にとって、冒険に行かないということはそのまま無生産市民への転落を意味する。

即ち穀潰し、ふうてんの寅さん、ルンペン、自由人、高等遊民。冒険しない冒険者とはその類の存在である。

ハンナⅡウルフは一晚で、自慢の艶を、一気に失った己の赤髪に手をやる。

大蟹の報告。エーサーベインとバル・ファルケンⅡノースがもたらした都市の混乱は、

冒険者の萎縮を招いた。

情けないな、という思いが、ハンナの心中になくもないが、しかし彼らを責めることはできない。

危険に近づかないその姿は生命としての正常。

結構、安全結構、命結構。

大切な物だ。それを守ろうとするその姿、結構な判断だ、一個の生命体としては、間違いなく一流だろう。

しかし本来、命の価値を越えて、危険と名誉に魅力を感じて感じて焦れるべき冒険者のその有様は、冒険者としては三流の証明に過ぎない。

それもまた事実。

ハンナⅡウルフは、そう考えていた。

対策と会議、情報の収集と、都市への説明書類。

斥候の選別と、速やかな派遣。

そこからもたらされる情報の分析。

それがもたらす疲れと、忙しさは天井知らずである。

やることは尽きない。

——身体と脳味噌があと10個は欲しいわね。

とハンナⅡウルフが考えることも無理はないのである。

外では雪が降る。

大陸中央部よりも北側に位置するこの迷宮都市の、冬は早い。

「まだ、混沌の月に変わったばかりなのにね」

（ちなみに一月から十二月にはそれぞれ、神の名が付いている。

至高神十九神十海王の月十死の悪魔の月

混沌神は十月である。

加護月の概念であり、その月にはその神が見守ってくださっている
という信仰でもある）

閑話休題

暖炉の火は、早くもくべられた薪を食い尽くそうとしている。

「寒いわね」

机に座り、ぶつぶつ、と文句のような呪詛を延々吐きながら、しかし確かに進められるその作業は、これから先の計画立案である。

斥候の報告によれば、件の蟹、ダンジョンを掘り進めるのをやめたらしい。

無駄なことで悟ったか、しかしその心はわからない。

ハンナⅡウルフはその思わぬ幸運に感謝して、問題の蟹をどうするか考える。

——エーサーの話では、攻撃をするまではあちらも攻撃してこなかったただけだ。

案外、好戦的でないのか？

しかし、問題はそういうことではない。

あのロード・エーサーベインを打ち破った蟹の怪物が。

最前線近くの階層に、我が物顔で居座っていることが問題なのだ。たとえばそれが迷宮軍の新兵器だったとしたら、その恐ろしい蟹が迷宮を掘り進み、

こちらを挟撃しないとも限らない。

あるいは50層に向かう途中で、あるいは50層から帰る途中に、その蟹が待ち受けていないとも限らない。

なによりも、それがそこに平然とあることは、50層に行く気持ちに萎えさせ、

その怪物が健在であると言うだけで、木っ端冒険者は萎縮し、口だけの益荒男は酒場で飲んだくれる。

治安は悪化し、都市の経済の停滞も招く。

鍛冶や商業組合からの迷宮組合への圧力は既に掛かり始めている。

——ことは、そう簡単ではないのだけれども。

ただハンナⅡウルフにとって朗報が一つあるとすれば。

その蟹が敵側の兵器の類ではないだろう、という推測が立つことである。

その蟹の鎮座していた空間が古代遺跡であるということ。

発見の状況。室の状況。48層到達から50年経っての発見であること。

なによりも

「あちらも動いてるらしいのよね」

迷宮軍がその蟹に対して斥候を送っているらしいことが駄目押しだ。

——これで、本当はあちらの新兵器だったりしたら、すごい策士ね、主とやらは

しかしその可能性は低い、とハンナは考えていた。

迷宮の主は、高慢で直情径行、感情とプライドで動く、ある種の愚物である。

600年近く、迷宮で戦ってきた相手だ、冒険者たち情報の蓄積の末、想定している迷宮主の性格を読み違えていたのなら、何を信じればよいのか、全く分からなくなってしまいうだろう。

では、どうするか

「迷宮側の対応を見つつ、斥候の護衛隊、蟹に対して一度当たっておく必要があるわね、それも近い内に」

負けさえしなければ、あとはどうにかしてみせる、と自信を滲ませ
呟くハンナ。

バルとエーサーの敗北では後手に回ったが、そも印象操作、風評操作、あるいは火のないところに煙を立てるような真似はハンナ・ウルフの十八番だ。

その自身が自負として滲んだ。

ふう、と一息ついて、机から立ち上がり、黒茶を煎れる準備を始める。

歩きながら、作戦手順と、これから始める各種交渉の段取りと順番を脳裏にまとめつつ、

迷宮に送る、蟹と迷宮軍へとぶつかるかもしれない先ほど決めた派遣隊の人員の構成を

どうするか考える。そして早速、幾人かの冒険者に当たりを付ける算段をする。

——こんな時に、バルが居てくれればね

未帰還者として迷宮に消えたまま返ってこない一人の男を思いつつ。ハンナは溜息を吐いた。

「ばかね」

——私も、あの髭も、そしてエーサーも。

そう心想を深めるその顔は、これまでになく暗いものであった。

人は、想いも、願いも、振り捨てて進み、そして何時の日かふと我に返り想うのだ。

終わった後にしてもしょうがない、後悔というものを。

メイニー・ランチェットは初心者冒険者である。

田舎物、純朴で素直。

気立ても良く、見た目も中々。

身長こそ高くないが、商店街の親父ども、鍛冶屋街の偏屈どもに娘のように可愛がられる。

言うなれば町娘フェロモンのような物を備えている。

彼女はひょんなことから冒険者になり、ひょんなことから中位冒険者ロッド・エヴァンスとともに暮らすことになった。

いい加減慣れてきたとはいえ、冒険者になった当初は右も左も分かつらず、ロッドの顔に渋面を作らせ続けた。

いま彼女は、学府に通いながら、時折、浅い層にロッドとともに潜ったり、

街の郊外や、街道に出る低位の魔獣、獣、盗賊などを退治する依頼を受けたりしている。

いつまでも半人前扱いなんですから、もう。というのはメイニー嬢の言である。

「ロッドさん、仕事かー」

メイニーの言うところのロッドさん、ロッド・エヴァンスは中位冒険者であり、

常日頃からメイニーのお守りをしている訳ではない、時折、中位冒険者に相応しい依頼を、知り合いや友人と受けている。とロッドからは聞いている。

メイニーにはそれが不満でもある。

置いてけぼりにされている気がするのだ。

あの常日頃から、全くやる気を見せず、ぬぼーっとしているロッドが、中位冒険者という、

初心者の自分と比べると遙か遠くのように感じられる位置にいて、自分の知らない人と、冒険をしている。

そのことを考える度、メイニーは、自分も絶対に中位冒険者まで上がってやる、と決意を新たにするのだ。

――ご飯も作れないし、掃除も洗濯もできない、お買い物メモだって忘れる。あのロッドさんが、

中位冒険者の依頼なんて……不安です！ 自分がついていって助けてあげなくちゃいけません！
といったような決意を。

「ロッドさん、まだかなあ」

そのロッドは今は居ない、先ほども言ったように仕事である。

それもととても忙しい仕事であるようで、

「いいっすか、下手したら大分かかるかもしれません、仕事とか、勝手に受けないようにお願いっす」

と言いつ残して、今朝、大慌てで出て行ったきり、全く姿を見せないままだ。

昼行灯の面倒くさがりロッドさんがそこまで言う仕事だ。かなり大変なものなのだろう。

——不安です、心配です、ロッドさんのことです。仕事中に立ったままいきなり居眠りしかねません！

とメイニー嬢は先ほどから心を悩ませているのであった。

リビング兼キッチンと個室二部屋だけの簡素なアパートメントに、煮込んでいるシチューの匂いが漂う。

油を差してあるランプの明かりと、暖炉の灯りが、部屋を照らしている。

朝方から降り始めた雪は、今もまだ降り続けている。

外はほのかに薄暗く、昼過ぎだというのに、日照は全く存在しない。

——シチューせっかく昨日の夜から用意したのに

昨晚から仕込みを始めたシチューを、果たしてロッドさんは食べてくれるのか、

夜には帰ってくるといいのだけれど、とまたしても思い悩むメイニーであった。

良い匂い、食欲をそそる匂い、匂いだけで胃が刺激される、暖かな家庭料理の香り。

これはロッドがまた食べたいと言った。メイニー自慢のシチュー。

そんな思い悩むメイニーは、数冊の書を机に置き、それを読んでいく最中であつたようだ。

一冊は魔導書。

100種類にも及ぶ、紋章が、厚い紙に記されている本である。

これは所謂、初級魔導書と呼ばれる物で。

人が自らの魂に触れ、そこから「力」を引き出し、それを使うという魔導（儀式小家）の実践的な修行のための魔具である。

紋章とは基本である。魂から引き出した「力」を操作し、外にある紋章に馴染ませ、その紋章は記された定式に従い効果を発現する。この魔導書にはその紋章が無数に記されており、1p目から100p目まで、難度順に色々の紋章が並べられているのである。

メイニーは先ほどから、この魔導書50p目に、「力」を流し込もうとしていたが、

心配事に気が逸れて、遅遅として進展してないのが実情であつた。

（もう一つの魔導の基本として瞑想がある。これにより魂に触れ、『力』に触れることになるのだが、瞑想が進むと、魂の器が大きくなり、「力」の容量が増える）

「もうっ！ ロッドさんのせいです、全然進みません」

ぷんすかぷんすか、と少女は頬を膨らませる。

集中できない。今はシチューに付いている必要もない。

暇なのだ。ではどうするか？

「借りてきた本でも読みましょう！」

そういつて『神話・物語録』（エンゲルス・バッキオス著のベストセラー）の十二巻を手取る。

——学府のいいところは、身分証明されて冒険者なら、大抵の本を貸してくれるところですね！

と、メイニーはご機嫌である。ロッドにとっては全く興味のそそられない話ではあったが。

この本の内容は端的に言って、各地の物語、伝承、童話、伝説、神話を選び抜いた本である。

面白い、楽しい、かなしい、不思議、謎、恐ろしい、怖い、かっこいい。

そういった色々の内容が、エンゲルス・バッキオスの慧眼により巧みに配列され、脚色され、注釈されている。

親からこういつた話ばかりを聞いて育ったメイニーにとって、この本との出会いは運命だったといっても良い。

特に魔将関係のエピソードは真に迫ったものが多く、魔将に馴染みのない民衆に感動や、哀惜の思いを伝えている。

（爆笑エピソードも多いが）

魔将とは、不可思議な存在だ。神の僕もいれば、神そのものもいる。悪魔もいれば、神官のような存在まで居る。

多様であり、魔族でありながら、怪物でありながら、新神に付き従ったことも不思議だ。

その扱いには、神殿の神官も困っていると聞いた。そもそも日常において、全く生活に関わらないような魔将は、

その存在を余り知られていないものも沢山居る。

子供であれば誰もが聞いたことのある『大蟪蛄が来て、悪い子を斬っちゃうぞ！』の『大蟪蛄』や、

至高神の兄君である『魔王』や、機巧の親である『小鬼』、神器の親とも言われる『四耳猫』などは民衆に広く周知されているが、

もっとマイナーな魔将や、地味な魔将などは、専門家やその道のマニアでなければ、普通の人は誰も知らない。

そもそもエピソードやその背景、気性などが全く知られていないので周知のしようがないとも言える。

ではそういった存在しないはずの魔将の話を幅広く収集しているこの本の作者は何者か。

「歴史の片隅に埋もれる運命にあった伝説や民話をつなぎ合わせた結果」と著者のエンゲルスは言っているが。

大手の新聞や、著名な書評家、評論家、学者の中に、これらの話を完全に著者のエンゲルスの創作と言っている者も少なくはない。

著者のエンゲルス・バッキオスは、一切の公的な場に顔を見せず。それどころか出版社も一方的に郵送されてくるその作品を受け取って、指定された口座に金を振り込むだけ、という

異色異様な、謎の覆面作家である。その謎がまた受けているとも言えるが。

その謎がまた、そういった「創作説」の根強い風潮を支えているとも言う。

が、メイニーには、それは些末なことである。読んでいて楽しければ、

あるいは歴史を想像することの助けになれば彼女にとってそれが本当であるかなど、詮のないことであつた。

全十五巻で、今読んでる十二巻は『迷宮篇』最近、急に身近になつた迷宮の話と言うことで、メイニーは特に楽しく読んでいる巻である。

メイニーが特に気になっているのは、自分のいるこの魔惨迷宮の章の「謎」の段にある。

「彼方に潜みし悠遠の、時を過ごせし強大な

信念の獣が、心の強き者を待っている」

という伝説である。

魔惨迷宮が都市の体裁を整えた頃。

それこそ新暦の1100年頃には既に伝わっており、多くの冒険者がこれにロマンを感じた。

しかし400年の間、誰もが探し求めたその伝説は、しかしなにもその伝説の片鱗を確認できず。

1500年頃、冒険者が40階層にまで辿り着く頃になると、口に出す者も少なくなり、

それから1000年経った現代では、覚えているものなど皆無に近く、とうに忘れ去られた伝説である。

と本には書かれている。

「信念の獣かあ、どんな姿なんでしょうね」

と、呟くメイニーは、忘れ去られた伝説への浪漫を感じる心に満ちていた。

心の強き者を待っているというのが、ドラゴンの試練の話に似ていることから、この話の獣とは竜なのではないか？

とメイニーは心密かに思っている。

そうして、メイニーは、書の見せる、めくるめく伝説の世界へと引き込まれていく。

3

魔惨迷宮49層中央部。

銀の鎧に身を包む、二本の角が逞しい騎士。

ロード・エクサリオスの姿がそこにあった。

一晩かけての作戦立案と情報収集。

右に構える神器である『神盾イーリス』

左手には柄、鞘に納められた剣が、杖のように地面に立てられている。

睥睨するは、闇の向こう。

篝火を灯とし、座る彼女の眼差しは、しかし堅い。

件の蟹は、今日の昼に一度目視した。

予想以上の大きさ。

今は眠りに着いているかのように大人しいが、あれは紛れもなく脅威である。

ロード・エクサリオスはそう認める。

その偉容。その壮烈さ、世界に対しての余裕さえ感じるその強者の空気。

——認めよう、あれは間違いなくかのロード・エーサーベインを打ち倒した怪物であると。

こちらの兵員は7名。少数精鋭。

任務は、対象の撃破捕獲、もしくは討伐。

戦力の内訳は、

蛇頭の天使が2。黒鬼が2、魔導行使型の黒耳長族が2。

どれもロード・エクサリオス自身が育て、薰陶を与えた、自慢の精

鋭である。

しかし相手が悪い、あの巨大、予想攻撃力と予想防御力、予想速度を考えると陣形を組んで戦闘を行うには、

一山ならぬ苦労を想定せざるをえない。とエクサリオスは考える。

「どこかに嵌める、そして押し切る」

それしかないか、とエクサリオス。

しかし罠を張ろうにも、対象は広大な王墓に閉じこもっている。

あれはあちらの領域だ。出来ることなら近づきたくない。

——進撃を開始してくれるのなら、こちらも紋章と刻印を駆使した、魔具を準備し、拘束を考えることも出来るのだが

しかし蟹のことだけを考えてもいられない。

問題は

——冒険者どもの動きだ。今代の組合長は中々に侮れない、この期に50層を直接狙うぐらいはしかねない。

こちらの動揺を前提に、あの巨蟹を捨て置いて、最前線を動かす。それぐらいの奸智と胆力のある相手だと、エクサリオスは理解している。

「しかし妙だ」

あれは、昨日あんなにも熱心に行っていた迷宮進撃を今日になって全くおこなっていない。

ただ、広大な空洞に身を潜ませるかのように、黙座している。
気性に関しての分析が完全に狂ってしまった。

——戦闘を好まない種なのか？ いや、そもそもあのような巨大な蟹の種がなんであるのか。

ふと、エクサリオスはそう思った。

とはいえ一瞬のこと、些細な疑問を横に置いて、エクサリオスは思案に戻った。

「冒険者の動きを見て、あわよくば」

漁夫の利を。と呟いて、エクサリオスは部下に次の指示を出す。

4

下水の奥、地下4階、下水管理室。
そこにルーがいた。

自らの住居と商店も兼ねたあの秘密区画ではなく。
来ようと思えば、誰でも来れる部屋だ。

下水の水量確認、区画ごとのパイプの管理、水流の調整などが行える機関室。

下水の脳とも言うべき部屋。

ルーはそこに日常衣でもあるコートとスーツとマスクに身を纏い。
これからの作戦の手順の確認に邁進していた。

ルーは悩んでいた。

企んでいたと言い換えてもよい。

一日目、陽は落ちた。

準備の下ごしらえは、とうに始めている。

で、なければ間に合わない。

目的はデンザロスの脱出。

手段は穴。

「シンプル、シンプルにゃ」

これ以上ないほどには、単純だ。

とはいえ世にある多くの物事も事案も、実際この程度にはシンプルである。

それが複雑になるのは、手段のための準備、下ごしらえ、根回し、前提、そういったものを揃え揃えないと、そのシンプルが実行できないのだ。

穴を空けるのは、テントの奥に眠っているあの『鎧』を使用してだ。それをさらに迷宮の、しかも深部に運ぶ。

裏の道を使いつつ、それを、まず迷宮に運ぶまで間、誰にも見られてはいけない。

その上、裏道を使うところも誰にも見られてはいけない。

迷宮内の移動も、誰にも見られてはいけない。

『鎧』は重い、数回に分けなければ、機巧で引いても、運びきれないだろう。

さらには、肝心の穴を空ける瞬間。その先に、地表に誰かが居たりしたらことだ。

被害を出さないように、そしてそこから出る蟹も見られないようにしなければならぬ。

これには下準備が必要だ。街道や盗賊、農民がいなくて場所を探し、そこに穴をつなげる。

さらに、そこに運悪く居合わせる者がいないようにもしなければならぬ。

やることは多い。

「本当は真上にぶちまけるのが早い話にやんだがにや」

穴さえ天井に開けてしまえば、あの蟹でも外には出られるのだから。
と

しかしあの王墓の真上は丁度、行政庁の城のような館が建っている。そこに穴が空いたらそれはそれで気持ちがいだろうが、当然そんな目立つ行為はNGである。

斜めに、そう都市の外に。

都市の郊外域、スラムの向こう、街道の隣の花畑、その辺りが丁度良い。

地表側の目星は付けた。

後は迷宮の20層前後の何処ぞ隠し部屋に『鎧』を集めて

当日の夜に、鎧ごとあの王墓に辿り着けばミッションコンプリートだ。

さて問題は、人払い、そして荷物運びだ。

と、その時

かつ、かつ、かつ、と足音になる。

なにか来ている。

緊迫、緊張状態

なにかは、扉の前に立つ。

猫に走るのは警戒。

都市の行政官か、はたまたならず者か、それとも

「へえ、おいらです」

協力者か。

「にやっにや、やったにや？」

「へい、言われた通り、噂を流してきました、靴磨きの連中と、塵拾い、糞拾いの仕事をしてる連中の協力のおかげでさあ」

協力者は、浮浪者、ボロ布を身に纏った、最貧民。

その多くが下水の各地を住処に、都市の末端を汚している。

ルーは、こういうときのために縁を作っていたこの連中、こういった仕事を金の為にやってくれるこの連中。

警戒のされにくく、後腐れのない、この連中に噂を流させていた。

——とはいえ、あっしが流させているという情報が漏れないとも限

らない……にや

そのためこの指示は、最貧民の顔役を交渉対象として限定して、その交渉も扉越しに行っている。

彼らは最貧民、風説の浸透力に期待しすぎてはいけない。

それでも彼らの情報が、酒場主たちや、迷宮管理組合、行政に少しでも伝われば、猫の行動の助けになる。

流した情報は、

「都市の西部、住宅街や、商店街、スラムで、凶悪犯罪多発、強盗や強姦、殺人が頻発するも、警備隊はそれらの犯罪を抑えきれていない」

というもの

丘に作られたこの迷宮都市の構造は、

都市中央部にして頭頂部。行政区と軍区のある最上段。

一段下がり、迷宮探索のための装備を整える鍛冶商店区と、酒場や宿屋、娼館が集まって、迷宮管理組合が存在する冒険者区のある上段。

さらに一段下がり、学府や、研究室、行政官や軍の高官が住み、大手の商館や百貨店がある高級住区。これが西部。

反対側の東部には繁華街と商店街。これが中段。

さらに一段下がって、西区に住宅街と小商店街、東区に第二軍区（主に宿舎があり、多数の軍人とその家族が住み、訓練している）さらに壁を周囲が覆っている。

その壁を境に向側に、貧民街（都市の庇護はないが、市を開いたり、労働力として都市に出稼ぎに来る、定時には壁の外に帰っていく）これが下段。

これらの段々の地下に下水が存在し、東北域の青海へと流れ来む川に汚水が流れ込んでいる。

（ちなみに汚水の除去は導師と法師が、川への合流地点に詰め、水へ干渉して、

その川を出来うる限り浄水している）

（かつては垂れ流しであった川が浄水されることになったのは、ある環境学者の「衛生観念」の発見、公害の起こり、市民運動、参加する学者、年代をまたぐ大きな社会運動などなど、ここには記しきれないような膨大な量の努力と涙と汗と血のドラマがあったらしいが割愛）

上段にある迷宮入口。

軍人が囲んだそれを、冒険者は降りていく。

入り口の隣にはポーター。

軍兵が詰めて一定の防備を備えている各10階の中継地へと、儀式大家が送ってくれる（値段は恐ろしく高い）

迷宮に潜む、魔物には二種ある。

一つは、迷宮という建築物を使い、迷宮主が、各地に儀式大家を使って送り込む魔物。

使い魔、迷宮主の僕、魔法で作られた生命である。（天使など）

こういった魔物は浅い層には距離的な問題で簡単な魔物しか現れないが、奥に行けば行く程、強い魔物が現れる。

もうひとつは、迷宮側で生活をしている亜人や、迷宮主手製の人造生命、迷宮に持ってこられた魔獣である。

これは群れを作り、迷宮に巣を作って、時に迷宮主に従い、時に自律して、冒険者の前に立ちふさがる。

（スライムなどの単細胞種族や黒狼、蝙蝠から、黒色の各種亜人などだ）

迷宮は広い、縦にも、横にもだ。

そしてそれは10層から加速度的に一階層の大きさを広げてくる。

そこに暮らす亜人や、生命を、冒険者が全て討伐するのはとてつもない時間と人数の必要な難事業である。

閑話休題

さて

ここまで大まかとはいえ長ったらしく都市の説明を行ったのは、猫のこれからの行動の説明のためである。

猫ことルーは、東部域にありもしない噂を流すことで、そちらに行

政や、冒険者（警備依頼を受けた冒険者）の目をそらし、

これからやろうとしてることへに布石としたのである。

勿論、己の顧客である冒険者幾名かにも、同様の噂の伝播を頼んでいる。

限らない力技、だが今日の朝から各地でばらまかれた情報は確実に広がっていた。

勿論、通常ならばこのような根も葉もない噂は、さっさと沈静されるか、行政が対処したであろう。

しかし一度広がった噂は、しかも各地で囁かれる噂は、これは嘘である、などと公にいったとしても、信用されない。

既に広がっている以上、「隠されている」と考えるものも出てくるだろう。

その上の、ここ二日間の蟹の噂、エーサーベインとバル・ファルケン・ノースの噂。

それらへの対処のため行政と迷宮管理組合の多忙と動揺、怯えた冒険者たちによる治安の悪化。

それらの事態が、この噂を後押しする。

こうなれば、行政も、冒険者組合も、事の真偽をこの忙しい事態に時間をかけて対処するよりも、さっさと冒険者や警備を派遣するだろう。

そこで、元々軍人の住まう区画であり、噂の流れていない東区には隙が出来る。

軍人のお膝元という安心感、その上、東区の住民も、念のため夜は出歩かないことを考える。

実際に治安は悪化しているし、暴れる冒険者もいる、その上、蟹があそこに居る以上、この噂の効果は幾日か沈静化されずに続く。

その隙を突いて、下水を伝って東区のある場所に荷を持って出る。
下段東区の丘より、閑静な大邸宅街の片隅、そこにある古びた一軒家。

そこに昨日、蟹に語った『裏道』がある。

あれは迷宮第9層への直通路。元々はここに住んでいた古い知人が、迷宮を監視するのに使っていた『裏道』だ有り難く利用する。

その上、あえてマスクとフードを外して、頭巾を被る、下はコートとワンピースなどの緩く全身を覆うものを身に付ける。

これで傍目には、村娘型の耳長族の少女が、重い荷物を引いて、東区に迷い込んだように見える。

もし誰かに見つかっても、どうにかなるし、正体はバレないはず。気にすべきは、夜闇に紛れる質の悪い人さらいか、酔っ払って遊びほうけている不良軍人程度。

既に連絡場所である、下水管理室から、テントのある秘密区画へと戻ったルーは、満面の笑みでほくそ笑んでいる。

「かんぺき、にゃ…… かんぺきにゃ！」

自画自賛、マスクの下、見える口元には、童女の如き素直な笑み。そしてにやりとほくそ笑み。

ふふふ、と今度はチェシャ猫笑い。

「あっし、自分が自分でおそろしいにゃ！」

一日目、またもや進まない話（後書き）

魔軍三六将

列伝

『海王』 ベンテューク

母なる海の出身。

魔王領のみならず、世界の全海岸域、島嶼域において新暦以前から信仰されていた唯一の魔将。

海の全てに通じ、海の王国を従えた海王である。

その姿は幾千幾万にものぼる数の触手を持った大巻き貝。

神秘法を使いこなし、大家にも通じていたため堕神や堕天使の一切を海の世界から撃退し続けた英王。

彼の存在によって、天上世界は海をその遊びの道具とできなかったとされる。

『有角姫』の人格に惚れ込み、天上戦争にも参加。

巻き貝ではあるものの人格に優れ、誰であろうとも対等に扱うその紳士的な物腰。

多くの戦闘指揮経験、明晰冷静なその頭脳によって、仲間の全員から一番の信頼を受けたと言う。

『有角姫』の副将として常に最前線で戦い、神3柱を屠った。

新暦においては海の王国に帰り、海獣や海棲生物、船を操る人間を海底の玉座において見守っている。

また『海』の神として正式に信仰されている。神の位を得た唯一の魔将。

『魔王』黒い箱

魔王領 首都アマリック

先代魔王である『黒の雨』の妾の子。

王位継承順位は38位。策謀の限りを尽くし、時に対立者を正面から打ち破り、

先王の死後3年で新魔王に即位。

先王の晩年の狂乱。自らの乳母と従者の発狂に天上神たちが関わっていることを突き止め

その憾みを忘れなかった。

在位中は度々人間界に侵攻。その異能により『黒い箱』と渾名される。

これを気に入った『魔王』は自らの正式名称とする。

先王の最晩年、幽閉された魔王の下に勇者が辿り着き、そこでなにかがあったことは知っていた。

とはいえ、まさか勇者と愛し合い、子まで作っていたことには驚きを隠せなかった。

この歳の離れた末の妹と、魔王領に入っすぐに面会するや否や。一夜で意気投合。

目的の一致をもって、自らの妹（『有角姫』）を総大将とした少数精鋭軍『地軍』を結成。

以後『有角姫』とともに、人員を募集し収集することに努めた。

天上戦争においては参謀長を務め、策戦を考案実行した。
主に神の僕、天使や聖獣との戦いに大きな戦果を挙げた。

新暦においては『悪魔長』 人間の負の感情を司る存在として認知
されている。

現在は魔王領第三迷宮『封印迷宮』（第19迷宮）を単身攻略中。

一日目夜 小さな話（前書き）

推敲とりあえず終了。

一日目夜 小さな話

1

深夜未明。

夜は更け、人の声も、夜に生きる住人の声も幾分落ち着ち付き始めた時分。

日は変わり、道と道の間を往く民衆の姿は、殆ど見当たらない。

昨日から町の至る所で噂されている。治安悪化、凶悪犯罪頻発の噂は、

酒場で、主婦の間で、客と店主の間で、冒険者と情報屋の間で、情報屋と軍、行政の間で。

つまりは至る所で囁かれていた。

噂。しかも信憑性のある噂。

かねてより人通りの少ない時分。もとより人通りの少ない場所。人通りを少なくするかのような噂。

魔惨迷宮、都市下段、西区。

軍人住宅街。及び高級住宅街の人通りは、一定の警邏の人員を除き、犬の一匹さえ、姿を見せず、冷え切った沈黙にその身を浸していた。

その暗く、静かな、一区画の、さらに暗く静かな裏道を。

一匹の猫、いや一匹の耳長族の少女が荷を引き歩いていた。

その顔には笑み。

愛らしい花柄の頭巾に似合わぬ、猛禽のごとし口角の歪み。

その顔には笑い。

汚れなき童女の顔には見合わない、山羊のごとき悪徳の栄え。

にしし、と。

実際に笑う。

コートがたなびき、下半身、足を覆う白いワンピースから覗く足は、しかしブーツに塞がれている。

今夜、既に廃屋に4回、件の『鎧』の部位を運んだ。

組み立ての手間を考えても、この手段が一番確かで、簡単だった。

作戦は手順通りに進んでいる。

いま。運んでいる5回目、胴部の一。

これを運べば、後は明日の夜に4回だ。

その後さらに迷宮に運び、明後日の夜に組み立て、一気に蟹の下に行く。

『鎧』さえ王墓に持ち込めれば、後は脱出するだけだ。

鎧自体を見て正体に気づく輩も万が一いるかもしれないが、その時その所有者足るルーは、既に下水に居ない。

蟹と一緒に脱出して、姿を眩ませれば、なにか厄介ごとに巻き込まれる前に、さっさとおさらばできる。

冒険者や、この世界の生き物に、干渉するつもりはない。

穴を空けるだけなのだ。ちょっと地表と地面の一部を借りるだけのこと。

勿論、出来うるかぎり細心にだ。

問題は、運んでいる時、正体がばれること。

『鎧』は部位に分けているため、まずもってそれがなんであるかは

分からないだろう。

しかし、それが魔具であり、高級そうなかであることは確かで、それ故にこれを見とがめられるのは望ましいことではない。

もう一つ、運んでいる自分、コートと頭巾の下の耳長族にはありえない身体の特徴。

これは色々と面倒を引き起こすだろう。

自らの美貌（猫は己の美貌がそれなり高いことを客観的事実として理解している）

さらには、その正体までバレてしまうかもしれない。

気をつけなければいけない。卵を護る親鳥の細心と繊細をもって行動しなければならぬ。

こう考えた、耳長族ルーの作戦は、今のところ順調であった。

足音がすれば、隠れ。

通路と通路の間は、意識し、己の内の「力」を風として世界に現し、それを使って周囲を探った。

要所ではコートに備えた紋章を意識し、姿を透明化させた。

（それが出来るなら全部透明化すればいいのでは？という疑問があるかもしれない。

しかし、紋章術とは、己の魂の力を、紋章に流し込み、使う力である。

それは一度注ぎ込めば、持続的にしようできるというものではない。持続的に使用すれば、使用している間中、魂の力を使い続けなければならない。

三日間続き、難所も幾つか想定される作戦だ。明日も、明後日も作戦は続く。

有限の力を、時間の経過、睡眠と食料の摂取である程度回復すると

はいえ

無用に使っていは、真の危機において命取りになりかねない。

特に透明化の紋章は、大きく複雑だ、持続的な使用は、猫の器の大ききでは2時間が限度、それで所有している力は空になってしまうだろう。

余談になるが、持続的な使用がそのまま持続的な消費になる以上。余りに多くの持続効果型の紋章を身に付けて、多重起動を繰り返せばすぐに「力」は尽きてしまうだろう。

そのため熟練した冒険者ほど、使い分ける持続効果型紋章を厳選し、瞬間的に効果を発揮する紋章で補えるところは補う傾向にある）

順調に快調。

——あつし、怖いぐらいにや

ルーはそう考え、心なしか喜び弾むように、しかし、周囲に注意を払いつつ行動する。

荷物を運ぶ、手順は簡単。後は蟹の方が問題を起こさなければ。

——いやあ、らくちんにやあ。

その姿に、その心の内に、慢心が油断がなかったとはいいいきれないだろう。

事実その（表面上は）耳長族の少女は。

自らの姿を監視するように眺める。

黒尽くめの影が、西区の高い家屋の屋根の上にあることにも気付いていなかったのだから。

黒い影。

顔には黒面。

靴は黒。頭部を、胴部、胸部を、背部を、脚部を覆う特殊なスーツも黒。その装備も全て黒。

全身を闇に溶け込ませ、調和させることに腐心された。

黒一色装備の、男か、女か分からないその影は。

遙か下方、西部の大邸宅と一般の屋敷群の合間を縫うように、見事な隠形を使って歩き進んでいる。

耳長族の少女。それもいやに見目麗しいその少女。を眺めている。

見た目だけならば、ただ耳長族の少女であつたろう。

この町には、人以外の種も多い。

どこぞの耳長族の家の子か、旅のそれが、軍区に迷い込んだそう考えられなくもない。

しかしあの少女はどう見たとしても堅気ではない。

荷を背負うのはありがちなことだ。まだわかる。

しかし、裏道や地味な道のみを経由して、さらには姿が言葉通りの意味で消える。

影は紋章術であろうと判断する。

隠形いんぎようは巧みで、熟練の技を感じる。

耳長族の少女が夜に、道具を持って隠形を使って、奇しげな小道を使って古ぼけた屋敷を行き来する。

どう考えても堅気ではない。

黒い影はそう考えた。

但し、一般の軍人や人の良い警邏などは騙せるかも知れないし、裏道を駆使したその隠形と紋章を合わせれば、大抵の冒険者、それこそ高位冒険者でさえもその気配を察知することは難しいだろう。

さらには、なぜだか人通りの少ない夜の道で。あの少女は、僅かでも人の居ない道筋を選択している。

遠くから響く犬の声。猫の鳴き声、花の揺れる風の音。

酔っ払いの怒鳴り声、笑い声。

かすかに聞こえるそれを、背景に黒い影は考える。

あの奇しい存在をどうするか。と、

黒い影としては、見過ごしておけない程度にはその少女は奇しい。

こう見えても彼（便宜上、彼としておく）は、公の権力機関の一員であり。

治安維持も時に任務として請け負う。それに彼自身も重大な犯罪を見過ごせない程度には正義心を持ち合わせていた。

近づき、検問を加え、その目的を問いただしたい。いや、警邏衛士の詰め所に連行すべきなのか。

影はそう考えているが、しかしその行動を取ることはできない。

『影』 彼は軍の犬である。

彼は軍の命令に従い、行政や冒険者どもの情報を集め、時に迷宮に降りて情報を収集する。

時に冒険者を装い、時に軍人を装い、あるいは黒一色の装束に身を纏い、都市のあちこち、あらゆる組織機関に潜入する。

人間の監視、脅迫、窃盗、時に暗殺を行うその姿は、まさに影、面に表れることの出来ない存在であり、

その行動には全て、都市の軍における直属の上司である。ある士官の許可と命令がなければならぬ。

（とはいえ少女を見つめるこの『影』は、姿を見せず、その正体を漏洩させないのならば、幾ばくかの個人の裁量が許されている。それを可能にする実力と、実績がこの影にはあった）

が、この少女は余りにも得体の知れない相手だった。

耳長族であること、少女であること、その二つの要素が、彼女がな人であるのか、それを読ませない。

一体いかなる勢力か、個人か、目的か。思想は、信条は、その意図は。

もやに包まれたかのような、怪しさ。

一度、上層部に報告してから接触すべき。と影は考えてる。

迷宮で、冒険者組合の斥候に付き従い、件の蟹と斥候と迷宮側の情報を個別に入手するのが、『影』の役目であった。

ロード・エーサーベインの敗退したという蟹。

それについての情報を、軍は冒険者組合から入手している。

しかし当然のことだが、冒険者組合からもたらされる情報は選別、取捨選択の上での情報であり、

その信憑性や、そこに含まれている真実の度合いの問題。

また、その速度、鮮度において多くの劣化が見られることになる。

それは冒険者組合にとって当然の行為ではある。

しかしそれに軍が、都市の防備と管理の責任を自認する軍が、甘んじる必要は何処にもなかった。

軍は、エーサーベインの敗北の一報がもたらされた時から、諜報や暗殺といった裏の仕事を担当する部署とその部署の長たるある士官に、

独自の情報入手を命じたのだった。

そして士官が、実際に情報を入手するように命令した相手が。

『影』構成員において最も腕が立ち、技が立ったこの『影』——『潜影』と呼ばれていたこの『影』——であった。

冒険者組合の斥候隊の追跡、監視、蟹に関する迷宮側の情報を自らの手と足で入手し、報告する。

この影が行っていたのはそういう仕事で、彼はその仕事の帰りであった。

そこで彼は耳長族の少女を発見した。

彼の『影』としての経験と直感、技術でなければ、見逃していただろう。

これはルーの中途半端に巧みな隠形のせいとも言える。

古い家々が立ち並ぶ住宅地。、古ぼけた見た目の家々の中。そもそも更地であるのなら、一瞬気を止めても、そういうこともあるのか、と立ち去る。

しかし立ち並ぶ家々の中に同じように並んでいながら、一軒だけ妙に新しく美しい新品の家があるような、そのような奇妙さ。

それを『潜影』と呼ばれるこの影は見逃さなかった。

『影』は少女が一軒の家に入るのを見送ってから、屋根の上から、音もなく姿を消した。

空には月が昇っている。

蒼いそれは、いつになく静かな住宅街を、ただただ照らしていた。

一日目夜 小さな話（後書き）

『大蠋螂』アータレス

出身地不明

開幕特攻の魔将として知られている。

元々は異常進化した魔獣であり、意志など持ちようのない生命体であつたが。

長きに渡る生の末、徐々に単純な意志と目的を獲得。

正しく言えば目的のために意志を発達させたとも言う。

その目的とは彼の両手の鎌の切れ味に関することである。

多くの獲物を刈り、多くの魔族や人間と戦った彼は、自らの鎌を使って戦闘をした。

生を掛けた連続戦闘、鎌を使った技はますます冴え、その鎌自体の切れ味も凄まじいものとなつていった。

その頃になると彼に変化が訪れたのだ。

『斬ること』それが目的として、いつしか彼の内に現れたのだ。

この世の全ての種と戦い、それを斬った彼は、いつしか死神と呼ばれるようになった。

それでも蠋螂は斬った、強きを斬り、さらに強きを斬り。

より上手い斬り方を求め、より斬りやすい部位を覚え（元々記憶力なんてないのに！）

鎌の切れ味を鋭くするため、多くの獲物を斬った。

あの『大亀』や『……』の甲羅でさえ彼には木片の類にしか見えなかった。

その彼は次に、飛ぶ鳥を斬り、飛ぶ風を斬り、逃げるあらゆるを斬

ることにした。

一刀両断。それこそを終生の目的として、いつの間にか、意志を獲得していた彼は、

しかしこの世に退屈しか感じなかった。

なぜなら、この世の全ては柔らかすぎる、そしてこの世で斬っていない物質など、彼にはなかったのだ。

あるとき人と魔族の血が混ざった存在が彼の前に現れる。

（とはいえ彼にとってはなにか柔らかいものが来た、とても言うべき認識でしかなかったが）

その存在は、天を指差し、自らを指差し、目の前に墮神の骸を投げ捨てる。

そして蝙蝠は理解する。長き生、彼もうっすらとその存在を直観していた、あの存在。

それを斬らせると、目の前の存在は言っているのだ。

彼は承伏した。

そして、彼でさえも、命の危険を感じる恐ろしい者たちに囲まれた。
（とはいえ彼にとっては斬ったことのある種族しかいなかったが）
そして幾ばくかの時が過ぎる

天上戦争の一番最初の戦闘。天上に來た『有角姫』を待ち受けていた主神の息子にして戦闘長官である『神盾』イージスとの戦争。

アータレスは、掛けられる限りの儀式大家、神秘大家の強化を後ろから受け。

戦闘が始まる瞬間に、単身敵陣に特攻した。

彼が狙うのは、最も固そうな獲物。

そこには銀に輝く鎧を身に纏い、アータレスでさえも尻込みする程の偉容の盾を持った者がいたのだ。

勿論、彼が狙うのはそれ。

彼にあるのは一刀両断、それだけが彼の目的、それだけが彼の意志。二の太刀はありえない、一度で切れるか、一度で切れぬか。

神は虚を突かれた、神は慢心していた、神は自負があった、神は独りだった。

鮮やかな大蝙蝠の特攻の果て、旧神の最高戦力は。

その盾ごと、一刀に断たれ、その命を散らした。

そして大蠋螂は帰ってこなかった。

後に地軍の誰もが語ることに、戦争の初期の初期の初期に、あの神が討ち取られていなければ、

我らの被害は、生半可なものでは済まなかっただろう、と。

新暦においては『神僕』死神のような存在として畏怖されている。

子供であれば誰もが一度は言われる『大蠋螂がきて、悪い子きつちまうぞお!』で有名。

そのため知名度だけは無駄にある。

二日目 蟹 油断大敵気の緩み 魔法合戦（前書き）

推敲と加筆修正。終了

二日目 蟹 油断大敵気の緩み 魔法合戦

3

もしかしたら誰かが疑問に思っていたかもしれないこと、それに答えよう。

即ち、なぜエーサーベインは、巨蟹デンザロスについての報告、それにおいて、巨蟹が言葉をしゃべることを伝達しなかったのか？ということである。

その答えは簡単。

デンザロスの言葉は、エーサーベインにとって言葉として映らなかった、それだけのことである。

思えば1000年以上の昔に、眠りに着いた巨蟹。

彼が口内に刻む、紋章構成の極北とでもいうべき精緻なその紋章の効果は。

端的に言うのなら、「意志を言葉として変換する」それだけのものである。

無数の文法、単語、意味、それを細密画の要領で、圧縮、要縮し、刻まれたその紋章。

しかしそこに潜んでいる。文法、単語、意味の羅列が何時の時代のものであるのか？

それを一考すれば、エーサーベインにデンザロスの言葉が伝わらなかった理由が分かるだろう。

古すぎる言葉は、例えばそれが自らの語る言葉の直接の先祖であつても、理解するのは難しい。

それが、緊張と不安と恐慌に陥っていた戦士ならば、余計に伝わらないのも無理がない。

このような補足説明のような文言を、冒頭に表したのにも、勿論意味はある。

巨蟹デンザロスは、新たに現れた侵入者を相手に、意思の疎通が取れなかったのだ。

古き友、ルーが『鎧』を持ってくると言つて、二日目の昼。

あの懐かしき語らいを行った夜は、既に一昨日のことだ。

巨蟹デンザロスは、変わらず王墓に居る。

しかし彼はいま、困惑と困窮の渦に巻き込まれていた。

座る彼の前には、見るからに荒くれという姿の、大男や傷を顔に作った巨漢、刺青を身体に這わせた暴漢の類が犇^{ひし}めいていた。

その数はおよそ18。

3〜6が基本とされる。冒険者の編成。一グループの人数。それが4つ、18人。

そもそも共同での迷宮探索を行う冒険者は普通でない。

それは報酬の分配の問題であつたり
急造のチームでは十分かつ効果的な連携と協働を取ることが難しい
という問題が存在するからだ。
それらの事柄から、大規模なチームを組んで迷宮に潜る冒険者は滅
多にいない。

しかし、その機会はゼロという訳ではない。
むしろそれなりに長い迷宮の歴史の中、冒険者が集い、チームを作
った事例というのは意外なほどに多い。

そしてそれが結ばれるのは、どんな時か。
大抵のところ、それは要縮すると三つになる。
強大な魔物、厄介な怪物、迷宮軍との大戦争の三件だ。

この場合、強大な魔物はデンザロスを指すことに疑いはなかった。

この冒険者達の思惑は何か、
例えば、かのロード・エーサーベインが敗北したという巨蟹を、自
らの手で討ち取り、賞賛と名誉、冒険者組合からの報酬を目的とし
たものかもしれない。

例えば、巨大な怪物に、巨大な古代遺跡、そこにあるかもしれない
古い宝物が目的なのかもしれない。

あるいは、巨大かつ鉄壁の巨蟹、その身体の部位を未知の素材とし
て渴望した武器マニア的根性の表れかもしれない。

ともすれば、決して他人の図り知ることのできない、深い理由かも
知れない。

しかしそのどれであってもデンザロスにとって大差はなく、面倒な

だけである。

冒険者同士でもそれは同じだ、彼らはそもそもデンザロスに知性を想定していないし、

他の冒険者の目的など気にしていない。

それぞれが、それぞれの欲望と目的のためだけに連帯する、この冒険者18人はそんなチームであつた。

髭の男は、大人しい蟹を前に言う。

「はあ、こりやつでつけえな」

答えるように傷の男も呟く。気弱げな男ではあるが、この中で唯一の最高位冒険者である。

「な…なあ、これほんとに勝てるのかよ」

「ああア？　おいおいどうしたよてめえ、いまさら怖じ気づいたってか？」

「はっ！　臆病者が」
チキン

「怖いなら宿にでも帰って寝てろや！」

他の荒くれ風の男たちが揶揄するように嗤う。

嗤われた傷男はむっとした後、おもむろに厳めしい顔を作りそれに反論する。

しかし最高位冒険者ではあるものの、その臆病さは有名であり、それが中位や高位の冒険者たちにも舐められている彼という図式を作り出している。怒った時のしゃべり方の滑稽さも、彼の扱いの低下を招いているのだが、しかし彼はそれに気付いていない。

「ば、馬鹿にすんじゃねえぞっ！　こんなデカいだけの木偶の坊に俺がビビるワケねえだろうが」

笑い、応酬、野蛮と野生の香り、粗野の凝縮。

いきなり目の前に現れ、躊躇なくこの蟹へと近づいて来た冒険者たちのチームに、

蟹はとまどいを隠せない。

彼らの言葉はわからない、ところどころ自らの知っている言葉に似た響きのことばを感じるが、やはりなにを言っているのかは殆ど全く分からない。

デンザロスは先ほどから、話しかけ、声を出し、交渉あるいは会話をとろうとしているのだが、それが理解されない。彼らの言葉も理解出来ない。

ただ分かるのは彼らがこちらを見くびっているということだ。

「舐められたものだなあ」

蟹は言葉を音にする。

人の言葉を放つには、口内の紋章が必要であり、魂の力を使ってそれを起動し、

意志を言葉に変換する。

しかし、それは伝わらない。

「おいおいこいつ啼いたぜっ！」

「蟹の鳴き声か、始めて聞いたぜ」

「別な鳴き声なら、毎晩ベッドの上で聞いてるんだがなあ」

ふざけた雰囲気。

そこには強者への認識も、警戒も存在しない。数の優位。エーサーベインへの嫉妬。欲に眩んだ瞳。

彼らの持つそもそもの気性。

事実、彼らはこの蟹を警戒していなかった。

エーサーベインが破れたとしても、この人数が居るのなら、多少の被害が出ても討伐出来るだろう。

そんな驕りに心の中は一色に染められていたのだ。

デンザロスは、しかし彼らを醜いとは思わない。

この欲望、この愚かさも生命の象徴である。

そも生とは、醜く汚らしいもの、これぐらい薄汚れているほうが、まさに生命という感を覚えるのだ。

デンザロスは、だから彼らが、目前を幾ら通り過ぎようがしようが、下品で下劣な様をもって、至近に群れていたとしても、それだけで排斥をしようなどとは思わない。

ルーより、聞いている通りの、冒険者という生き様の象徴が感じられて、むしろ心地よい位であった。

——舐められるのは頂けないがな

そう考えるデンザロスにはしかし余裕がない。

彼は、冒険者という「今、この世界を己の意志で生きている生命」の可能性を摘み取りたくはない。

出来うる限り、問題にならぬよう、ルーが来るまで間ここで待っているつもりであった。

しかし目算は崩れ、今、目の前には冒険者らしい命知らずが集まっている。

彼らに見えるのはデンザロスへの敵対の意志。

――逃げる事が出来るのなら。

逃げただろう、デンザロスは、彼の高潔さは、目的の為の逃走を恥とは思わない融通の利くものだ。

されどここは密室。広大とは言え密室。

逃亡する先もない。

戦闘は不可避。

「ならばどうする?」

蟹が呟いた。

同時に、冒険者たちは刺青の男の一括で騒ぎを納め、各々武器、魔具を取り出し、紋章を起動させる。

剣、鎚、刀、槍、杖、魔導書。中には短刀や斧を取り出した者もある。

刻印も用意し、魔法陣を刻み、見るからに高価そうな法器を幾つも持ち出し、地面に刻印を記している傷の男は儀式大家だろうか。

戦闘準備だ。

見積もりもなく、欲に目を眩ませ、情報さえも断片的でありながら未知の巨蟹へと戦闘を挑む彼ら。

愚かだ、一流の冒険者であったなら、より情報を入手してようやく蟹に対する対応を熟慮しただろう。

彼らは冒険者としても、一流というよりは三流、よくて二流半といったところの者ばかりだ。

中位冒険者が中心であり、高位冒険者が何人か、最高位冒険者が一人。

その性質は皆、考えなしで粗暴。楽観的。そのくせ暴力と闘争に關してのみ一定の能力を有する野蛮な山賊氣質。欲望により、冷靜な判断を下せない類の、考えなしのはみ出し者ばかりであった。

彼らが群れて、チームを組んだのは、せめてもの理性の表れなのか。

蟹を他の冒険者に討伐されることを恐れた彼らは時期尚早に行動を起こした。

蟹に千金の宝を、利益の匂いを求めた。

蟹は先ほどの呟きに自ら答える。

——遊んでやればいい。

殺すつもりもない、実力を示し、あるいはあちらの攻撃を避け、防ぎ続ければいい。

蟹はそう考える。

携えた武器を振りかざし、こちらへと、冒険者達が突撃を始めたのを尻目に見ながら。

そう思った。

冒険者たちは咆吼する。

考えなしとも誹られる。

暴挙とも考えられる。

軽挙そのものとも言える拙速。

欲望に素直な彼らは、思考するよりも実行するような彼ら、しかしそれでも彼らは戦闘においては腐ってもプロであった。

あるいは彼らにはそれしかなかったのかもしれない。

戦略はない、準備も不十分。

しかし獣のような戦術だけはきちんと用意していた。

とはいえそれは基本とも言える戦術であったが。

前衛として十二人の冒険者が蟹へと攻め寄せる。

細かい連携はない。

彼らは隣の冒険者の動きにせめて合わせることしか考えられない程度の急造チーム。

大柄な荒くれどもが、徒党を組み、強化された腕力によって。

鋭化され槍。重みを増した鎧。炎を纏った剣を蟹の足にたたきつける。

後衛、数人の魔導士が、紋章から火を放ち、雷を、大気の圧縮を放つ。

時間稼ぎ、彼らの狙いは、儀式大家の儀式法。

鍵を魔法陣の中心に置き、刻印を使い、世界へと己を埋没させ、語らい、それを掴もうとしている傷の男。

人が直接、儀式大家により世界に干渉する時、刻印をもってして自動で魔法が発現することはない。

刻印は世界を理解しやすくするための道のようなもの。

そして世界を理解した後、所定の方法に力を定義し、形作るための馬車のようなもの。

なにもない状態で、世界に満ちる「力」に対峙するよりも。

恐ろしく早く、高い完成度で、儀式大家、即ち世界に満ちている大きすぎる力を扱えるようになるだけのこと。

早くなるとは言え、幾つもの刻印を同時に使用し、それが複雑に絡み合った刻印を使用する儀式法は、独特の難度が存在する。

刻印による力の構成の他に、詠唱法により世界の形を想定しなければならぬ。

掛かる時間と思考は、膨大だ。

それでも最高位冒険者でもある傷の男は、それらの絡み合った広大な魔法陣の上に座り、黙々と世界を探索している。

世界に直接触れているとも言える。

発現効果の大きい儀式大家による攻撃、それこそがこのチームの勝ち筋であるらしい。

指揮官らしき刺青の怒号により、攻撃が加わる。

ガンッ、と岩を殴るような音。

「かてえッ！」

岩ではなく、まるで鉄のように。
響く音は鈍いものばかり。

「なんだこりゃっ!!」

「どうなってんだよっ!!」

力の込められた武器が容易く止められる。

何事もなかったかのように、攻撃は止められる。

幼児の振り上げた拳で傷つく大人は居ない。
つまりはそういうことである。

「それだけか？」

——つまらない。

蟹はそう言いたげに、不機嫌な調子で呟く。

ことばの分からぬ冒険者にも伝わった。

今の音は落胆の調子を帯びていると。

躍起になる冒険者。

振り上げられ、落とされ、音が鳴る。

ガキンッ、ガツンッ、ガギイッ！
響く音。さざれ石でも殴っているかのような鈍い響き。

後衛から飛んでくる術法の火も、雷も、大気のうねりも、
しかし蟹の身体を傷つけない。

やがて、冒険者の咆吼は、音を減らし、幾たびかの打撃と剣撃と魔
導による複撃が加えられて。

その後、咆吼は完全に止んだ。

――湧くのは些細な恐怖、不安。

本当の愚か者とは、考えぬ者、想像せぬ者、疑わぬ者である。

「……おいおい」

「ばかなっ、こんな筈では」

彼らは結局のところ舐めていたのだ。

どうにかなる、というような楽観か。

あるいは、蟹という敵のさきにある、栄誉報酬名誉、そんな幻視が、
彼らに、蟹という目前にある脅威を認識させなかったのか。

勢いは、似たような者が集まる内に、気持ちが高まり、

怒濤のように、迷宮まで彼らを駆り立てた。

「刃あ欠けちまったよ……高かったのに」

不思議と、攻撃を仕掛けてこないのは蟹。
その偉容。堅固。そこに垣間見える余裕。
冒険者たちの意気はみるみる萎えていく。

萎えていないのは、世界という大きな「力」の渦へと己を一意している傷の男と、

指揮官らしき、刺青の巨漢。

（傷の最高位冒険者はそもそも意識を陶醉させ、没入させているので外が見えていないとも言う）

「ふ、ふざけるなっ！」

刺青は、意気を挫かれた冒険者どもを見やって、憤る。
次に蟹を見て憤る。

——こんなはずじゃあなかった。こいつは狩られるだけの獲物で、
——俺は、俺はコイツを討ち取って英雄として讃えられる。
——そして、そしてあの雌狐は、おれに傳く、その筈だ、その筈なんだ！

あるのは醜い狂熱。願望と欲望の入り交じった黒い原動力。
自らが最高位冒険者になれない原因である雌狐の顔を思い浮かべ（と本人が考えているに過ぎない）
屈折した欲望をトリガーに、意志の撃鉄を振るわせ、刺青の男は激情の気炎を立ち上らせる。

「ふざけるなよ…… 蟹風情がッ!!」

刺青の男は、足を、肉体を加速させる。

意識、紋章起動、足部、脚部、全身、速度加護、強化、二重。
全身に入れられた刺青——紋章を輝かせ、油断していたデンザロスの腹部下へと辿り着く。

蟹の弱点は腹部である。

しかし、その巨体の腹部の真下とは、そのまま腹に踏み潰される危険と表裏一体である。

冒険者たちは、それを考えたが、脚の堅さと蟹の巨体さに尻込みしていた。

しかし刺青の高位冒険者は、それに頓着せず、腹部の下へと、凄まじい速さを持って滑り込む。

デenzaロスは油断していた。

それは先の黄金剣の冒険者の如き超技をこの冒険者に期待していたことに端を発する。

だが思いの外、彼らは単調で、単純な力任せの技ばかり、技巧らしきものもなくもないが、

しかしそれは先の冒険者ほどに洗練されていないという現実に。

——これだけなのか？

と思いを浮かべる。

確かに、それぞれの冒険者も、かつて自らの生きていた時代の人間の戦士や闘士よりも、

装備も、導術も、見事かも知れない。技も平均して高い。

しかし、それだけだ。

あの黄金剣の冒険者ほどの驚きも、油断の出来ない警戒も感じない。
——あれは、この俺と戦闘をできるほどの人類だった。
とそういった一種の尊敬を改めて黄金騎士に思う一方。

——冒険者としてピンキリか

と過剰な期待をしていたことに気付く。

そもそも警戒心が最初から足りていなかったなコイツら、と思い納得する。

考える蟹は、冒険者たちの立てる声が小さくなっているの聞きながら、黒すぎる瞳で、彼らを改めて一瞥した。

冒険者達が持ち込んだ九つカンテラが、周囲を照らしている。

日頃、黒一色に染まる、城のごとき室は、灯器に照らされ、爛々と蟹の甲羅を、赤と青で染めている。

蟹の心にあるものは隠しきれない落胆。期待はずれの念。

広大な室の中央にいる自らは、この戦闘が始まって全く動いていない。

鋏も、脚も、甲羅も、始まった時のまま、ただある。

——あと、注意すべきなのは、段差の中ほどで、一人世界に入り込んでいる儀式大家の男ぐらいだろう。

冒険者への慈しみの念、尊崇は変わらない、しかし評価は変わった。

そんな時、一人の男が、腹部の真下へと入り込み、その構える斧の紋章を起動させる。

鋭く、重く、爆発する斧。

一人の男の身勝手な矜持の爆発と咆吼。

「うあああああああああああああああああ
！！」

醜い咆吼は、しかし絞り出すような絶唱。

鈍く、音を立て、刃はぶつかり、砕け、その後、内蔵と周囲を巻き込むように、斧が熱を放ち、破壊しようとする。

「がっ?!」

蟹は鋏を思わず、振り上げる。

泡が、はき出される。

呻く音。

冒険者という可能性に対する柔らかな方針。

落胆から来る油断。こいつらはたいしたことがないな、という慢心。それらが混ぜ合いあい、現れた。その一瞬の隙。

それを見抜いたかのような、刺青の男の絶妙な攻撃のタイミング。あるいは見抜いていたのかも知れない、この男は、腐っても高位の冒険者であったのだから。

それは確かに、蟹の身体に、大きなダメージを与えた。

一瞬の油断は命取り、犬も棒に当たれば、猿も木から落ちる。

デンザロスの腹甲は、男の加速、体重の載せ具合、重さ、効果、なにもかもが上手く決まった一撃により。

腹部の中心を始めとして大きく碎かれていた。

後少しで、味噌にまで到達しえたほどの一撃、満足に言葉も喋ることのできぬ状況に蟹は落ち込んでいた。

予想外の攻撃を喰らって。

蟹は、とっさに判断を切り替える。

件の冒険者は、もう一撃を、それこそすぐさまに放とうとするだろう。

周囲の冒険者たちも腹の下へと行動するかも知れない。

勝てないと一度考えて恐怖した相手が、無様にも不覚を取り、それなりの被害を受けたその姿。

失われた熱狂は、より大きな狂騒としてよみがえる。

命を捨てるかのように、同じような真似をはじめめるかもしれない。

そういった色々な判断を、刹那の間に済ませたその蟹の歴戦の経験。こういった前衛の冒険者への油断や高慢は払拭された。

刹那の判断の後には、刹那の行動。

蟹は脚を動かす。

横に、縦に、無造作とも思える程の支離滅裂な軌道を描くその機動。冒険者からの逃避。

しかしそれは余りにも早い。

巨体が動くその速度は、ともすれば異様でもある。

瞬く間に蟹は、外周部最上段。

ロード・エーサーベインの開けた穴（入り口でなく、その向い側の穴）がある辺りに居る。

睥睨するのは、己に傷を与えた、有象無象ども。

——いや。命は取りたくない、というのが傲慢だったのか？

——しかし、ここで彼らを殺めれば、俺の噂はさらに広がり、恐怖を呼び、人々の記憶に残ってしまうかも知れない。萎縮も招くかも知れない。

——いや、だが、しかし、明日には外へと脱出して消えるこの身。ならばなにを恐れることが……

——いやいや、干渉はしたくはないが……、しかし痛いなあ。

約束が彼を縛る。自らの一度決めたスタンスを破ることへの忌避を感じ、高潔さが彼を縛る。

痛みをこらえ、歯を食いしばる。

そんな蟹を見る冒険者の目には驚き、未だに蟹がどこにいるかも理解していない、あるいは高速移動の事実を認識をしていない大多数の冒険者。

しかし、後衛の者たちは見ていた。あるいは攻撃を仕掛けようとしていた刺青も見ていたかもしれない。

その蟹の異様とも思える機動を。

恐怖、恐れ、エーサーベインが抱いたのと同じそれをワンパターン

にも思う。

しかし、違うのは、彼らは、そこに脅威があると知って近づいてきたことにある。

それは、死の覚悟をしていと言ひ換えられるはずだ。

（とはいえ、欲に目の眩んだ彼らの内、一体誰が、己の死を真剣に想定したのか、だって彼らは勝てると思っていたのだよ？）

この時、ようやく、蟹の脅威を真剣に受け止めた彼ら。

それは遅きに失したのかもしれない。

なぜならデンザロスは己の理性と感情を戦わせていたのだ。

痛みへの報復を訴える感情本能と、それを抑える彼の持つ理性との激突。

下手をしたら、蟹は彼らを殺めるかもしれない。

今の一撃はそういった一撃であった。

蟹は悩み、冒険者たちを尻目に、己の心の内で激情と理智を戦わせていた。

5

傷の男が行動を起こしたのその時だった。

深い深い儀式の見せる闇の奥、あるいは自らを取り囲む世界、空気、大気、力のもや、そこに至り、

遙かなる絶対神が滝のごとく垂迹しているこの「大きな力」に己を埋め込み没我し没入した傷の彼。

初心に返ったかのような恍惚を、母の胎内にいるような安らかささえ感じていた彼は、そこから立ち返った。

何もかも捨て去るかのように、放下しきった末に、また現世へと帰ってきた彼にはしっかりと「力」が握られていた。

——準備完了だぜえ。

そして夢と現の境、朧な意識、灯器の照らし出す明かりさえも微かなものとして感じられる夢現な心像の中。

一人、賢者のごとき、仙人のごとき淡い全能感で、対象を。

蟹を探し、発見した。

今、世界の力は理解した。壮大な理解だ。

七種の刻印を持って、二種の想像を働かせ、夢のような力をこの身に、この魂で感じた。

それらは輝きであり、力だ、些かの動揺もあり得ない大地を味方に付けたかの如き力だ。

魔法陣には十の宝石とさざめいた波紋岩。

それを供物として。彼は、魔法陣と刻印と想像の組み合わせにより自由に操作できるようになった「力」を、——発動させる。

儀式大家——儀式法。傷の男を最高位冒険者たらしめた技術。世界という者を理解できるまで己を捨て去ることが可能であるという狂気の世界の住人。

魔惨迷宮三十万の人口の内、十人に届くかどうかという秘技。

この傷の男、人格はともかく、資質においては、間違いなく優秀な儀式大家であった。

冒険者たちの奇妙な強気を支えていたの彼であり、彼を持って、蟹狩りは、成る。

魔法陣の内、傷の男は、胡座を組み静座している。

神秘の匂いは、信仰心の薄い者の多いこのチームの冒険者をもってしても『至高』や『混沌』神のために、思わず祈りのU字を書く程に濃厚にして香しい。

男は両手を挙げ、世界に満ちる力を理解したまま、蟹の周囲の力までも、その意識の下に置いていく。

意識——理解——定義——発現。

儀式により操れるようになった、一定量の力と属性と概念に従い。蟹の近くの空間を支配下に置く。

蟹の迷い、蟹の睥睨、蟹の怒り。

それらをものともせず。

男は、上げた両手の平を、胸の前で、たたき合わせた——

デンザロスは、悩みつつも見ていた。

視界の隅で男が、いきなり手を上げ、それをおもむろに胸の前で合
わせたのを。

瞬間。

――圧力

蟹を、蟹の、堅固にして屈強な肉体を無理矢理に、押しつぶすか
のような、凄まじいまでの圧力。

「ぐっ、が、がががが」

ブクブク。と泡が吹き出る。

圧力は続く、蟹の身体を、絶対硬度を無視して、ひねり押しつぶす
うとするかのような絶対的な暴力。

「ぐっ、があ」

蟹は呻く。

甲羅ごと、堅い外皮ごと、押しつぶそうとする企み。

その圧力は続く、それどころか蟹の周囲のあらゆる空間からその圧
力は迫る。

咄嗟の判断で、腹を地面へと接地し、脚を身体に密着させていなけ
れば、圧力が発生した時点で破裂してしまったかもしれない。それ
ほどの圧力。

「があっ、がっ、ぎい」

響く音は、みちみち、きちきち、という嫌な音。

モノとモノが無理矢理、一緒くたにされている音、甲殻と外殻、鋏、脚、外皮、内皮、それらのぶつかり合う音、押しつぶされようとする音。

ここに至り。

蟹は油断も、慢心も、慈悲も、容赦も、その一切を捨てた。あるのは純然たる殺意。

その思考は赤々とした殺意の黒一色。

単色、約束も、干渉も、高潔さも、そこにはない、死に瀕しているものの特有の余裕のなさ。

外圧。外圧、蟹を囲み、むりやりに丸くさせる歪な強制力。

蟹周囲の空間を、支配下に置き、「力」を使って大気を圧力へと変換し。

それを自らの意識の延長線上にしている傷の男。

今また手の平と平を合わせ、手首を回している彼に従うように。

巨蟹デンザロスの周囲の空間は捻れ、圧力を作り、その上、膨大にして無限の外なる力をも圧力に変換し。

己の周囲の外なる力と蟹の周囲の外なる力までの一定範囲を、支配下に収め、

傷の男は圧力を高めている。操作している。

蟹は己の前提を見誤った。

エーサーベインにより高められた戦士系冒険者への認識。

このチームにより、より正確に判断されたそれとは違い。

導師、法師といった『力』を操作するものに対する認識が薄かった、低かったのだ。

これほどの儀式大家、蟹の時代にもいたことはいたが、それこそ仲間を除いたならば（友人のある大猿などはこれぐらい兎戯同然で行う）

一国に一人、あるいは一大地方に一人いるかどうかといったところであろう。

油断かも知れないが、しかし油断ではない。情報不足とでもいうべきもの。

猫の失態もある。

かつての時代よりも、大きく洗練され、多くの刻印の組み合わせが、そして補助の魔具が、この現代では生み出されたことを説明していなかった彼女の失態も、

蟹のともすれば無様な現状の一因だ。

想定外の大技。

持続的行使。

掛けられ続ける圧力。

眠りから覚めたばかりであるのに、訪れた命の危機。

猫という古い友人と会えたことに覚えた心からの安堵。

古い、友人たち。

沸き上がる意志はなにか？

生への執着、怒り、憎しみ、自己嫌悪、喝采。

「が、がががががががが」

蟹は、なけなしの意識を集中させる。

圧力に耐えるために。

己の甲殻に刻まれた。五種の刻印の内、一つを意識する。

圧力、脚が折れそうである、内臓が、欠損部分が、決れる。

下方向からの圧力がないのがせめてもの救いだ。

「力」を意識する。

外にある力を。刻印により、巨蟹デンザロスの周囲の「力」、即ち傷の男の支配下に入っている力へと干渉し始める。

そして外を意識しながら、内をも意識する。

甲殻に這わされた紋章が光を灯す。

刻印を意識しつつ、それとは別に、甲殻と脚、全身にある小さな溝、模様つまりは紋章に力を流す。

「意識」――外甲殻・内甲殻・脚部――儀式小家・紋章法――導力――防衛強化・硬化・自動再生・自動再生・自動再生――五重同時・発動

甲殻を防ぎ、補う、外圧に耐える為に。

破損や欠損を魂の内にある「力」を使って補修する。

蓄えられた魂の器の内にある力が、持続的紋章の多重起動により大きくその量を減らす。

長き生により拡大に拡大された魂の、器の容量をもってもこのままでは、30分ほどでそこに「収める」力を枯渇させるだろう。

甲殻は硬化し、また外から圧力に抗する重さを得た。

傷は癒え始め、全身の筋肉、肉体を十全に行使できるようになる。

幾分、緩和されて感じる、傷男の作る外圧。

それは、全体的な防御力の上昇と、あるいは傷の回復とによって生じた余裕。

余裕とは言え、外圧は、傷男の作る圧力は続いている
幾分緩和されたように感じるのは、デンザロスが備えを作ったからである。

傷の男の儀式大家の起動と、

それにより蟹の動きが止まったのを見て、安堵した様子で蟹の耐え苦しむ様を見ていた冒険者たちの間に動揺が走る。

傷の男は、世界とつながっている。魔法陣により（つまりは儀式大家・儀式法により）、多くの外にある力を自らのもののように操作し、圧力とし、壁として、自由に扱うことが出来る。

彼と、彼の周囲、あるいはこの王墓に漂う「力」 世界そのものとも言える、絶対神から垂れている滴の如きその「力」

それに浸り、それを借り受け、圧力へと変換し続け、蟹にぶつけ続けている現状、圧力への変換と力の自由操作をもって蟹を圧殺せんとしている現状。

この王墓の「力」は男の支配下にあった。男は「力」であり、「力」は男であった。この王墓という世界は、彼そのものであった。

男は、力を回復した蟹を感じ、それに対しより多くの「力」を蟹の

周囲の圧力として変換し、そこにねじりを、歪みを、波を加える。その操作に対応するように、魔法陣に趺坐するおとこの両手に込められた力は高まり、その手と手は動き続ける。

蟹を、潰す。そのための圧力、高まり続ける。

勿論、傷の男は、常にその「力」を理解し、想い、自らの意識、魂から離れぬように常に注意し続けている。

傷の男にとっても、精神と心に対する絶大な負担が掛かり続けている。

外の「力」を持続的に操作すること、その負担、その繊細さは常人には計り知れないものである。

蟹は圧力は感じる。

さらに強い圧力、自らの身体に対する。強い強い圧力、そして「力」

しかし、蟹はそれに耐え続ける。

この蟹が耐えている力の重み、鉄塊でさえ刹那にひしゃげ、薄くなる、超圧縮されるような圧力。

巨蟹の身体を中心に、「力」は高まり続ける。

だが、蟹はもう、先ほどのような無様を晒していない。

その姿、その形は、毅然とし、そのバックラーのような大きさの瞳に、焦りも、恐れもない。

その館の如き身体は、屈強な忍耐をもって、整然としたさまをもって、死をひしひしを想わせる物凄まじい圧力に抗していた。

——耐えきれないかもしれないではない。耐えるのだ。

鋼を越えた意志、自らの甲殻の堅さの如きそれ。
そしてようやく

——刻印を、パイプとして、外の「力」を、敵の支配下にあるこの「力」 干渉させてもらうぞ！

刻印を意識する。

外の力を意識する。

デンザロスは、残りの全意識を、自らを取り囲む圧力へと変換されている「力」への干渉、浸食へと注力する。

意識——世界——力——干渉——儀式大家・刻印法——定義…『蒼』

——失敗

意識——世界——力——干渉・浸食——世界——敵性体操作中

力を込めている傷の男は、気付く。

己の操作する「力」 俺の操っているこの「力」、俺の定義しているこの「力」へと

——何者かが、干渉している！ と

暗い王墓、九つの灯器カンテラの光。

照らされ出されている蟹の眼が、こちらを見据えている気がした。

——蟹がつ、魔獣ごときがつ?! この俺の、俺の儀式大家に干渉するだっ！

ましてやあの圧力の内にあって、それに耐えながら、世界を、そして身の回りにある「力」へと意識を没入させるその精神力。

——そんなモノを持ち合わせている魔獣が、いやそもそも儀式大家を行使する魔獣が、存在するわけがねえっ！

——まさかあの魔物には心が、高い精神が、あるとでも？！　そんな魔獣が、魔獣がつ？！

いるはずがないっ、もし居たとしたのなら、それは、それはまるで……

驚愕、予想もしない抵抗。

傷の男の恐ろしい予測。

今、対峙しているこの怪物が、正体についての予測。

その瞬間、蟹を囲んだ圧力——「力」の緩み。

本当に些細な緩み。

それを蟹は見逃さなかった。

力の合間、傷の男の同調の薄い「力」の隙

そこに己の意識を合わせる。

外の「力」を理解する。

大きな、莫大なもの、あの遙か上、混沌の源を感じる。

世界に満ちている力に触れた。

触れ、支配下に置き、定義づけ、理解する。

意識——世界Ⅱ力——儀式大家・刻印法——定義…『蒼』

；行使者『大蟹』デンザロス・デンザロス・ペンタレシア

——理解・定義・支配——刻印法『大海嘯』——『支配範囲及び量が足りません』『純度可』

外なるもや、外なる力、王墓に満ちる「力」の一部を占有する。

力とは使えば勿論、消費される。

しかしそれは、全世界の全空間にある「力」は、消費した瞬間に、天上からまた零れ落ちて補充される。

「滝の水を一番下で小さなコップ一個で受け止めている世界」というのは古い研究者の比喻であるが。

滝の始まりこそが「無にして混沌、有にして絶対の神」である。空間にある力。

それを支配下に置く、あるいは借り受ける儀式大家。

儀式大家同士、法師同士の戦いとは、リソースの奪い合い、空間の力の奪い合い。世界への理解がより深く純粋なものが勝利を収める戦い。

それは熾烈だ。それは見えない。

そも肉体戦闘において、肉体のスペックにおいて劣るものの多い儀式大家が、このように法と法を競わせることなど滅多に存在しない。

その希少な戦闘が、薄暗く、薄明るい王墓において行われていた。

傷の男は、自らの失態を悟る。動揺を突かれた。

儀式法。

その上、王墓に満ちる「力」のほぼ全てを支配下に置いている。

一定範囲の「力」の量と形、属性、方向をコントロールすることができる儀式法に對し。

刻印法では、一定の形でしか、「力」を理解し、操作することができない。

大抵の場合。世界に満ちる「力」が一定範囲必要だ。

発動要件を満たす、世界理解をさせなければ、あの蟹はなにもできねえ。とそう考えるのは男。

このまま一気に「力」を掌握する。と考えているのはデンザロス。
始まるのはせめぎ合い。

デンザロスが行うのは、敵の囲いを食い破ること。

自らの周囲を固め己の甲殻を圧迫する『力』は健在

油断、手痛い傷、死の淵、見るつもりがなかったそれを見せられた
ことへの憤り。

己への、なによりも目の前の敵に対しての憤り。

油断せず、世界に満ちる「力」 敵の支配下にあるそれを意識する。

傷の男は、周りでざわめいている冒険者たちを意識の外に置いたま
ま。

目を瞑り。

世界に身を浸す。

己の周囲の、あるいは蟹の周囲の「力」を抑え、閉じ込めるように、
意識する。

綱引きをしながら、あんパンを食べつつ、空の色に思いを馳せて、
脳裏で九九の暗算をするかのような極限の集中の分散思考。

……

……

……

あるのは緊迫。

意志と意志、理解と理解、「力」を巡るゼロサムゲーム。

続くせめぎ合い。

傷の男の汗。

男の操作する圧力に耐える蟹。

精神と、魂の上げる悲鳴。

「燃えさかる心と天使の境地、静かな鏡面に泳ぐ、無限の数の白鳥を全て捕まえることを望むこと」

それを「力」 世界に満ちる「力」を、理解すること、と述べたのは一体何時の研究者だったか。

1分、2分。3分。5分。時は7分に近づく。

この戦いが、既に一昼夜行われているかのように錯覚する傷の男。

しかし今は昼だ。

男が号令を掛けてからそう時間も経っていない。

じりっ、と、多分どこかの冒険者の靴のずれる音。

汗が、ぽたりと流れ落ちる。

蟹の口からは泡。それがランタンの光によって、歪な朱に満ちて見えるシャボン玉のような泡。

……
……

人と蟹。

無限の可能性を秘めてはいるが、限りも多き人の身と。

歴戦の、限らない儀式大家行使を経て、長き生において弛まず戦い生と死を見つめた長命の異形蟹。

傷の男は限界を迎えた。

精神が、心が、脳が、灼けている。

刻一刻と、脳が、魂が、煌然と燃え尽きはじめる。

脳味噌が蝋燭になったかのような錯覚。

——人の子よ。俺の勝ちだっ！

蟹はそのとき、ほんの数瞬前まで、傷男の支配下にあり、傷男の意志が介入していた「力」に、
自らの意志を合わせた。

範囲が、質が、量が獲得される。

刻印に従い、概念を切り取り、定義した「力」

それが刻印に従って、一定の形となり、暴力となる。

その時、冒険者は見た、刺青も、髭も、小柄も、大柄も、のっぽも、ちびも。

空中、蟹の真上、そこに、透明な塊が現れたのを。

ランタンの光が入射し、揺らめく炎に合わせ、まるで火を閉じ込めたガラス玉のようになっていいる塊を。

見た。

刻印法『大海嘯』

刮目せよ！

透明な塊は水である。

丸い水の塊。

それは冷たい、それは歪。

それは輝き、赤く、暗い。中空を漂う水は、やはり歪。

水とは蒼であるというが、その実、透明である。

その塊は、しかしやがて、ぽつりぽつりと蒼を内包し始める。

やがて蒼は広がる。まるで絵の具を水に流した、色水のような不自然な蒼が塊を覆い尽くす。

それは回る。

それは流転する。

それは回転する。

それは流れる。

速さ、量、色の濃さ、それらを漸増させ、その勢いは高まり続ける。

傷の男は、精神の死力を尽くす。

既に発動されたことを察知しながらも、必死にその蒼の塊に干渉する。

己の操作及ばぬ「力」が増え、儀式法の効果が薄れ始め、世界への理解が薄まりつつある。

そのことを察知しつつ、しかしそれでも諦めず、男は、蒼の塊へと理解を進めようとする。

すでに冒険者たちは退避を始める。

あるものは加速し、あるものは跳躍する。

ほんの一時前、勝者の錯覚に溺れてたときの感覚は、もうない。

必死に――駆ける。

走る。跳ぶ。転ぶ、また走る。

冒険者の先頭が穴に入ったその時、

丸い蒼は、その冒険者を追いかけるように穴に入り込んだ。

やがて先頭の冒険者、そして穴に既に逃げ込めていた冒険者は、毒々しいまでの青さ、創作物の如き蒼さを持った水に飲み込まれる。

唯一の出口を塞ぐよう、不自然な蒼の水球は、穴の中に鎮座する。

玉の回転は、玉の流れは、まだまだ速く猛る。

穴の中にいた冒険者を自らの内に閉じ込め、窒息させる。
その上、その勢いと水圧により、水球の中の冒険者は引き千切れていく。

玉の入っていった穴、たった一つの出口を見つめるのは、幸運にも穴に入るのに間に合わなかった冒険者たち。

しかしそれは一瞬の幸運に過ぎない。

やがて蒼い水は、王墓の中に流れ来む。

蒼が、不自然な蒼が怒濤の如き勢いで、古代遺跡の中を満たしていく。

水は迷宮には流れない、流れ、回るのは、王墓のみ。

怒濤の水流は、数秒で、城さえ入るような巨大な王墓を満たしていく。

水は流れ、回転する。廻り、廻る。

縦に、横に、渦を描くように、無慈悲な暴力を振るい続ける。

蟹は、その中を塵のように廻る数秒前まで冒険者だったものたちを無表情に眺める。

刺青も、髭も、傷も、巨漢も、のっぽも、ちびも、小柄も、大柄も。
水圧と水流の激動に巻き込まれ、一緒にたに引きちぎられ、潰され、
窒息させられ、分け断たれる。

ミキサー。あるいはフードプロセッサ。
ふと、そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

数十秒後、水は引き、
水はまた球をなし、そして消えた。

引いた水の後、動く者はなにもない。

死後の世界のような沈黙があり。

無数のがれきがあり

ところどころに落ちているなにか肉片、そして金属片が。零れた米
粒のように点々とあり

王墓の隅に、一匹の蟹が微動だにせず隅にある。

最後に、鋏の合わさる音が鳴った。

蟹の瞳には何があるのか、

達成感か、後悔か、徒労感か、自己嫌悪か、あるいはその全てか。

それを見る者は、しかし誰もいない。

二日目 蟹 油断大敵気の緩み 魔法合戦（後書き）

『人形師』 ゲウーネエフ

出身不明

金属と生命の融合、異能研究の大家、儀式大家を体系付けた男。魔王領において第二の魔王と呼ばれる実力を誇っていた。

膨大な儀式刻印を身に纏い、外にある「力」を儀式大家を行使して操り、

無数の人形を即座に制作できたとされる。

儀式小家の詠唱術でその人形を操作し、一人で軍勢を作り出すさまは正に『人形師』

その後、地軍に参加。

マッフ機巧と……の神器理論、ガルニゼスの『力…金属』を駆使し、完全自立人形を開発した。

人形を従えた彼は一人一軍として天上戦争においても活躍。主に防衛においてその能を発揮した。

新暦においては『高位悪魔』として各地の説話に登場する。

一説においては、大陸東方の島嶼部に人形の国を立てたという。

二日目夜 組合長の胃に穴。 猫！ うしろうしろ！

1

魔惨迷宮、上段、冒険者区のある酒場にて。

数グループの冒険者がそれぞれに卓を囲み、賑やかな様相を呈している。

全ての席は満杯。大盛況である。

これは、だが異常でもある。

夕方、陽の終わり、鮮やかな真紅のグラデーションを描く空は、雪を降らせる灰の雲からかすかに見えるばかり。

この時分に、これほどの盛況を博したことは、この酒場が今代のマスターに変わってから初めてのことであった。

普通、冒険者とは一日の内、一定の時間は迷宮に潜っているモノだ。地下という性質上、迷宮というのは常に薄暗いモノである。

言い換えればそれは何時に潜ったとしても職場の条件に大差がないということでもある。

そのため冒険者は、同業者の競合を避けるために、夜に潜るモノもいれば、昼、朝、夕方に潜る者たちもいるように、自ずと労働する時間——迷宮に潜る時間を決めているのである。

さて、では、なにが異常なのか？

それは本来この時間に潜っているような冒険者たちが、軒並み、ほぼ全グループ迷宮に行かず、ここににいることである。

深夜から冒険に行く者たち、昼に帰ってくる者たち、しかし彼らも今日は迷宮に潜らず、酒場にいる。

行くべき迷宮に行かず、卓と卓、マスターと客が、噂を交換し合っている。

仕事をせず、迷宮に潜らず、今日一日ここにいた者も多い。

ここで少し補足しておこう、

迷宮都市に酒場は本当に無数にある。

そして何処の酒場を行きつけにするかということは、実は大変重要なことだ。

それは、こういった冒険者たちと親しみ、どのような情報のネットワークを利用し、どの酒場のマスターの庇護を受けるのか。ということを決めることに他ならないからである。

酒場のマスターとはクエストを出し、情報を集め、迷宮管理組合の委員でもあり、迷宮管理組合への口利き、身分保障も行っている存在である。

酒場ごとに、マスターの性格や能力の違いがあるのは、自然の摂理であり、そこに選択が生まれるのだ。

また、同じ酒場を常連にするもの同士は、情報を交換し、時に助け、時に助けられ、物を交換する機会持つ。

酒場選びとは大切である。もちろん不文律の慣習のようなものなので、幾つかの酒場を利用したり、各地の酒場を転々とすることも自由である。

しかしそんな者たちも、一月単位で見たら、一番顔を出していて、何時も座る席が決まっているような、行きつけの酒場があるものだ。

この酒場でも、そういった冒険者同士の活発な相互扶助が行われていた。

たがいつもと違うのは、この時間にいない筈の冒険者が、多くいるということだろうか。

中位冒険者が多く、高位冒険者も何人かいるこの酒場は、魔惨迷宮全体で見た酒場の位置づけとしては中の上、あるいは上の下といったところか。

情報も鮮度が高く、それなりに信頼できるようなものばかりである。

とはいえ、いまこの酒場で最も活発に話されているのは醜聞の類ではあったが。

「チーム全滅か」

とある冒険者が不安げに髭をこすれば、

「ニケロ・フィリップと、『庄殺者』クトウルヌ・イーガンが主導したらしいな、それ」

「でどっちも帰ってこなかった、と」

と隣の卓の若い前衛戦士二人が食いつく。

さらに近くの卓からも声が飛ぶ。

続けて飛ぶ声、相槌、同意の声。

今日の昼に入ったこの新しいニュースは、
無数の動揺と噂を生み、この酒場でもそれについて先ほどから何回
も何度も話されていた。

「やばいわねえその怪物さん。あと……蟹の形をしてるんですって
？」

「ニケロはお世辞にも気持ちの良い奴じゃあなかったがよ、死んじ
まえとまではあ、俺あ思っていなかったな」

「ああ、くわばらくわばら」

「ニケロの変わりはいるけど、『庄殺者』クトウルヌ・イーガンが
死んだのは……」

「手痛いなあ、前線は後10年膠着するんじゃないか？」

魔惨迷宮でも荒くれどもばかりが集まる、ある酒場の冒険者たちが
主導して、

迷宮管理組合に先んじる形で件の48層の怪物へと挑戦した事件は、
昼には解決した——挑戦したチームの全滅という形で。

都市でも屈指の荒くれ者として知られた粗暴なニケロの死は、さら
なる不安と動揺を魔惨迷宮中の冒険者たちにまき散らし。

それに増して惜しまれたのは『庄殺者』と言われたクトウルヌ・イ
ーガンである。

儀式大家で、儀式法まで使える人間はこの都市だと10人、実戦で
短時間でそれを行使できるのは僅か数人、その内の一人が消えたの
だ。

斥候隊の第一報を聞いた迷宮管理組合の組合長ハンナ・ウルフは、
飲んでいた紅茶を吹き出し、手に持っていたお気に入りのお茶の狼柄のテ
ィーカップを窓に叩き付けそうになり、寸でのところでどうにか抑

えた。

そして全滅したチームに、最高位冒険者クトウルヌ・イーガンが参加していたことを知ると、迷いなくティーカップを窓に叩き付けたのだった。

「知っていたら止めたモノを……」うぎぎ、と呟く組合長の目の下には隈がある。

大規模チームの全滅の報は、隠しきれるものではない、そのためハナナールフはあえて先んじてその情報を公開した。

（公開された情報、全滅した冒険者の人数が多少減っていたのはご愛敬ではあるが）

それから各地の酒場では、その話題と件の怪物についての話題でもちきりであった。

クトウルヌ・イーガンは儀式大家の儀式法を行使できる仕手だが、果たしてそれを使って破れたのか、

それとも作戦の不足で、発動前に破れたのか、ということが話題になれば。

果たして前衛の攻撃は効いたのか、や、蟹の攻撃手段はなんであるのか。それは倒せるのか。

斥候隊の一員が目撃した大量の水とはなんだったのか、などが話題に挙がった。

「巨大な蟹といえば、魔将の内に一匹、そんなのがいるらしいな、つい一昨日くらいまで全く知らなかったが」

「私も知らなかったわよ。そんなのほんとにいるの？」

「おお儂は知ッとするぞい『巨蟹』じゃろ？」

「ううむ、聞いたことがないなあ」

「いやさ、最近ベストセラーになったあれに書いてあつてさ」

「『神話・物語録』か」

「もしかしたら本当に魔将だったりして」

「ははは」と酒場全員が笑いながら話す、

心に不安を抱きつつ。それをあえて振り捨てるように。

皆が、件の怪物に思いを馳せる。

ある卓では違う話が行われていた。

酒を飲み、カードに興じている若手冒険者の集まりだ。

「で、明後日の朝なんだろう？」

「なにが」

良いカードが来たのかそれを場に出しながら男が答える。

「あれだよあれ派遣隊の告知」

出された男は苦い顔をしている。

「ああ……、あれか」

「そうそう、それ」

いいから早く出せ、と勝っているらしい男が指で場を指示す。

「定員12名」

「もう参加者も大分決まっているらしいね」

横で見ていた男が口を挟む、彼は審判役も兼ねているようだ。
勝っている男は、いやらしく笑い。

先ほどよいカードを出された男が苦い顔のまま、熟考。
しばらく簡単な応酬が続くも、場はそのまま変わっていない。

「『黄金剣』さまのリベンジか」

「後は、メーダ、ニケロット、ボブ、あとあの豚野郎、行くなってさ」

「『銀鬼』ロレントオカ」

「お仲間と一緒にだ」と

審判役の言葉に、負けているゲームから気を必死にそらすように負
けているらしい男が答える。

勝っている男はこれで決まりだ！ と一枚のカードを場に出す。

「とりあえず、蟹に近づいてみて、細やかな情報収集とついでに周
囲の封鎖もやるんだ、と」

それまで負けていた男が、急に顔を歪め、それを待っていたとばかりに舌なめずりをする。

名演技。男の出したカードを見て、それまで勝っていたはずの男は、絶句、呻いて呟く。

――投了

「はい終了。まっ、なんにせよ明後日のことだ、いい加減俺も身体が鈍ってしょうがないよ」

呟く審判役の男は、酒場の外を見た。

既に陽は完全に落ち、辺りは一面の漆黒である。

ところどころにある酒場の煌めきがしかし漆黒を汚す。

喧噪は酒場の至る所から響く、しかしそれはどこか不安げな様子でもあった。

審判役は、今度は自分が参加する番だと、卓に付く。

不安であれど、恐れがあれど、日常は続く、

日々は続き、夜が来る。

呻く、呻く声。

吹き飛ぶ首は、病んだ朱、思えば遠く、思えば近く、慙愧に堪えず、後悔は無限かと錯覚する。

古い夢を見ていた。

そう思い、『潜影』は目を開く。

取るべき仮眠を欠かさず取ることも仕事の内である。

今日はやけに上が騒がしい。

繁華街も、冒険者区もだ。

それも無理のないことなのだろう、『潜影』はそう思う。

忙しさは、仕事は増え続けているようだ。

治安、不安、チーム全滅、蟹。

ふと思い出す話。蟹が魔将なのではないか、という議題が都市の最高会議で上がったらしい。

一笑に付すことも出来ない、と『潜影』の上司も言っていた。

ただ今のところ、『潜影』は暇であった。

斥候隊に影ながら付く任務は同僚と代わった。

次の任務は明後日の朝を予定している、内容は、対巨大蟹対策の冒

険者の派遣隊についていくことである。

そんな彼は、夜も更けて、上階の賑やかさを除いていやに静かな下段東区、昨日不審者を監視していた場所にいた。

件の長耳族の少女の話。

まるで花畑で花輪をこしらえる為だけに生まれたのではないか？
という可憐さの少女の不審者を、彼は直接の上司へと伝えた。

上司もその件を不審に思ったのか、その少女が入っていったという古屋敷について調べた。

場合によれば衛士や軍の派遣まで差配するつもりであつたらしいが、しかしそこで行政と一部の軍の上層部から横槍が入る。

曰く、その屋敷は世界各地の軍と行政に顔が利く、さる大富豪の所有であること。

その者との関係を考慮し、面だったいざこざは起こしたくないという話。

であつたらしい。

衛士や軍を人手として使えないのなら、夜に、自らの手駒で最も能力がある。

『潜影』を使用し、件の少女の捕獲、拿捕が命令された。

『潜影』としても件の少女のきな臭さ、胡散臭さを考えれば、任務に就くことは吝かでもなかった。

それが、昨日に引き続き『潜影』が、東区の大屋敷の屋根に立っている理由である。

黒面黒装束、一色の闇。影の中の影。

彼が見下ろす先には、昨日と同じように、そして昨日よりも慣れた手際で、道から道を適度な大きさの荷車とともに移動している頭巾の少女の姿がある。

もうすぐ日をまたぐ、少女はかれこれ数回、下水と屋敷を往復していた。

何かの荷を、屋敷に運んでいるらしい。

『潜影』は早く仕事を終わらせたいと考える。

今から行う仕事もそうだし、ここ数日の過密勤務、超過勤務の乱舞が終わって欲しい心から願っていた。

彼を、待っているものがある。彼も、もっとやりたいことがある。薄暗い仕事、血に濡れることもある仕事は、ここ数ヶ月で心に大きな変化のあった『潜影』にとって忌むべきものに過ぎなかった。

この仕事が終わったら、……を食べよう。

そんなことを思って、階下の町並みを、黒面越しに眺める。

蒼い月が、街を照らす。奇妙な静けさを演出する冬の乾いた空気。

澄んでさえある静謐な沈黙。

夜の街。沈黙の住宅地。酔っ払いの喧噪。

月光は白。浮かぶ影は黒一色。

冷えた風が、『潜影』と少女の間を横切った時。

黒は、屋根からその姿を消した。

3

猫の耳を頭巾で隠し、濃い体毛をコートとワンピースで隠したルーは、ほくそ笑んでいた。

背後の荷車には、『鎧』最後の部位。

これを後は、ちゃっちゃと迷宮に運べば仕事の下準備は完成だ。こんならくでいいのかしらん。とでも言いたげな満面の笑みを浮かべる身長120cm程の耳長族の少女。

——作戦に穴はあったにや、不確定要素もたくさんあったにや。運に頼っている部分もあったにや。

とはいえそれを越えるほどの幸運と成功に恵まれたのが現状にや。などと嘯く。

さて、一つ考えて欲しい、これからルーに起こる事態の原因を

久方ぶりの蟹。旧知との会話に心を緩めたのか。

それとも彼のことを思って仕事を出来る限り早めたのも一因か。成功に次ぐ、成功に見えたことが原因か。

そもそも己に対する自負、傲慢、慢心がなかったか。

耳長ルーは気付いていなかった。

己が幸運に恵まれているわけでもなく、作戦が問題なく成功しているというわけでもないことに。

ただもし。もしも。

運否天賦を言うのなら。

彼女の幸運はこの瞬間であっただろう。

屋敷の裏口に回る途中、屋敷の側面。

自らのブーツの紐が解けかかっていることに気付いて、それを結ぼうと屈めたことこそが、

彼女の幸運であっただ。

数瞬前まで、ルーの両肩があった場所を、それぞれ一迅の剣風が通過した。

一切の乱れない刃風。

ルーの認識外からの奇襲。

当たっていたならば、腕と肩を、しばらくの間、使い物にならなくされたであろう。

されど、当たっていたならばの話だ。

黒一色の装飾に身を包んだ奇襲者の見事な遠距離斬撃を、しかし彼女は運良く回避できた。

躲せた。首の皮は一枚つながった。

とっさに身を翻すルーは、敵襲を察知した。隠形を見破り、こちらを尾けていた存在がいることを認識した。

そして己の失態をも自覚した。

——敵襲にや。

一種の混乱を、即時に鎮圧。あるのは冷静な敵戦力の分析。追尾、奇襲、隠形看破、気付かなかった。無音、遠距離武器所持、速度予測。

刹那の分析の後、即時の行動。

奇襲の斬撃に失敗した影——『潜影』は、内心のかすかな苛立ちを、そのまま追撃への原動力とした。

意識——全身——儀式小家・紋章法——速度加護。

脚部——省略——脚力強化

持続——無音化・消臭・気配減衰——五重起動——脚力強化のみ瞬間起動。

構えるは二本の短刀。

ぶら下げるように持ったそれを、振るうため、無音の迅速で対象へと近づく。

対象のコート頭巾ネコミ少女は、コートを翻しながら、近づいてくる『潜影』が見えているかのように、壁側へと跳ねていく。

月から差し込む光。白く照らし出されている石畳。

丸く跳ね弾み、疾速で近づいた『潜影』から逃れるよう、壁へと着地する。

紋章法か、と思い、壁に張り付いたルーを見やる『潜影』

初撃を奇跡敵に回避したルーは、敵の接近よりも先に壁の中程に張り付き、下、石畳のある場所を見る。

目と目が会う。

片方は、頭巾を被った美しい耳長族の少女、花柄の頭巾が風に揺れている。

もう片方は、黒装束に身を包ませた、二本の紋章が刻まれた短刀を持つ、黒面の影。

「ずいぶんによあいさつにゃ」

返答はない。

接近しての斬撃で、確実に行動不能に追い込むつもりだった『潜影』の思惑は、
思ったよりも速い耳長族の少女の移動速度によりご破算。

潜影は、速度加護の紋章の発現を止め、脚力強化を二重に起動し、
飛ぶ。

跳んだ瞬間振るわれる右腕の黒短刀。

それを回避するように、耳長族は、コートをはためかせ、壁を走り、
跳ぶ。

跳んだ影は、一瞬前までルーのいた壁に足を置き、自らも壁に着地する。

脚力強化を外し、ブーツの底面に記された着地紋章を行使する。使うのは己の魂の内に蓄えられた力。

『潜影』の器は大きい。

それでも同時に起動された紋章の数を見ると『潜影』も長い戦闘はできないだろう。

狙っているのは短期決戦だ。

ルーは走る。壁を走る。

身体を構成している猫人の筋肉を、走り、跳ぶことに特化した、巧みさを生まれ持った筋肉構造を無理矢理に酷使する。

角を曲がり、跳ぶ、屋敷二階のベランダへと着地。

——気配が、全くつかめないにや。

しかしそれでもルーは集中し続ける。

緊迫、極限、精神と神経の高ぶりを抑え、敵の攻撃を予測する。

音。風の音。違和感。

全身の筋肉を跳ねさせる。

ベランダから屋上へ。

下を見る。ベランダの手すりを寸断する刃風。

——あの持つてる二本の短刀ナイフの紋章かにや。

刃に記され、刻まれた紋章に「力」を流し込み、その「力」を一定の大きさの刃として発現させているのだろう。

「力」使つての中距離攻撃もできる。暗殺者か、それに準じるような刺客。

しかも、専門ではないとはいえルーの隠形を看破し。

そしてルーに、猫人の感覚器官とルーの歴戦の経験を前に、その気配を掴ませないその巧みな技術と紋章術。

——最後の、最後でやっかいにや。

いやな相手に見つかったものにや、と思いを巡らせきる前に、横へ跳ぶ。

屋根にある己の影が一瞬ぶれたのをルーは見逃さなかった。

横転、躲す。しかし躲しきれず、コートを掠る一撃。

無音。いつの間にか背後へと居た相手にルーは戦慄を覚えた。

ルーは躲した勢いをそのままに、屋根から飛び降り、

空中で、コートのフードを頭にかぶり、懷に備えておいた愛用にマスク眼部に装着する。

着地。猫のごとき無音。

上からの攻撃に備え、速やかに移動。

月の光は明るすぎる。そう考え、奇しげな下水主の装いを何時も通りに身に付けた猫は駆ける。

屋敷の横側、先ほど己が初撃を受けた側とは反対側。その先にある木々の茂る庭へと突っ込む。

無数の草と木を連想させる。生い茂ったジャングルのような木庭へと駆ける。

ルーは冷製に判断する。

推察は頭を冷やし、己の戦力を考える。

コートに、その下に縁取られている刺繍の紋章に「力」を流し込み己の姿を透明化させる。

戦力。

あるのは肉体の筋力、感覚器官。

防備はコート、閃光弾、煙玉、まきびし。

下に来ているワンピースは、紋章刺繍がある、些細な防刃——意識——起動——ないよりは全然マシだ。

武装。武装は、コートの内に小杖が六本。カンテラー——武装ではない。背に一本の短刀。

杖と短刀は全て神器。

しかし「力」の起動、貯蓄にしばらくかかる。

であるならば、己の肉体のみで相手をしたいところだ。

手袋ごしに己の手を見る。

——いけるかにゃ。

それは、わからない、しかしその他に、当面の攻撃手段はない。

神器発動までの時間を稼ぐ。

そのための手段だ。

むぎむぎ一刀で切り捨てられる程にルーも柔ではないつもりだ。

どうなるか分からないがルーはやるしかなかった。

勝機は無いわけでは無い。

狙いは神器と……

考えながら、コートに潜めた六つの小杖の紋章を起動した、小杖の紋章は、小杖の刻印を作動させる。これで外の「力」が特定の属性で自動に貯蓄される。

そのとき、音がした。猫の感覚器官はそれを逃さない。

音、草の揺れる音。風。

猫は跳ぶ退く、跳ねて跳ねるその姿は、まるで祭りのようで。

庭の木に深い傷を入れるのは二本の短刀から放たれる跳ぶ剣撃か。

――にや?!

猫は戦慄する。

この黒尽くめは、見た目には透明化していて見えない筈の己の位置を看破して、攻撃を仕掛けてきたのか。と

移動する限り、音を消すことが不可能に近い庭を選択していなかったら。

そう考えルーはぞっとする。

シャンツ、という鈴のような刃音。

黒と緑と屋敷の茶色、それを覆う眩い月光。

猫は庭から抜け出すバックステップ。
バク転、丸く丸くそれこそ猫のように。

黒はそれを追う。猫を越える地上移動の速度。
走り、切りつける。

猫は空中で体勢を整え、それに抗する。

刃を受け止めるのは手

空中の防備という不利そのものの体勢から繰り出される、手刀。
ルーは意識し、己の手を覆う薄い手袋の紋章に「力」を流し込み続ける。

硬化、鋭化。

ついで靴の紋章。速度加護と着地紋章を発動し、戦闘準備を整える。

神技一步手前の空中舞踏を前に、しかし『潜影』も揺るがない。

ビュッ、ヒュッ、ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！ ヒュッ！

風を切る刃、大気に食い込む二本の短刀。

隙を狙い、受け止め、そして隙を狙う。

放たれる刃は、鋭利かつ流麗な滑らかさをもって、猫へと放たれ続ける。

空中から地面へ足場を移動させたルーは、目前にて振るわれ続ける、躊躇なき二刀連撃を受け止め、避け、受け流す。

一刀一断が恐ろし精度と鋭さを持った錬撃だ。

『潜影』の振るう刃は、
さながら蓮華の連なる様で。
それは加速する、無駄なき二刀乱舞。

ルーの振るう拳は、
まるで並べられる小楯の様で。
それは必死の心情を隠し、致命を防ぐ左腕右腕。

白き月光を光源に、未明。

古ぼけた屋敷の正面玄関前を舞台に、

演目は二人だけの舞踏会。

ルーと、『潜影』の踊るような戦闘。

しかし役者の顔に浮かぶ表情はどちらも無。

黒面に覆われた『潜影』の攻撃は、時間が経てば経つ程、
速さ、巧さ、鋭さをいや増していく。
フェイントが手品のように精緻を凝らして交り、練り上げられた強度ある速撃の嵐。

二者の表情は無である。

無であった。

猫が表情を変えたのだ。

猫の、コートの、長耳族の、ルーの表情は苦虫を潰しきったそれ。余裕のない。この接近の武闘に、勝利する未来が見えないという不安と恐怖の入り交じった歪んだ表情。

いつもにやにやとした笑いをこびり付かせているその口元は、しかし今は焦りとも言うべき形に。

認めなければならぬ、ルーは防戦一方であり、このまま『潜影』の振るう攻撃がさらに洗練されていくのなら。その先にある未来は敗北の他に無い。と

戦いはじりじり続く。

刃と拳が合わさり、猫の頬が切れる。

時折『潜影』が放つ飛ぶ斬撃が、足先をかすめる。

身長差をものともせず、跳び、時に、跳ね、合わせ、体幹をねじり、地を蹴るルー。

拳が受け流しきれなかった刃が掠り、コートに、フードに傷を作っていく、

ジリ貧、傷は微増に微増を重ね。確実に増えていく。

均衡は最初だけだった。

そもその身長差。

ウェイトの差に、技術の差。

不利に不利を重ね、短刀が空を泳ぎ、拳がそれを反らし切れなくなっていく。

一撃一撃が敗北へ近づいていく足音に聞こえてくる。

ルーの接近戦闘法は実のところそう悪いものではない。

体軀こそ小さいものの、それを動かすバネは、筋は、猫人の特有のしなやかで強靱、弾力的で強力な物である。

永きに渡る生の末に磨いた身長差を逆に生かし、相手の死角を突くことに注力して、

時に相手の目をそらし、跳ね、跳び、動き翻弄するその技術、その戦闘法は、初見ならば対応に苦慮し、並程度の冒険者であったならあっさりと敗北するであろうレベルだ。

しかしそれは並の冒険者であつたならば、だ。

より速く、より技に長け、腕力が無くとも数々の強者を相手取ってきた『潜影』にとって、

ルーは最初こそやりにくいものであつたが、慣れればそう大した相手ではなかった。

それ故の現状、ルーの不利が目前に存在しているのだ。

「にゃ」

呻く、時間は遠い。

「にゃ」

呻く、厳しい戦いだ。

しかし勝算が無いわけではない。

堪え忍べ、耐え忍べ。

猫よ、かつての大戦を思い出せ、

強力な魔法が、魔導が、武器が、肉体が迫り、殺意を向けてきた戦場に比べれば。

目の敵など、殺意無き敵など、たいしたものではない。

猫は、呻き、それでも無数としか言えない膨大な刃筋から、眼ををそらさず。

癩癩を起こさず、焦らず、歯を食いしばって、凌ぎ、耐え、待つ。

そして、コートに作られた比較的大きな掠り傷が、10を越えた時、猫は、おもむろに大きな蹴りを入れる。

自らの体勢を崩し、半ば捨て身で、『潜影』の胴めがけて鋭い一撃が、蹴り込まれる。

それを躲すように、スウェーし、自らの持つ短刀の紋章に、魂から「力」を引き出し、流し込む『潜影』。

刹那――中空を泳ぐ剣閃が作り出された。

猫は、ルーは蹴りを加えた時の、低く崩れた姿勢から。コートを脱ぎ、その内側に備えておいた小杖を引き抜いた。そしてコートを、飛空する刃影にあてがうように投げつける。

刃は防がれる。

小児の如きルーはコートをなくして、その腕の毛と、脚の毛を外に晒すが、しかし、稼いだ数瞬の間を使って、己の姿を隠すように、腰に帯びていた煙玉を地面に叩き付けた。

もくもく、と一面に火事のような煙。

作り出した隙。勝機。

そう考え、ルーは、小杖を四本指と指のあいだに挟み、紋章法脚力強化を発動し、全身の筋力を高め、意識を脚に集中させる。

目的は、高く跳ぶこと。

そしてそれは果たされる。

「にゃあ！」

と啼き、彼女の姿は屋根よりも高い中空に。

月光を背後に、月の化身のように身をそらせ、

煙が充満している地上へと杖の狙いを定める。

神器『小型光射機』

全六本、全てルーことリューレアーの謹製である。

神器とは、「神器」理論とは世界を革新した理論である。

元をただせば、ある一匹の魔将が考案したとされる。その後の世界の戦争の姿を変えた兵器技術。

その偉業を讃えられ、マッフ機巧と機巧学の創始者『小鬼』とともに考案者たるその魔将は『準神』として人々から信仰されている程だ。

……

神器理論の概要とは、即ち儀式大家・刻印法の一部と儀式小家・紋章法を組み合わせたことにある。

一定の物質に器を構成し、そこにを定義・概念付けを自動で行い、外の「力」を吸収し集めるという高度な刻印を幾つか組み合わせ、刻む。

人間という存在の場合、

世界の「力」を直接使用するためには、己の魂と意識とそこにある「力」と無数の雑念があるため、

妙なる才能と、努力と、修行の末に、世界を理解し、定義し、干渉し、念じ、概念付けをして、心を没入させて、ようやく外の「力」を借りることが出来る。

しかし、魂無き物質はその限りではない。

それを発見したのが先の考案者の魔将であった。

魂無き物質に特殊な刻印、自動の発動を前提としたシンプルな刻印を刻む。

そしてそれを、人間の意志を直接介在させるのではなく、人間がその刻印と重なるように配置された紋章に己の「力」を流し込む。

それが間接的に、その刻印を発動させる。

複雑なプロセスも、世界理解も経ずに、外の大いなる「力」を使うことが出来るようになり、

後はこの物質に儀式大家・儀式法で干渉し、「力」を溜めておくこととの出来る器と、溜めた「力」を操作する小さな紋章を記せば完成である。

一定の外の「力」を、外の「力」を理解出来ない者でも集めることが出来。

一定の属性、仕方にしか発動できないが一度溜めたその「力」を発動して効果を発現できる。

何回でも使える便利かつ有用な魔具。

『神器』の完成である。

「はっ！」と唸り、自ら造った小杖を地上に向けているルー。

彼女の造った神器も勿論上記の理論に乗っ取り造られている。

その効果は単純明快。

ロード・エーサーベインの『黄金剣』と仕組みを同じくして、その出力と範囲と発現時間を抑えたものである。

四本の杖の紋章に己の「力」を這わせ、神器は発動する。

音無く、放たれる、「棒術用の棒」程の太さの光線が、未だ煙が充満している地上に向けて放たれる。

その数、四本。一瞬の速さで地へと到達しこれを灼く。

煙発生から、光射出、この間僅か三秒のことであった。

四本の光線は、触れただけ相手を融かすような破壊を秘めて、地上の煙の全範囲を一掃する。

指と指に挟まれた杖を巧みに操り、先ほど『潜影』が居た場所から、隠れてそうな場所、移動予測範囲をルーは光輝で風ぐ。

数秒の照射。

屋根を高く越え、月を後ろに、黄金の髪を靡かせるしなやかな肉体の童女。

破壊の神のような醜いマスクに、空けられている空白に、しかし笑みはない。

引き締められた口は、敵を逃さぬ意志の現れか。

言葉を飲む程の凄絶な神秘美。

やがて高度の頂点に達したのか、緩やかに落下を始めるルーの身体。しかしルーの心に安心はない。気配が読めない。倒したのか、逃げたのか、殺せたのか、それさえも判断できない。

溜めた「力」未だ放出していない二本の杖を取り出し、構え、地上を睥睨する。

光線の威力と速度が起こした風と時間経過により、地上の煙もおおむね晴れた。

しかし地上には『潜影』の姿がない。

閃いたのは直感か。

視界の隅、見える屋敷の視線を移す。

そこにその隅、煙が晴れきっていないがその姿は隠しきれていない。

「そこかにゃッ！」

と猫が叫び、杖をそちらに向けるのと同時に、

二刀の短刀を胸の前で構え、煙が晴れ対象の位置が確認できるようになるのを待っていた『潜影』が刃を振るった。

交差する刃風と光線。

2と1。

刃は、落ちている猫の腹部と脚部に直撃した。

猫が刃風の致命を避けるためにとっさに取った空中の姿勢変更。

そして『潜影』の直感。

猫が放った光線は、『潜影』の顔面を僅かにそれ、彼の頭部全体を覆う装束の右側を掠めるにとどまった。

猫は信じられない、という表情で、しかし諦めず、歯を食いしばって。

地に墜ちる猿のごとき身のこなしをもって、空を厭うように地へと

落ちていく。

そのマスクの下にあるのは真の勝機の訪れを確信する強い瞳。腰に帯びていた最後の神器に手を掛ける。

黒面の『潜影』は、冷や汗を背中に流しながら、紙一重の勝利を確信している。

頭部を覆う装束の右耳の辺りが丁度破れている。

そこにあるのは、大きなイヤリング。

それを揺らすように、二刀を構え、ルーの下へと、駆け出す。

無音を解き、気配減衰を解き、着地紋章を解く、「力」の残量の調整のためである。

そして加速の加護を新たに掛けて、疾風の如き速度で、猫の身体が落ちた辺りに急ぐ。

庭の近く。

一瞬だ。

『潜影』は仰向けに寝て動かない少女を見る。

長耳族の少女かと思えば、その身体のかなたなワンピースから見える脚と腕の筋肉は引き締まり大量の体毛に埋もれている。

しかし纏う雰囲気は粗野ではなく、神聖。

歪なマスクと花柄の頭巾、苦しげに歪められた口元。

防刃でもしているのか、腹部に当たった刃はその肉体に到達していなかった。

脚部の傷はしかし深い、赤い血が傷から流れ出ている。

う、うう。と呻くような声。

『潜影』は奇妙な後味の悪さを味わいながら、傷の治療が出来る儀式大家の居る医院や、熟達した儀式小家の下へと急ぎ少女を運ぶことにする。

屈み、近づく『潜影』、童女を観察していく、あるのは投げ出された身体、脚、左腕……。
……右腕が見当たらない。

猫は己の背へと、己の背の短刀型神器『ヒュプネシア』へと右腕を当てていた。

この一瞬を狙った集中。
息を止める。

意識——発動紋章——神器『ヒュプネシア』——睡眠概念付与型大気

短刀から「力」がはき出される。

睡眠の性質をもった大気が吹き出しはじめる。

しかし油断していたとは言え、『潜影』はプロだった。
失策を悟り、大きく飛び退く。

充満した催眠ガスは、しかし『潜影』にとどかない。

――あつしの勝ちにや。

ルーは一昨日の夜に、己があゝの蟹の友人に語ったことを思い出す。

『――それこそ、前衛の冒険者なら高位辺りから勝てるかどうかあやしいにや、

あつし儀式小家しか使えないから詠唱中に斬られてボタンにや』

自らの魂へは先ほどから集中していた。

そこから「力」を引き出す。

無限の可能性を秘めながら、生命の魂に歪められるかのように色を所持した「力」だ。

己の内の「力」を理解している。

動かせる。何であるかが理解出来る。

想像する、大気の流動を。

想像する、大気の脈動を。

風を想う。

自らの「力」を、充滿している催眠ガス——神器から放たれている「力」だったものの周囲へと動かしていく。

要領は紋章法と同じだ、違うのは、流し込む先を自分で考え、その形を自分で指示することだろう。

己の心、意識の内、魂を励起させ、想像した形、それこそ何百回、何千回もイメージした形を想う。

即ち、風へと「力」を変えていく。

——相変わらず…… 使い勝手、わるいじゃあ

意識——魂——対象……世界——儀式小家・想像法——導力・属性想像・定義「緑」——

想像法『蠢く風』

催眠ガスの周囲を囲んでいたルーの「力」が風へと変換されていく。それは催眠ガスを巻き込み、渦を巻き、その速さ、その量を増して

いく。

蠢く風が、波を描くように、突風として、『潜影』の下へと飛ぶ。

油断、敵の隠し札らしきものを見切った安堵。

それがもたらした、『潜影』の最後の最後の油断。

それを巧妙に利用して、催眠ガスを纏った風は、『潜影』の下へと押し寄せた。

4

傷ついた脚を引きずり、荷を引きずり、ぼろぼろになったコートを肩に掛け童女は呻いている。

「いたいにああ」

——しかもこのコート高かったのに……にや

それにしても、と思考する。

「恐ろしく手強い相手だったにゃ」

間違いなく最高位冒険者の位階であろうその実力。

しかし己の情報網は、一度も黒尽くめの装束の最高位冒険者の話をもたらしただことはなかった。
つまりあれは

「秘された存在かにゃ」

何かの裏の仕事を行う者、その任に付いている者。
そういったどぶさらいの類か、と納得するルー。

こういった秘密裏の凄腕の存在を、思考の埒外に置いていたことを
反省しつつ。

気を取り直して、ルーは荷車を裏口へと運ぶ。

「まあ、その強さに敬意を払って命まではとらないんだにゃ、感謝
すればいいにゃ」

遠く祈りの声が聞こえる。

遠くの住宅地の教会か、深夜祭でも行われているのか、秘密の葬式
か。

わからないが、しかしルーにはどうでもいいことだった。

荷を運び込んだら、傷の手当てをして、すぐにこの荷を迷宮に運び込まなければならない。

（治療用の薬草やら魔具の類には事欠かない、ポーションは戦闘中は使えないが、こういった落ち着いたときのためにあるのだ）

まずはここにある裏道使用して降りていき、

そこから幾つかの道や隠し道を経由して、一二階の、事前に準備しておいた隠し部屋で組み立てる。

一気に三度の往復で一二階とここを行き来する。

外の庭の隅で寝ている『潜影』が起きるのは五時間程、短くとも最低で後3時間は夢の中だろう。

運び込んだら、明日は一日を掛けて組み立て作業に入る。

「それでミッションコンプリートにゃ」

そう呟いたルーは、

ふと、己のワンピースにも傷が付いたことを思い出し、

——これもお気に入りだったのにゃあ

と呟いて、口元をへの字に歪める。

「ままにやらないものだにやあ。何事も」

呟く猫の他、動く者はなにもない。

カビくさい古屋敷には、虫さえもないと錯覚する沈黙しか存在しない。

月は変わらず白い光を放っていて、窓はランプのようなものだった。

闘争は終わったのだ。

『潜影』は外で束の間の休息に就かされ。

四つの耳をピコピコ動かす童女は、嘆いて働く。

黄金剣の騎士は祈りを捧げ。 初心者冒険者は帰ってこない同居人に怒りを抱き。

雌狐は仕事に追われて、豚人は仲間と一緒に酒を飲む。

角を生やした迷宮騎士は動き出し、迷宮主は猥雑な悦楽に耽る。

ただ一匹、なにもしていない蟹は、王墓で一人沈黙する。

ああ、陽は巡る。

陽はまた昇り、都市に再び朝が来る。

自然の摂理に変わりなく、生命の習性には変わらない。

こうして二日目の夜が更けていくのだった。

二日目夜 組合長の胃に穴。 猫！ うしろうしろ！（後書き）

『侍女』 ヅュチャ・ンヴァング

魔王領 エル・ヴァングの出身。

昆虫型高位魔族。

人の姿を真似て、侍女姿を取り。その気質、冷静で大らか、と伝わる。

触覚と複眼、外骨格と多脚がチャームポイントの美人さん。

固いが柔らかい不思議な材質で肉体を構築していたと伝わる。

元々は魔王領の独立勢力の長。

その実の姿は、強大かつ巨大な複合昆虫である。

幾度かの擬態の末にその姿を封印している。

人間に出来うる限り似せられた、擬態姿と、

その穏やかな性質が合わさり、『勇者』をもって我が軍で最も可憐であることに疑いを挟まない。

と言わしめた。

新暦では『神の僕』 世界の虫を従えていると考えられ、一定の敬意を払われている。

本人は魔王領の森林に居を構えている、という噂である。

『竜人』 ガンジット

大陸西部 タンボルグ山の生まれと伝わる。

両親は不明。忌むべき混血の竜人。

竜頭を備え、人の子の如き体躯を持った女性である。

その性質は、傲慢にして不遜。冷酷であり残虐と伝わる。

岩と熱の儀式大家であった。

『有角姫』 『勇者』との闘争に破れ、密約を結んで天上に対する軍勢に加わった。

正義を自認する『勇者』とは度々衝突。

双方に大怪我を負うことも少なくなかったらしい。

天上戦争においては、多くの神僕や聖獣を屠った。

万にも及ぶと言われたその殺戮は、彼女の能が範囲攻撃に特化していたことの表れでもある。

天山戦闘の前哨戦とも伝わる。神鳴谷の戦闘において『勇者』を庇い、喉とともに声を失う。

新暦においては、タンボルグ山の山頂にただ黙坐している、と伝わる。

その位は『悪魔』殺戮と恐怖の力をもって、心の弱き者に間違いを起こさせると、考えられている。

三日目 昼夕 派遣隊出発 精鋭迷宮軍 あるいは決戦の日（前書き）

推敲したのであげます。量はかなり多くなってしまいました。すいません。

1対1の戦闘描写よりも、多対多の描写の方が難しいということの勉強になりました。

三日目 昼夕 派遣隊出発 精鋭迷宮軍 あるいは決戦の日

1

夜は明けた。

冒険に行く者も、行かぬ者も、多くの者が目を覚まし覚醒する時間帯。

人々は仕事に精を出し、あるいは朝陽が登り切らぬうちから酒を飲む。

勤勉に仕事に励む者も居れば、怠惰に耽る者も居る。

ともあれ、一日は始まり、どこか違った余所余所しさを醸し出し、都市は日常を演出する。

昼になれば、

空の色も、朝には射していた僅かな太陽光も雲に隠れている。

雪を産みそうな、灰色を孕んだ淀んだ雲。

それを背景に、日常の演出は破綻していた、

少なくとも都市上段の冒険者区にある迷宮管理組合ではそうだった。

迷宮管理組合、組合長と、斥候隊派遣を差配している幹部職員は、斥候隊の朝の定時連絡と、昼の定時連絡が途絶えたことを認めざるを得なかった。

斥候隊の人員は、戦闘能力こそ取り立てて高くないが、直感と経験に優れ、情報の入手に長けた技能を持ち、迷宮の地理と生態を熟知している。

正確な判断を行い、情報を収集し、そして逃げることに掛けては最高位冒険者にも劣らない、

決して強くこそないが、迷宮の探索を進める上での欠かせないシーカーであり、マップパーである。

今回の蟹には、常時三名付かせていた、交代を兼ねて、朝昼夕夜の四刻に斥候隊は地上に戻り、ハンナⅡウルフに情報を伝えた。

その彼らが、朝の定時を過ぎても帰ってこない。

その時点で嫌な予感を感じていたハンナⅡウルフは、念のために派遣隊に集合の号令をかけ準備を始めさせた。そして今、昼の二時を回り、斥候隊は一名も帰還しない。未帰還。バル・ファルケンⅡノースと同じようなそれ。

ことここに至り、斥候隊の未帰還を重く見たハンナⅡウルフは、この斥候隊未帰還の原因調査のため、派遣隊の早期出発を指示することとしたのだった。

任務は、斥候隊の生存確認。48層の現状調査。未帰還原因の解明。蟹の仕業か、それ以外であるのか、蟹の生態調査である。

斥候隊の全滅とはそのまま情報入手経路の寸断を意味するため、それを厭うてのことだった。

また、48層を蟹に占拠される、もしくはこの混乱を利用して迷宮軍に占拠をされてしまったら、

それは最前線50層に駐屯している軍と冒険者たちへの兵站連絡の途絶を意味することも、

この性急とも言える部隊派遣の理由であった

時は二時三〇分。

諸処の任務を請け負って、派遣隊全八名は出発したのだった。

その顔に浮かぶのは勇壮ではなく、不安と緊張であった。

2

ロード・エクサリオスとその部下六名は、未だに49層に駐留したままだった。

蟹のためか、幸いなことに49層を通過しようとする冒険者は全く

居ない状態であり、
ロード・エクサリオス率いる部下は56層を出発してから、ただの
一度も戦闘を行っていない状態であった。

焦れるのは、二本角と黄金が映える長躯の麗人、エクサリオスである。

昨日の戦闘は、戦闘開始前から、その情報を既に草から入手していた。

18人の中位、上位、高位、最高位冒険者の入り交じったチームが、
件の怪物、巨蟹と矛を交えるつもりらしいとの情報だ。

ロード・エクサリオスはこれを隙と見て、チームが蟹と戦い始めて
その両方が消耗してからその戦場に乱入するつもりであった。

昨日の昼はそのため一時、48層に降りた。

エクサリオスはこのときに、やけに逃げ足の早い冒険者（たぶん斥
候だろう）と接敵したが、

しかし放っておき、王墓につながるといふ件の大穴の前で隙をうか
がうことに専念した。

響いてくる閤の声、聞こえてくる絶叫。

唸り、音、薄暗いものの整備された松明や灯器があちらこちらにあ
る迷宮とは、違う閤に包まれた大穴の奥からは、

冒険者たちの持ち込んだらしいカンテラの光が漏れ零れてきた。

しばらくして、ロード・エクサリオスは、しばしの沈黙を聞いた。

そしてその後、焦り、慌て、声を涸らせ、魂の底に響くような恐れ

の呻きを聞いた。

駆けてくる冒険者の足音も聞いた。

そしてエクサリオスは見た、冒険者を飲み込むように大きな水の玉が、王墓へと繋がる大穴を移動して、大穴の出口で止まったのを。それはエクサリオスの目前であった。水に飲み込まれたらしい冒険者と目が会い、エクサリオスと部下は水に対して身構えた。

そしてそのまま、回転を始めた水の中、冒険者の悲鳴は水に消され、そして回転を続け、速さを増し続ける水が王墓へと流れ込んでいくのを、エクサリオスは見たのだった。

王墓の冒険者の全滅、

そして自らが主より与えられた任務の達成目標たる例の巨蟹は想像以上の怪物であったことを悟り、

エクサリオスは、早々と49層へと撤退した。

以降情報収集に努め、蝙蝠の僕や「力」で製造した人工生命を通して、迷宮と都市の情報収集をするに留めたのだった。

「しかし……、どうすればいいのか」

部下の黒長耳族や黒鬼も動揺と焦燥を隠せず、先ほどからひそひそと話しているのが、エクサリオスの視界の隅に見えた。

蛇頭の天使だけが、人造生命らしく物言わずに立ち尽くす。

「どうしょ……」

と、気の弱そうな黒長耳族の少女が、囁き、同僚である3m程の体躯の黒い大鬼が返す。

「コワイカ」

うん、と気弱な黒長耳族の少女は、己の腰と背に差した計四本の剣と、声を振るわせながら答える。

「あたしたち、あれと戦うんだよね」

「ウム」

もう一人の黒鬼が、自分の右腕を押さえて言う。

「オソロシイ、オレ、タブン、マルカジリ」

「勝てる気しないよね……」

はあ、と溜息を吐く黒長耳族の少女や、黒鬼に対して、先ほどから、それらの眩きを横で聞いていたもう一人の黒長耳族の少女が窘めるように喋る。

「あ、あんたたちっ！ な、なに弱気なことやってんのよ！

こ、こっちには！ エクサリオス様が付いてるのよっ！

ま、負けるはず無いじゃないっ！」

気丈に、美貌を歪ませる委員長気質の黒長耳族はかし。

「オマエ、アシ、フルエテル」

「カクセテナイ、ビビリスギ。タタカイ、ソウイウヤツカラアノヨイク」

う、うるさい、と叫ぶ黒長耳族の一人、笑う黒鬼たち。

部下たちの不安な声は、当然エクサリオスの耳に入っている。

彼女は悩んでいるのだ。このままでは任務の失敗という未来図しか考えつかない現状を。

部下たちの不安も最もだ。

3m近い強靱な肉体を誇る黒鬼でさえあの蟹の巨体を前には、館の庭に紛れ込んだ一本の麦といった様相を呈する。

とはいえ、ここで撤退し、おめおめと逃げ帰っては主の激怒を買うことは間違いないだろう。

勝てない相手から撤退したとしても、なぜ勝てぬと平然と問い返すのが主の気性だ。

エクサリオスが主に抱く忠誠心に一片の疑いも陰りもないが、それは別として主の人格が相当に厄介なものであることも了解していた。エクサリオスの主に抱く忠誠の心の源泉は、主が自ら造った主であるということにあって、決して人格、その気質をもって主に忠誠を誓っている訳ではなかった。

深い尊敬の念をその存在そのものに抱いてはいたが、人格やその気性に難があると判断できる程度にはまた主を客観視しているとも言えた。

コツ、コツ。

おもむろに足音が響く。

その場にいた全員が警戒をするように、部屋の入り口を見据えた。

剣を構え、拳を構え、槍を構える。

その何かは、入り口に姿を表すと同時に音を発した。

「キヒヒッ！ 難渋してるようですねえ」

響く声は、いやらしい音程、

肥溜めから匂い立つ廃棄物を無理矢理に声へと変換したらこういう響きを持つのだろうか。

匂いはそのまま肥溜めであった。嘔吐を催させる絶対的腐臭。

嫌悪感を生ある者ならば必ず抱くであろう醜悪極まりない匂い、音、見た目。

目を向けたロード・エクサリオスは、その正体を見るまでもなく承知していた。

このようなおぞましい形、嫌悪と不快を存在するだけで振りまくよ

うな生命の存在を、
エクサリオスは一人しか知らなかったし、これからも知ることはないだろうと考えていた。

振り向いた先には、ヒキガエルのような体型、人の形らしき体裁の醜い身体。肉が集まりすぎ微笑み以外の表情を表せない顔。

ロード・シレンカ

ロード・エクサリオスの同僚であり、魔惨迷宮が主、ナー・ナーンの直属の部下である四騎士の一人。

エクサリオスがこの任務を受けた時、エクサリオスとともに主の前に列席していた者の一。

最近、なにか良い玩具を手に入れたのか、部屋に四六時中閉じこもっていたヒキガエルのような体型の騎士と、エクサリオスが述べたその人に他ならない。

その顔を改め確認し、ロード・エクサリオスは、その壮麗な顔を露骨に歪めた。

部下の黒鬼の一人は露骨に顔を顰め、委員長気質の黒長耳族は聞こえるように舌打ちをする。

その他の部下も鼻をつまんだり、顔をそらしたりしている。

意志など持たず、半ば自動的に動いているはずの蛇頭天使二体でさ

え、心なしかそのヒキガエル然とした騎士から距離を置いていた。

「なんですかあ？ 一体、ねえその反応は」

気にしていないのに、気にしている振りをして、わざと顔の表情を哀しそうな微笑みへと変える。

対応したくないが渋々といった様子でエクサリオスが対応した。

「いや、他意はない……。それで卿の用事はなんだ。貴様はここ暫く部屋に籠もりきりで、此処に来るような用事もないと思うのだが」
わざわざ、なんのようだ？ と続けるエクサリオスの表情はしかし、隠しきれず苦み走ったものである。

ロード・エクサリオスはこの同僚、この迷宮において、己と同じ最高幹部の一人であるこの同僚を余り好きではなかった。

いや迂遠を避け、端直に言うならば、自らの半径100mに近づいて欲しくない程度の嫌悪を抱いていたと言える。

生命を冒瀆するかのように、人造生命や迷宮の住人たる魔獣や魔族や亜人を掛け合わせ、交配し、実験と称して改造するその様。

そして、捕獲された冒険者に対して行われる苛烈かつ残虐の極限に位置するようなその行為の数々を、微笑みながら行うその様は、味方であっても、エクサリオスが冒険者というものを忌むべき敵としか見ていなくても、後ろから切りつけたくなる程度には醜かった。

さらに、時折エクサリオスに対して、獲物を見るような、欲しい玩具をみるようなぎらぎらとした欲望に血走った目を向けていること

が、エクサリオスの神経を逆撫でしていた。

つまり、エクサリオスにとって、シレンカとは決して会いたくなるような人物ではない。

だが、シレンカはここ最近、特に主の寵愛を受けており、多くの援助を受けている。

そして、罫りがいのある玩具が手に入たと述べて、最近は富みにご機嫌であった。

その彼が、実験室を出てまでロード・エクサリオスの下へと来たということは何かの意図あつてのことだろう。

エクサリオスもむざむざ追い返すわけにはいかなかった。

そしてそれを判断し素直に実行できるだけの冷静さがエクサリオスには普通に備えられていた。

蔑むように、哀れむように、冷たく白い視線をシレンカに送るエクサリオス。

エクサリオスの質問に答えず、吟味するように、にへらっ、と彼女と彼女の部下を見ていたシレンカは、

その視線に気付いたのか、取り繕うように言葉を発した。

「いやねえ、玩具は色々なやり方で遊んだり弄くったりしたんだけどね！

元の姿が完成されすぎててね、キヒヒッ！ 結局その姿に戻しちゃったよ。うんっ！

だから脳味噌と心以外には少し限界を外してあげただけなんだ！キヒッ！

いや、ああこのことじゃあないんだねえ。うんわかったから冷たい

視線を向けるのはやめてくれないかねえ」

そして唇を舌で舐めた。

エクサリオスの背筋に鳥肌が立つ。

醜さの限りを尽くした挙動だった。

「うんっ！ お察しのとおり伝えることがあってやってきたんだね、キヒヒッ」

「そうか、ならばさっさと伝えればいい」

「つれないなあ。まあいいや、朗報だよっ！」

「なんだ」

「良いことさっ！ 48層に動きアリだっ！ 主の命令でもある。とっとと上に行けだとさっ！」

なんだと？ と鋭く引き絞られるエクサリオスの瞳。

急な話であった。件の蟹に思いを煩わせていた端からの謎の忠告。

理由も、動きの詳しい説明もなく、まるでなにも煩わしいことはないとも言いたげな、醜い笑顔のヒキガエル。

くだらない、と常ならば一笑に付すところだが、しかしシレンカの手にこれみよがしに握られている物は、全権委任状。

ならばこの命令は真実。

不穩かつ不審であろうとも、従わなければならない、これは忠告ではない、報告でもない、命令なのだ。

エクサリオスはそれを理解した。

……

「承知した……」

わざわざ出張ってきたカエル。浮かぶ顔には隠そうともされていない醜い狡知の気配。

主を丸め込んだか、あるいは主が己に痺れを切らしたところに付け込んだか。

わからぬ、わからぬが、と。その思誰を心に秘め、同じように疑念の視線をシレンカにぶつけている部下たちへと視線をやる。

部下はそれに気付き、大丈夫なのか？という心配の眼差しをエクサリオスに送る。

エクサリオスはそれに答えるように頷き、改めて声を発した。

「出発するぞっ！」

見事に隊列を整え、露骨にシレンカを避けつつ、隊列を組んだ七名は速やかに陣を張った大部屋から、48層へと向かった。

後に残ったのは、変わらず嫌らしい微笑みを浮かべるヒキガエルの騎士。

「あああ、相変わらず美しいなあ！」

——あれを自由にできたらなあ、あんなことをして、あそこをああやって改造して……

蠢く思索、思案に潜むは汚らしい狡獪な欲望。舌なめずりする邪心。

この作戦にもしもロード・エクサリオスが失敗したのなら、それはロード・シレンカの下へと払い下げられる。

その願いは既に主に聞き届けられている。

ましてや、ロード・シレンカの技術をもってすれば、ロード・エクサリオスの意志をそのままに言うことを聞かせることも。意志をなくして、その上で従来と全く同じ働きをさせることも可能だ。

それが出来る改造や調教の技術がシレンカにはあった。

シレンカの邪悪な意志を、薄々と感じつつも、それを拒否できず、命令に従っているエクサリオスの姿を想うと、

「あああ！あああああ！興奮が止まらないよお」

呻くような笑いを、蛙のような音で奏でる。

「それと例のおもちゃの実験にも丁度いいからね」

ああ、ああ、楽しみは尽きないなあ。

そう呟いて、腐臭を放つ騎士は、身の毛のよだつ半月円の笑みを作る。

派遣隊は道を進んでいた。

道とは言ってもそこは迷宮の通路のことである。

先頭を歩くのは黄金剣を背に背負い、右腰に以前になくしたのと同じの型の銀の魔剣を身に付けている男。

カンテラや閃光玉、ポーションに包帯をその他にも腰に帯びて、歩く姿は威風堂々。伸ばされた背、風を抱き、後ろへと広がる黄金の長髪。

ロード・エーサーベインである。

その眼差しにはあるのは、強い意志。

バル・ファルケンⅡノースのこと、巨蟹のこと、ハンナⅡウルフのこと。

考えること、抱える想いは多いが、傲慢とも言える高い矜持を貫いて、集団の先頭を我が物顔で歩いている。

次に人間の冒険者が幾人か続く。

大陸の北方でよく見られる二刀の小斧を使った闘法を使う男、金短

髪のニケロット。

南方の槍術闘法を駆使する、パーマのボブ。

エストックとレイピアを構えた、特殊な闘法を使う、緑髪のイレ―ネ

大きな杖、見るからに補助の道具と言った風情の飾りを幾つも首や腕、耳や鼻に付けている、

魔法士メーダ。

その後から亜人と呼ばれる種族の冒険者が続いている。

鞆を背負い、多くの道具を持っているらしい、体長は4 m近くに到達するだろう巨体の大鬼^{オーガ}。

翼をはためかせ、顔にある嘴が妙に可愛らしい、弓を帯びたツインテールの翼人女性。

最後に一行の殿を勤めるのが、歴戦というに相応しい威圧と眼力を備えた、大柄な豚人^{オーク}

銀の大剣が清浄な気配を放ちながら、ともすれば寒さ冷たささえ感じる威容を誇り、その豚人の背にある。

『銀鬼』ロレントオだ。

一行にあるのは僅かな会話と沈黙、現在45層を歩いている彼らは、これから向かう地への不安こそあれど、歩いている通路に対しては僅かな不安さえもなかった。

薄暗い通路を照らすのは、通路に備えられている灯火の他、先頭を歩くエーサーベインの持つマッフ機巧の灯器。

それとロレントオとメーダの持つ高級灯器である。

それなりの容量の器を持つ高級灯器は、あらかじめ迷宮管理組合が用意し、器を「力」で満杯に埋めておいた品だ。

そして何よりエーサーベインの持つマッフ機巧の灯器。

最高級品であるそれは四等級の希少品であり、組合長ハンナールフからの「絶対に帰還するように」というメッセージでもあった。

マッフ機巧についてここで簡潔な説明をしておくと、それは外なる「力」をエネルギーとすることの出来る機巧をさす。

極限られた人間が幾つかの素材の組み合わせに、独自の儀式大家を掛け、それをマッフ機巧とする。

その制作には多くの下準備と、長い時間がかかる上、量産できないため、現代でもそれを造れる数少ない機巧師は数十年先まで予約注文で一杯である。

外なる「力」が無限である以上、マッフ機巧とは半永久的に自律する機巧ということになる。

それが一体どれほどの意味を持つのか、考えなくとも答えは容易いだろう。

現にこのマッフ機巧のカンテラ一つで小さな城が建つ程の価値はあった。

46層へ降りる階段を8人は連なり警戒して降りていく。

8人に油断はない、慎重だが確実な足取りをもって、警戒と会話を同時にこなしつつ通路を進んでいた。

会話は主に槍を携えたボブと緑髪のイレエネを中心に行われていた。

魔法士はぶつぶつとなにかつぶやきながら、世界など目に見えていないという風情だ。

「で、その時に、現れたのがエーサーベインさまだったの！」

と二本の刺突剣を携えた緑髪の女性は呟けば、

「はあ、そりゃすごいねえ」

と答えるボブがこの話を聞くのは既に10回を越えていた。

緑髪イレネはエーサーベイン最肩であり、第一のファンを自称しているミハーな冒険者であった。

今回の派遣隊に参加したのもエーサーベインが居たからと言う軽い理由であった。

しかしその実力は本物であり、双の刺突は、牛の突進の如き威力と、蜂の如き疾速とまで謳われている。

決して軽くはないレイピア（普通は8kgはある）を平然と振り回せるその身体能力と、

幾度もの大クエストに参加している経験豊富な高位冒険者である。

イレネは先ほどから先頭を歩くエーサーベインに懸命に話しかけていたが、

エーサーベインはそれを鼻で笑い、振り返ることもせず、意味のある会話以外の一切を無視していた。

気位の高さ、傲慢な誇り高さが染みついているエーサーベインらしい行動でもあった。

生来おしゃべりなイレネもこれには音を上げて、無口なニケロッ

トや、会話好きなボブにその会話の矛先を向けたのだった。

背まで伸びた濃い緑髪、長耳族に多い髪色を持つまだ若い人間の美女との会話に一種の幸運な機会を感じたボブであったが、その話題の殆どが、いけすかない『黄金剣』の話であり、それを壊れた蓄音機のように繰り返す段階で

――あ、これだめだないと、早々に見切りを付けたのだった。

「角に。……敵だ」

二刀斧のニケロットが無駄のない意思伝達を行う。

中央の四名は何度かグループを組んだことのある面子だ。意志の伝達は取りやすかった。

半ば凶戦士じみたエーサーベインはともかく。

問題は後ろの三人であった。

『銀鬼』ロレントオを中心とする三人組。

亜人である彼らと、中央部四名、特にその内のボブ、イレ―ネとはいまいち折り合いが悪い。

亜人。新暦元年にあった『至高神』ネーベンハウスの帝国では、一般階級に引き上げられ、人間と同じ権利を獲得した存在。

しかし旧暦に存在した帝国や各王国では一部を除いて常に奴隷階級、二等市民とされていた者たち。

新帝国の解放令によって、一定の地位を得て、既に1200年以上経っているが、未だに根強い差別が残っている。

旧暦時代に、特に労働力として亜人を酷使した北部と南部の地域や国家の出身者は、亜人に対して偏見による差別を行う者も多い。

（亜人のならず者や犯罪者の多さ、魔王領という人間にとって色々複雑な地域の主要な国民であることもこれを加速させていた）既に1100年代に新帝国が迷宮により崩壊し、各地域に国家が乱立している現代。

一部の国家では、亜人に限ったの絶対奴隷階級を狙っている政治家や市民運動も起こっている程である。

（奴隷の子でなくとも、あるいは債務者や犯罪者でなくとも、亜人という存在そのものを奴隷と見なすこと）

多くの冒険者の場合、生死が関わる仕事であり、命あつての物種である以上、種族や人種などは糞喰らえというものも多いのだが、ここが北部域の迷宮都市であり、イレエネが貴族階級であり、ボブも裕福な家の出身であつたことが、

『銀鬼』たちと人間の間に僅かな溝を作ることになっていた。

お互い腐ってもプロである。

お互い相手を守り、連携もちゃんと取り、意志も伝達するであろう。しかし、表面上は取り繕っているが、他人を見下す眼差し、雰囲気というものはえてして隠しきれないものである。

そのための気まずい雰囲気、このグループの中には漂っていた。

エーサーベインの刃に切り刻まれ、ニケロットの斧に引き裂かれ、イレエネとボブに貫かれた牛型亜人魔物の残骸。

そこに向けてボブが唾を平然と吐きかけ、にやり、と笑って屍体の顔を踏みつける。

大鬼がそれを見て拳を握りしめ、『銀鬼』ロレントオがそれを見て宥める。

「気にするな」

「ダゲドヨオ」

「死んだのは敵だ気にしてもしょうがねえ……、気持ちには分かるがな」

派遣隊の集合場であった、ある高位の酒場。

そこでイレエネが、同じグループにロレントオたちが加わると知ったときに見せたあの表情は、

豪気にして剛毅を地で往くうえ、温厚で嫌なことを水に流すような性格のロレントオを持っても暫くは忘れないだろう。

それほどの見下しきった瞳。ロレントオは一瞬その場でイレエネの顔を捻りきりなくなったほどだ。

エーサーベインも、こちらを露骨に見下す、アレも苛立つが、しかしエーサーベインの場合は例え同族であってもその視線が変わらず投げかけるので、怒りまでは湧いてこない。

エーサーベインがその視線を投げかけない相手など、組合長ハンナⅡウルフか、先頃未帰還だったバル・ファルケンⅡノース位であるう。

ニケロットは武骨だが実直だ。その評判は聞き及んでるし、一緒に仕事をしたことはないが二度三度、卓を囲んだこともあった。

メーダはよくわからない。魔法士には多いタイプの連中だ。特に気になる程ではなかった。

「……階段」

ニケロットの声。

「了解っ！」

「了解」

「リョーガイ」

「了解です」

「了解だ」

エーサーベインは声を放たず、そのまま開け放たれた地獄への入り口のような階段へと直進していく。

——豪気なこって。

ついで続く冒険者たち、亜人、その最後にロレントオが47層行きの階段へと足を掛けた。

47層を往く。

40階代の特徴は、単純な建築物型迷宮であるということだ。

沼や森に擬された20層や30層とは異なり、

かつては迷宮側の軍事施設や準備施設として使われていたらしい、
進みやすく進まれやすい通路。

主な生息魔物は牛型亜人——いわゆる牛頭人ミノタウロスや魔法で作られ蛇頭生物や剣の聞きにくい粘状生物スライムが主である。

エーサーベインの銀閃が煌めく。

シャンツ　と音が鳴り、蛇頭が断たれる。

「ふんっ」と力んだ声で、斜めと横と縦を縦横無尽に駆け巡る、ニケロットの斧の軌跡が、それを防ぎきれなかった牛頭人の首と腕を断つ。

通路を曲がったところに潜んでいた12匹の敵混合部隊との乱戦である。

メーダが、魔術書を開き、そこに書かれている大火弾紋章に魂の「力」を流し込み、放たれた火が粘状生物を焼く。

槍を携えたボブが、ちりちりのパーマを揺らしながら発動に多少のラグがあり、機敏な動きの出来ないメーダを守るように立つ。

鬼は、朱猿と聖蛇の体液を混ぜた毒を己の拳に塗り込み、それを蛇頭天使の顔面に叩き込んでいる。

全てを見通せる高さ4mの地点から比較的無口な翼人が嘴から呼気を漏らし、弓で敵の後衛の蛇頭を射貫く。

ロレントォは後ろを警戒しつつ、イレーネと共に、敵の中央に切り込み、牛頭人三体を相手取っていた。

敵の蛇頭天使の紋章術の風の刃を巧みにいなしつつ、イレーネの盾となり、

「力」を腕力強化と攻撃加護の紋章に流し込み発動したイレーネが、ロレントォの後ろより飛び出し、神速の三連撃を牛頭人の喉に叩き

込む。

エーサーベインがその隙を突いて押し進み、後ろで風の刃を放っていた三体の蛇頭天使の肉を断ち戦闘は終了した。

「楽勝ね」

「油断するな……」

イレーネを窘めるニケロット。

「……終わった」

「ラクジヨウダア」

と翼人が大鬼と笑い合い。

ボブが胡散臭げな一瞥をロレントオにくれた後、己の槍の穂先の血を拭く。

「もう少し敵に果敢に突っ込んだらどうだよ『銀鬼』さま」

「なにか不満だったのか」

ロレントオは、清浄な銀色の大剣を再び背に背負いながら言う

「いや、勇猛で知られる『銀鬼』さまならもつとずばっと突っ込んで、ばしゅばしゅっと牛頭くらい始末してくれると思っただけだかね」

「俺はやるべきことをやった、それだけだ」

そう言い捨て、ロレントオは隊列の一番後ろに戻った。

ついで、沸点の低い大鬼の友人を止めなければならなかった。

「けっ、同じ畜生同士、情けでもかけたんじゃない……っ」

しかしその言葉は、最後まで放たれなかった。

『銀鬼』の、豚そのものを多少人間よりデフォルメしたようなその貌は、

醜く歪み、ボブを、射殺さんばかりの殺意に満ちた眼光で見据えていたからだ。

「下らないことはやめろ、下賤ども」

エーサーベインがタイミングを計っていたかのように、言い捨てる。会話は終わり、隊列には沈黙が満ちる。

そして48層へと向けて、47層を歩き始める。

「もうっ！エーサーベインさまを怒らせちゃだめだよっ」

「……あ、ああ」

ボブとイレーネの言葉だけが交じる隊列。

気を取り直したようにボブが、言葉をひりだす。

「……しかし、面倒な任務が多いな」

「うんっ！ニケロットもそう思うでしょ？」

「……俺は言われたことをやるだけだ」

「けっ、クール気取りやがって。」

お前だって先に全滅した馬鹿斥候どもや、クソツたれどもの荷物回収や全滅確認なんてやりたくないんだろ？ ホントはよお」

「関係ない、言われたことをやり、件の強者をこの目で確認する。それだけだ」

冷静に切り返し、口を閉じたニケロット。

ボブは溜息を吐いて、まじめだねえ、と呟く。

イレネはエーサーベインを眺めて、ぼうとしていた。

メーダは虚空を眺めながら歩いている。

翼人は翼を使わず、歩いている。無表情。

鬼は憤懣遣る方無いといった表情で、ドスドスという音が聞こえそうに大胆に地を踏みしめている。

ロレントオは、調子を戻し、気の良さそうな笑みを浮かべながら、後方に注意を払っている。

後方、歴戦の派遣隊に、優秀な冒険者たちである彼らから付かず離れず一定の距離を保っている追跡者がいた。

それは影であり、無音である。

あらゆる気配を感知させず、時に牛頭人の傍を通り過ぎ、時に蛇頭天使の喉を切り裂き進む、黒一色の影。

名は『潜影』

軍の命令に従い、予定よりも早く出発することとなった派遣隊を監視しつつ、自らの目で48層の確認をする任務を実行中であつた。

昨晚の激闘。肉体の疲れは睡眠と食事で大分取れたものの、思わぬ

不覚を取ることになった精神の疲れは未だに癒し切れていなかった。あるのは悔しさ、そして久方ぶりの敗北を受けたが命まで取られなかったことへの疑問と感謝が彼の心には充滿していた。

——ともあれ命あつての物種。

朝起きて館に侵入しても、そこにはなにもなく、隈無く探索したところ迷宮に繋がる隠し道が発見されて、あの奇しい長耳族の少女を逃したことを知っても、余り後悔はしていなかった。

そのため、その屋敷と隠し道を報告した後は、家に帰らず、そのままこの任務に就いたのだった。

見据える先には『銀鬼』

剛胆かつ剛毅でありながら、慎重であり、物腰も柔らか、それでいて通すべきところは通す強い心を併せ持った、この迷宮都市の亜人種たちの有力者。

『潜影』がボブとロレントオであつたらどちらの冒険者が気持ちよく仕事が出来るかと考えたならば、その軍配はロレントオに上がるだろう。

それほど有力な冒険者が『銀鬼』であつた。

現在対象は、48層への階段へと到達。

任務地域、例の大穴は48層を降りて歩いてすぐの場所にある。

彼らの仕事もうすぐだろう、『潜影』も、彼らに悟られぬように尾行する。

不覚をとったとはいえ彼は影、潜む影。
相手がどれほどの実力者とはいえ見つかるような失態からはほど遠かった。

冒険者を見つめる黒面越しの眼差しは、どこか憧憬を感じさせる暖かさに満ちて。

あるいは己自身の過去のために、顔を捨て、冒険者たるを捨てざるえなかった彼は、
懐かしむような溜息を吐いたのだった。

4

派遣隊が出発してから大分経つ、

時は昼をとうに過ぎている。

冬の早い日の終わり、既に陽は落ちかかっているようだ。

推測なのは、空には一面の雪雲が広がり、雪を降らせ始めていたからだ。

時折、僅かな朱が、地上へとどうにか辿り着こうと木漏れ日のよう

な半端を地上に差し込ませていた。

冷たい空気に純白の雪、やれやれ、こりやまた積もりそうだと心思するのは街の民。

朱はどうか己の位置を得たのか、遙か地平。

下段の城壁、あるいは都市上部から見える地平の先を、白と赤の混じり合った奇妙なものにしていた。

白と赤を合わせた雪の世界の始まり、陽の終わり。

ハンナ・ウルフが窓からそれを眺めていたその時、派遣隊は48層の斥候隊が詰めていた筈の地点へと辿り着こうとしていた。

「なにもないな」

呟くボブを尻目に、エーサーベインは奇妙な匂いを感じていた。

それは僅かな、僅かな、ともすれば見逃してもおかしくないような薄く小さな匂い。

鼻の奥にこびり付くような人糞と動物の腐ったような匂い。

エーサーベインは『銀鬼』にちらし、と目をやる。

「ん、ああ」

あこがれのエーサーベインが呼んでいる、とイレエネがロレントオに嫉妬の交じった視線を向けて、その肩を叩く。

豚人特有の厚い体毛と筋肉、脂肪のように蓄えられた腹部の筋肉瘤を揺らして、エーサーベインを見やるロレントオ。

「感じてるよ、匂いだろう？」

こともなげにそう言うと、それにエーサーベインは頷く。

「なにか来たことは間違いないな、恐らくもう……」

「……道具から装備までなにも残っていないが、迷宮か？」

ニケロットは斧を触りながらエーサーベインに尋ねる。
恐らく組織だった集団が、計画的に襲撃し、追い詰め、そして全てを奪っていった。

そしてそれは迷宮側の仕業ではないかと誰何する。

「多分な」

ロレントオが答えた、その瞬間それまで、目を瞑っていたメーダが、身を震わせ、口を開いた。

「空気がおかしい。おかしい……っ。おかしい！」

空気という熱い湯に身を浸からせたかのような身震い。
決して低くないが、背を著しく丸めている為に相対的に低身長に見える彼の身体が怯えるように揺れる。

「「力」が乱れてる、何も……「力」がなにも……っ。なくなるよ
うなっ隙間がっ!!」

その言葉をメーダが放ち終わる頃には、既にその他の彼らも全員身構えていた。

何かが来る。隊列を組んでこちらの方角へと向かっている気配を。

その角を曲がれば、あるのは王墓へと繋がる、エーサーベインの空けた穴。

現在は、蟹が掘り進めたことにより、空けた当初の範囲を大きく広げているその地点。

そこは広大な大通路になっている。

そこを通り、こちらへと向かってくる集団の気配。

エーサーベインは、黄金剣の充填を起動させる。

這うように大ぶりの長剣に刻まれた紋章に内の「力」を這わせ、神器に外の「力」を集めさせる。

8人はエーサーベインに習い、それぞれの技を、紋章を起動させる。

ニケロットが、腕力と攻撃の加護を加え、体重と防備に加護を加え。

メーダは刻印を意識し、それを下に世界へと己の意識を埋没させる準備をする。

イレエネは速度と脚力、腕力と攻撃の加護を身に付け。

ボブは、眼と耳の機能を強化し、腕力と、防護の加護を願う。

翼人は羽ばたき、目を強化すると同時に、弓に刻んであった紋章へと「力」を這わせ。

大鬼は、幾つかの葉を飲み干し、牛頭人の角を砕き粉にしたものを飲み、己の肉体を震わせる。

『銀鬼』も己の浄銀に輝く幅広の大剣を、神器を起動させる。あの猫店主に調整を頼んでから初めての起動であった、次いで、腕力と脚力を、威力の加護を全身の紋章に這わせた。

息を飲む。

敵も件の大穴の辺りでその歩みを止めている。

おそらくエーサーベインたち8人の存在に気付いたのだ。

出向けと言われた先にいる敵勢力の存在。

エクサリオスは軽いを混乱を覚えただろう。

しかしそれをすぐに抑え、己の6人の部下に隊列を取らせたのだった。

水も溜まらぬ一瞬の空気。

角の向こうエクサリオスと、角のこちらエーサーベイン。

二人のロードは、息を吸い、そしてまた吐く。

「行くぞッ!!」

お互いの準備完了を確認した即席のチームは、角に飛び出した。

それを迎え撃つのは銀色鎧に身を包んだ、二本角の騎士。

左手に構えるは『神の金属』により造られたブロードソード。

右手に構えるは同じく『神の金属』により造られた大盾『イージス』

エーサーベインは、角を曲がり、脚力が強化された己の足を躊躇なく進ませる。

敵を確認。

「やはりっ! 貴様かっ!」

とエーサーベインは叫びつつ大気を切るように駆ける

その速度は神速。

意識——全体；鎧——紋章法——導力——発動；速度加護。

「エーサーベインツ!!」

と叫ぶ麗人へと走り込み、振るうのは神速の銀長剣。

シヤツ! と唸るように、見えぬ軌道を描いて、刃はエクサリオスの喉元に迫った。

「くっ! 今は、貴様などに用はないっ!」

エクサリオスはその神速の一撃を、ブロードソードで受けた。

圧倒的なエーサーベインの速度にようやく追いつくように、イレエネとニケロットが迫る。

遙か背後にメーダが世界へと干渉し、それを定義し始める。
一定の「力」を理解する為の真摯かつ純粋な没我の境地。
それを守るように立つのはボブである。

翼人は弓を携え、それを引く。

「援護っ!」

意識——弓——紋章法——導力——発動…追尾・貫通; 二重瞬間起動

速やかに放たれる矢と併走するように、鬼と豚が駆け、前線へと走る。

エーサーベインの神速連撃を、しかし盾で受け、時に剣で受けるエクスリ奥斯。

イレーネがその盾と剣の隙を突くように、強化された刺突を瞬間的にさらに強化し、六連撃の魔技を魅せた。

それを受け止める手が迫る。

大きな腕。イレーネの胴程の腕を持った黒鬼だ。

「ヤラセンッ」

ふんっ、と息んで、硬化した己の腕を使い、六連撃を視認して、それを防ぐ。

黒鬼は高位冒険者の全力の連撃を、見切り、そこに己の腕をかぶせたのだ。

もう片方のニケロットにも、腕を硬化した黒鬼が迫り、その爆発するような速度で振り回される二本の斧撃を見事反らし、時に受け止めている。

三体の壁と、三体の攻め手。

後ろから迫った矢は、既に蛇頭の天使の風の紋章法により造られた風の壁に阻まれ防がれている。

六連撃を受け止められ、体勢を崩した緑髪のイレーネに迫る、黒鬼の容赦ない豪腕。

それを受け止め、イレーネを庇うような体勢を取るのは大鬼。

鬼対鬼。腕と腕がぶつかり、力と力がぶつかり合う。

血と汗の飛び交う戦線の隣では、剣閃が放たれ続けている。

鋭化の紋章を発動させている貯蓄型…銀剣の、蟹の関節に切れ目を入れることが出来る程の切れ味の刃は、神盾に確かに傷を付けることができているが、それを突破することまではできていない。

放ち続ける剣の速撃は、しかし全て最高の一撃ではないことが原因だ。

エクサリオスが絶妙のタイミングで入れてくるブロードソードの薙ぎ払い、突き、斬撃が、エーサーベインを徐々に追い詰める。

「伏せろっ！」

豚人ロレントオの体重と腕力が込められた銀大剣の大振りだ。

後先を考えていないような大ぶりには、全身の筋肉、腹部の筋肉瘤から練り上げられ送られてきた爆発力。

さらに紋章を使い威力上昇の加護と、瞬間的な二重の腕力強化が上乘せされている。

地を砕き、岩を砕き、鉄さえも砕く、ロレントオの一撃は、

——しかし受け止められる。

受け止めたのは大地。

壁のように隆起した大地の壁が、丁度エクサリオスの目前を覆うように二枚現れたのだった。

ロレントオ渾身の一撃は、一枚を破壊し、二枚目を破壊していた、

しかしその先にあった神盾には減衰した力しか伝わらず、僅かに擦過傷を作るだけであった。

「むっ」

ふっ、と息を吐くのは、二人の黒長耳族の少女。二本の杖を構えた委員長気質の黒長耳族の少女と、

二本の長剣を構えた。先ほどまで気弱になっていた黒長耳族の少女だ。

二剣を構える少女は、その目を弓のように引き絞り、殺意のみが込められた鋭い視線をもってエーサーベインたちを凝視していた。

黒長耳族の少女は、

ロレントォが、己の銀大剣を、二本杖の少女が発動した儀式小家（魔導）・想像法の、高密度の土壁に取られているのを隙と見て、目の背、ロード・エクサリオスの背を踏み台に、迷宮の上辺へと跳び、ロレントォの背を狙い、二本の長剣を鷲の爪のように突き出す。

必殺の意志が込められた見事な双撃は、しかし防がれる。

体勢を立て直したイレーネの刺突がそれを止めたのだ。

歯ぎしりするような音を立て、黒長耳族の少女は防がれた剣を捨て、己の背に負っていた二本のバスタードソードを抜き、イレーネの刺突後の首を狙う。

そこにロレントォが重い蹴りを入れ、それを阻止する。

二本杖は僅かに後退しつつ詠唱を、己の「力」を、地面へと這わせ、そこに想像を顕現させることに集中する。

紋章法ではなく、想像法。しかしそれは設計図から家を建てるような技術、時間が掛かるものだ。

そして黒鬼と大鬼は殴り合っている。

菓の効果か、全身の筋肉を励起させ、圧壊的な奮撃を、黒鬼の腕に加える。

硬化と防御の加護のみの黒鬼は体躯では勝っているものの辛い。

翼人の放つ矢は、蛇頭の二天使の風の壁に留められ。

斧を振り回し、回転させるように、連続で、縦に、横に、その逆に、斜めに、必殺の一撃を加速させ続けるニケロットに対し、

黒鬼はそれを紋章で硬化させ、その上、防護の加護と、刃止めの紋章の三重の紋章術の掛かった腕を振るい防ぎ、時に丸太のような足を牽制（にしては主すぎる威力ではあるが）として加える。

にゅっ、シュッ、という鋭い音と奇妙な音を感じさせて、ニケロットの隙を突くような横からの攻撃。

斧と鬼の均衡を壊そうと乱入する、エクサリオスの援護である。

それを受け止めたのは、エーサーベイン。

銀剣と、籠手による防御。

中央域、イレエネに刺突を止められた後、重量半減化の紋章と、腕力強化のみを己に発動し、二本のバスタードソードを振るう黒長耳族の少女は、

ロレントオと、体勢を整えられないイレエネ二人を見事に一人で相手取っていた。

「はっ！」

「ふっ」

振るわれるバスタードソードの軌道は癖のない素直なもの。

しかしその狙う先は、当たれば必ず命を落とすであろう箇所。

一本はロレントオに素早く振るわれ、ロレントオが威力の入った一撃を振るうことを巧みに阻止している。

もう一本は、刺突の威力と速度こそあるが、体勢と姿勢が崩れた場合、回復に時間の掛かるイレエネを封じるように、足と腕と首を狙って、続けざまに振るわれ続ける。

元来、長耳族とは肉体の弱き者、それを補うようにある大きな魂の器と、世界を理解のしやすいという特徴がある。

それは黒長耳族も変わらないはずであった。

しかし、今エクサリオスの部下として刃を振るい続ける黒長耳族の少女は一味違った。

——なんつう、技の冴えだよっ！

と内心『銀鬼』が唸る程の巧みさと速さを、しかも同時に二本に与えているのだ。

脅威であり、驚異であった。

ここで時間を稼がれては、もう一人の黒長耳族の紋章法の発動を許してしまうだろう。

こちらの前衛は五人。ボブが後衛二名を守っている。

相手の前衛は四名、しかし蛇頭天使は前衛も可能だ。

なによりも恐ろしいのは、このエクサリオスの部下の恐るべき練度の高さである。

相当な修練を積んだのか、高い実力と高いチームワークが結びついている。

『銀鬼』は分析し、状況を考える。

こちらの後衛は、一人は弓使い、もう一人は儀式大家。

おそらく刻印法の理解に手間取っているのか、その発動の気配はまだない。

——こちらの急造のチームワークでどこまでいけるかが鍵か。

「エーサー！」

「言われなくとも！」

斧男を少し休ませ、一人で二人を相手取っていたエーサーベインが、ロレントォに答える。

斧男がロレントォたち二人の援護に回る、それを見た二剣の黒長耳族が状況の不利を予想し、飛び退く。

脚力を強化しているのか、いやに高く二本のバスタードソードを持った黒耳は跳ぶ、

3体1を避ける為の跳躍だ。

跳ぶ先には黒鬼と殴り合っていた大鬼が居た。

これを機会と見るのは黒長耳族。

僅かな滞空時間、己の剣に想いを潜ませ、跳んだ黒長耳族の少女は意識を集中する。

意識——バスタードソード——紋章法——導力——紋章法…『雷迅剣』——起動

…——派生——二本同時——二本目起動。

斧は間に合わない、突剣の刺突は届かない、大鬼は気付いたが、しかし遅かった。

豚人のロレントォは己の銀大剣が銀の輝き放ち、神器の発動が可能となったことを知った、だが無意味だ。

弓は届かず、刻印法は未だ発動しない。ただ一人その行動を見越していたかのように行動する者が居た。

エーサーベインである。

意識——全身…脚部——紋章法——発動…飛翔…脚力強化…速度加

護——三重起動。

かつて蟹と戦い破れ逃れ、辛くも逃亡するときに発動したのと同じの紋章構成。皮肉な話だ。

あらかじめ黒長耳族の少女の跳躍を読んでいたかのように、二本を持つ黒長耳族の少女が跳んだ刹那、エーサーベインも宙に己を浮かしていた。

少女を越える速度、掛けた紋章の数、そもその筋力量の違い、エーサーベインは追い着き、それと同時に己の刃を黒長耳族の少女の身体に打ち込んだ。

同時に地上では

ロレントオが、エクサリオスと黒鬼を抑えるために、己の神器を構えそちらへと進み、

イレーネが、ガラ空きになっている二本杖の委員長気質の黒長耳族の少女の下へと駆ける。

エーサーベインの攻撃は、しかし外れた。

蛇頭天使が矢を防いでいるのに使用していた紋章を、黒長耳族の少女のエーサーベインの間に挟んだのだ。

風の壁、剣は阻まれ、少女は風に煽られ体勢を崩す。

彼女の放とうとした剣は、大鬼の首を狙った双撃は、しかし逸れ、その腕と胴を傷つけるに留まった。

「ウガア……っ！」

雷の力を帯びたバスタードソードは腕の半ばにまで食い込んだがそこで止まり、胴を貫いたバスタードソードは、腹部を貫通するには届かなかった。

鬼は呻き、激痛と、一切の感覚が麻痺していくような雷の痺れに、思わず肩を落とす。

着地をしていたエーサーベインが、それを庇うように、黒鬼の追撃の前に出る。

黒長耳族の少女は黒鬼の後ろへと着地する。

ロレントォは奮迅の働きを魅せていた。

うねる筋肉、凝縮された筋繊維の、豚人特有オークの持続し活性し続ける筋肉の生み出す圧倒的な臂力を持って、エクサリオスを相手取っていた。

イレーネの刺突は、己の「力」に集中している黒長耳族へと確かに迫っていた。

このままでは黒長耳族の少女は己の命をあえなく散らしたであろう。

だがそうはならなかった。

それを防ぐように現れたのは黒鬼。

イレーネの攻撃を察知し、その身を委員長気質の少女の前に割り込

ませ、己の身体で、イレーネが繰り出した、今日、最も威力が乗った流麗な軌跡の六連撃を防いだ。

腹部を硬化させ、しかし幾つかは貫通し、黒鬼は口から血を流した。

次の瞬間、風の壁が無くなったことを好機と見た翼人が、遠く後方から強化した矢を放ち。

黒鬼は飛んできた矢に喉を突かれ、絶命する。

「アト……タノンダ」

その言葉が聞こえているのかいないのか、しかし精神の動揺を隠し、面に見せず。

己が、大地に潜ませた「力」を、練り上げ顕現する。

意識——大地…迷宮48層通路区画…正面一部範囲——儀式小家…
想像法——導力——

想像法『大地の槍』起動

ニケロットとエーサーベイン、ロレントオとイレーネ、大鬼を含んだ大地一帯が、鋭角に隆起する。

ロレントオは発動寸前、咄嗟に己の銀大剣を大地に突き刺す。

その無防備を突くエクサリオスの斬撃は、しかし二本の斧によって防がれる。

ロレントオの神器こそが、ロレントオを『銀鬼』たらしめているといっても過言ではない。

その刃に、その器に蓄えられているのは、膨大な『冷氣』 外なる「力」を冷氣として吸収するその神器。

冷氣の使用方法は簡単、触れた者を凍てつかせる、それだけである。そして、それが地面に突き立てられれば、その『冷氣』は瞬く間に大地を氷結させ、強固に固める。

それは既に、黒長耳族の少女が想像した大地ではない、条件が違う。なによりも、隆起するはずだったその土の棘は、隆起を始めたその瞬間に全て氷結させられた。

黒長耳族の少女を守るように、二匹の蛇頭天使は前進し、盾を構える。

一匹になった黒鬼を盾としながら、剣を大鬼に置いたまま黒長耳族の少女も退き、

エクサリスもそれに合わせ、退いて、一列に壁を形成する。

黒長耳族の少女は蛇頭天使が腰に帯びているスピアのロングソードを一本取り、構える。

「メーダが動くぞっ！」

ボブの声が飛んでくる。

冒険者全員が、脇へと飛び退く、エーサーベインは黄金剣を右手に握り、ロレントォは再び己の神器に「力」を集め始める。

意識――世界Ⅱ「力」――儀式大家…刻印法

——行使者…メーダ
——理解・定義・支配・干涉錫——補助…赤の石——刻印法…『火
の鳥』発動——量・範囲・質——可

刻印法…『火の鳥』

メーダという猫背の男の前の空間が、陽炎を発する。

太陽光なきところに陽炎の起こる矛盾。

ゆらめく大気、大熱を帯びるは空気。

全てを焼き、灼いて、燃やし盡くす、絶対の意志の顕現。

やがて大気の揺らぎは、焰を形作る。

それは火であり、炎であり、焰である。

火は成人男性程の大きさの棒を形作る。

そこに秘められたるは、万物を焦がし、燃やす、破壊の「力」

消し炭も残らない程の絶対火力は、しかし奇跡的な凝集によって外
に漏れない。

熱力学を無視するかのような偉業の火棒は、やがて翼を手に入れ、
飛び立つ。

羽ばたく音は、煉獄の音。

鳥というには稚拙な形をしたそれは、確かに鳥のように飛び立ち、目前に並ぶ敵たちへと向かっていく。

人間達は、脇に退き、伏せ、一部は大穴に隠れている。

ロード・エクサリオスは覚悟を決める。

己の傍に倒れる、一匹の黒鬼を見、それに祈るかのように眼を瞑る。

神の盾を発動する。

神の武器とは何か、いや正しくは、神の金属を使った武器とはなにか。

神器は、人間が作ることの出来る者だ、儀式大家の刻印法と儀式法を駆使すれば、肝心の刻印と器さえ作り出せばいいのだ。

恐ろしく時間は掛かるものの、それは人間が作ることが可能である。

マッフ機巧は神器よりもさらに難しいし、さらに時間も膨大に掛かる。

だがそれは人が造ることのできるものである。

神の武器とは違う。

それは文字通り『神の』武器である、

『鍛治』と呼ばれた九烈士。後に『大地』と道具を司る神となった鉄小人^{ドワーフ}。

彼にしか造ることの不可能な武器にして、魔具。それこそが神の金属であり、神の武器である。

エクサリオスがそれを持っているのはかつて冒険者から戦利品として収奪したからである。

以来200年近くの長きに渡り、本来は敵であるはずの『大地』の神が拵^{ししち}えたこの盾と剣を己の武具としてきた。

神の金属とは、「力」そのものを金属として加工したものである。

「力」を使い、物質を創造する。あるいは物質へと変換することは容易い。

しかしそれは加工するとき既に「力」ではなく、その変化した物質である。

『大地』ガルニゼスは、「力」を「力」のまま、その性質、その深淵、その神秘をそのままに、武器として、物質として加工したのである。

なにかに変化する前の、「力」を盾に、「力」を剣に。

エクサリオスが握っている武具とはそういうものであった。

エクサリオスは、心を静め、己の盾へと意識を集中し、それを理解する。

その様は儀式大家が世界を理解するかのようなようであるが、彼女が理解しているのは世界ではなく盾だ。

200年変わらぬ、盾というものを構成する「力」。

それは既に庭であり、住み慣れた我が家のようなものである。

迫る火をものともせず、水面に座る仙人のような心持ちで、盾を発動する。

『神盾』 イージス

かつて旧神たちの戦闘長官であった神と同じ名をもった、皮肉な名前の神の武器が。

広がり、厚みを帯び、「力」そのものとしての特徴を現す。

迷宮の通路一杯に広がる幅を得て、淡い銀色のカーテンのように広がったそれは、来る暴力の化身^{きた}。

『火の鳥』 とぶつかる。

それを防ぎ、それを阻み、その溢れ出る灼熱の業火を吸収し、反射し、無効化するように、それを覆い包む。

「力」と「力」のぶつかり合いは、しかし呆気ないとも言ってしまう速度で、終結に向かいつつあった。

火の鳥は、飛び立てなかった。
盾の勝ちだ。

「力」が急速に、炎が急速に落ちていく。

この稼いだ時間をチャンスとして、二本杖の黒長耳族は「力」を大地へと流し込み、

蛇頭天使は己の紋章に「力」を流し込み、風を発現させる準備をする。

だが、だがそこで終わりではなかった。

メーダの放った炎は防がれた。

そしてそれが終わればまたもや接戦となるだろう、ジリ貧かもしれない。

決定力が炎に足りていなかったのなら、それを補えばいい。

エーサーベインが己の黄金剣に手を掛ける。

構え、目を閉じ、無上の愛を神に捧げる神秘主義者のような面持ちで、

神器…黄金剣の紋章に己の「力」を流し込む。

現れたのは、炎により弱められた神の盾を無理矢理に貫き、侵すような、極大の光。

薄暗い迷宮を、太陽の至近にいと錯覚させる程の眩さ。

敵を、迷宮ごと、大地ごと削り、消し飛ばす程の砲火。

エーサーベインの構えた黄金剣から放たれる神器の暁光。

それは消え去る寸前であつた『火の鳥』を覆い、新たに『神盾』へと迫る光の渦であつた。

あるいは曙光か、黎明のごとき光の質量により、神の盾は再び激突の悲鳴を挙げた。

音はない。視覚に覚えるのは閃光のみ、当事者の二人。

ロード・エクサリオスとロード・エーサーベインのみの争い。

この二人の盾と、剣の争い、「力」と「力」の衝突。

押し合い、^{せめ}鬭ぎ合う光の優位は、しかし徐々にエーサーベインへと傾いていく。

「くっ！」

と呻くような声をエクサリオスは挙げる。

脳裏に浮かぶのは10年前の敗北。

——ここでっ！　こんなところでっ！　再び敗れるだっ！

嫌な思い出だ、主の寵愛を失い、同僚からの信頼を失い、憎み続けないければならない終生の敵が出来てしまった。

だが主の寵愛を失ったことは気にならない、主の信頼がどうであれ、己の主に対する忠誠に僅かばかりの曇りもないのだから。

だが同僚の信頼を失ったことも気にならない、己は己に課された仕

事を、任務を、淡々とこなせば良い、それだけなのだから。

——だがっ！ 己に敗北の土を付けた、この敵に再び敗れるようなことは、ありえてはならない！

盾の出力が徐々に減衰する。あらゆる「力」と力の侵入を拒む盾が、光の圧力に負けつつある。

エクサリオスは左に構える剣を手取る。

それは新たな力、それは武器。

神の盾と同じモノ、神の武器、神の剣。

「おおおおおおおおおおおおつ！」

発動は一瞬、己の盾が限界を訴えたその瞬間に、光に向い放たれるのは銀の刃。

光を断ち、分解する「力」の刃。

「断たれろッ！！」

閃光は消失した。

後に残るのは息も絶え絶えなエクサリオスと何処か余裕を見せるエーサーベイン。

二人は、お互いを睨み、目を合わせ、ある種の意志を通じ合わせ、そして通路の中央に疾駆した。

ぶつかり合うのは銀の刃と銀の剣、盾と黄金剣。

踊るような剣戟。

入れ替わり立ち替わり、お互いの技と技のぶつけ合い。

相互に、あるいは同時に放たれる剣技は、神の領域か。

エーサーベインが銀の鋭剣を、視認が不可能な程の速度で三度放てば、

エクサリオスは神懸かった見切りで、それを全て左手に持つ神の金属で造られたブロードソードによって全て弾かれる。

エクサリオスがそれに合わせて神盾を構え突進すれば、エーサーベインはそれを黄金剣で斬り止める。

続けざまの大立ち回り。

その一と一が見せる。

遙かな剣影の魅技に見とれていたそれぞれの仲間や部下が、気を取り直し、己に出来る最善手を取り始めた。

仕切り直された戦闘が始まる。

5

戦闘は佳境に突入していた。

大鬼が死を悟り、蛇頭天使一匹を道連れに自爆紋章により爆散し。

もう一匹の蛇頭天使は喉と頭に矢を数本貼り付けて息絶えた。

緑髪を揺らしていたイレーネは腹部をバスタードソードに貫かれて壁に礫にされている。

辛うじて息があるが、戦線復帰は不可能だろう。

それを為した黒長耳族の剣士は、翼人と魔法士と槍使いを相手取り、その術と弓と槍を防ぎつつ、巧みに相手の援護攻撃を妨害している。振るうのは蛇頭天使たちから受け取った、二本のロングソード。

エーサーベインとニケロットがエクサリオスと打ち合い。

それを援護する二本杖の黒長耳族を守るように、全身に矢を一〇本以上受けている黒鬼が前に立ち、

冷気を放ち、巧みに黒鬼の足を止め、その強化された堅い身体を、それ以上に強化した己の腕力と攻撃力で殴り削っていくロレントオが居る。

数の優位は完全に冒険者側にあった。

6対4、エクサリオスと黒長耳族の剣と魔をもっても覆すことの難しい戦力差。

二本杖の黒長耳族が現在唱えている想像法が阻まれた場合、この戦力差は決定的になり、崩すことは不可能に近付くだろう。

その上、二本杖を守る壁は、冷気を放つロレントオの大切断によって、その命を防御加護と全身硬化ごと散らそうとしていた。

『潜影』は迷っていた。

己の目前で、敵と戦い冒険者がその命を潰えさせている。あるいはその激戦で今にも死にかねない。

彼が参加すれば、イレエネは守れたかもしれない、大鬼は爆発して肉片へと変化しなかったかもしれない。

己は影である。冒険者であることはとうにやめていたつもりだった。あるいはあの少女と過ごした半年間が、己に再び冒険者の魂を宿らせたのか。

思い悩むのは、手を差し出すことが出来るのか、その資格があるのかということだ。

いま『潜影』には、

己が参加しなかったから、二人の冒険者が無惨を味わってしまった、という傲慢にも似た心持ちと

己に彼らを助けることなど出来ない、己は軍の犬に過ぎないという怯懦な気持ちとが混在していた。

彼はだが、『銀鬼』が、味方を守るように壁になっている黒鬼を打ち倒す大上段を放ったのを見て、己を抑えたのだった。

戦況は決まった。

ここに至り勝機は失せた。

そう悟ったエクサリオスは、脚力強化を発動し、大きく飛び退き、二本杖の黒長耳族を庇うように前に立ちながら、徐々に後退する。

敵は三者、後衛を攻める二剣の部下に向かって叫ぶ。

「撤退だっ!!」

二剣を振るう黒長耳族は、それを聞いて、己の速さを強化し、47層へと撤退へと走り抜ける体勢をとる。

ボブや翼人がそれを阻もうと攻め手に回る。

後退するエクサリオスと二本杖の前には、豪快だが決して隙の作らない洗練された剣裁きを見せるロレントォと、無数の斧刃の軌道を作り出しているニケロットがいた。

その後ろに見えるエーサーベインは黄金剣の剣先をこちらに向けて構えている。

——……詰んだか

ふと心にそんな想いがよぎった。

命を散らした己の部下に、忠誠を捧げている己の上司へと収まりがつかない、そんな想いを抱く。

エーサーベインの構える刃に「力」が集まるのを感じる。

二本杖が辛うじて放った土槍は、しかし豚人に止められている。

ニケロットが二本の斧を振るい続ける。

「苦戦しているようですねえ」

響く声、奇妙な音程。

誰もがその動きを、その考えを一瞬、止めた。

通路のエクサリオスの後方から現れたのは黄金の鎧に全身を包んだ。

肥大化した蛙のような身形の騎士。

似合わぬ甲冑姿。腹を揺らして迫るのは迷宮の最高幹部。

ロード・シレンカ。

幾つかの影を、奇妙な形の合成生物を、あるいは人間であったモノを隣に置いて、彼はそこに居た。

「玩具のテストに来てみれば、随分とお、くうせんしいてるようですねぇ」

ニヤニヤ、と笑い、その言葉を放つ彼の顔に浮かぶのはしかし舌なめずりするような欲望。

呟く言葉、放たれる言葉、隠されない下卑た欲望に染まった顔色。

だが、だが、そんなことはどうでもいいことであった。
いま、そこに居た冒険者にとっても、そしてロード・エクサリオスにとってさえも。

エクサリオスの、ロレントオの、あるいは冒険者たちの、
もしくは『潜影』の、なによりロード・エーサーベインの、

その驚愕に満ちた眼差しが、視線が投げかけられているのは、ロード・シレンカのその隣にある彼に対してであった。

彼、そう彼。

驚愕と動揺の視線を自らの隣に置かれていることに気付いたロード・シレンカはにへら、と笑い、答える。

「これですかあ？ これは最高傑作ですよ！ とは言ってもちよちよつと弄くっただけで他には特になにもしてないんですけどねえ」あれです。素材を生かす調理って奴ですよお。そう言い募るヒキガエル。

ここ暫く、およそ二週間以上にも渡ってロード・シレンカを楽しませてきた玩具。

それは髭の男であった。

それは初老で、それは均整の取れた肉体と、多くの苦難と試練を乗り越えてきた歴戦の風格をその風貌に備えていた。

その目に光無く、その顔に生氣無く、構える拳には鉄の籠手。

エクサリオスが動揺から抜け出し、叫ぶ。

「っ！ シレンカット！ 貴様っ、きさまっ！ なぜ……っ なぜそこにそいつがいるッッ！ その男がッ！

——バル・ファルケンⅡノースがそこにいるッッ？！」

最高位冒険者バル・ファルケンⅡノースは未帰還者である。
いやであった。

エクサリオスの疑問の慟哭。

ロレントオやエーサーベインにとって、
あるいは冒険者たちを包んだ沈黙の重さは如何ほどであったのか。
それは計り知れない。

そして戦いはこれより、終幕へと向かう。

三日目 昼夕 派遣隊出発 精鋭迷宮軍 あるいは決戦の日（後書き）

九烈士

『騎士』 エーミッタ・フアーレイ

エミダリア旧帝国、首都エミダリの出身。

高潔にして清廉。実直かつ義に厚い旧帝国の女騎士である。

銀牙騎士団を従えた、旧帝国で最も若く、最も美しいとされた騎士団長。

山嶺の新興国のタンタリアの帝国侵入を防ぐ為に赴いた戦場で、タンタリア国王であった『有角姫』と出会う。

以降破竹の勢いで進撃してくるタンタリアをただ一人よく防ぎ、よく守った。

しかしその後エミダリアは敗戦、タンタリアに併合されることとなる。

責任を取るつもりで自害しようとしていたところを『有角姫』に止められ、

説得の末、配下に加わる。

以降、タンタリアが帝国を名乗り大陸征覇に乗り出したときも、帝国を統一した『有角姫』が神に闘争を挑んだときも、変わらず傍に侍り、その命に付き従ったという。

魔王領での戦争準備や、魔将集めにも協力。

武人であり、良くも悪くも不器用であったものの、高潔さは本物であった『騎士』は、

差別や偏見とは無縁であり、魔族や魔獣と特に親しい九烈士の一人であった。

（からかいがある為、人を食ったような人格の多い魔将に反応を気に入られたのではないか？という説もある）

天上戦争においては、『有角姫』に付き従い、多くの戦闘に参加した。

竜公が地に墜ちる直前、その最期の言葉を看取ったとも伝わる。

後に本人も天山攻略において左腕を失うことになる。

戦績としては、神二柱を屠ったとも伝わる。

新暦においては『法』の神として信仰されるが、それはその公平さ、実直さにちなんだものである。

現在は、『有角姫』とともに行方不明。

三日目 夕夜 最高位冒険者 決闘 (華麗に終了していた) 激闘 (前書き)

夜勤に行く前にあげたかったので、無理して推敲して上げたのですが、

明けていまゆっくり見直したら、細かい誤字脱字が多い多い。
興ざめしちゃいますねこれ、すいませんでした。

三日目 夕夜 最高位冒険者 決闘 (華麗に終了していた) 激闘

1

エクサリオスは、己を叱咤し、動揺を抑えた。

「そうか、そういうことか…… つ、貴様、最初から仕組んでいたなッ!!」

ロード・シレンカはくすくす笑う。

「仕組んでいたなんてえ、ひどい言い方ですねえ」

悪魔の微笑み。

「このまま行けばあ、貴方は私の部下ということにいい、なりますけどねえ」

エーサーベインの瞳には、理解の色、転じて膨れあがった魂の底からの憎悪。

人格さえ歪みかねない深い深い憎しみの願いが沸き上がっていることが、傍目にも容易く理解出来た。

冒険者一同に動揺を与え、ロード・エクサリオスにさえも動揺を与えた存在。

それがロード・シレンカの隣に傳くように立っている一人の男であった。

バル・ファルケンⅡノース最高位冒険者。

魔惨迷宮頂点のマッパー、シーカー、シーフ。

前衛冒険者としての類い希なる才華。儀式小家にも長けたその戦闘能力。

迷宮の全階層に通じ、多くの魔物と戦闘の為の、あるいは探索の為の智慧を極めた存在。

かつて最高位冒険者グループ『命知らずの赤狐』の副長を務め、現組合長であるハンナⅡウルフを支えた男。

組合長候補に三度名が挙がりその度にそれを辞退した冒険者。

人格に優れ、親父臭いが愛嬌のある性格。無数の酒場に己の席があったと伝わる自称冒険者の父。

それがバル・ファルケンⅡノースである。

古き昔に受けた二つ名は『爆砕』 エーサーベインでさえ由来の分からぬ古い二つ名である。

「っ……バルツ！俺だ、エーサーだッ！」

黄金騎士の言葉は、しかし聞こえていないかのように、髭の男性は極微の反応さえも見せない。

『銀鬼』ロレントオは、エクサリオスと対峙するのをやめ、剣を構えながら、一歩引く。

ニケロットもそれに倣い、共にエーサーベインの隣に立つ。

おいつ、バルツ、バル・ファルケンノース。と続けられる声は張り裂けんばかりの悲哀。

ロレントオとニケロット、ボブはエーサーベインのそのような声を初めて聞いた。

まるで父の死に目に立ち会う、幼い息子の挙げる泣き声のような音の響きだった。

「無駄ですよ」

絶望と憤激、憎悪と哀切の入り交じったエーサーベインの視線をその身に受けながら、

とても気持ちよさそうに卑猥な笑みを見せるシレンカ。

「その人形に、ことばはもう意味がありません。意志もないです、魂はありますがねえ」

キヒヒッ！ というシレンカの笑い声が響く。

ザンッ！

という音が鳴る。

エーサーベインの繰り出した、銀閃は髭の男バル・ファルケンに防がれていた。

「っなぜだ！」

「しつこいですねえ。……なぜも糞も無いんですよ、こいつはただの人形う、わたしの命令に従うだけの肉人形ですう」

苛立った声音。

そして腐臭を撒き散らせ、金の甲冑に身を包んだ蛙男は、唾を吐きかけながらエーサーベインに続ける。

「さあて、せめて楽しいものをお見せてくださいよお?!」

その言葉と同時に、凍った場が再び、燃え上がる。

シレンカの背後にあった。幾つかの生物を組み合わせたようなキメラが動き出す。

馬であり牛。猫、獅子、烏賊、犬人、猫人、長耳族、黒長耳族、人間、混沌の生物は足らしきモノを使って、這って進む。

最高位冒険者バル・ファルケンⅡノースも動き出す。

硬直と混乱から逃れたエーサーベインは大きく退く、動揺は流石の最高位冒険者をもってしても収まらない。

エクサリオスは、歯がみしつつも、二本杖の黒長耳族とともにシレンカの背後に退く。

戦いに参加するつもりはない、そもそもこの冒険者たちとの戦闘は想定外であったのだし、それは彼女の任務ではないからだ。

ニケロットと、ロレントオが歯を食いしばり、戦闘の態勢を整える。

キメラが四体、ロード・シレンカに、ロード・エクサリオス、そして黒長耳族が一人。

やけに凄まじい手並みの剣士黒長耳族は既にこの場にいない。
撤退して、そのまま47層に到達したのか、この場の事態には気付いていないようだった。

バル・ファルケンⅡノースの脚甲が大きく光る、全身に身に付けた革鎧と、両腕の籠手が銀に光る。

紋章法。それはオーソドックスな構成であつた。

脚力の強化、全身に防護と速度の加護、両腕の腕力増加。

強化された腕力の拳は、必殺の威力を秘める。おそらくオーリオ鋼の重鎧さえも歪ませ砕くだろう。

一歩、一歩、歩みを進める。

髭を揺らし、大地を踏みしめるような前進。

揺るがず、多くの想いを乗り越えてきたであろうそのその威容。

立ち上る強者の気炎、修羅場を乗り越えてきた冒険者特有の雰囲気。

だが、その瞳に眼光はなく、その瞳に意志はない。

冗談を好み、多くの愛を囁いたであろう口は固く閉じられている。

「おいおい」

『銀鬼』ロレントォは、思わず呟く、まさかここでバル老と戦うことになるとは、当然だが想像の枠を越えている。

いやそれはこの場にいる冒険者全員に言えることであつた。

殺す覚悟、戦う覚悟、死への覚悟はあるとはいえ、かつて味方であつたもの、あるいは今もまだ味方であるかもしれないものと戦うことになるなど、思考の範疇外。ましてやそれがあのバル・ファルケンⅡノース相手である。

ニケロットが両斧に、油を垂らし、滑りを整え、既に大きく使ってしまった器の「力」を搾り取るように己の紋章に這わせる。

ボブの「つま、まじかよ……っ！」と言う声が聞こえてくる。

キヒヒッ、といういやな笑いシレンカの笑い。そして悪臭。

その他には、ただ黙々と近づいてくるキメラと最高位冒険者の足音だけが存在する。

エーサーベインは未だ動揺を抑えきれず、呼吸を荒げ、己の混乱、己の過去、己の心と戦っている。

覚悟を決めるための戦い、バル・ファルケンⅡノースという恩人に刃を向ける覚悟を決めるための。

2

だっ、という音。

次に、ひゅんっ、という音。

最後にガキン、という音。

バル・ファルケンが大地を大きく踏みしめ、こちらに駆けだした音。

それを狙って翼人が貫通と追尾の紋章を発動させた矢を放った音。

高速で向かってくるその矢を、バル・ファルケンが殴り落とした音。

バル・ファルケンの正面に立っていたニケロットは、突如バル・ファルケンの姿が消えて見えた。

そのまま死んでいてもおかしくはなかっただろう。

その姿を認識できていた『銀鬼』ロレントオの大剣が、己と、バル・ファルケンが振り上げた拳の間に挟まれていなければ。

「……っ！」

迫るキメラ。唸り眼光をぎらつかせ、覚悟を決めた『銀鬼』ロレントオ。

己の友人たる大鬼の骸を見て、彼は覚悟を決めた。遠く、既にメーダが意識を世界へと合わせている。

エーサーベインは動けない。

振るわれる拳。

強化された銀の拳が嵐のように振り下ろされる。

一撃一撃が岩石を碎き散らすような単純暴力。

しかし、あの怪しげな猫店主の造った神器はそれぐらいでは歪まない。

ニケロットを背に、『銀鬼』ロレントオが、振るわれ続ける拳。弾丸の連射の如きそれと対峙する。

蒼い輝きを放つ銀大剣は冷気を放ち続けており、
バル・ファルケンの籠手を絡め取り、凍らせ、その動きを鈍くする
のに役立つ。

だが、弾丸は加速する。

弧を描き、凍った腕が砕けかけようとも、折れようとも、激痛さえ
感じないバル・ファルケンは、
人間の限界まで引き出された筋肉の性能、人間が無意識に抑えてい
るそれさえも出し切って。

『銀鬼』の銀大剣を殴り続ける。

暴風雨。人間でありながら、ただのシーフであった男が、最高位冒
険者にまで上り詰めた研鑽の神髄。

惜しげもない武の結晶は、意識が失われていようとも、間違いなく
バル・ファルケンが、バル・ファルケンたる証であった。

ニケロットは戦いの次元の違いを想い。

ロレントオへの加勢ではなく、迫るキメラの下へと前進させた。

「ああああああああああああああっつつっ!!」

響く声はボブの物、彼が絶叫と共に、
己の槍に全ての「力」と力と体重を載せて、

鳥影の如き速度をもってバル・ファルケンとキメラに向かって前進してくる。

ヤケクソな彼の判断と行動。冷静は欠けている。

キメラは牛の骨を、あるいは粘状生物のような触手を使い、ニケロットの前後左右を責め立てる。

だがニケロットは一步も引かない、向かってくる触手を振り払い、切りつけ、切り落とし、再生するそれを切り刻む。

返す刃でフェイントが加えられ、幾つかの部位は宙を飛ぶ。

己を顧みない、背水の裂帛。

戦況を見るシレンカは、己のでっぷりと肥大した腹をさすり、唇を舐めながら、楽しげに笑う。

「あの斧、いいですねえ！ 素材に欲しいですよ？ ああ、あの豚さん筋肉が、それと体毛もいいですよ！ ……ん？」

どうしましたか？ エクサリオスさあん。と己を睨んでいたエクサリオスに声を掛けるシレンカ。

「……貴様のやり口は好かん。趣味ではない、と改めて思ったただけだ」

「ああ、そりゃしいつうれえい！　でも貴方はわたしの趣味ですよお？」

反吐が出るな。とエクサリオスは思った。

「反吐が出るな」とエクサリオスは呟いていた。

「キヒヒッ！　まったまたしつれいい、で、いいんですか貴方？」

「なんだ」

「戦闘に参加しなくても、貴方の憎い憎いエーサーベインの最期になるかもしれませんよ？」

それを聞いてエクサリオスは、角を揺らし、自らの髪を揺らし、シレンカを蔑むように見下ろした。

鼻で笑う、その調子は、面白くもない冗談を聞いたという風情である。

「っは！　あの『黄金剣』がこれぐらいで折れるものか……、余り舐めるなよ？　アレはもっと傲慢で、生き汚い矮小な生命だ」

そしてそれ故に、強く、厄介なのだ。とエクサリオスの瞳が輝く。

その言葉に従った訳ではないだろう。

だが彼は確かに、己を取り戻していた、

あれがバル・ファルケンであつたとしても、例え元に戻せる方法があつたとしても。

いま、目の前にある彼は敵なのだ。

立ち向かわなければならぬ。彼はそれを了解していた。

恐れを、不安を、怒りを、憎悪を、飲み込み、それらを腹の中で原動力として燃やし続けなければならない。

情念を、闘志を、振り捨てず、武器として、立ち上がらなければならない。

エーサーベインは、『黄金剣』ロード・エーサーベインは、そのことを自覚した、そして改めて確認し、彼は前を向いた。

ボブは、キメラを一体、粉碎した、貫く槍撃は燃えさかる火炎を帯びている。

高位冒険者の端くれとしての意地を見せた形だ。

そして、死の気配が近づく、粉碎した筈のキメラが、その破片から、己を復活させ、それに気付いていないボブの脳へと、あるいは耳穴へと鋭い触手の攻撃を行う。

シャンツ、と鈴の音、あるいは蛇の鳴くような音。

エーサーベインが銀剣を振るった。

左腕に構える銀の剣、右に持つのは黄金剣。

助かった、とボブは、エーサーベインを見やり、そして息を飲んだ。見開かれた瞳の意志。覚悟の色に気圧されたのだ。

その視線をものともせず、エーサーベインは刃を振るい続けている。

近くでは、翼人の矢が放たれ続け、一匹のカメラが針山のようなっていた。

シレンカを塞ぐように一匹のカメラが、追尾紋章により直接シレンカを狙った翼人の矢の射線の上に入ったのだ。

『銀鬼』が、冷気を己の振るう刃から放ち続けている。見ると天上には小さな氷柱。

振るう刃から放たれる冷気は、バル・ファルケンの『爆砕』と呼ばれた男の豪腕を防ぎ、その鋭さを鈍らせ、関節を軋ませている。

バル・ファルケンは、己の意志を失いヒキガエル男の操り人形に落ちきった男は、戦いながら。

己の籠手の紋章に「力」を這わす。

特に大きい一撃を振るい、相手がガードをせざるを得なかった、その時を見計らい。

拳と拳を打ち合わせる。

意識——両腕・籠手——儀式小家・紋章法——導力——発動——紋章法…『指向性爆発』——起動；二連

その時、爆発が『銀鬼』を襲った。

彼の身体の前面、顔と胸と腹の一面を、二度、火と圧力が舐めた。目を瞑り、しかし振るう刃を放さなかった豚人の腹に向かって、拳が放たれる。

「っがああああっ！！」

血を吹き出し、己の焼けかけた腹に鋼鉄の弾丸——バル・ファルケンの拳が打ち込まれているのを、ロレントォは見た。

しかし、倒れない、しかし、退かない、これ以上の醜態を見せるつもりはない。

眼光には決死の色。だが諦めはどこにもなかった。

その時、バル・ファルケンの姿がぶれた。

そしてロレントォの目前から消える。

あるのは、かすかな残影。

バル・ファルケンが欲したのは、一瞬の隙、後衛へと駆けるための一瞬の隙。

彼はエーサーベインを越える程の加速を見せて、魔法士メーダと翼人を狙う。

翼人の矢を、バル・ファルケンが拳で打ち落とし進み続ける。

豚は動けない。そして追いかけてしようとしたエーサーベインを覆うように一挙に二匹のカメラが襲いかかってきた。

ニケロットでは速度が足りず、また彼も一人で二匹のカメラを挽肉にする作業の真っ最中であつた。

ボブは駆け出すが、間に合わない。

誰もいない無人の野を往くように、神速を持って、迷宮の大通路を駆ける。

阻む者は誰もいない、阻む者はありえない。

振りかぶるバル・ファルケンの拳は、

――だが、食い止められた。

振るわれた拳を止めるのは、二刀の短剣。

黒一色の装束に身を包んだ、顔は20代後半と言ったところの若い男である。

今の今まで、何処にいたのか、それはわからない、しかしそれまで影であったその男は、影であることをやめて、一人の人間、冒険者としてその場に現れたようだった。

右の耳を飾るのは大きなイヤリング。

短く切られた金髪。いつもは眼たげなその両の瞳はいま、輝く意志と確固たる決意によって大きく開かれている。

突然の邪魔に苛立つようにバル・ファルケンが拳を叩き付け、足による蹴りをそこに加える。

男は、数瞬前まで『潜影』だった男は、一人の冒険者として目前の脅威に立ち向かっていた。

スウェー、回避、身体を反らし、紋章の刻まれた両の短刀をもって相手の拳を反らし弾く。

「冒険者、ロッド・エヴァンスです。冒険者の仁義に乗っ取って助けに入るッす！」

昨晚一人の猫をなます切りにしかけた双刀の魔技が惜しげもなく振るわれる。

二本の刃と豪腕の応酬。

突然の応援に驚きを隠せない冒険者だが、数秒後には、細かいことはどうでもいいと頭を切り換えた。

最高位冒険者であり、ハンナ＝ウルフと親しいエーサーベインだけはその正体に思い当たりがあるようだったが、正体はなんであれ、こうして助けに入った事実が全てを優先した。

『潜影』、いやロッド・エヴァンスは、笑みを浮かべる。

多くの迷い、彼が冒険者をやめた理由や、二人の冒険者が倒れた後に今更どんな顔をして入って行けば良いのか。ということがあった。悩み、苦悩、臆病、しかしバル・ファルケンⅡノースがその姿を見せた時、彼が心に浮かべたのは義憤であった。

元々夜の怪しい長耳族の少女を、正義心にも似た心で監視したような男である。

彼の天秤は、このとき、悩みを、過去を振り切って、軍の職務規程さえも大きく振り捨てて、一人の冒険者としての援助を選択したのだった。

彼の過去が、なんであったのか、なにがあったのか、此処に知るものは誰もいない、それでも今の彼の顔は何かを抜け出したかのように明るく澄んだものであった。

エーサーベインが、黄金剣を放つ。

キメラが極大光に一掃され。

スタミナを切らし、大きく肩で息をしていたニケロットが『銀鬼』ロレントオとともに飛び退く。

シレンカとエクサリオスへ迫る光はエクサリオスに防がれた。

僅かな肉片からキメラは再び再生を始めるが、時間は数秒でも稼げれば、それで問題はなかった。

高度なフェイントと連撃に次ぐ連撃、風を斬り、闇を斬る、無数の刃の連打。

それをバル・ファルケンは拳で合わせ、打ち落とし、時に逆にフェイントを入れ、より威力の大きな一撃を殴り入れる。

そして背後からボブの接近を感知して、後ろへと大きく飛び退く。

脚力強化を、さらに重ねるように瞬間起動したのだろうか。その距離はやけに長く速い。

目前、速度と攻撃の紋章をのみ発現しているロッドに向かって、先ほど『銀鬼』に向かって行ったのと同じような拳爆発を繰り返す。

対象が退いたことに合わせ、ロッドは自らの短刀の紋章に「力」を流し込む。

振るわれる刃は宙を泳ぎ、拳を打ち合わせたバル・ファルケンへと向かう。

バル・ファルケンは己の冒険者としての直感により、首を反らしてそれを躲す。

ただし胴を狙った一撃は、その鎧に大きな傷を入れることになった。

もし意志があったならば舌打ちしたであろう状況を、無音で凌ぐバル・ファルケン。

爆発の指向をメーダに向ける。

刻印法を発動しようとしているメーダの集中を揺さぶる老練の手並みである。

刻印法の集中が崩れ、世界理解にさらなる時間が必要となる。

バル・ファルケンは、接近してくるロッド・エヴァンスとボブを相手取る。

ボブの使う槍。

蛇のような軌道、宙を泳ぐ、蛇影。

二本の短刀は、手の動きさえ視認できない高速度。

それを凌ぎ、時に殴り、蹴りを加え、紋章を瞬間的に起動して、合間合間に恐ろしく速い拳撃を加え二人へと対処する。

それでも槍撃が掠り、二刀の短剣は、無数の傷をその厚い鎧と顔に加える。

だが、バル・ファルケンは大きく揺るがない。

通路の壁を背に、彼は獅子奮迅の拳の闘法を見せる。

なお加速する、ロッドの短剣術、そしてそれを援護するボブの槍。その軌跡の嵐に向かって、あえてバル・ファルケンは一歩踏み出す。

見切り、振り上げられるバル・ファルケンの腕。

ロッドは、手先に激痛を感じ、一步飛び退く、己の手甲が大きく砕けているのを見た。

絶句。横手ではボブが体重の乗ったワンインチパンチを食らい、向いの壁に吹き飛ばされているのを見る。

——軌道が見えてるッスか?!

「冗談じゃないっスね、こりゃあ」

「そうだ、冗談ではない、あれはバル・ファルケンⅡノースなのだぞ?」

エーサーベインの声が掛かる。

隣にはニケロット、腹に大穴を空けているのに平然と動いているレントオ。

起き上がり腰をなでるボブ。

翼人は寡黙に弓を放ち続けているが、それはキメラを盾にされ防がれる。

見ればバル・ファルケンは大きく後ろへと後退していた。

キメラに守られるように怪物の後ろに位置し、最高位冒険者がこち

らへと歩いてくる。

目を瞑り、先ほどの激しさが嘘のように。

何かを感じ、何かへと干渉しているかのように。

ロレントォはそれを紋章術かと考えた。

だが、エーサーベインとロッドは何をしようとしているのか、それに正しく気付けた。

目を瞑り、世界を掴もうとするその所作、見れば籠手の一部が開け放たれている。

まるで腕にある『何か』と外界を接触させるかのように。

その閉じられている瞳は、強い意識は、まるで世界に向けられているかのように……神聖さをともなった静謐にも受け取れる。

エーサーベインは己の始めて見るバル・ファルケンⅡノースの挙動に動じながらも、全く同じような行動を取ったかつての戦闘相手を思い出し。

ロッドは長い裏世界の仕事の経験上、相手をした冒険者の極一部が同じような挙動をしていたのを思い出す。

放たれるのは味方への警戒の言葉。

エーサーベインでさえも知らなかった『爆砕』という二つ名の由来。
その技術は

「バル・ファルケンⅡノース。籠手の紋章は囧だっ！あの下にあるのは『刻印』」

——バル老は儀式大家だ！」

そしてその言葉を待っていたかのように、バル・ファルケンは、拳を胴の横に構える。

力と『力』を折りたたみ、腕に侍らせる、掴んだ「力」により特定の範囲を支配下に置く。

一秒よりも短い、間。

バル・ファルケンは動き出す。

正拳突きの要領で、拳は放たれる。

軌道は弧を描き、力の蓄えられた拳は途中で開かれる。

最後に、腕を伸ばしきった体勢で、再び開かれた手を拳の形に閉じる。

なにもない空中を殴り掴むように。

その先にあるのは、冒険者の群れ。

意識——世界——「力」——儀式大家——刻印法

——行使者——バル・ファルケン——ノース。

——理解・定義・領域——一時支配——発動——刻印法『空間爆
砕』——発現

「退け！」

刻印法——『空間爆砕』

飛び退いた冒険者達は見た。

意識を世界に埋没させていたメーダが、避けることの出来なかったメーダが、

血と脂を身体中から吹き出し、

骨と肉と脳と魂、その全てが、容赦なく、無惨に

一握の下に、粉碎される様を。

冒険者は皆、言葉を失い、見る影もないメーダだったものの姿を見る。

あるのは骨と皮と血、溢れる臓器のみ。

「ひ、ひい」と舌端を震わせるのはボブ。

悲しむ間はない、動揺する数秒も惜しい

これを好機と捉えたのはエーサーベイン。

彼は沈黙の内に、黄金剣を取り、バル・ファルケンとキメラたちに向かって構える。

「『銀鬼』と影」

呼ばれた二人は、頷き、壁に張り付けられているイレエネを見て、息があるのを確認してからそれを降ろす。

それと同時に、エーサーベインが最大出力で光の奔流を敵へとぶつける。

バル・ファルケンⅡノースと、歪なキメラたちに迫る光。

神盾を持つエクサリオスは戦闘に参加せず、後方、シレンカの隣にいる。

キメラは再生する。

だが、バル・ファルケンⅡノースは再生しない。

単純な判断。

バル・ファルケンは、それを躲すために、蟹の鎮座する王墓へと逃げ込む。

光は放たれ続けている。通路を塞ぐような光の束。

大鬼の持っていた荷物の内、比較的即効性のポジションをイレエネに飲ませ、
ロッドとロレントオは、ニケロットとボブと翼人を交え、打ち合わせをする。

「俺に秘策があるッス」

「ああ俺にもある」

ロッドとロレントオの言葉。

目前にはキメラ、その奥にはニヤニヤ笑う醜い蛙。

「っや、やるってのか?! こんな糞もみてえな面子でっ!」
正気の沙汰じゃないと。ボブ。

「……良いわ、何をすればいいの?」

嘴から快諾の声を放つのは翼人。

「勝機があるのなら、乗るのも吝かではない」

全身から血を流し、キメラ相手に捨て身の奮戦を見せた男は薄く笑う。

「時間を稼げばいい……、ま、キメラとあの蛙くらいは始末しておきたいがな」

そうロレントオは笑う、己の腹部に包帯を巻き、応急措置としながら。

「お久しぶりの冒険者稼業。やっぱヘビィっす」
どこか嬉しそうに笑うロッド。

横にあるメーダの肉片を見て絶望しているボブ。

「あ、あんたら正気じゃねえよ！」

かつて組合長ハンナ・ウルフはこう考えた。

『命の価値を越えて、危険と名誉に魅力を感じて感じて焦れるべき冒険者』

それを体現している彼らは間違いなく一流の冒険者であった。

「なあに、悲しむのは後で良い、戦うのは今しかできないんだからなっ！」

——再生するなら、凍らせてやればいいのさ。

豚人^{オーク}の表情は飢えた猛禽のように歪み。

初見では脂肪と見紛う、膨れあがった腹部の筋肉瘤を血の赤で染めながら、

突進寸前の猪の如き猛剛の決志を立ち上らせて、そう嘯いた。

視界の隅では光が止み、

エーサーベインが、

バル・ファルケンⅡノースを追いかけるように蟹の巨体と同じ大きさの穴の中へ、入って往く。

エーサーベインは驚く、意志が消え、
目に光のないバル・ファルケンは、しかし己を誘うように穴の奥へ
と走っていくことに。

意志は消え、魂も汚されたのかも知れない、心は無く、本能的な
にかが残っているのだろうか？

エーサーベインが抱くのは覚悟。

想うのは過去。

今よりもさらに傲慢で、鼻っぴしが強かった気位の高い貴族の三男
坊だった頃。

才能があると自惚れ、父と兄への反発から家を出た齡17。

辿り着いた迷宮都市で己の高い鼻を丁寧に折ったおっさん。

気に入らないおっさんだと思った。

大したことない盗賊崩れだと断じた。

敗北を喫した。怒られた。鍛えられた。

仲間に加えられ、生まれて始めて誰かに頭を撫でられた。

仲間と呼ばれる者が出来た。父みたいな者も出来た。

もし、あるとき、そのおっさんが、己を助けなければ。

己はどこか中途半端な階層の通路で、一人孤独に死んでいただろう。

その男と、いま己は戦おうとしているのだ。

数日前に傲慢と慢心から屈辱を晒した大蟹の住処で、

10数年前に、己の傲慢と慢心を抑える為に己に屈辱を課した男と、

——戦うのだ。

走る大穴はやがて、途切れる。

あるのは城が入るような大きさの古代遺跡。

王墓である。

蟹は、自己嫌悪に陥っていた。

殺める必要のない生命。

野蛮だが可能性に満ちた人の子を、己の怠慢、油断、慢心で殺めることになってしまった。

以来一日中、蟹は王墓の角。

それなりの高さを誇る位置に、蜘蛛のように張り付きながら、ぼうとしていた。

気落ちしていたと言っても良い。

不愉快ではなく、後悔でもない。

生命を奪うべくして奪うことに文句はないが。

己の不用意で奪うべきでない生命を絶つことには、奇妙な残念がある。

そんな蟹が、一日ぶりの来客を察知したのは夜のことだった。

やけに騒がしい音、声、気配。

闘争の気配を感じ、身構えて、真っ暗な王墓の中で、油断せず（今度こそ）

己の掘り進めた大穴を見据える。

そして来客を感じた。

来たのは、やけに洗練された物腰を持つ、見るからに屈強そうな冒険者であった。

暗く、姿が分からない。しかし多分その姿は、壮年程。

何かに追われているのか、あるいは何かを待っているのか。

強者の気配を持ちながら、しかしその壮年の冒険者は妙だった。

生の気配、命の活力が歪んでいるのだ。

彼を構成する「力」が汚染されている。つまり魂が汚い汚水に満ちているような雰囲気。

蟹は警戒する。

しかしその冒険者は、蟹ことデンザロスには用事があったわけではないようだ。

すぐにもう一人の来客が来たのだ。

やけに明るい光を放つランタン。

それは己の古い古い亡き友の造ったもの似ていて、思わず郷愁の念を蟹は覚えたのだった。

次に気付くのは、彼の握る剣、一つは銀に輝く剣。もう一本は忘れようのない黄金剣。

ここで目を覚ました時に一番始めに出会った強者だ。

蟹に一つの冒険者像を植え付けることになった男。

一番最初の理想像。生命が、神を殺すと誓った生命わけでもないが行ってきた研鑽と前進の歴史。

それを感じさせた、驚嘆すべき俊敏の冒険者だった。

言葉は通じぬ、しかし名を交わしたい相手だ。

蟹は己の甲羅を身震いさせ、鋏を振り回し、誤って王墓の壁にぶつけてしまう。

響く轟音。

しかし二人の冒険者は一切の動揺を見せず、お互いのみを見据えている。

マップ機巧のランタンを床に降ろし、二本の剣を両手に持ったエーサーベインと

銀の籠手を締め、全身にあり各所を守る銀の防具をランタンの輝きによって艶立たせているバル・ファルケンⅡノースの

決闘であつた。

デンザロスは見る。

蟹の眼をもつてしても、一瞬その姿が捉えきれない程の速度で、

拳の壮年に、近づいた黄金剣の騎士の、

二本の刃が――おそらく瞬間的に何重もの強化を施された高速双剣
撃が、

大気さえ後ろに置く程の速度で、壮年の冒険者に振るわれたのを。

デンザロスは見る。

蟹の歴戦の感覚をもつてしても、一瞬その姿が捉えきれない程の速度で、

己の身体を黄金剣の騎士の下へと届かせた、拳の壮年の、

二本の腕が——おそらく瞬間的に何重もの強化を施された高速双拳
撃が、

音さえも後ろに置く程の速度で、黄金の冒険者に振るわれるのを。

デンザロスは、デンザロス・デンザロス・ペンタレシアは感嘆する。

思わず拍手するように己の鋏と鋏を打ち合わせた。

その体幹、その足運び、手の振り、それらを動かす筋肉の練度、身
に染みた闘法の妙。

その極限。人が、人以外とあるいは、人と戦うために考え研ぎ澄ま
したのである。武法の極致。

己の脚部関節にヒビを入れた一撃が、何度も惜しげ無く振るわれの
を見よ！

己の甲殻を歪めかねないほどの衝撃を持った拳の威力を見よ！

油断無き闘争、真剣な命の掛け合い。

相互に続く応酬。

刃の連打、拳の連打。

デンザロスは恍惚とする。命の可能性を見る思いだ。

——冒険者とは、ああ……　なんと素晴らしい！

そう陶醉するのも無理はないだろう？と蟹は想う。

銀剣だけではなく黄金剣も使い、時に斬り、時に叩き、時に盾と
している黄金騎士。

その高速瞬断を躲し、反らし、時に手を当て押し返しさえするのは
拳の男。

王墓の中心で、外延で、内側で、穴の傍で、蟹の近くで、無数の技
と力が交換される。

王墓は欠け、地には斬り傷が無数にでき、ひびわれ、破碎され、創
傷のごとき穴が著大に作られる。

既に黄金騎士は無傷ではなく、既に壮年の男も無傷ではない。

相互の技術と速度の高さ、それが二人に大技を使わせない。

光の収束は放たれず、空間は爆発しない。

その暇はなく、寸暇を惜しんで見せられる武技は、全て真っ向から相手を絶たんとする絶技に他ならない。

無数の刃軌、拳軌。

蟹は戦いのリズムを取るように、何時しか、鋏と鋏を鳴り合わせていた。

ガチッ！ ガチッ！

シャッ、ダンッ！

と音が鳴れば、それは拳の男が地を踏みしめ、練り上げられた渾身一投の一撃であり。

シャンッ、ザザッ！

と音が生^なれば、それは拳を二剣を使い反らしながら、足を擦らせながら相手の威力を抑える黄金の騎士の足音である。

最後に中央から天井近くまで跳躍した黄金騎士が、下方に向かって光の束を放ち。

それに向い、拳の男が「力」を掴んでそれを光へとぶつけ、爆発させながら逸らす。

（己の方角に向かって「力」が逸れて飛んできたのには、デンザロスも辟易したが）

「力」は何時しか尽き、己の器の「力」を使わない、人間と人間の素の力の闘争へと移行していく。

限界を外された拳の男が有利であるだろうに、黄金騎士はそれに対して己の闘法と体力のみで抗い続ける。

十五年前。

一人のおっさんと、一人の若者が、己の技術と肉体のみで勝負した時と同じようなその光景。

今、おっさんは親父へと変貌し、体力と肉体に年齢から来る衰えを

付随させていた。

そしてその心は、凍てつき、技に粘りはない。意志はなく、魂は輝かず淀んでいる。

今、若者はおっさんと呼ばれる年齢へと成長し、体力と肉体そしてその技術の全ては、かつてのその時よりも上であった。

そしてその心は、燃え上がり、拳の技に粘り強く耐えている。意志は充満し、魂はかつてない輝きを放っている。

蟹が何時しか、鋏を鳴り合わせるのをやめた。

その眼差しには賛美、尊崇、驚嘆。

一人の画家の、全精力がすぎ込まれた、壮絶の美。それを思わせる光景。

演劇の名場面よりも、絵画の一場面よりも、壮絶な形。そんなものが映っていた。

デンザロスに言葉はなく、あるのはただ善いモノを見たという感動の興奮。

見れば、銀の剣をのみ構えた黄金の騎士が、拳の冒険者の双腕を切り落としていた。

そして沈黙のまま、恐れるような眼差しで無腕の男を見る。

エーサーベインは苦悩した。

覚悟の果てである、しかし、命など取りたくなかった。

バル・ファルケンはどこにいるのだ。

幾らでも復活の手段などありそうなものではないか。

意志を取り戻す、心があるのではないか？

そんな縋るような願望が、彼の心を埋め尽くしていた。

それに答えるように、バル・ファルケンが口を開いた。

音は出ない、瞳に、光は戻らない。

だが、何かに耐えるように、音の連なりを必死として口から出す。

「っ……や……れよ」

微笑むような形。

苦悩を振り捨てない、エーサーベインの迷いは強くなる。
なぜなら意志が蘇ったその瞬間を目前にしているのだから。

「やれっ………。げん……か……い、だ……っ」

魂の残り滓^{かす}を、使っているのだと、そういうような凄絶な音。

エーサーベインは、手の震えを止めない。

悩みは、苦悩は、止まらない。

だが、急かすような、そんな瞳の光をバル・ファルケンの内に見た
ような気がする。

これは多分今生の別れ、ここで殺めなくとも、殺めても変わらない
ような。

エーサーベインは、目を強く瞑る。
開く。

覚悟の光彩に彩られた瞳の下、己の銀剣を、静かに、バル・ファル
ケンの心臓に突き刺していく。

墓標を打ち立てるかのような荘厳。

だが、バル・ファルケンの命は未だ絶たれない。心の臓が動きを止めた程度では、死ねない身体。悪夢の表現。震える怒りに、口を歪ませるエーサーベインに、バル・ファルケンは軽く笑う。

「あああ、これで……、これでいいんだ……

なあエーサー……後は、ハンナは頼んだ……っ

俺は満足だ、これで、これで充分に、満足だ！」

蠟燭の最後の輝きか、

最後にそう叫んだバル・ファルケンは、音の出なくなった蓄音機を壊すように己の目と口を閉じた。

放たれる言葉はなく、ただ待っているかのような沈黙が辺りを包んだ。

エーサーベインはその言葉を受け取った、バル・ファルケンの最期の言葉を受け取った。

意志を受け取った。想いも受け取った。

覚悟も受け取った。

バル・ファルケンから離れたところに向かって、エーサーベインは歩き出す。

そこにあるのは黄金剣。

握られるのは、対象の塵さえも残さないだろう光を産む、黄金剣。

こうしてバル・ファルケンⅡノースはその50年の人生に幕を降ろした。

後に残るのは、王墓に空けられた三つの大穴。

一つは迷宮へとつながるモノ、もう一つはその反対側にある余波により作られたモノ。

最期の一つは王墓の中央、まるで奈落へと墜ちていくような形で空いたモノ。

デンザロスは別れを見た。デンザロスは命の潰える瞬間を見た。

エーサーベインは一本の黄金剣のみを握り、穴へと向かった。

気高い時間に敬礼するように蟹は己の名を呼ぶ。

「デンザロス！」

デンザロス、デンザロスと繰り返される音。

延々と流れるそれ、黄金騎士は歩きを止め、蟹を見上げる。

蟹はその巨体に見合わぬ速度で、黄金騎士の目前へと迫る。

既に「力」尽ているためか、身構えることもせず、それを眺めるだけのエーサーベイン。

蟹は鋏を出来うる限り内側に、出来うる限り己を指し示すように折り曲げ、己の名を繰り返す。

「デンザロス」と

蟹のそれは複雑ではない、遙か古代の言葉をひたすら繰り返すだけだ。

言葉ととれば、何か意味を探そうと考えられるが、そのままでは何かの音としかわからないもの。

もしかしたら自己満足かも知れないと思いながら、エーサーベインはこの巨体の威容に向かって己の名を告げる。

「エーサーベイン」と

蟹は「エーサーベイン」と音を出し、

それを認識したエーサーベインが、今度は「デンザロス」と言う。

そして蟹は鋏を降ろし。その後、エーサーベインの黄金剣を軽く触る。

鋏の大きさは一つの馬小屋ほどはあるだろう。

爪楊枝のような黄金剣を、しかし恐れず、エーサーベインは堂々と蟹の鋏へと当てる。

それでおしまい。

エーサーベインは踵を返し、チームの下へと歩いて行き。

デンザロスは、元の高い場所へと移動した。

5

エーサーベインが大穴から迷宮の通路に戻るとそこには、キメラの氷彫刻が四体あった。

そして、あの黄金騎士が一〇〇本ほどの矢に覆われ、上半身と下半身が絶たれた状態で、

無数の斬り傷に覆われて、所々凍り付きながら倒れていた。

こちらにサムズアップしてくるのは『銀鬼』とロッドなる冒険者。

傍には腰を抜かしたらしいボブが、生き残れたよ、おい。と呟いていて、

その横に形状の変わった弓を持った翼人が羽を羽ばたかせている。

全身から血を流し、ニケロットが膝を突いている、しかしその顔には笑みがある。

「いやああ、本体には分離されちゃったッすよ」

「おおお、後一步のところだったんだけどなあ」

そう話す二人によればロード・シレンカのカメラと本人を、

ロレントオの神器、ロッドの儀式大家（ネックレスを使った秘策）
翼人の秘密兵器

ニケロットの、死力を尽くした時間稼ぎ、

それとボブ渾身の突撃によってかなりいいところまで追い詰めたらしい。

エクサリオスが、早々に撤退して、戦闘に関わらなかったのも幸運だった。

ロレントオとロッドが言うには、

エクサリオスは、「私の仕事は蟹を倒す、というものでそれ以外にない。

蟹を倒すという命令をなによりも至上だと主が望むならば、それに従えばいいのだ。

つまり私が、お前を助ける理由など存在せん」と

ロード・シレンカに啖呵を切って撤退していったということらしい。

何かを聞きたい、といった様子でこちらを見てくる冒険者たちに、

エーサーベインは深く頷き答えた

「終わったぞ下賤ども」

そうして半死半生のイレエネを担ぎ、メーダの亡骸と大鬼の亡骸を

出来うる限り集め、

冒険者達は己の住み家、都市へと帰って行った。

夕刻はとうに終わり、既に夜のことである。

冒険者たちの帰還をなによりも喜んだのはハンナ・ウルフであり、

彼らの仲間であった。

これから忙しくなるだろう。

問題は山積している。

それでも今だけは、今だけは、と思い、冒険者たちは酒を飲むのだ。

死者へと想いを馳せるような、思い出を懐かしむような、

そんな哀悼の酒を。

時は深夜。

場所は王墓。

王墓には蟹と大きな機巧が二足で直立している。

背の丸い、人形、しかし顔はない、直径2 mほどの大きな球体。

正面のみがガラス張りのそれに。

ぎこちないような関節を持った、金属の手足が接続されている。

全長は4 m程か。

待ち人來たるといった風情で、その機巧人形を見据える蟹。

「まったにゃ？」

「ああ、待ったぞ」

にゃにゃあ、とその球体の内部から響く声は、猫人兼長耳族のルー。

深夜になって、やけに賑やかな都市を尻目に、

隠し部屋で一日を掛けて組み直した『鎧』に乗って、約束通り巨蟹の下に向かったのだ。

疾駆する有人機巧。

恐ろしい速度で、時に紋章により加速させ、時に催眠の神器により障害物を排除し、

時に麻痺を、時に腕の一振りによる威嚇で、ともあれ、無事に猫は蟹の下に辿り着いたのだった。

「退屈だったにゃ？」

「いや、退屈はしなかったな悪い意味でも良い意味でも……うん」

歯切れわるいにゃ、と呟くのは猫。

いやまあ色々あったのだ、と呟くのは蟹。

館ほどの大きさの巨蟹の隣、高さこそ余り違いがないが、その幅と広さでは大きく負けている『鎧』

「だが、よいものを見たぞ！」

と蟹は続ける。

「あれこそ命の可能性。生きている者が紡ぐ生の証であったな！
昔日を思い出した。

俺にもあのような時代があったことをな、『騎士』のような瞳をした人間だ。」

はあ、と呟き聞くのは猫。

デンザロスは『鎧』の方に、ともすれば円らに見えなくもないその黒い瞳をやり、さらに続ける。

「思った以上だった！」

昨日の連中も、今日の連中も、生への貪欲さ、前進への執念に欠けたところ何一つ無しっ！！

凄い戦いだっただぞ！　そして感動した！　冒険者はこのようなものばかりなのかと思うと、

うむっ！！　なんとも素晴らしきは生命の可能性かつ！」

「あんたちよっと興奮しすぎにゃあ」

『鎧』左腕の金属腕で、頭兼運転部である球体を搔く。

「これが興奮しないでいられるか……っ」

興奮しすぎたのか、腹部の傷に障ったのか、身を揺らして呻く。

そしてまた猫が、はあ、と呟く。

手順の説明を終えて、猫はいよいよだにゃあ、と言って

「さっさと脱出するにゃっ、こんな暗いところにいるずっと意味もないことだしにゃ」

と続けた。

蟹は頷くように鋏を鳴らして言う。

「そうだな、俺も準備を始めよう」

『鎧』を操作する球体に乗り込んだ猫は己の「力」を、『鎧』中に張り巡らされた紋章に流し込む。

細部まで行き届くように。

この機巧。七割のパーツは神器である。

それらは起動を始め、刻印に従い「熱」「光」を集め始める。

古い古い付き合いの己の『鎧』は絶好調だ。

咎の証でもあり、友の遺品でもある己の道具を、猫はにやにや笑いではなく、

清純な少女のような笑みを浮かべて励起させる。

この『鎧』 パーツの七割は神器である。

各関節や腕、中央の球体を構成する残りの三割は全てマッフ機巧であり、これが主導力となっている。

集中する「力」は膨大、それをコントロールするように、幾つかのギミックが、集められた「力」

全身に蓄えられた力を繋ぎ、暴走を抑える。

全長4mの金属の塊。そこに蓄えられたる「力」の量は黄金剣の何

倍か、何十倍か、何百倍か。

隣、蟹は黙想するように大人しい、

全身に入れた五つの刻印の内、唯一戦闘用の刻印ではない一種を使
い。

世界を理解し、干渉し、己の意識を没頭させている。

「力」の範囲を、量を、妙なる集中により掴もうと努力する。

集中する猫と蟹。

蟹がふと口を開く、

「なありユーレアー、俺はこの世界で、やりたいことができたよ」

「後で聞かせてくれにゃ」

答える猫、そして答えるように『鎧』が充填を完了する。

「力」の『鎧』は慢心の証。傲慢の証。罪証に他ならない。

少なくとも猫には、リユーレアーには、それは罪の象徴である。

驕りという罪。失うという罰。

そしてまたリユーレアーは『鎧』を誇りに思っている。

全てを胸に抱いて、それを傍に置くことで、己が二度と間違わぬように、

そして忘れずに生きていけるように。

それを示してくれる宝だとリユーレアーは思っている。

だから、猫よ今は昂ぶれ、天を望め、友を助けるために、それを使

え。

忘れぬことだ猫よ、『四つ耳』よ。 罪を罰を。

そしてその上で胸を張って、

愛した親友^{しんゆう}を想い、胸を張って、

——その「力」を放て！

閃くのは光。

黎明を越えた。曙光の如き光の束。

それは斜めに放たれた。

あらかじめ理解しておいた方向に向けて放たれる史上最高の暴力の一つ。

『鎧』の産んだ光は。

天井の半分と、鎧が向いていた方向にある壁と段差の半分を一瞬で消失させた。

城ほどの大きさ。

それひとつを覆いかねない極大の照射。

それは土を消し、地層を消し、一秒もかからずに、地上へと到達した。

夜。

既に就寝している農民や、宴に夢中の冒険者、貧民や一般の民衆の大半は見なかった。

そして一部の民は見た、外を歩いていた冒険者や、奇跡的に起きていた民衆は。

見た。

天へと登るような巨大な光の柱が、一瞬、丘の向こうに出現したのを。

酔っ払いの戯言めいたその言葉は、確かに現実が存在したのだ。

「力」を放った猫と『鎧』の前には巨大な穴。

というよりも王墓の半分はすで穴といっても過言ではなかった。

エーサーベインの空けた穴のある面の反対側の面の上半分と天井の半分が無く。

そこには土が見え、長い長い穴が、遙か地上へと繋がっているのが見えるのだ。

冗談のような光景。

蟹はしかし己の意識を沈めきっていた。

『鎧』は、ちょっと威力の調節ミスったにや、抑えるの忘れてたにやこりや、と思いながら。

蟹の広い背中に載る。

蟹の準備も完了した。

掴んだ「力」を己の身体に合わせ、当てはめ、一時的に再構成する。

意識——世界Ⅱ力——儀式大家・刻印法——定義…『蒼』

——；行使者『大蟹』デンザロス・デンザロス・ペンタレシア

——理解・定義・支配・操作・一時再構成

——刻印法…『天馬飛翔』——『量可』『純度可』『支配領域

可』『再構成可』起動

儀式大家…刻印法『天馬飛翔』

「力」が集まり、蟹の甲羅に集まっていく。

いや蟹が自ら集め、刻印の通りに、そして己の想像の通りに、外の「力」を捏ね、形取っていく。

生まれるのは羽。

羽の山。

甲羅の両端、そして一定の間隔を空けて、蟹の目の後ろにそれぞれ大きな羽が生まれる。

館サイズの大きな羽が、四つ、天馬の如きそれを用いて、蟹は飛翔を始める。

羽ばたく、浮く、加速する。

王墓の宙を浮き、王墓を名残惜しむように、永きに渡って使った愛着の湧いた寝具に別れを告げるように。

蟹は鋏を鳴らした。

始まるのは加速。

魔惨迷宮48層を飛び立ち、加速して、猫に空けられた大穴に行く。

終わりに見えるは地上。

空。

夜の深い蒼。

羽を生やした巨蟹と、それに載る、『鎧』に載った猫。

「相変わらずシュールなすがたにゃあ」

「ふん、カッコイイだろう？」

そんなことを囁き合いながら、蟹と猫は夜の空へと飛び立った。

上る、上る。

丘の麓、地面に空いた大穴を尻目に、猫と蟹は、高さ3000m近くまで上昇する。

下に見えるのは山、森、川、緑、遠くには海。

人の暮らすであろう迷宮都市。

眼下にあるのは全てミニチュアの如き大きさ。

遠くには地と空の切れ目、地平線が見える。

「で、次はどうすればいいのだ？」

「これから言う場所にとりあえず降りてゆつくりするにゃ」

「わかった」

一息吐き、天馬のような羽を四つ生やした蟹は

己の背に『鎧』ごと乗る猫に問いかける

「で……、あの穴はどうするんだ？」

「その内崩れるにゃ」

こともないというような口調。

沈黙。

風が鳴る。音が鳴る。

強風にも揺るがない『鎧』と蟹であった

「……それだけか」

「いにゃ、一応立て札と柵を張っておくように、部下に言っておいたにゃ、結構あぶないからにゃ」

「埋めたりは……」

「誰かがどうにかするにゃ」

にゃにゃにゃあ、と笑い声がする。

それを背に聞きながら、溜息を吐き、そして改めて1000年ぶりに出た外へと視界を向ける。

「やはり広いな、世界というものは。

命の匂いと輝きに溢れている」

世界には多くの植物と動物。

精霊と亜人と人間。

冒険者の息吹が感じられる。

それは土臭い王墓とは比較にならないものであった。

蟹は空を飛び想う。

――さて、これからどうしようか。

と

三日目 夕夜 最高位冒険者 決闘 (華麗に終了していた) 激闘(後書き)

魔軍三六将

『四つ耳』リ्यूレアー

出身不明。

魔王領首都アマリックの天下水主。研究者。

その姿は猫人の耳を持ち、さらには耳長人の長耳を備え、体長は猫人の如き、つまりは幼い長耳人のようであり、体毛は猫人のように濃い。そして頭髮だけ金色で、体毛は茶色であったと伝わる。

つまるところ混血児であり、どちらの種族にも排斥されて世に生を送ったと考えられる。

強かで冷酷凶暴、愛らしいその姿に見合わない狡猾さをもって、アマリックの暗部とも言われる下水街を支配した。機巧と魔具技術に長け、後に『小鬼』や『鍛冶』とともに三工人と呼ばれることとなる。

この世界の秩序を作った旧神への憤りと、今まで生きてきて一度も持ったことのなかった。

温かな仲間、友人関係に惹かれて『有角姫』に協力。

彼女の生まれて始めての友人が、彼女の造った魔具に目を留め近づいて来た『小鬼』ヴァウマッフであった。

その後ほぼ全ての魔将や烈士とも親交を交わした。

一説によると魔導と魔法それぞれの技術を組み合わせた『神器』理論の生みの親とされる。

その技術理論が後世に与えた影響は大きい。

天上戦争においては独自の魔具群と、『小鬼』から借りた兵器を使い戦った。

天山攻略では、『大蟹』や『小鬼』『侍女』とともに北東から侵入。自らの失敗で『小鬼』の命を失わせることとなる。『小鬼』を失った彼女の慟哭は天山中に割れ響き、彼女は深い悲しみに陥った。

それを乗り越え、小鬼の遺品に自らの培った技術の粋を加え構築した決戦兵器こそが、

儀式併合型・神式マッフ機巧『鎧』に他ならない。

史上最高にして最強の魔具の一つである、その『鎧』によって、

リューレアーは、『雷神』エンベルグ 『歌神』マーレ 『魔導神』ヴァオルグ・ベイの高位三神を消滅に追い込んだ。

新暦においては、『魔工準神』として研究者や鍛冶、恩恵に預かっている高位冒険者に信仰される。

『小鬼』とともに魔将であっても広く信仰されている数少ない内の一人。

本人は、世界中を旅していると噂される。

四日目 早朝 とりあえずの後日談 そして始まり

1

早朝の魔惨迷宮。

迷宮管理組合、組合長室には二人の男女が顔を会わせていた。

一人は、最高位冒険者ロード・エーサーベイン。

そしてもう一人は、迷宮管理組合組合長、元最高位冒険者ハンナⅡ
ウルフ。

357

エーサーベインが、本棚に囲まれた組合長室に入れば、
そこには何時も通りの気丈な顔をしたハンナⅡウルフがいた。

彼女は、朝から仕事をこなしていたのか、椅子に座り、机に向かっ
ている。

外は一面の雪。

昨日降り始めた雪は、深夜により一層激しさを増して、一時は視界

が全く利かない程であつた。

今は晴れ、太陽が清々しく地上に向けて顔を出して、雪は光を反射してきらりと光っている。

魔惨迷宮の上空だけが蒼天に包まれているような奇妙な青空は、しかし心地よい。

——強い女だ、やはり。

仕事に向かうハンナⅡウルフの顔を見て、エーサーベインは改めて思った。

エーサーベインが昨日、帰還してまず最初に行ったのはバル・ファルケンⅡノースについての報告であつた。

それを受けたハンナⅡウルフは、顔を俯かせ、部屋から己を追い出し、一晩中だれも近づけなかった。漏れ出る音は、嗚咽か、涙、男勝りな女傑の心に去来したものは何だったのか。

しかしそれを顔に出さず、こうして早朝から仕事に励むその心の強さはやはり、尊敬に値する。

エーサーベインはそう静思した。

エーサーベインからの視線を煩わしく思ったのか、赤毛の魁傑は顔を上げ、妙に気まづげな己の後輩に目線を向けた。

「別に恨んでない、って言ったら嘘になるかも知れないけど」

貴方に看取られて幸せだったわよ、あの親父は、多分。と言葉を作るハンナ。

泣き腫らしたであろうその瞳は、いつもよりも厚い化粧に覆われて、いつも以上に健康そうに見えている。

「本当は未帰還者になった時に諦めていたもの……、だから気にしてないわ」

エーサーベインは息を飲む、微笑むハンナⅡウルフの気丈な美は、しかし悲しみを表しているように見えたのだ。

だが、彼はなにも言えない、己にその資格はないのだ。エーサーベインは諦め沈黙する。

しばし、目と目を合わせたあと、ふと思い出した、といった様子でエーサーベインが口を開いた。

「なあハンナ、俺は新しくギルドを作ろうと思うよ……、俺のギル

ドだ」

初めて聞く話に、ハンナⅡウルフはぼかん、とする。

一匹狼の傲慢な独身貴族。

そのエーサーベインが、人を集め、人に教える、人に関わると言うたのだ。

古い馴染みであるハンナⅡウルフの驚愕は計り知れない。

そしてその理由を考えれば、多分それは、昨日最後に戦ったという髭面の男との……

「どうして？」

そう思ったら、ハンナⅡウルフは言葉を作っていた。半ば無意識であった。

暖炉はパチパチ、と音を鳴らす。蒼の日射しと雪の反射光が窓から入り込んでいる。

「今回のことで、多くの上位と高位の冒険者を失った。

そして未熟な冒険者が多く残った。ならば、ならば俺もおっさんのように、

誰かを導いてみるような、そんなことを少しでも出来るのではないか」

と、呟く。心境の変化は別れか。あるいはその時に何かあったのか。

「凄い心境の変化ね……、あの人も喜ぶわよ、これを聞いたら」

ハンナⅡウルフは満面の笑み、燃えさかる美貌が、童女のように自然に、淡く微笑んでいる。

「メンバーは？」

「昨日、帰還を記念して酒場で飲んだんだ、珍しく俺も参加した。

相変わらず酒臭いすえた匂いの、俺には似つかわしくない場だった。

それで、その時に『銀鬼』がな、一緒に飲んでいたんだが……参加したいそうさだ。

あとはあの翼人の女に、ニケロットとかいう斧男、あと槍の……なんだったか。それと緑髪の女だな。

……この5名と結成することにしたよ」

あの影の男も加わってくれば良かったんだがな、というエーサーベインはハンナではなく、横の本棚に顔を向けている。

本当に作るのね自分のグループを！　という母親のような感動の眼差しを見せるハンナに。

傲慢なエーサーベインは、しかし俺に本当に出来るのかな？　というような幼子のような不安な表情を見せている。

出来るわよ貴方なら、とでも言うようにハンナは媚容けんようを崩し笑い。

エーサーベインは、自らの黄金の髪に手を当て、それを掻いて、うむ、と呟く。

幾つかの会話、報告の後に決まったことは、

・バル・ファルケンⅡノースのは先の未帰還認定のまま、昨日、敵として現れたことは公表しないこと。

・派遣隊はロード・エクサリオスとロード・シレンカと接敵し、2名の死者を出したがこれを打ち破り撤退に迫り込んだこと。

これを『事実』として発表すること。

細かい報告を受け、戦闘の経過、以降の情報操作についての作案構築、

新ギルド・グループ結成の認可証を制作していた、ハンナⅡウルフの隣で、

ふっ、と思い出したようにエーサーベインが笑った。

怪訝な顔をするハンナⅡウルフに対してエーサーベインは述べる。

「蟹の名前らしきものを思い出したのでな」

昨日の奇妙な接触、あれが名前だと決まった訳ではないが。

（もしかしたら『蟹の鋏』『俺はザロス』という意味かも知れないのだから）

しかし、何かを交換するかのような暖かさを覚えたのは事実だった。

それ故の笑み。

ハンナⅡウルフは蟹に知性があり、意志疎通が可能であるかのようなその発言に驚き、先を促す。

「で、その名前は？」

「デンザロス」

だ、そうだ。と続けるエーサーベインをハンナⅡウルフは既に見ていない。

それに気付いて訝しげな顔をするエーサーベインは、本を取るなど滅多にない典型的な冒険者であり。

本を読むハンナⅡウルフが、最近読んだ本はエンゲルス・バッキオスの『神話・物語録』である。

目を見開いたハンナが、驚愕の悲鳴を上げるまでの時間は、そう短いものではなかった。

こうしてようやく、迷宮を騒がした『大蟹』の正体が判明したのである。

2

ロッド・エヴァンスは家に帰り、帰り着くなり同居人のお叱りを受けていた。

その激怒は、ガラスが揺らめき、岩が砕け、地が割れ、置いてあった花瓶が宙を飛ぶような大激怒であった。

「もう、本当に心配したんですからねっ！ ロッドさん」

「へーい、っす」

とおざなりに答えるロッドの顔には疲労困憊。

器の「力」は空に近く、肉体的にも精神的にも連日の酷使と戦闘。なによりも目の前の少女の怒りが作る疲労困憊。

顔には死相。っす、っす。と繰り返す病んだようなロッドの疲れた顔。

「全く！ せっかく作ったシチューもっ！ 無駄になっちゃったんですからね！」

お隣さんにお裾分けできなかったら、全部駄目にしちゃうところでしたよっ！

そうぶんすかぶんすか怒る少女を後目に入れつつ。

彼女が作ってくれた、スープと卵焼きを口に運ぶロッド。

彼が思うのはこれからのこと。

冒険者の皆には、口止めをしてある。

影がその姿を現すのは、当然のことながら軍規に違反している。
厳罰は免れまい。

だが、あの場に、己の他に影はいなかったと判断できた、
少なくともロッド・エヴァンスが感知できないほどの手練れの影を
上司が隠し持っていなければ、の話ではあるが。

だが、情報とはどこから漏れるかわからないモノだ。

冒険者として完全には信用ならない。

いつ苦難が訪れるかも解らない、判断は嚴重に、そして速やかに。

ロッド・エヴァンスは考える。

考えつつ思い出すのは昨晚のこと。

久方ぶりにこのみすばらしいアパートに帰ってきた時。
ただいま、と言ってドアを開け、ロッドが目撃したのは、

目に涙を溜めながらこちらに飛びかかって来て、

「心配しましたあ……心配しましたよおお」とわんわん泣く一人の少女だった。

その時の情景、その時の少女の表情。その時に彼女の感情。

悲しみ、嬉しさ、そんなものが入り交じった心の底からの心配の涙。

それは失いたくないモノ、それは尊いモノ、ロッドはそう確信した。

いまは視界の隅でぷりぷりと怒っているメイニー・ランチェットという一人の少女。

彼女を守り、彼女を見守る。そのために、己に失敗は許されない。

そして昨日、得た感情。あの喜び、取り戻した冒険者として生きる喜び。

その二つを両立するためにはどうすればいいのか。

ロッドはそんなことを考えていた。

——退職届とか大丈夫っすかね。都市追放を条件に、むむむ。

上司は厳しい、闇の仕事、軍の影だ。果たして己はこの仕事から抜け出せるのか？

あるいはどんな抜け出すための手段があるのか。

そう悩み、むく、と言っているロッドを見て、言い過ぎたか、と反省するのはメイニー。

メイニーの怒り、心配、悲しみ、そういった感情のうねりもようやく落ち着いたのか。

彼女はいつものような朗らかな声音で、昨日から気になっていたことを尋ねる。

「そんなに大変な仕事だったんですか？」

そう明るく尋ねるメイニーに、ロッドは、考え事をひとまず置いておき、答える。

「えっ……ああ、そうっすよ！冒険者稼業も楽じゃあないっすからね」

「でも、いつもは仕事の後は凄い暗い顔してますけど、今日はとても顔が明るいですよ！」

そう言った少女に、虚を突かれたのは一人の男。

自らの顔に手をやり、そしてにこにこ、と微笑んでいる少女に顔をやる。

——見られてるもんっすねえ

そう唸るように感動し、少女の目に、己の目を合わせる。

「メイニーさん、明日にでもまたシチューを食べさせてくださいよ」
そう清々しく朗笑するロッドに、はいっ、と頷くのはメイニー。

何時しか空気はほどけ、いつもと同じ、日常の気安さが戻ってくる。

「ねえ、ロッドさん知ってます？ 迷宮には勇気を試す伝説の魔物
がいるんですよ！」

陽は明るい。空は蒼く、空気は澄み、やけにのどかな雪の色。

それはうらかな朝的一幕であった。

「おお！ ……これが外か！！」

そう言葉を作るのは銀に輝く鎧を身に纏い、

『神の金属』により造られた剣と盾を背負っている迷宮の騎士。

「あれが緑、あれが太陽、あれが空……うむ、本当に蒼いのだなあ」

長い長い土の穴を、強化した脚力をもってしても数時間掛けて登り続けたその果てに、

ロード・エクサリオスと配下の黒長耳族2名は外の世界へと出ていた。

生まれたのは迷宮。

生まれたときには既に、冒険者たちが10層以上を己の支配圏に置

いていた。

齡200才の二本角の騎士は、
長軀を震わせ、武骨と誹られることもある己の顔を柔らかく歪め驚
嘆していた。

これが、彼女の始めてみる外の光景なのだから。

茶色や黒、赤といった色ではない。

緑、青、白、黄。

遠く山嶺に僅かに見える緑、紅葉した色とりどりの紅、黄、橙。

空は蒼く蒼く澄み渡り、清浄が視界に染み渡っている。

世界を包むのは遙か天にある光そのもの、即ち太陽。

地を覆うのは白い雪、光の反射もまた黄色。

彼女たちは、迷宮にあれば冒険者を血祭りに挙げ、恐れられるエクサ
リオスは、

童子のように、胎内から出たばかりの赤子のように、世界の大きさ、
広さ、厚みに圧倒されていた。

何もかもが新しく、何もかもが瑞々しい。

主が世界を望むのも、これでは無理がない。

——こんな、こんな世界があったとは

と、ただただ感嘆する。

背後には、一軍全てを落とし穴に嵌めることも可能であろう大穴。

そしてぜえぜえと息を吐く、二本杖の黒長耳族の少女。

平然としていながらも、表情には不安を滲ませた四本の剣を背負う黒長耳族の少女。

彼女たちも、始めて見る太陽の明るさ、空の眩さに目を痺れさせつつ。

己の主へと不安を問いかける。疑問を形にする。

「……よ、よろしいのですか？」

……うう、外怖い。と呻いている気弱な少女の後を継ぐように、

委員長気質の少女がことばを口にする

「その……。勝手に迷宮の外に出て行かれて」

その……。ロード・シレンカも多分貴方をお呼びになりますでしょうし。と言いくそような少女。

一人、性格に似合わないような素朴な感動に浸っていた200歳は、振り向き、

一点の間違いも犯しておらず、何一つ誤ったことはしていないという表情で胸を張って。

己に素直に、己の正しさを確信するように部下の二人に言う。

「なにを恐れることがある……。っ！」

私の主に対する忠誠に一片の陰りもない。私は主を崇拝している。

だからこそ、私は蟹を探し出して倒さなければならないっ！

何年かかろうと！ 何十年かかろうと！ 何百年かかろうともだっ！

未だ主から直接の命令変更が下ってない以上、未だ主が私に蟹を倒すことをお望みである以上

忠誠に一片の陰りなき私は、その命令をなにがなんでも果たすため
に行動しなければならないのだっ！

ロード・シレンカが私を呼びつける？　主が私をあのヒキガエルに
下賜する？

結構！　それが主の思し召しなら血反吐を吐いてでも従おう！　あ
あ従うとも！

ただし、主の命令は未だ変わっていない、蟹は外に行った、なら私
も外に行く！

完璧だ！　論理的な矛盾が一切無い！　当然の帰結だ！

その決断を、一度も主の下に戻らずに行うのも、速やかな判断が必
要であったからだ！

そう！　私の行いは全て忠誠心ゆえにあるのだッッ！」

そう一息に言い切った迷宮騎士の顔には、一切の迷いがない、とも
すれば清々しかった。

冬特有の清澄な空気が、辺りを沈黙とともに包む。

騎士は歩み始め、圧倒されていた委員長気質の少女は、それに慌て
て付いていく。

四本の剣を背負った黒長耳族は、地面を見ながら、エクサリオスの
傍に侍る。

遠からずこの大穴は都市によって封鎖され、

埋め立てられるか、整備されて利用されるだろう。

しかし大穴が都市に管理される前に、

この大穴から旅立っていった一行があるのを、

太陽の他、誰も知らない。

そこは、温暖であつた。

冬の景色と気候へと完全に変わりきつた、北の大地とは違った世界。

大陸の南。

大連峰の南側、楽園のごときゆりかごと呼ばれる半島。

山と山の間。そこにある花畑を、ゆっくりと進んでいく巨大な要塞の姿があつた。

要塞の背には猫のような長耳族のような童女。

その背後には、球体の乗り込み口が開け放たれている『鎧』

要塞は大蟹である。

館の如き巨体の上に『鎧』と猫を乗せ、それでもその甲羅には未だ膨大なスペースがある。

猫は一面の花畑を見て、にゃああと欠伸をしている。

まるで猫のように丸い姿。

長耳族の童女が大きな獣に包まれているかのように見紛う寝姿。

陽光は温厚そのもの。

温かいのだろう、丸くなろうとしていた猫娘は、丸くなるのをやめ、そのまま甲羅を背に大文字で寝転ぶ。

厚く濃い体毛と模様の全てを世界に見せつけるかのような寝姿。

その身長を考えれば、破格の大きさの形の良い胸部も、

腰のくびれも、太股のたくましさも、そして素朴な長耳族の天使の如き微笑みも、

その全てを見るものは、太陽の他にない。

「なあ、ルー」

「なあああんにやあああ」

ふう、と息を吐き目を瞑る猫。

「なぜ全裸なのだ？」

「みるものにやんて誰もいないにや、あんたも背には目が届かないにや！ 知ってるにや」

「見ることができるなら、俺が好き好んでお前の裸体を見るだろう！

という前提を勝手に作らないでくれないかルー？」

にゃあ、そうかにゃあ？

という蕩けたような声に呆れながらも、花の海を、出来うる限り壊さぬように進む蟹。

暗い下水も大好きだが、

服を着ていると暑く感じられるほどに元気な太陽の下にあるのも、リューレアーは大好きだった。

「というか暑すぎないか？」

暗い海底は好きだが、

服を着なくても暑く感じられるほどに元気な太陽の下にあるのが、デンザロスは凄く苦手だった。

花畑はまるで一つの世界として完結して見えた。

あるのは綺麗で、時に毒々しい、ただ美しく儚い世界。

猫は伸びをして、太陽に手をかざす。

「んで、どうするにゃ？」

やりたいことが、見つかったとかいってたにゃ？

その疑問に、返ってくるのは沈黙。

蟹の移動する揺れ、遠く遠く一国の範囲に咲き乱れる花世界を風が泳ぐ音。

しばし黙止の時間が続き、蟹は意を決するように音を生み出す。

「なあルー」

「なんにゃ？」

「俺は見たよ、輝く生命の可能性を」

「にゃ」

「俺は見たよ、前を進もうとする冒険者の生き様を」

「にゃ」

「俺は思うよ、己にもあのような前を向いて、やりたいことをやって、時に悔やみ、時に悩んで過ごすことが出来たらそれはどれだけの幸せかと」

「にゃ」

「俺は思うよ。眠りから覚め、再び世界に起きた己にも、やりたいことができたのだと」

「それは？」

「ルー、俺は冒険者になろうと思うのだ」

――第一部 『蟹の前日譚。あるいは冒険者と迷宮と生き様と』

―――
第二部
『少女と蟹の話』
へ

完

四日目 早朝 とりあえずの後日談 そして始まり（後書き）

魔軍三六将

列伝

『大蟹』 デンザロス・デenzaロス・ペンタレシア

インザーディオ サヴォーナ河畔出身

人間の背丈を超える高さ。一つの屋敷に匹敵する幅と長さを誇る機動要塞。

つまりは巨大な蟹である。

こう見えても言葉を解することが出来る優秀な魔獣であり。

特に優秀な儀式大家でもあり、飛翔と海嘯の儀式と概念を司る。

五種の刻印を誇り、圧倒的な防御力と機動力の駆使するその戦法は非常にえぐい。

闘争においては『鬼王』に劣り、儀式大家においては『大猿』『海王』に破れ、

速度においては『竜公』に届かず、防御においては『大亀』に一步譲るものの、

攻防速魔、その全てに通じるその戦闘力は、まず間違いなく魔軍三六将の内でも高位に位置するだろう。

その意志は高潔、その志は不屈。

よくも悪くも純朴で、そして感動屋でもある。

生命の可能性、自律意志というものを特に大切にしている。

『有角姫』と『九烈士』との出会い、その他の魔将との出会いから、生命に飽いて、世界に抱いていたある種の諦めから脱却し、地軍に参加。

天上戦争においては機動要塞として多くの戦線に参加し、盾となり、仲間を運んだ。

確かな判断力と突破力で、神僕や神の兵器を多く死に追いやり、また、戦争の最終局面では『闘迅』焰を溺死させ、『司法』デボネックを圧死させた。

新暦においてはどこかの洞穴、地殻の奥深くに姿を隠したとされる。『水の神僕』として一部で信仰されており、また魔王領においては水の守護者である。とされる。

この列伝は、エンゲルス・バッキオス著『神話・物語録』――第一五卷

付録「早わかり烈士・魔将列伝」より引用させて頂いています。あしからず。

後書き、次回予告、報告 謝辞

序章完

ここまで読んでくださってありがとうございます！御座います！。

行と行の間隔、誤字脱字、変な文章、色々にご迷惑おかけしたかも知れませんが、

描き溜めゼロ、ノープロット、実は設定もかきながら考えていました。

どうにか着地できたと思います。

とりあえず、魔惨迷宮篇はこれで終了。

この後も勿論冒険は続きます。いえこれからが冒険の始まりです。

次回からは、冒険者に憧れて小さくなった蟹さんが、冒険者志望の村娘と出会い、

彼女と一緒に、大陸一番の難度と、規模を誇る迷宮に行くという話を、予定しています。

（リクエストがあるのなら、違う話でもいいですよ）

今度は、真つ当な冒険ものになりますね、浅い階から深い階にもぐったり、酒場やクエストをぼちぼち受けたり

少女ときゃっきゃうふしながら、もっとミクロな冒険者の生活、蟹の冒険者生活などを描けたらなあ。と

後少女は、信仰心に厚いので、この世界の信仰についても描けるかもしれませんね。

実はSだけど、いろいろあってBな蟹さんと一緒にダンジョン潜り。クエストを受けたり

地味な相手に苦戦する少女！（ゴブリンとか、蝙蝠とか）色々と言したりする師匠役の蟹さん！

昔の友人を娘さんのために連れてきて、師匠役をさせたりします。サイズは人2人が乗るのに丁いい大きさを想定しています。

ゴブリンと、エルフと獣人のハーフの少女の友情物語とかも書きたいですね。

あと明後日から学校が始まるので、更新速度も大分落ちるかも知れません。

とはいえ10日で十二万字、書けたので作業効率が一割に落ち込んでも、

一週間で一万二千字は書けることになりますので週二回くらいの更新を予定しています。

（実際はもっと多くの更新ができるかもしれませんがね）

最後に、こんな場末の小説を読んでくださって本当にありがとうございました。ございました。

お気に入り登録も、感想も、アクセス解析で上げたら増えるユニーク人数も、その全てが励みになりました。

ああ、読んでくれてるんだなあと思いととても嬉しかったです。

この励みがなかったら途中で投げ出してた気がします。

しつこいぐらいですが、本当にありがとうございました！

蟹と少女の出会い、出発。

——まさか1000年以上会ってなかった相手の第一声が、

「俺の身体……小さくしてくれないか」

だとは思わなかったわね——

大陸南方　ゴルシュナメルク島にて　ある高位長耳族の

眩き

1

大陸南西部　ロートランド公王国は小国である。

とはいえその狭い領土は潤沢な土壌の平野部と、自然の恵みに事欠くことない母なる森林を備え。

西方に世界最高峰のタンボルグ山が望め、南には大連峰が有り、ロートランド大川が中央の内海に向かって流れている。

およそ肥沃な土壌といえる条件の全てを併せ持っており、その農業生産は、小国ながら侮れないものがある。

小村、山村が多く、そこに公王国の主要な階級である村民が住んで

いる。

彼らは畑で作物を作り、森で狩猟し、時に川で魚を釣る漁民にもなる。

彼らのもたらす食料を使い、首都ロートランドの王や大臣は近隣諸国と貿易を執り行い、国を富ませるための様々な政策の財源としていた。

また、南西にある大連峰とタンボルグ山の境、モレアス自治共和国からは、

大連峰を迂回した南の旅行者、行商人、貿易者が入り、タンボルグ山を避けた西の交易者や旅人も、ロートランドに入る。

貿易の経路、あるいは中継都市としての首都ロートランド、そして狭いながらも肥沃芳醇な地味もたらす高い食料生産の領内。

ロートランド公王国は端的に言って、恵まれた裕福な国であった。

さて、話はそのロートランド公王国の一つの村で始まる。

時は夕刻。 逢魔が刻とも呼ばれる時間帯。

春になり繁茂した森林の生命に、不吉な赤い夕陽が差し込み、朱と緑が入り交じる、

なんともいえず混沌とした原初の不安を感じる時分。

「っ……はあはあ………は、っは?!」

鬱蒼と茂る森の中、追われるように逃げる一人の少女の姿があった。

いや、その姿は正しく、逃亡の為の疾走であったのだ。

まるで屠殺を察知した豚の逃げる様。

みつともなく、息を切らせ、呼吸を乱しながらも、足を動かす。

向かう先は、より深い緑界。

春を迎えて生命を謳歌する森林の中、駆ける少女の未来は、いま途絶えようとしていた。

追う者は亜人。獣型の亜人だ。

その亜人種の中でも特に低知能な種であるのだろう。
言葉はなく、飢えた狼のような吠える音だけでコミュニケーションを取っているようだった。

その正体は犬人^{コボルト}

低知能の亜人、犬のごとき、狼の如き面貌と、野生を併せ持った種族。

その多くは、森や山に潜み、少ない数が迷宮にも棲んでいる。ときおり民家や旅人を襲う生来の無頼漢とも知られていた。

いま彼らの犬面、狼面には下卑た欲望に彩られている。

その数は6。何処ぞの群れの狩猟隊の一班か、彼らは獲物を狩り捕らえるために、南の大連峰の方面から、この辺りに出張したのだろう。

そもそもこの辺りに犬人は滅多に出現しない。亜人の脅威など無い、平和な森。

逃げる少女が、一人（少女は何時も一人だ）

いつものように森の奥で山菜や果実、ついで若い枝を採取していて問題はなかった。

はずだったのだ。しかし今日の森林には野蛮な侵入者がいた。

少女はそれに気づき、一目散に逃走を計ったのだった。

それから数分が経過し。

駆ける少女と、追う者の距離がぐんぐんと縮んでいるようだった。

ワオォーン、というような歓喜の遠吠えを謳う獣たちを後目に。

少女は駆ける駆ける。

脚を動かし、手を動かし、脚を取られたら一巻の終わりと頭を動かす。

その年齢はおよそ10代の前半というところだろう。

駆ける速度は健脚。歳と性別を考えれば恐ろしい程の速さで、己が熟知している森林を駆けている。

平均以上の運動能力、地の利、それがなければ、とうに捕まっていただろう彼女の顔は必死に歪められている。

涙、鼻水、顔をくしゃくしゃにして、本来なら気丈な類の、筋の通った清廉な美を醸し出すであろうその容姿に、見る影もない。死に際の梟。あるいは死地を悟った魚の如き瞳。

それでも諦めずに少女は駆けた。肩まで伸びる金の髪を揺らし、必死に走る。

しかし鬼ごっこには何時か終わりが来るモノだ。鬼たる獣たちは少女を捕まえる。そして、この鬼ごっこに交代はない。

スタミナが切れ、速度の落ちた少女は、距離を詰めてきた犬人にその身体を木に叩き付けられていた。
まな板にこれから捌く鯉を載せるような乱暴で乱雑な動作。

「っ……かはっ」

と衝撃に淡く呻くのは顔を歪めた少女。

しかしその瞳には諦念はなかった。

意地、危機に瀕した少女の氣勢。

とはいえ少女を木に押さえつけた犬人の周囲に、追いついた他の五人が集まってくると、その瞳の意気も急激に失われる。

手間を掛けさせやがってという表情で顔を歪める犬人。

そこにあるのは喜悦、原初的な欲望。支配を行うということへの恍惚。

舌なめずりする彼らの巢に持ち帰られる少女の前途は悲惨である。
その先にある未来とは苗床。孕み腹。望まぬ欲望の解消のための道具と墮す、尊厳なき生。

少女の首元には何時しか犬人特有の長い舌が這わされ、
その毛と肉球を備えた手は嫌らしく猥雑に、まだまだ未発達な蒼い胸に這わされている。

そして隆起した己の欲望を、少女のスカートに、太股に、股に、さ
するようこすりつけている。

見れば周囲の五匹も、己の股間をむき出しにしていた。、そこにあるのは毛がびっしりと生えたそれぞれの獣人の愛子。

匂い立つのは凄惨な予感。獣の如き野生の欲望。青臭い、そして獣臭い野蛮な性愛の空気が六匹の獣の間に立ちこめていた。

己の巢へと持ち運ぶ前に、前菜を摘むかのような調子で行われる、強制的な狂欲の宴。

「っ……っっ」

と微かな恐怖、己の終わりを少女が自覚するかのように、ふるえ、いやだ、いやだ、と声を出したその時。

「ふむ、その者たち、少々尋ねたいことがあるのだが」

と、音が吹き抜ける。

音は言葉だ。新帝国崩壊後に主に各地で使われている方言の中で、最も共通語的な方言と見なされているエミダリ方言を巧みに操っている。

（言語学的な意味での方言とは、標準語という仮想の理想ではなく、それを基底として各地で話されている現実の言語を言う）

姿は蟹である。

大きい。しかし大き過ぎはしない。

身長150cm半ばという背の少女の腹ほどの高さ。

横の幅は、少女が二人も載れば満杯になるというような大きさ。

当然のことながら、その幅の多くは甲羅がとっている。

色は蒼。鬱蒼と茂り乱れる植生の王国においては一目で珍客であると分かる程度には
その森という情景に合っていない蟹である。

響いた声に、振り向くのは人型の獣、六匹。

狼そのものの形相で、唸り、吠え、睨み、牙を軋らせる彼ら。

絶対の警戒態勢。

その反応は、どうみても言葉が通じているとは思えぬほどに獣に近かった。

蟹のかつての仲間に『海月』というものがいるが、その群体生物にも遠く劣るようなその身振り、知性というものの縁遠さを感じずには入られない、野性の存在であつたようだ。

「ううむ、困つたなこれは……、言葉が通じておらぬのか？」

と、呟く、遠く聞こえるのは呻く声、押さえつけられ、服装を破かれて、己の大人しい胸を空気に晒している少女の声。

——た、たすけてっ。

「ふむ、私は生の可能性の追求者、それが野蛮な欲望であろうとも、自律意志に基づいたのなら温かく見守りたいモノだが」

……生命の可能性とは醜い欲望を含んだ自由のことなのだから。とはいえ、その六匹の獣は言葉が通じない、そして通じるのは一人の百舌の早贄のように射止められた少女のみ。

彼は尋ねたいことがある。彼らでは不適任で、彼女は適任だった。

「うむ、すまんな獣諸君！ ……なに命までは取らんよ、俺は」

自らもまた、一人のプレイヤー、世界というモノを新しく生きると決めた。

生の営みの参加者。ならば、己の利益の為には越えなければならぬ障害というものも現れるだろう。

そして障害とは除けられるモノだ、己の利益と目的のために、それが生というもののだから。

眩きと共に、獣へと猛然と突進する蟹。

そこに恐れは微塵もなく、敗北への不安も一切見えない。

鋼鉄の弾丸。残像しか認識できない超速度に乗った甲殻が、猛然と獣へ突き進み、そしてぶつかった。

蹴散らされるのは獣。

蟹のとしての牽制の一撃は、しかし数匹の獣を吹き飛ばし、その足を砕いた。

少女の傍へと侍った蟹は、人間の如き太さの脚をもって、その速度

を作り、
そして人間の腕を幾つか束ねたかのような大きさの鋏を振り回し、
幸運にも蟹の突進を回避できた二匹のコボルトの脚の腱をを剪み、
斬る。

ザッパア、と鋏が入れられ、脚が紙であるかのように、すっーと、
断たれる。

辛うじて幾つかの筋肉繊維と皮だけが残ったというよう有様。

蟹はその瞳になんの感慨も浮かべず。

豆腐に包丁を入れるような自然さで、鋏を入れている。

激痛。満足に歩けぬ未来像。死よりの残虐。

しかし蟹にとっての精一杯の手加減であった。

彼にとっては、未だ慣れぬ、矮小に変身した己の姿。

その中で取れる、最も操作性の高い攻撃が鋏であったのだ。

器の「力」を用いた想像法や、紋章法では、即死は免れない。
突進では不慮の死があり得るため、つまりは生命を不用意に奪う可

能性がある以上、多用はしたくない。

その点、鋏ならば、暗殺者が人を殺し、蚊が人の柔肌へと浸食するように、簡単に、命までを取ることのない致命傷を避けての攻撃が可能なのだ。

……とはいえ、その先にあるのは死よりも辛い激痛と不便の生活かも知れないが。

蟹にとってはどうでもよいことであつた。

奪うと決めたなら迷わない、その不断さは蟹の特徴の一である。

既に犬人^{コボルト}は恐慌とともに姿を消し始めていた。

ある者は仲間を抱え、ある者は木を伝って、森に逃れる。

安寧の狩りを、一転させて破壊した。

奇妙な姿の強者から逃れるために。

速やかに目的を遂げた蟹は、呆然と、己の運命を救出した蟹を眺める少女へと話しかける。

「ふむ、無事か？」

「えっ、あ……っ、無事……よ、一応」

そう顔を赤らめた少女は、泣き腫らしたモノ特有の気怠さに満ちた表情を取り繕うように、強気な表情を作る。

乱れ晒された己の身体を急いで整えるその様は、隠しきれない可愛げを伴っている。

ぴよこぴよこと動く頭、顔には羞恥と感謝、そしてそれに素直になれないことからくる熱が灯り。

ついには顔をそらして、蟹に向かって呟いた。

「えう…… そのっ……ありがとう………ました」

後半は消え入るような音で、多分本来は強気な少女の精一杯の礼儀。
未だに混乱から立ち直っていないようだ。

蟹はしかしそれに頓着しない。

「なに、礼はいい。……こちらにもこちらの事情があったのだから
な」

そう呟く蟹、未だ混乱と恐怖が抜けていないだろうに、必死に己を
取り繕う金髪の村娘の姿は愉快であった。

とはいえそれを何時までも何時までも観察している暇はない。時間
の無駄だろう。

無駄にも滋味があるが、その滋味を味わっているようなシチュエー
ションでもなかった。

「さて、聞きたいことがあるのだが」

「え、えっ、ええ、な、なんでも聞いてちょうだい」

「エミダリへの道はこちらでいいのかな？」

髪に手をやり、それを整え、表情の陰も幾分とれた少女の戸惑い。

（この蟹、喋る）

という素朴にして重大な疑問。驚きもある。

しかしそれ以上に、彼女が戸惑ったのは、あるいは天啓を感じる程に驚いたのは。

――エミダリ

大陸の中心。地理的に文化経済的にも、そして歴史的にも世界の中であり続けた。

由緒で凝り固まったような大都市である。

この奇妙な大型の蟹は。少女が生まれて始めて見た喋る魔獣は、そこに行きたいと述べている。

この蟹どうやって声を出しているのかしら？ と考えながらも、返す言葉を考える少女。

その表情は真摯。期待。歓喜に塗れている。

蟹という魔獣を目前に、その対応を二の次にするほどの強い意志の発火。

少女は気がついたら不眠にも、質問の声を発していた。

「あんた、わざわざエミダリまでなにしに行くの？」

うつすらとした期待、ときどきと鳴る胸の音。

エミダリ、エミダリ、その名前を、そこへの行き方を、彼女が知らない訳がなかった。

彼女が恋い焦がれたのもまたエミダリなのだから。

蟹は、鋏を掲げ、その黒く、どこことなく愛嬌のある瞳で、こちらを見据えた（ように少女には見えた）

「当然、冒険者になりに行くのだ」

そう音を作った、蟹の最新型音声変換紋章の音に、しかし少女は喜びと戸惑いの表情を浮かべた。

「そう！ もちろんあたしも知ってるわよ、エミダリの場所。あたしもそこに用事があるの」

蟹は、鋏を鳴らす。

少女の威勢に何かを感じたか、愛らしくも燃え上がるような瞳の中の、意志の火を眺める。

「あたしの用事も、冒険者になることよ！」

これが、長い長い付き合いになる、一匹の蟹と一人の少女の出会いであった。

彼と彼女は、此処に始まり、これから多くを共に見て、共に歩くことになるのだが。

その奇妙な運命を知るものは、しかし未だ誰もいない。

「背中に乗るがよい」

という蟹の言葉に従って、少女は蟹の甲羅に座っている。

蟹の脚は、巧みに木と根を選び分け、森林をそれなりの速度で進んでいる。

少女を、村に送り届けるのと、これからどうやってエミダリに行けばよいのかその詳細を聞くためである。

少女は先ほどからどうしても気になっていることが一つあった。

些細な疑問。

——どうして、背中にリュックがあるのかしら？

二本の紐がX字に蟹の甲羅に縛り付けられており、そのXの交差点に大きめのリュックが一つある。

「ねえ、この荷袋リュックなんだけど」

「ん？ ああ……、中に飴ちゃんはいってるから開けて食べても良

いぞ」

弾むような声。げんなりとした少女の声。相手をするのも面倒そうに少女は答える。

「あたしは子供じゃないわよ……」

「ふむ、俺からして見れば幼児に毛の生えたようなものだ」

蟹の歩みは続く、少ない揺れで、上半身を巧みに運んでいる。

脚裁きの熟達。四本の脚を見事に動かす。

進むや、進む、山を森を歩く蟹は堂々とした足取りをもって進んでいた。

そしてまた少女の、素朴な疑問。

「このリュックどうやって開けるの？」

「む…… なんだ、その」

親切な人に…… と呟く蟹の声は小さい。

冒険者に荷袋は必需品であるという情報が先行して、後先考えずに知り合いに作ってもらった荷袋だ。

当然の話だが、背中に鉢は届かないし、蟹は触手だとか手を持っている訳ではない。

多分これを用意して巻き付けた旧友連中は知っていてやったのだろ

う。

揃いも揃ってそういう奴らしいのだ。

「わかったわ！ あんたアホなのね」

「傷口に塩を塗り込むような真似はやめてくれないか？ レディ」

ふとそこで気付いたのだろう。

少女は気の強そうな顔、しかしまだ何処かあどけなさの残ったそれに微笑笑を浮かべた。

「ルナーレⅡジュール、あたしの名前よ」

「デ……、ペンタだ」

——やけにかわいい名前ね。 ——放っておけ。

少女がしばし揺られ、たわいのない話でしばらく時間を潰していたところ。

気がついたら村へと到着していた。

石、木、煉瓦、泥。

それらの素材を混交して造られた質素で素朴な家が、山の傾斜の始まりに、密集している。

幾つかの群れと群れ、数戸の家の連なりが至るところにあり。

それらを囲むように、棚田と段々畑、傾斜に沿った果樹、牛と鳴き声、馬のいななき、犬の吠える声。
そういったものが存在している。

笑いの声が響き、希に来る行商人と旅人の為の宿を兼ねている村の為の酒場からは、灯りと土の香り漂う男たちが酒臭い息を吐いている。

夕刻も終わりが近づき、とうに山間の向こうに、陽そのものは落ちて
ている。

空にあるのは終わりの名残、かすかな夕暮れの紅と、境界の橙と白
と透き通った青、

そして空には一番星と深い青、月は昇り、雲は無数だ。

蟹を乗騎として、少女ことルナーレは、意気軒昂とはほど遠い表情
で、村の中を伺いつつ、蟹と共に進んでいる。

酒場と教会、そして自分の住家でもある村長邸宅が、村の中央部と

でも言うべき戸の群れの中に見えた。

人口は三〇〇人程か、山村にしては多いだろう。

道の途中では老婆が、歩み、時に足を止め、時にぎよつとした表情で大きな蟹の魔獣と、それに乗る少女を見る。

老いた老人が、庭に立ち、左足をぴんと伸ばしながらも、もう片方の脚を大きく曲げている奇妙な体勢で、果樹の整備をしているのが見える。

よぼよぼの顔、時折見えるのは若い男、若い村娘、質素なスカート、それを大きく補うような飾らない笑い。

粗野で野暮ったいとも言える村娘と村の青年たちの逢瀬。笑い声、ふざけ合い。

下品な冗談は酒場からも、その若い集団からも聞こえてくる。

近くを、あるいは少し離れて、村の住民の傍を通り過ぎる蟹と少女を見る顔は、驚きと恐怖と好奇心に彩られている。

しかしそれでも近づいてくる影がないのは、一体なぜなのか。

少女を背に乗っけている蟹の大きさか、はたまたこの少女の村での立場がそれをさせるのか。

様々な視線にさらされながらも、蟹はそれを意に介さず。

少女は、ふんっ、と氣勢を吐いて、逆に睨み付けている始末である。

村の中で一番大きな邸宅。

ただ一つの二階建て、石造りと煉瓦、そして木が混交された独特の建築様式。

とはいえ、大きな都市の一軒家という程の大きさでしかない。

マッチ棒の中にライターがあれば目立つだけのことだ。

植物の垣根、中庭、道、蟹の足音、無言の少女、段差、木の扉、一人ほどの大きさのそれ。

少女が蟹から降りて、蟹は、中庭で脚を折り、疲れを休める。

とんとんっ、というのはノック。

そしてそのあと、ガチャリ、とドアの開く音。

しばしの待ち時間だ。

蟹は色々考えてみる。

昨年の冬、新暦1622年の冬、蟹は1000年の眠りから目覚めた。

そして運良く古き友と出会い、冒険者という生き様を見て、外の世界へと脱出した。

新しき夢を得た彼は、肉体的に怪しまれない大きさに変貌し、

実力を制限して、己の新たな生を送ることにした。

そのために古き友人を何人も訪ね協力を仰いだのは良い思い出。

最終的には儀式大家に覚えのある研究者肌の友人知人が自らの身体を弄くってくれた。

九烈士ならば『無貌』『智慧』『賢者』 魔将は『鴉』『人形師』
『海王』『四つ耳』

簡単な同窓会であった。

ともあれ彼らの渾身の世界理解、儀式法、想像法、紋章法、と属性変化やら概念変化やらのお陰で、

蟹はその姿を封印し、大きくサイズを縮小することになった。

刻印も削り、紋章も削る、魂の器は一度大きくしたのなら二度と小さくならない類のものだったのでそのままではあるが。

冒険者として生を送ることにした己への選別に皆、色々なモノを送ってくれた。その嬉しさを胸に。

デンザロスは、大連峰南の半島を出発し、途中で『四つ耳』と別れて、後は世界最大の迷宮、エミダリ中央迷宮へと向けてぽつぽつと進んでいたのだ。

旅路は順調、しかしモレサスを越えた辺りから続いた同じような景色が、

蟹の方向感覚を崩し、それがエミダリへの正しい道よりも、幾分に東にあるこの村の森林区域へと、蟹を進ませた理由であった。

蟹として体力は無尽蔵ではない、溜まった疲れを休めることもある。道を聞くために助けたルナーレの実家で、それを行っているところであった。

「ん？」

ふと視線を感じる。

子供だ。村の子供達、怖い物知らずな好奇心旺盛の少年少女が、仕

事の手伝いを終えた後の時間で遊んでいた少年少女の視線が己に向けられていることにデンザロスは気付いた。

「どうした」

うわぁ！ という喜び、うわっ！ という驚き。

喋った！ 喋ったという少年少女たちに、魔獣であるデンザロスへの恐怖は殆ど無い。

猫を殺す好奇心、地雷原へと脚を進める好奇心。

蟹は鋏をちよいつ、ちよいつ、と動かし、子供達にこちらへ来るように伝える。

好奇心を隠さない子供達は、そうして蟹の下へと走り寄る。

「なに……これ……」

ルナーレが見た光景は驚きの物であった。
呆れを伴う物でもあったが。

腰には鈍く輝く武骨な剣、少女の腰に帯びるのは不均衡で不調和的なその装備と、

大きなリュックを背負った少女は、

うわぁ、と呟く。

蟹が、凄まじい速度で、残像さえ捉えられないような高速で、左右を行き来しているのだ。

背には子供が乗っている。

きゃっはっ、だとか、うおおおお、だとか。

呻きとも歓喜とも取れる声を挙げてその速度を楽しんでいることは明らかだった。

——あたしが、父さんと母さんに会っている間に一体なにがあった。
シユールな蟹の高速反復運動。

眼を輝かせている順番待ちの子供たちを掻き分け、少女は蟹を止める。

「おおルナーレか」

「「おおルナーレか」じゃないわよっ！　なにこれふざけてるの？」
どうしてこうなった。というルナーレの背には子供からの非難の
声が響く。

それをシャアーツ　と威嚇して、そのあと蟹をまた見る。

「うむ、試しに子供を乗っけて動いてみたら思いの外、好評だな」

「好評……」

俺はこう見えても、仲間内からは、見ていて愉快な奴だとなぜか言
われていた蟹だからなっ！

それ褒められてるの？

結局子供たち全員が満足するまでの間、蟹は子供を乗せ、疑似ジェットコースターごっこを行った。

子供達は全員満足した顔で、笑って家へと帰っていった。

各地の戸で、暖炉の灯りと煙突から出る煙が上がり始めている。

春とはいえ、夜はまだ寒い。

「それでその荷物、どういうつもりだ？」

蟹の問いかけ

背負っていたリュックと、鈍く古いもののよく手入れされているらしい剣を、中庭の隅に立てかけてからルナーレは振り向く。

「決まっているわよ、冒険者になるための道具」

そう毅然と返すのは村娘、

とはいえその容姿は、村娘とは思えない程の気高い器量に満ちていたが。

「俺に付いてくるつもりか？」

――それを俺が許すと思うか？　そもそも納得のいく理由を示してみろ。

審問のような、冷たい声が蟹の微妙に泡を吹いている口から出ている。

先を促す蟹の黒目。

「理由はね、簡単」

一息を溜め。

「強くありたいのあたしは」

誰にも負けないような強さが欲しい。

そう願ひ、空を見るのは少女。

「本当はさっき、あの獣どもにも臆してはいけなかった。毅然とにらみ返して、舌を嚙んで死ぬべきだったのよ。」

……あたしね、この家の本当の子じゃないの、歳を取って子供のいなかった村長夫婦に拾われた子供なの。

小さい頃からそれで虐められたりしたわ、拾われっ子でね……誤解しないでね、あたしはお父さんとお母さんを本当の両親だと思っている。

沢山の愛情を受けて育ってきたわ……でも、でもね、この村にはどうしても馴染めなかった。

この村は何時までもあたしのことを阻害しているように見えた、あたしのことが嫌いな村。

……息苦しいのよ、だから、あたしは何時かこの村を出て行こうと思ってた」

——その為の冒険者

蟹は、身じろぎせず、先ほど会ったばかりの少女が告げる話に耳を澄ませる。

「しかし、なぜあったばかりの俺に、しかも蟹の怪しい魔獣にそれを話す？」

「さあね、聞いてもらいたかったのかもしれない、こんなこと話せる友達なんて一人もないもの。」

……いや正しくはわからないのね、わからないわからない。

本当はわかってた、木刀を暇なときに幾ら振っても、体力を鍛えると言って走り込んでも、

それは現実逃避なのかも知れないって、本当は村を出て行くことも冒険者になることもなく、

中途半端なまま、この村で適当な相手と結婚して、子供を産んで育てて、老いて死んでいくのかも知れないって」

言葉を切る。既に夜の暗さだ。

強い意志を瞳に乗せ、ルナーレと呼ばれた村娘は、蟹を見据える。

「そんなときに、あんな奴らに襲われて、そして白馬の王子様ならぬ、大蟹の王子様に助けられた……」

そしてその蟹は、ペンタとか名乗ったあんたは、エミダリの中央迷宮に行くって言う。

もうこの機会しかない、これを逃せば、全てを諦めて、惰性で生きることになるって思ったの。

それはいや。そんなのは死ぬのと変わらないわ、前を向いてないもの……、だからあたしはアンタに付いていく、そう決めたの」

ほう、と蟹が呟く、生の輝き、素晴らしいまでの自律の意志。

我。つまりは自らというものと。

それ。多くの雑然としたものを振り捨てて、

汝。己の真にやるべきと自認する目的への純粋な意志。

生を追求する、生命の意味だ。

「素晴らしい」

蟹の思わず漏れた声。

だが、だがそれだけでは……

「私に何のメリットがあるのだ？」

「簡単なことよ、貴方は魔獣。一人じゃあ生きにくいし、偏見に晒されるわ、仕事だって選べない。本だって読めないし、金の受け取りも支払いも出来ないわ。なら、それを補う人間が必要じゃない？」

それにあんたどうやって一人で背中の荷袋あけるつもりよ……」

はっ、はははははは！ と響めくのは蟹の笑い声。

「それもそうだなあ。うむ言うことは一々最もだ。理由も気に入ったぞ」

「そう、お褒めにあずかり恐悦至獄ってところかしらね」

「ふむ、だがご家族はなんと言ったのだ？」

するとそれまで、輝かんばかりの強気に満ちていた顔が、弱り俯いた。

父と母というものを想う顔だ。血が家族なのではない、想いが家族なのだ。

それを象徴するような苦しそうな嬉しそうな顔のルナーレ。

「いつか、いつか……こんな時が来るような気がしてたって

娘が、外の大きな世界へと旅立っていくような気がしてたって……

それは心配だけでも、それは成長だから誇らしいって、

笑って、笑って言うの……、この剣もくれたの、役に立つだろうっ

て」

「ふむ、血のつながりはない。がしかし、想いのつながりはあると
いうことか、

良い家族ではないか！　とはいえ、こんな若い少女をしかし一人で
旅させるのは危険ではないか？」

「そのことでね、ええと……ペンタだっけ、あんた家の中に入って
いいって、

それで、ちょっと話をしてみたいってお父さんが言ってた」

「ふむ、娘を託すに相応しい相手かどうか見極めるということか？

まるで婚姻みたいだなあ」

「こ、婚姻って、……なっ、ば、馬鹿じゃないのっ！」

「うむだが、俺はお前が気に入った、気持ちの良い性格、前を向く
意志。

とはいえ冒険者として適性や知識についてはまだなんとも言えない
がな」

「ばっ、ばかにしないでよねっ、こうみえてもあたしに剣技や駆け
っこで勝てる相手なんてこの村にいないんだからっ！」

腰に手を当て、自慢げにそう話すルナーレ。

その言葉を受けて、苦笑するかのように笑うデンザロス。

扉へと歩き始める蟹。

そしてそれに続くように、怒鳴るルナーレ。

「つちよ……ちよっとなにがおかしいのよっ！」

「いや、なんでもないぞ？」

「むゝ、なんでもないことないでしょっ！」

「いやいや、本当になんでもないよ」

頬を膨らませ、蟹の後を追う少女と、少女の住家に向かう蟹は、

笑い合いながら、家へと入っていった。

食卓には奇妙な客人。

奇妙な食事時。言葉を喋ることの出来る大蟹はしかし凄い速度で馴染んでいくのだった。

そして一晩が経過した。

翌朝、村から朝早く出て行く二つの影がある。

荷物をまとめ、改めてエミダリへと出発する一人と一匹の影だ。

少女と蟹の冒険生活、その始まりである。

続く

蟹と少女の出会い、出発。（後書き）

という訳で新章スタート。

精一杯やらせて頂きます！

前章のここに書いてあった設定は実は演出と伏線の一つだったので
（のつもり）

特にここに載せる予定はないのですが
必要に応じて載せることにします。

少女と蟹。進まない話。旅路的一幕。

1

陽は既に昇りきっている。

春とはいえ、輝く日射しは夏にも負けず。

暑く厳しい旅路を、道を行く者へと課す。

こういう時に限り、風は吹かず。

歩く者、進む者の意志を挫こうとするような、熱線が、道を歩む者の肌を灼いている。

ロートランド公王国、北西、ワインランド都市共和国へとつながる小さな旅人用の道。

そこを行く二つの影は、一切の手加減無く疲労困苦を与え続ける天性のサディストに、

一抹ならぬ呪詛を抱きながら歩いていった。

歩く姿二つ。

一つは元村娘、現旅人兼冒険者志望。ルナーレ・ジュール。

もう一つは、大きな蟹だ。少女の腹程の高さもある。

彼の最も大きな特徴は少女が膝を抱えたならば寝そべることができ
るであろう甲殻の広さ。

動かされるのは四本の脚。すべすべした棘もなく、毛のない種類の
蟹であるのだろう。

サイズ以外の点ではどこからどう見ても普通の蟹であった。味噌の
旨そうな類の蟹だ。

歩く姿には奇妙な愛嬌が漂っている。

名前はデンザロス・デンザロス・ペンタレシア。

故あって今はペンタという率直な名を名乗っている蟹だ。

二人は目的の一致から、同道して旅路を進んでいる最中であり。

その二人の旅路は、今のところ順調であった。

ルナーレは小さなリュックを背負っている。

村を出てからしばらく経つが、未だ慣れない腰に提げた剣の重みに、
時々、身体を取られているようだ。

服装や、食料、水や鍋、火打ち石や大きな布の類が入った大きいリュックは、

デンザロスの背中に置かれている。

蟹と、少女の二人旅。

少女の姿はマントに覆われている。旅人用の装いだ。

寒さと風を凌ぎ、泥を被り、草から身を守るためのマントには、無数の傷が付いていた。

着ている服は、長旅と、森と土の埃のためか、あるいは野宿をしたのか、およそ少女に似つかわない程に茶黒く汚れていた。

見るからに疲労が溜まっている少女は剣の重量にときおり脚を取られながらも。

それでも、脚を健気に動かしていた。

蟹は、その危なげな歩調を見て、僅かに心配の念を抱く。

もちろん蟹は、荷物、あるいは少女の身体を己の身体に預けてもよいと、助けを申し出た。

疲れるであろう、生半可な鍛錬しかしていないような村娘のいきなりの強行軍であるのだから。

といったニュアンスで。

しかしルナーレはそれを固辞した。

曰く「己の足で歩かなければ一体それがどうして自分の力で前に進んだことになるのか」ということらしい。

——その言葉、最もだ。と蟹は納得し、以降、少女が限界を訴えるまでは、背に乗せぬと決め、これを見守っていることにしたのだった。

——己の夢へ、足を使い進む覚悟。自分自身への覚悟の表明、決意の表明。

甘えを許さない気高さがそこにはある。誠に好ましい。そう蟹は考える。

「ねえ」

物思いに耽る蟹に何か問うような声。

緑と紅。

緑樹と花や果実のコントラスト。

春の色彩に彩られた世界に入り込んあだ錯覚が二人は包む。

日射しを遮る植界の庇護に入り、少し暑さが落ち着く。

遠く、どこからか聞こえてくる川のせせらぎ、昆虫の羽音、鳥の合唱。

自然の合奏が些細な清涼感を演出する。

日射しが落ち着いたのを見計らって蟹が応える。

「なんだルナ」

少女は、顔を動かさず、しかし足を動かして聞く。

「……まだ？」

「まだだ」

はあ、と息を付くのはルナこと、少女ルナーレ。

汗に湿る金の髪、それを払う仕草は、檻に入れられた獅子の気怠さ。世界を厭うかのように、手を振り、回る羽虫を追い落とす。

「あと、どれくらい……？」

「ふむ、計算上は三時間か、四時間か、日暮れ直前くらいには着くだろうな」

その言葉に絶望感を覚えたのか、少女は一度、足を止めた。

「ワーオ！」

少し壊れてしまったかのような感嘆。

「じゃあ、あたしはこの糞暑い、糞太陽の下、糞羽虫に集られながらあと糞四時間も、この糞街道を歩くことになるのかしら」

村長夫婦が聞いたら泣いてしまうだろう汚い言葉で少女は聞いた。
(悪態つき)

あるのは間で、蟹は鋏を天頂に振り上げ、

——イグザグトウリイ！

なめらかな応答とともに振り下ろす。

シャキンッ！ という軽快な鋏の効果音付きだ。

「……」

はあ、というのは、ルナーレの息の音。

水分をこまめに補給し、一定のペースをどうにか守って歩くその姿は、どこからどうみても限界直前。

足は棒、脚は鉛、腕は壊れた案山子の風に揺れるよう、空を見上げて虚空を眺める瞳の光は、たしかに危うく限界直前。

「乗るか？」

蟹の問いは、即ち限界を問うているのだ。
ここで諦めるのか？

そんなニュアンスに聞こえた少女は、己を奮起させ、歯を食いしばり、足に込める力を再びしっかりと意識する。

蟹本人は純粋な善意のつもりであったそれは、
村を出たばかりの少女が、二日間しっかりと地を踏みしめ歩いて進み、野宿にもちゃんと付き合った強い少女への純粋な気遣いは、
しかし誤解され、思わぬ効果を生むのであった。

つまりは奮起。意地である。

「まったく……まだあ！」

叫ぶように、死力を尽くすように。

力の残り滓を振り絞ろうとするその少女の姿は気高く、活力に富んだものであったが、

しかし、万が一に備え、力を使い切らないようにすること、温存することを知らぬその様は、

どうしようもなく素人的で、決定的に冒険初心者であることの表明であった。

だが、しょうがないだろう、二人とも実際に素人であるのだから。

やがて少女は突き進み、ばたんと顔面から地に崩れ落ちた。

2

少女の奮起むなしく、結局は蟹が少女を背負うこととなった。

宿場街ポートニアへと辿り着いたのは、陽が落ちきって一時間ほど経った頃である。

スピーディで、軽快な蟹の背中から見る景色、その疲れ知らずに進む蟹の速さは、少女の疲れを癒す程度には楽ちんであったようだ。

ぬるぬると、一定の速度で進む蟹の機動力は、恐ろしく安定している。

宿が見えると、少女は筋肉痛に悩む足を降ろし。

蟹をおいて、打ち合わせ通り、一人で宿屋へと進んだ。

身だしなみは年ごろの少女にあり得ぬほど薄汚れていたが、少女は頓着せず、足を動かす。

忍者の忍び足のような、傍から見ると滑稽な動きで、そろそろと宿へと向かうルナーレ。

一階部分が酒場を兼ねている旅人、行商人、巡礼者のための宿屋。

大変盛況なようで、一階の酒場からは無数の笑い声が響いている。

人見知りの気がある少女は、足を小さく震わせ、息と唾を飲み、『至高神』へと祈りを捧げてから扉を開けた。

手を組み、祈り、よし。と呟いて、

扉を押す。

バタン、という音。

瞬間的な沈黙。

一瞬、酒場にある全ての女。男。荒くれや冒険者、旅人や老人の視線が己に集中したように感じる。

その緊張と羞恥で、酒場に足を踏み入れた少女の心は、既に折れ気味であった。

足と手を、子鹿のようにぷるぷると震わせ、羞恥から頬と額を赤く染めているその姿は、どこからどうみても初な田舎娘。

どこかからヒューッ、と音がする。

煽るような声、品定めするような声。

「はあ、ありや絶対初物だね」

「あのケツのラインいいなあ、ありや将来そとうな美人になるぜえ」

だとか

「へっへ、お一人は危ねえぜ嬢ちゃん」

「あれぐらいなら俺でも……」 「ばっかおめえ俺が口説くぜ」

というように猥雑が入り乱れ、色々な声が、獲物の鴨を狙う銃口のようにやまずに反響する。

森のさざめきよりも多いその音の反響は、少女が歩く間、つねに嵐のように鳴り響いていた。

そういった声や態度、露骨に卑猥な言葉や仕草を取る彼らに対して、少女が抱くのは当然怯えである。

次いで、竦み。

次に怒り、最期には胸を張り、手足を震わせながらも、堂々と酒場の主らしき男のところに進む。

その姿には、彼女のやけくそな気持ちとそれ以上の「負けてなるか！」というが自負が見受けられた。

結局のところ負けず嫌いなのだ彼女は。

彼女は負けるのに屈辱を感じ、歯を食いしばって耐えているのだ。難儀な性格である。それ故に行動できるとも言えるが。

蟹は宿の扉を少し開け、その黒い真珠のような瞳で、その情景を覗いていた。

ぴょんっと飛び出る鋏は、扉を抑え、止め。

蟹は、気丈な少女の様子を見て、安堵するような気持ちで、ほっと一

息吐いた。

見れば少女が、酒場の奥、階段の隣、宿の主人兼酒場の主人であろう、髭面の肥満中年と話していた。

「ええと、宿を……っ、一晩もらいたいんだけど」

慌てるような、慣れないような声。

「30メルクだ」

「えと……」

助けを乞うように蟹を見つめるのは少女。

赤い頬はさらに紅い、煮詰めたトマトのようだ。

——お金は……？

とでも言うような円らな子犬の瞳。

——というよりもあれは

耐えきれなくなったのか、

あるいはヤケクソの心持ち特有の開き直った氣勢が、予定外の質問で削がれて正気に戻ってしまったのか。

見れば、「足りない」というように、こちらに口をパクパクさせている少女が一匹そこにはいた。

哀れなひな鳥を掬い上げる心持ちで蟹は、鋏を使ったジェスチャーを行う。

こっちこいこっちこい、とでも言うような、ひょいっ、ひょいっという鋏を掻く仕草、それによって少女を招く。

少女は、最後の力を振り絞ったのか

「ちよっと待ちなさい」

と店主に大声で言った後に、大急ぎで扉へと走り、外へと駆けていく。

なんだありゃ？というのは店主の心思で。

ガキのお使いかよ！ままごとかよ！という声は酒場中から響く酔っ払いのヤジである。

オチが付いて笑う観衆のように、酒場は笑いに包まれた。

旅に似つかわしくない姿と仕草、明らかにないような動作の少女を話の種に酒場は盛り上がるのだ。

とはいえ話の種になるのも五分かそこらで限界であろう。

物珍しいとはえ、一瞬の珍客、長く話すようなネタでもない。

いつしか話題としての面白さは薄れ、このままいけば少女の存在自体が、

明日か明後日には完全に、この酒場に居た全員の脳裏から消えたであらう。

そう、そのままであつたのなら。

ギィ、という木の揺れる音。妙に強い足音を、出口の傍の卓の男は聞いた。

バタンツ！ という強い音。扉が開かれる。

少女が戻ってきたのか？ と酒場の主を含めて幾人かが出入り口を見つめ、息を飲む。

そしてその反応を見て、酒場にたむろする他の者たちも扉を見つめて、
こちらもまた同じく驚きから、だらしなく口を開ける。

そこにいたのは蟹。巨大な魔獣。巨大な蟹であつた。

青光りする肌に、人間の太股ほどもある巨大な鋏の威容。

人間の脚ほどの大きさもある四対八本の脚。黒く円らな瞳。口角から微かに吹き出るのは泡である。

そして、その丸く平べったい甲羅に、先ほどの少女が堂々と腕を組んで座っていた。

酒の飲み過ぎか？と、

己を疑わざるをえないような、奇妙な姿が、開け放たれた扉の前に仁王立ちしている。

クラブ・ライダー。

知っているのか？と、それを呟いた老人に視線が集まる。

いや知らん。

——酔っ払いの戯言であったようだが、その意味するところは明白だった。

彼女は間違いなく、クラブ・ライダーであった。

少なくともそう言われて違和感のない姿ではあるのだ。

シニールな緊張を多分に孕んだ空気。

幾人かの冒険者は、戦闘態勢を取り、警戒を欠かさず。

魔導士は己の魂に、己の【力】に、己の意志を埋没させる。

そんな警戒をしている冒険者たちを、凡夫と、

一気に切り捨ててするような潔い動作と挙動をもって、二人は酒場の中心を往く。

まるでモーセの海を往くが如く。

「マスター、待たせたわね！」

先ほどよりも幾分以上に安心している少女。

心強い味方、ある意味保護者のような蟹が付いているからこそその、露骨な安心感から来る強気だろうか。

強い語気で言いきり、挑発的とも言える笑みを浮かべる。

「あ、ああ」

と呆然としたように呟くマスターは驚きが抜けきれない。

今まで生きてきて、初めて見るような異様の魔獣——それも巨大な蟹——に乗って、酒場に少女が入ってくるという現実でないような現実の映像。

さすがの歴戦のマスターも、多くの旅人、民族、種族を迎え入れてきた宿場街の宿屋主も、大きな混乱を隠せなかった。

しかしそこは流石にプロ、速やかに己を安定させ、まずは少女に声を掛ける。

ごほんっ、と咳き込んだ後に、いかにもなしかめっ面で少女を必死に威嚇する。

蟹を視界に入れないように。

「すまんがな嬢ちゃん、そのデッカイペットは外だ。わかるな？」

威厳を漂わせる、店主の声音。

厳めしい面、厳つい雰囲気。咄嗟の取り繕いとしては上出来だ。

そう己でも思うような見事な「威厳ある店主」っぷり。

俺は猿でも鹿でも蟹でも人間でも怖くねえ！まとめて掛かってこいや！

とでも言いたげな店主の必死の重圧に、

しかし少女は僅かにも、うろたえない。

外面はともかく、少女の内面は揺れまくりではあったが、

密かに、蟹の背中に背負うリュックを触ることによって心を慰めている少女を置いて、

デンザロスことペンタが店主に応答する。

「ペットとは失礼だな店主」

驚愕、混乱、理解不能。

如何に歴戦の店主のもってしても予測しえなかった事実が、津波のような衝撃として、彼の意識を殴りつけてきた。

蒼い蟹は喋る！この蟹喋るぞ！という二段構えの驚愕、酒場は何時しか静まりかえっていた。

冒険者も、巡礼者も、従業員も、この突発的な事態の進行を、ただ見つめることしかできなかったのだ。

蟹の追撃のような問いの重ねは続く。

「ふむ、俺はこう見えても中々に紳士的な蟹でな、糞尿の類を撒き散らすつもりもない。

建物になんらかの危害を加える程に暇でもないのだよ、勿論、誰かを攻撃する意志もない」

一息に言い切る、彼が放つのは、本当に蟹が喋っているのか？という信じられないような理性的文言。
まだしも、少女の腹話術と言った方が信じられるような口ぶりである。

蟹が、蟹の魔獣が、しかも巨大なそれが、言葉を不自然なほどに巧みに操っている謎の事実。

酒場の主にしても。酒場の客にしても一生忘れえぬ驚きと衝撃が包んでいる。

少女だけでは些細な笑い話。一瞬の話の種であった。
しかし蟹と合わさった少女の話は、これから一生のように、話の種、物の話として語られるのだろう。

幾ばくかの時間が、沈黙の内に過ぎて、

どうにか店主が再復帰した。

理性あるらしい蟹の応答に、ようやく対応できたとも、気持ちが追いついたともいう。

蟹が行っているのは、よくよく考えたら商談交渉の類なのだ。つまりは蟹という一顧客の交渉である。そう考えれば、店主もいつまでも驚いてはいられなかったのだ。

この場にいる人間の中でも特に速い復活を果たして店主は計算を働かせる。

つまり、泊めてよいのか？ 他の客の迷惑にならないか？ もし泊めるとしたら料金は？

といったような計算を行いつつ、沈黙を場に作らないように咄嗟に応答を差し挟む店主。

「む、それは……」

蟹の言葉に応えるように出た音は、迷いの濁りが染みついた水のような声。

迷っているという心情が漏れ出ているようだ。

「むろん無料ただとはいわん」

少女はこの成り行きを完全に蟹に預けたようで、ただ一連の蟹の発言を一幕の劇のように眺めている。

「人間の大人二人分で俺を換算しても良い、また朝食もいらない、水を少し頂ければな」

つまり一人分の手間で、三人分の宿賃を取れるということである。

――雑費合わせ一〇〇メルク！　どうだお得ではないか？

そういうような声も聞こえてくる。曇みかけるような蟹の声だ。

「ううむ」

と、悩む店主に追撃を掛けるかのように、蟹は己の甲羅に座り、ことの成り行きを眺めていた少女の太股を、鋏で軽く叩く。

ルナーレは打ち合わせ通りに、蟹の荷袋を開け、周囲の冒険者には見えないように、店主の手元に一〇枚ほどブツを握り込ませる。

黄金の輝き。

旧帝国の貨幣の皓々とした輝き。

世界で最も純度の高い金貨。

美しく、純度の高い希少な金貨

店主は無意識のうちに、懷に差し込まれたその重みを確認した。

――勝った。

と思ったのは店主の反応を見ていた少女と蟹。

沈黙と動揺、些細なざわめきに包まれた酒場で、直前まで悩みに悩んだであろう店主は、

「いやあ、お客さん運がいい！」

今なら最高級の部屋が空いてましてね！

いやあ貴族様もお泊まりになれる程のレベルの部屋ですぜ。と、どこか嫌らしくしかし憎めない微笑みで、肥満の身体と、顎髭を揺らしていた。

そして、あ、気付きませんでしたね、へへどうぞ！ と手元にある鍵を少女に渡し、手を擦り合わせながら揉み合わせる。

「さあどうぞどうぞ、あっ！ お食事は直接部屋に運びますか？」

「う、うむ」

——自分で大金払っておいてなんだが、気持ち悪い変わり身の速さだな。

中々見事な鋏ですね、いやあ甲羅もピカピカ。

と続ける店主を後に、二階の奥にあるらしいその部屋に向かうために階段の起伏を器用に登っていく蟹。

脚は、下から、上へ、一步一步、一段一段、確実に進められる。

背中に乗せてことのなりゆきの完全に安全に終結した過程を見ていた少女は、
少し驚きながらも安心したように微笑み、
ペンタは鋏をたたき合わせ、微笑みと同じような感情を彼なりにアピールする。

そしてすぐに二階に到着する。

向かうのは奥だ。階下からは奇妙な珍客二人についての無数の雑言と囁き、ざわめきと不安の声が聞こえてくる。

当人たちが消え、にわかに噂の虫、おしゃべりの虫が騒ぎ出したのだろう。

それとは別に蟹と少女を擁護するような店主の大声が響いてくる。
とはいえ二階と一階を隔てる床が厚いのか、その声はまるで地獄から聞こえるように遠かった。

疑問があるの。という不安げな調子で、
ペンタの背中に声が降ってくる。

「あんた、あの金どうしたのよ」

蟹はしばし言葉に迷う。

「ふむ、友人の手製……んん、手土産のようなものだな、うん」

ふん。と訝しげな少女、

一日歩きづめで疲れ切ったルナーレは、

脚が重いのか、蟹に座りながらそれをぶらぶらと揺らしている。少し緊張が切れたようである。

男、男、男。

嫌いな村とは言え全員が知り合いの村を出て、初めて触れた他人の群れだ。

カモシカが狼の群れに出会ってしまったかのような驚きと不安を感じたとしても不思議ではない。

蟹のインパクトと、思いのほか遅しかった店主の商魂に助けられた形だが、

どうにか今夜の宿を確保できたこと。

三日ぶりのベットを手に入れたことによる安堵が、ルナーレの細く肩や腰に、降りかかってきてもおかしくはない。

——当然のことか。

むしろよくやっている。

とは蟹の思考。

今のところ気概はぶれていない。

頼もしい若者だな、うむ。と蟹は喜ぶ。

ふと見れば、目の前には扉、その他の部屋より多少豪華な装いだ。

預かった鍵を手にも、鍵穴に差し込めば、ギィ、と開くのは扉なり。

旅人にも休みは、いや旅人にこそ休息は不可欠である。

往く道が街道であろうとも、人生であろうとも変わらぬ一つの真理。

それを噛みしめながら蟹と少女は、扉をくぐった。

3

「ふ〜」と息を吐くのは布で身体を拭い、服装を変えて、二日ぶりに下着を替えた少女。

洗う目処も、場所も、暇も無い以上、最低限の着替え以外は行わないのが旅の基本である。

水袋にナイフ、簡単な布、マント、松明、火打ち石、鍋、必要なも

のは幾らでもある。

服や下着の替えは余り入れてないのは、容量に余裕がないためだ。

ルナーレはその恥辱に唇をくしばり、目に涙を溜めて、一時間ぐらい、うくと、唸ったが、覚悟を決めたのか、あるいは吹っ切れたのか、全身を覆うマントの下、服や下着を殆ど替えずにここ数日の強行軍に望んでいた。

部屋の隅に置いてあるそれらの脱ぎ終えた服（薄汚れた雑巾の色彩である）は、余り目に入れたくない代物なのだろう。

故郷の村、村長の娘として幾分裕福な生活を送っていれば出会わなかったであろう屈辱の象徴は、

丸めて、まるで捨てられるゴミのように、部屋の片隅に預けられていた。

しかし、後悔だけはしていないのは、ルナーレ天性の資質であろうか、もしくは気性なのかも知れない。

少女が着替え、身だしなみを整えるさまを、

部屋の隅で、やることもなしにぼうと眺めていたのはデンザロス。

柔かな肢体、映える黄金の髪、どことは言わぬが成長途中の部位が幾つか、

しかしそこにも若い雌特有の、蒼い瑞々しさが満ちている。

未だ熟していない果実。均整の取れた体美は、

可能性という偉大な資質が、潤沢に眠っているであろう鉱脈のごとき身体でもあった。

その光景は、見る者が見れば幾らでもニヤニヤできる程度に、あどけなさで未成熟ゆえに醸し出される快美を感じることが出来た

のであろうが、
しかし、蟹であるデンザロスには当然、興味もなく、そそられるような対象でもなく、
粛々と行われる着替えも、悠然とさらけ出される裸体も、暇つぶし以上の意味はなかった。

いま、デンザロスは、
ルナーレに頼んで降ろしてもらった彼の荷袋を前に、一人その内容を吟味していた。

完全に友任せであった責任。

ああこれがまさに因果の応報なのか。と
心理的打撃を喰らわせる荷袋の中身のチョイスに、蟹が泡を吹いている。

横から投げかけられる声がある。

「ペンタ…… ペンタ！ ペンタッ！」

目をキリッと釣り上げ、少女は何回も呼びかけている。

「ん？ ああ、すまんすまん余り名前で呼ばれることに慣れていないくてな」

ルナーレが吐くのは呆れの吐息。

腕を腰に当て、幼子を諭すように、蟹に向かって喋るその様は、まるで姉のようであり、どこか優しげである。

「もう……しっかりしてよね」

「ううむ、すまん……、考え事をしててな」

「その荷物？」

「ああ」

一見するとがらくたしか入っていないようだが、

うわすごい！本当にがらくたしかはいってない。

『人形師』が入れたのであろう、完全自律人形手乗り版、大道芸くらしいにしか使えない。

『海王』は綺麗な貝殻を幾つか、意味ありげだが、本当にただの観賞用である。

『鴉』が入れたであろう鴉の羽、意味ありげだが、実のところ本当にただの羽である。

『無貌』は書物を三冊、

蟹は文字が読めないし、そもそも本を持ってない、開けないと知っての所行だろうか。

『賢者』の脳は相変わらず弾けてるのだろう、
鍵の束である。意図はあるのだろう、しかしそれがどこかの鍵であるのかはわからない。

ここまでは畜生野郎どもだ。

多分に悪ノリしているか、そもそも旅行に何が必要なのか解っていないようだ。最高に頼りになる。

そもそも何が必要なのか聞く気がないのが見え見えで、一周回って潔かった。

横で少女も、うわぁ。と言っているのが、蟹に余計、もの哀しさを

覚えさせる。

己の友情について弁解したくなったが、それは置いておく。

しかし幸いなことに、『智慧』と『四つ耳』はまともだった。

流石に良心が咎めたのだろう『四つ耳』は大量の旧帝国金貨を袋に詰めて入れてくれている。

入手先は問わない。

ついで、貯蓄型の動機であるのだろう宝石が幾つか入れられていた。

頼りになるやつだルー。と蟹が呟き。

我が軍で一番まともな心根であろう『智慧』あの高位長耳族に至っては、

地図と特殊発煙筒、ついでに導器である『【道】の杖』を入れてくれている。

完璧なチョイスである。鋏のような研ぎ石まで付けていて、他にも幾つかの道具まで入れている。

——うむ、持つべき者はやはり友。

——それも融通が利くような友であるな。

蟹は確信を深め、人型であつたら間違いなく笑みを浮かべていたであらう心情で落ち着く。

落ち着かないのはルナーレである。

改めて見てもこの金貨の量は異常だ。

「ねえペンタ」

「ん？なんだルナ」

「あんたの友達って何してる人なの？」

「うむ……。そうだな……。高度な自営業、とでも言うべき職業……
だと思う」

答えるつもりはナッシング。

そんな返答である。

ルナーレがその返答に顔をひきつらせながらも納得したのは、
その先を聞いても碌なことにならないと直感したからであろうか。

本当に不思議な蟹ね。と脳裏に浮かべるルナーレは、旅の供である
蟹を眺める。

不思議な存在だ。というよりもデカイ。ちょっと怖い。

少しダンディで、もしかしたら天然で、愉快なところもある奴だ。

ここ数日の付き合いで既に大分打ち解けたようにルナは感じていた、
が、しかし、未だに解けぬ疑問もあった。

「そもそも何であんた喋れるの？ 納得いく説明もらってないんだ
けど」

「知らないのも無理はないか」

まるで無知をあざけるかのような蟹の声。

しかしその言葉には優しさが含まれていた。

物を知らないのが当然の童子に対するような甘い態度。

まるで用意してあったようなその発言は、

非道くルナーレの神経を逆撫でするような口ぶりであった。

「し、知ってるわよっ！」

と条件反射的に反応してしまうのも、ルナーレの気性がなせる技なのか。

「……まだなにも言っていないのだが？」

「言わなくてもわかるわよ！」

「……はあ。まあ、知らないのも無理ないかもしれないがな」

と一息ついて、少女の見栄を通り過ぎて、続ける。

「蟹というのは喋る物なのだぞ？」

沈黙。

驚き。

嘘でしょう？というルナーレの表情は、
もしかしたら本当かも知れないという不安を僅かに含んでいる。

「えっ？」

「うむ」

「いや……うそでしょう？ 聞いたこと無いわよそんなのあたし」
「本当だとも……、ほら俺の円らな瞳を見ろ、これが嘘を吐くような瞳に見えるか？ んん？」
「うう」

本当なのか？ 蟹は信頼に値する蟹で、なによりも現実として喋っ

ている蟹が目の前にいるのだ。

「……そう言われると、確かにあたしは本物の蟹に会ったこと無いけど」

「そうだ、それに一部の選ばれた蟹が言葉を喋ることができるようになるのだ。知らないのも無理はない」

「へえ、そうなんだ……って！　べ、べつに知らなかったわけじゃないんだからねっ！！」

本当だからねっ、と呟く少女を真面目な顔で見つめる蟹。蟹の表情はしかし人間には解りづらい。

実際のところ、蟹はいま喜色満面の笑みを内心で浮かべていた。

——というような嘘にひっかかる人間がいるはずないと、思っていたのがなあ。と

やだ、この子からかうの案外楽しい！

と思う彼の思考回路は間違はなく、彼が、先ほど彼自身で罵っていた畜生野郎どもの一員であることを如実に表していた。

夜の訪れを祝すように、外からは虫の音が鳴る。鳥の囀も聞こえてきた。

酒場で酒を飲み、旅の疲れを癒していた旅人たちも、部屋に戻り、鍵を掛けて、明日に備えた睡眠を取り始める。

月は雲に覆われ、酒場は静かだった。

4

蟹が少女に、現在の暦を聞く。

現在は四の月。

至高の月、秩序の月、混沌の月、法の月と続く、その法の月であるらしい。

ついでに言うならばその後に、知恵、闘争、創造、平和、正義、真実、海、死と続くとのことだ。

長きに渡って眠っていた蟹にとっては初めて聞く暦の名称である。
一月は昔と変わらず週7日で、至高月のみ五週間、死の月は三週間のみだ。

「今日の日付は？」

と蟹が試しに聞いてみると、馬鹿にしないでよねっ！ と鼻で笑って教えてくれた。

「今日はねえ、法の月、21日ね、第三週、三の曜日、時刻も付け

加えるなら丁度九ノ夜刻ってところかしらね」

本質的な暦や、暦法は旧暦の頃から変化してないと蟹は判断した。

思えば脱出からこの方、強行軍の連続であり、こうやって落ち着いていまの世界のことを聞く暇もなかったのだ。

蟹はそう思い、鋏を振り回しながら、次々に質問を重ねる。

「大きな方言の数は？」

「えと……たしか六つ、あ、八つだったわよ」

「貨幣はどうなってるのだ？」

「旧帝国の貨幣を古代公式貨幣として、新帝国時代の貨幣が一番流通してるって教わったわよ、一応各地の都市や国家では、信用と証書と兌換を前提とした紙の貨幣もあるらしいけどね」

えへん、と言う少女は、思った以上に博識であるらしかった。

おそらくあの村長の一族は、古くからあの村の知識人の血統であって、村の商事交渉や教育を一手に取り仕切っていたのだろうと推測できた。

その蓄積があるからこそその教育。

文字も読めるらしい彼女のその博識が、彼女の村での孤立の一因であつたこともまた疑いを得ない。

そしてそれを誰かに語る機会もなく、今までただ覚えるだけだった

知識を、こうやって披露する機会に恵まれたことに対する喜びは如何ほどか。

「では、今日はもう時間がない、最後に簡単でよいから現在の信仰……新しき神について教えてくれないか？」

大まかなところはあの王墓でリユーレアーから聞いていた。しかし細かいところでは、現在の信仰の形態や新しい神話、魔将の扱いについてなにも知らないデンザロスの純粋な疑問である。

これに驚いたといった様子で、デンザロスを見るのがルナーレである。

やがて、頭を振って、これもしようがないことかと言うように頷いて、説明を始める。

「まさか新しき神々さまについて何も知らないなんて」

「うむ、すまん、なにぶん魔獣なもので」

「はあ。魔獣だからといって、その知能の高さなら知らないとも思えないけどね、いいわ説明してあげる」

溜息、その後、大きく息を吸う。

ババーン！という効果音が似合いそうな、

独特の気迫を伴ってデンザロスことペンタを見つめる、ルナーレことルナ。

「まず偉大なる神様は一〇柱おられるのよ！」

10！ と返すのは蟹。ノリノリである。

「『至高』と『戦争』のネーベンハウスさまを主神に

『秩序』と『狂気』を見守るアジヨリナさま

『混沌』と『信仰』を示すチャルデルラスさま

『法』と『善』を導きくださるエーミッタさま

『知恵』と『学問』を司るフィネイルウさま

『闘争』と『誓約』を貫くタンドランさま

『創造』と『大地』を護るガルニゼスさま

『平和』と『魔法魔道』を究めたキュリエルさま

『正義』と『寛容』を広めたシエンペルさま

『真実』と『悪』を見抜くデルバイアーさまの一〇柱よ」

後、偉大なる10柱じゃあないけど『海』の神というのもあるわ！
と付け加える彼女の表情は満面の笑み。

「ううむ、いきなり名前を覚えるのはきついものだな」

それも、友人に知らず知らず付けられていた痛い渾名を覚えるような作業である。

きつい。

というか広めたとか究めたとか言うものの、一体いつの間に究めた

のだろうか？

それらの蟹の懊悩を尻目に、少女はどんどん興が乗っているようです。ますます口舌を回転させ始める。

「まあ別に名前までは覚えなくてもいいんじゃないかしら。役職とそういう守護神がいらっしゃることだけわかればべつにいいわよ」

そしておもむろに少女ルナーレは、膝を突き、手を組み合わせ、それを天に掲げるような姿勢のまま微動だにしない。

「これが基本的な祈りのポーズね、略式で、手を組むだけのが一番人気だけれどもね」

「ふうむ、これは教会とやらが決めたのか？」

己の過去にもそういう名の組織が存在し、旧神の先兵だったような気がしたが気のせいなのか。

「そうね、最も偉大なる神への忠誠者にして伝言者、イリネミレエルさまが1000年以上前に神の啓示を受けて、天にいる神に最も偉大なる方への尊敬の形として伝えたらしいわね、まあそんなことはどうでもいいのよ、結局は気持ちの問題なんだから」

蟹は流石に聞き流せないフレーズがあったように感じたので、少し突っ込む。

「その……、なんだ、神は天にいるのか？」

「そうよ、流石に聞いたことあるでしょ？ 天上戦争って言ってね、

それでこれまで人間達を豚のように扱ってた悪い神様たちが倒されて、その後、ネーベンハウスさまとその家臣であった九烈士の方々は旧神の代わりに天に座って、地上を見守ってくださってるのよ」

「ああ……そうなんだな。うん、よくわかったぞ」

——天になど居るわけもないのだがなあ

それこそ二月ほど前に地上で『智慧』キュリエルや、『賢者』フィネイルウ、『無貌』チャルデルラスに会ったのだから。

思えば姫様が人間界に一切の接点を持たなかったことがこのような独特の信仰を生んだのかと、蟹は推察する。

姫ことネーベンハウスは旧神を破った後、その後の地上には一切の姿を見せなかった。

神を倒して混乱に陥っている世界を、尻目に南洋に繰り出して釣りに興じるような人格の持ち主であった姫。

どうにか崩壊する秩序、後退する人々の道徳心に歯止めを掛けるために、強ち間違っても居ない話を考えて、新たな信仰としたのが現在の教会なのだろう。

——長く関わらず、世に情報が漏れないところなのか、ううむ。

「うむ、そういえば魔軍三六将についてはどれほど知ってるのだ？」

「魔将？ ううん。さすがに私も10人言えれば切りのいいところかしらね。というかマイナーな魔将なんて殆ど誰も知らないんじゃない？」

ないかしら。

準神であられる『小鬼』『四つ耳』、
魔將唯一の神でもある『海王』　ネーベンハウスさまの兄君である
『魔王』

小さい頃にお父さんからさんざん聞かされた『大蠟螂』

えと、後は、物語の題材になりやすい『竜公』や『竜人』

普通の人が知ってるのはこの辺りまでね！　まあ私は後2、3人知
ってるんだけどね」

えへんっ！という少女の笑い顔。

えへん！顔とでも言うのか、自信満々なその面持ちはどことなく愛
らしい。

まるで童女が、自分の知ったばかりの知識を、大人に話して、どう
すごいでしょ！　とでもいうようなあの愛らしさに通じるものがある。

——あるいはこれが俗に言うドヤ顔という奴なのか、ううむ。

えーと、『獅子王』に、『大亀』と『鬼王』……これぐらいかしら
ね。

と髪を揺らして、告げる少女の笑みを见ていると、蟹もどこか楽し
い気分になってくるのだった。

——うむ！　やはり子供は元気で笑顔が一番だな。

遠く昔を見る老人のような、遙か年下の親戚を見るような心持ちで、ルナーレを眺めつつも、

蟹は、少女に一つ質問する。

「ふむ、色々名前が出てきたが、一番好きな神は誰なんだ？」

「好き？ ……うん。 ……ネーベンハウスさまかしらね」

「ほお、それはまたどうして」

「だって凄い人なのよ！ 父親が魔王で母親が勇者という悲劇の血筋に、銀の髪の流れるような美貌をもった儚いけれど気丈な姫神さまなのよ！」

憧れるわあ。と続けるルナーレ。

——ぷつ。と吹き出しそうになったのは蟹。

蟹は耐えた。意志を閉じ込め、己の心を無にして耐えた。

「そんなネーベンハウスさまが涙ながらに人間をまとめて、その人望に九烈士が集まってきて、帝国が統一されて。

自らの兄でもあり当時の魔王でもある人を説得して、争いなんかなしで、人と魔族をまとめちゃったのよ！

凶悪な魔将たちも涙ながらの説得と情で接して信頼を勝ち取った姫。可憐で、清楚で儚くて、それでも旧神と戦ったすごい人なんだからねっ！」

その時、蟹は耐えきれなかった。

ブフッ！ と吹き出す音が無情にも部屋に響く。

……

.....

「なによ！ あんたなんか文句でもあんのお？！」

「くっ、無駄に高性能だなこの言語変換紋章っ！」

「ちょ、ちよっと言語変換紋章ってなによ！ といひかなんで笑ったのよっ！」

「いやすまんな、俺が悪かった。うむちゃんちやおかしくなってきたな」

「なにがよっ！ といひか全然と思ひてないわねあんた。むゝ、私ひがその姫様と全然違ひから笑ったんでしょ！」

「いやそれもあるが、うむ」

剣が飛んでくる。

蟹は華麗に横スライドでそれを躲した。

「ちょ、避けないでよね、床に傷が付くでしょうっ？！」

「いやいや、俺に傷が付いてしまひうぞ！」

蟹が笑った理由は、本当のところ別にある。

『有角姫』ネーベンハウスの後世に伝わったイメージの余りの違ひに吹き出してしまつたのだ。

それは何者か（主に蟹の友人連中）の作為を感じる程の正反對なイメージである。

――拳三発で城を物理的に沈めるお方。

――九烈士と三六将合わせた地軍の面子の中で、最も仲の良かった親友が『鬼王』^{オーガ}ケップタイオスだったお方。

――夕暮れの城壁跡で、夕陽をバックに、二人で殴り合ひて友情を深めるようなお方。

――ケップタイオスに我が生涯の唯一の宿敵にして、親友にして、

義兄弟とまで言わしめるお方。

——それに対して、うむ、苦しゅうない。我が義姉になってやろう。と返すようなお方。

——その後、なにがおかしいのか二人で笑い合って、ケップタイオスと酒盛りを始めるようなお方。

笑いをこらえきれぬのも無理はあるまい。

蟹をせめるのは酷である。

なにもかもが違いすぎるのだ。

これは間違いなく何者かの陰謀の仕業であった。

そう蟹が思わざるをえないほどのイメージの違い。

そしていま、蟹はその笑い代償としてルナーレから飛んでくる暴言を捌き続けているのだ。

「最悪っ！　さいあくさいあくサイアクッ！」

「いやすまん、笑うつもりはなかったんだ、うん」

「なんで曖昧な言い方なのよっ！」

「いや、だって食事を食べようとして食卓について、本来肉が置いてあるべき場所にブロッコリーが一本だけ載ってたらかかしいだろう？」

カッ、と火に油を注がれたようなルナの挙動は、直接的な暴力へと変更された。

逃げる蟹を捕まえようとしている料理人のような形相のルナに対して、

うむ、と高速で移動して逃げ続ける蟹。

むー、むーと唸るルナーレの相手をするその顔はどことなく楽しいである。

少なくとも気持ちという面においては、少女から逃げる蟹と、蟹を追いかける少女に暗いものは一切なかった。

誤解から始まった訳の分からない騒ぎではあったものの、切欠はどうあれ、ここにいるのは脳に血の登った娘が一人。

そして何処か楽しげな蟹が一匹。

「というか笑ったことよりも苛つくことがあんのよっ!!」

「うん? なにかあったかな?」

「くっ! 言語変化紋章ってなによ!」

「ああ……まさか騙されるとは思わなかった。うむ今は反省している」

「?!?!?!?!?!?!」

何を言っているのか到底理解できない、罵詈雑言。

感情と怒りと驚きから、口から出る言葉は支離滅裂で。

蟹の甲羅の堅さを忘れて拳を振り上げる少女は

近くの部屋の連中が煩いと思うような音量で、暴言を撒きながら必死で蟹を追いかける。

結局この追いかけてっが、

日が変わるギリギリまで続いたという事実は、ここに小さく記すに留めておこうと思う。

後には疲れ果てて、ベッドに突っ伏して寝ている少女と。

足を畳み、鋏を折り曲げ、黙坐している蟹の姿が、あるだけだった。

少女と蟹。進まない話。旅路的一幕。（後書き）

思いのほか推敲と加筆に時間がかかってしまいました。超難産。

会話文って難しいですね。上げてある会話練習用短編に続いて練習を兼ねてもう一編かこうか悩む今日このごろ。全体的なプロットにも苦慮してます。

山場をどう設定するか、登場させるキャラクター像。伏線。設定説明。

書くのは難しいものですね。

※ 二つ名とか魔将おおすぎ！ まとめてほしい！ という方のため情報まとめ

魔将とか二つ名とか、ゴチャゴチャしてきたので簡単にまとめてほしい。

とのご意見がありましたので、簡単にまとめておきます。

ただし、

ここに記すのはこれまでに本編に出た情報のみです。

全部読んでくださった方でも細かい読み逃しや、忘れている方おられるかも知れないので、その辺りの参考にもどうぞ。

記し方は

『二つ名』本名 （本名が本篇及び設定未登場の場合は載せていません） その他の渾名の順。

★設定は本編か後書きでのみ、語られるべき（あるいは示唆される

べき)だと思っているので。

ここにあるのは全部本編からの引用、本篇中に出てきた情報のみをまとめてあります。

明確に九烈士、三六将と言われたものだけを九烈士、三六将として取り扱いました。

どこにどんな情報があつたのか、魔将や蟹の友人関連を中心にまとめておきました。

少しでも、情報の整理に役立てば幸いです。

・・・
【地軍】

『有角姫』 ネーベンハウス 現代の『至高』と『戦争』の神。『至高神』とも 姫さまもこの人。

・・・『九烈士』

『神官』アジヨリナ 『秩序』と『狂気』

『智慧』キュリエル 『平和』と『魔法魔道』

『無貌』チャルデルラス 『混沌』と『信仰』

『鍛冶』ガルニゼス 『創造』と『大地』（物質とも）

『賢者』フィネイルウ 『知恵』と『学問』

『騎士』エーミッタ・フアーレイ 『法』と『善』

・・・参考

【『正義』 『知恵』 『混沌』 『秩序』 『闘争』 『平和』 『誠実』
『物質』 『法』
の九神である。】 1部三話設定

「『至高』と『戦争』のネーベンハウスさまを主神に

『秩序』と『狂気』を見守るアジヨリナさま

『混沌』と『信仰』を示すチャルデルラスさま

『法』と『善』を導きくださるエーミッタさま

『知恵』と『学問』を司るフィネイルウさま

『闘争』と『誓約』を貫くタンドランさま

『創造』と『大地』を護るガルニゼスさま

『平和』と『魔法魔道』を究めたキュリエルさま

『正義』と『寛容』を広めたシェンペルさま

『真実』と『悪』を見抜くデルバイアーさまの一〇柱よ」
二部二話 ルナーレの発言

『『智慧』キュリエルや、『賢者』フィネイルウ、『無貌』チャル
デルラス』 二部二話 本文中 デンザロス

『『智慧』と『四つ耳』はまともだった』二部二話 デンザロス

『それは文字通り『神の』武器である、

『鍛冶』と呼ばれた九烈士。後に『大地』と道具を司る神となっ
た鉄小人^{ドワーフ}』

【『大地』ガルニゼスは、「力」を「力」のまま、その性質、その
深淵、その神秘をそのままに、

武器として、物質として加工したのである。】 どちらも1部9話

本文中 エクサリオス

——まさか1000年以上会ってなかった相手の第一声が、

「俺の身体……小さくしてくれないか」

だとは思わなかったわね――

大陸南方 ゴルシュナメルク島にて ある高位長耳族の
眩き 二部一話冒頭

『そのために古き友人を何人も訪ね協力を仰いだのは良い思い出。
最終的には儀式大家に覚えのある研究者肌の友人知人が自らの身体
を弄くってくれた。』

九烈士ならば『無貌』『智慧』『賢者』 魔将は『鴉』『人形師』
『海王』『四つ耳』
簡単な同窓会であった。』 二部一話

『騎士』 エーミッタ・ファレーイ 1部9話設定

『勇者』 ←の本編引用の『竜人』参照

・ ・ ・ ・ ・ 『魔軍三六将』

『小鬼』 ヴァウマッフ

『人形師』 ゲウーネエフ

『海王』 ペンデューク 『海神』

『鴉』

『大猿』

『大亀』

『竜人』 ガンジット

『侍女』 ズユチャ・ンヴァング

『四つ耳』 リューレアー 『魔工準神』 四耳猫

『大蟹』 デンザロス・デenzaロス・ペンタレシア

『魔王』 黒い箱

『大蠟螂』 アータレス

『竜公』

『鬼王』 ケップタイオス

『獅子王』 レオハルケン

・・・参考

『地上に墜ちた元神やら、堕天使、意志持つ精霊から鬼王に魔王。竜さえも加わった』

『時に竜が地に墜ち。小鬼が自らの兵器とともに爆散した。騎士の片腕が落ち。』

蜥蜴人の尾が断たれ。竜人の喉は潰された。』どちらも一部一話

『魔将？ うゝん。さすがに私も10人言えれば切りのいいところかしらね。というかマイナーな魔将なんて殆ど誰も知らないんじゃないかしら。』

準神であられる『小鬼』『四つ耳』、

魔将唯一の神でもある『海王』 ネーベンハウスさまの兄君である『魔王』

小さい頃にお父さんからさんざん聞かされた『大蟬螂』

えと、後は、物語の題材になりやすい『竜公』や『竜人』

普通の人が知ってるのはこの辺りまでね！ まあ私は後2、3人知ってるんだけどね』

『えゝと、『獅子王』に、『大亀』と『鬼王』……これぐらいかしらね』 二部二話 本文中 ルナーレ

『子供であれば誰もが聞いたことのある『大蟬螂が来て、悪い子を斬っちまうぞ！』の『大蟬螂』や、

至高神の兄君である『魔王』や、機巧の親である『小鬼』、神器の親とも言われる『四耳猫』などは民衆に広く周知されているが、もっとマイナーな魔将や、地味な魔将などは、専門家やその道のマニアでなければ、普通の人には誰も知らない』

一部五話 本文中 メイニー

畜生野郎ども 二部二話 本文中 デンザロス

(九烈士三六将合わせた中で)

『鬼王』^{オーガ} ケップタイオス 二部二話 本文中 蟹

『大蟹』 デンザロス・デンザロス・ペンタレシア 1部11話 設定

――闘争においては『鬼王』に劣り、儀式大家においては『大猿』

『海王』に破れ、速度においては『竜公』に届かず、防御においては『大亀』に一步譲るものの、

攻防速魔、その全てに通じるその戦闘力は、まず間違いなく魔軍三六将の内でも高位に位置するだろう

『「力」の『鎧』は慢心の証。傲慢の証。罪証に他ならない。

少なくとも猫には、リユールアーには、それは罪の象徴である。

驕りという罪。失うという罰。

そしてまたリユールアーは『鎧』を誇りに思っている。

全てを胸に抱いて、それを傍に置くことで、己が二度と間違わぬように、

そして忘れずに生きていけるように。

それを示してくれる宝だとリユールアーは思っている。

だから、猫よ今は昂ぶれ、天を望め、友を助けるために、それを使

え。

忘れぬことだ猫よ、『四つ耳』よ。罪を罰を。

そしてその上で胸を張って、

愛した親友^{しんゆう}を想い、胸を張って』1部10話 本文中 リューレアー

『竜人』ガンジツト 1部8話 設定

——『有角姫』『勇者』との闘争に破れ、密約を結んで天上に対する軍勢に加わった。

正義を自認する『勇者』とは度々衝突。

——天山戦闘の前哨戦とも伝わる。神鳴谷の戦闘において『勇者』を庇い、喉とともに声を失う。

『侍女』ヅチャ・ンヴァング 1部8話 設定

——『勇者』をもって我が軍で最も可憐であることに疑いを挟まない。

と言わしめた。

『人形師』ゲウーネエフ 1部7話 設定

——『小鬼』のマッフ機巧と……の神器理論、ガルニゼスの『力…金属』を駆使し、

完全自立人形を開発した。

『大蠮螋』アータレス 1部6話 設定

——あの『大亀』や『……』の甲羅でさえ彼には木片の類にしか見えなかった

『小鬼』ヴァウマッフ 『機巧準神』 1部4話 設定

――仲間を庇っての死と伝わる。

『獅子王』レオハルケン 1部4話 設定

――『有角姫』の乗騎としても働き

『これほどの儀式大家、蟹の時代にもいたことはいたが、それこそ仲間を除いたならば（友人のある大猿などはこれぐらい児戯同然で行う）』

1部7話 本文

『四つ耳』リユールアー、『魔工準神』 1部10話 設定

――機巧と魔具技術に長け、後に『小鬼』や『鍛冶』とともに三工人と呼ばれることとなる。

――天山攻略では、『大蟹』や『小鬼』『侍女』とともに北東から侵入。

自らの失敗で『小鬼』の命を失わせることとなる。『小鬼』を失った彼女の慟哭は天山中に割れ響き、彼女は深い悲しみに陥った。

それを乗り越え、小鬼の遺品に自らの培った技術の粋を加え構築した決戦兵器こそが、

儀式併合型・神式マッフ機巧『鎧』に他ならない。

『神器』とは、「神器」理論とは世界を革新した理論である。

元をただせば、ある一匹の魔将が考案したとされる。その後の世界の戦争の姿を変えた兵器技術。

その偉業を讃えられ、マッフ機巧と機巧学の創始者『小鬼』とともに

に考案者たるその魔将は『準神』として人々から信仰されている程だ。』

1部8話 本文中 リューレアー

・・・【昔の友人として言及されているもの】

『ではそういった存在しないはずの魔将の話を幅広く収集しているこの本の作者は何者か。』

「歴史の片隅に埋もれる運命にあった伝説や民話をつなぎ合わせた結果」と著者のエンゲルスは言っているが。

大手の新聞や、著名な書評家、評論家、学者の中に、これらの話を完全に著者のエンゲルスの創作と言っている者も少なくはない。

著者のエンゲルス・バッキオスは、一切の公的な場に顔を見せず』

1部5話 本文 メイニー

『この列伝は、エンゲルス・バッキオス著『神話・物語録』――』

1部 11話 設定

蟹のかつての仲間に『海月』というものがいるが 二部一話 本文 蟹

「馬鹿だなあ『騎士』の奴……で、その話、承けることにしたのか？」

「んにゃ、そこまで馬鹿じゃなかったにゃ、でもその時の決め台詞が「貴方の触手になんか、決して負けはしないっ！」でこれがまた傑作なことに……」

「ほう……、『霧』はそんなところに」

「「俺は晴れない霧になる、それでこの湖の名物になるんだ」だそうにゃ」

「『木人』が地元の村で神木扱いされて動けにゃいにゃ、ずっと同じ姿勢で腰もいたそうにゃ」

「切られるよりはなんぼもましだろうが、しかしそれは………うん」

「姫さまは相変わらずにゃ、今も世界をぶらりと回ってるにゃ、大陸中の名物を食い尽くすつもりにゃ」

「会うのか？」

「たまに、ホントにたまにゃ、10年20年にいちどってどこかにゃ」

「ふむ、一度、会いたいものだな」

「あうといいにゃ、あれで結構、友達おもいにゃ、よろこぶにゃ」

1部4話 本文中 デンザロスとリユーレアー

付録 これまでの登場人物と二つ名のまとめ

【黄金剣】 ロード・エーサーベイン

迷宮騎士 ロード・エクサリオス

ロード・シレンカ

『銀鬼』 ロレントオ

イレエネ

ニケロット

ボブ

メーダ

翼人

部下の黒長耳族

組合長 ハンナⅡウルフ

ギルド 【命知らずの〜】

バル・ファルケンⅡノース 【爆碎】

『潜影』 ロッド・エヴァンス

メイニー・ランチエツト

ニケロ・フィリップ

『庄殺者』 クトゥルス・イーガン

回想 同窓会 敵意（前書き）

おそくなり申し訳ありませんでした。
10分後にもう一話上げます。

回想 同窓会 敵意

1

新暦1622年 死の月。

大陸南方、ゴルシュナメルク島にて。

四方を絶壁に囲まれ、激しい潮流に護られているゴルシュナメルク島。

幾つかの伝説の舞台となった経歴の他に、何も持たないこの島。

多分これからも歴史の表舞台に立つことはないであろう小さな島だ。

至近の半島には漁民がおらず、

遠く漁をたしなむ者たちも、潮の流れ、波の激しさからこの地へと至ることは決してないこの島。

遠く、忘れ去られたノートのような、

あることはある、しかしもう二度と陽の目を見ることはないだろうその島に、

この日、幾人幾匹の客人が訪れていた。

島に居住する鳥でもなく、は虫類でもなく、虫でもない、大きな知

性持つ生命体が幾つか。

何もかも阻むかのような島の奥の聖堂に、彼らは集う。

島でただ一つの建築物であるその聖堂は柱が巡らされ、その上に天蓋が置かれている。

柱も天井も草木に覆われ、自然の揺りかごとといった様相の、

島固有の樹木に囲まれた、古い建築様式の聖堂だ。

そこに動く影が八つ、密やかな同窓会、あるいは密談を執り行っていた。

その影の内の一人、人型の身体を持つ一名が落ち着いた様子で他の七名を見渡している。

「さて、実はねデンザロス。 私たちが集まった理由は、貴方の頼みを聞いたためだけじゃないのよ」

金の長髪、薄緑の見るからに繊細な衣服。

トーガのようなそのみを身に付けた、女神のような雰囲気の長耳族。

彼女が淡々と言葉を放った。

その長い耳には一切の汚れがなく、ピンと立ち、誇示されている。それは美しく形よく、なによりも如実に、彼女が長耳族であることを示していた。

柔らかな物腰で、

古い時代に使われたであろう、寝台のような椅子に座り、彼女は、他の者を窺っている。

身振りに粗野なところは一切なく、その口から生まれる言葉も、雨の滴のように色めいて自然だ。

彼女の言葉を引き継ぎ、黒い鳥が、羽を広げた。

「ハナスベキコト！ アルヨ！」

カー、と鳴いて言葉を締める鳥。

その姿は、一見なんの変哲もない『鴉』。

黒羽は、涙を湛えた乙女のような艶やかさ。

濡れたような鴉羽の艶色美を見せつけるように『鴉』は両翼をさらに広げ、

客人の一人――先頃、己の肉体を縮小化させ、身に付けた紋章を新しくしたばかりの蟹――の背中に乗る。

『鴉』である彼の口から響くのは、しかし人間の成人男性の声音。

どこかおかしなその鴉は、毛繕いするような嘴の突っつきを蟹の甲羅に浴びせかけている。

彼なりの独特のコミュニケーションだ。

常頃、蟹はこのコミュニケーションを嫌がっているが、『鴉』にはやめる気配は全く見えない。

1000年経っても全く変わらぬコミュニケーションに、ある種の感動さえ蟹は覚える。

「話したいことなあ」

いかにも嫌なことを聞いた、という調子で声を聞くのは突っつかれている蟹――デンザロスである。

――この面子でわざわざ？ 相当にきな臭い。

と蟹は思念を及ぼす。

人の顔がもし蟹にあったもなら、露骨に嫌だ、ということを経験で主張していたであろう。

「事件」

蟹の質問に端直に答えるのは『人形師』と呼ばれる存在。

全身をローブで覆った彼は、己の自慢であり全てでもある、奇跡の完全自律人形を五体。

これみよがしに侍らせていた。

人間と寸分違わぬ構造と昨日。

見た目も人間そのもの、その知性においても人間に匹敵する究極の自動人形。

『人形師』ゲウーネエフの持てる知識と技術全てが注ぎ込まれたであろうその人形たちは、一切の表情を変化させず、当然のように、『人形師』の傍に付き従い、己の主の挙動を、細部まで注視している。

主の些細な望みに、確実に対応できるように、と。

先の女性長耳族――『智慧』キュリエルと同じように、寝台に腰を落ち着かせている彼の表情は、ローブに覆われて確認できない。

「至急解決。必要」

ぽつりぽつりと、低い声がぶつかりに会話を進行させる。

他の影、即ち、場集っている客人は、事態の進行をただ見守っているのみ。

『四つ耳』リユーレアーは、聖堂を支える円柱の一つに背をもたれ、己の小さな身体を伸ばしながら、眠たげな表情で、欠伸をするように、にゃ〜、と鳴いている。

『無貌』チャルデルラスは、膝を地面に突いて、土下座をするような体勢で、腕のみを天上に伸ばしたまま動かない、彼の日課である祈りだ。

その日課は平均して。一日14時間行われる、飽くことなき狂信者の祈禱である。
しかしそれを気にする者はこの場には一人も存在しない。

『海王』と呼ばれる魔将は、その膨大な触手の一本のみを海底からこの場に伸ばし参加している。

そのため彼は複雑な挙動がとれない。うねうねと動く、巻き貝の触手は、

リユーレアーの子供めいた体よりも太く、弾力を持ち、どこかなめらかな白色の光沢を放っている。

存在感はピカイチだ。

その彼は、時折触手を動かして、なんらかの意志を伝えようとしているようだった。

不思議と意図がわかるのが不思議といえば不思議か。

彼らはこの場において、会話に積極的に参加する気は微塵もないようだった。

観劇に招かれた招待客のような不遜さで、ことのなりゆきを、ただ静かに見守っていた。

そもそも『無貌』に至っては外の世界の音が聞こえているかも怪しいだろう。

世界を理解し、干渉し、確かめながら、そのうえ己の魂をも確かめる、深い深い瞑想。

魂の奥の奥、魂自体が元々は絶対なる神の一部であったという事実への感謝を捧げるように、

己の魂の、そこに満ちる【力】の奥、小さいな孔を探すように、心を静めている彼に、届く言葉はありえない。

ただ最後の一人、

『賢者』のみが、『鴉』や『人形師』、『智慧』の言葉に耳を傾け、発言の機会を窺っていた。

見事な円錐型の一本角を額から、天上に向けてそびえ立たせている彼女は、精霊種の一民族「有角人」だ。

この世の全ての書に通じ、科学と哲学をこよなく愛し、実験と実践を友とする狂人一步手前の烈士。

小ぶりの眼鏡。理知的な瞳の色。綺麗に伸びた背筋。膝の上に重ねられた両手。

落ち着いた学者のような佇まい、冬の雪山から流れてくるような静かな美。

知識人めいたその顔かたち。

だが貌に浮かぶのは月を割ったかのような狂笑。

落ち着いた知性を感じさせる美貌の上に置かれるのは、

世界の全てを喰い、解体して、飲み込もうとするような欲望の笑み。

「いやあ、やっばいんだよねえこれがさ！」

その見た目とは反するような、無軌道に高い声の調子。

『賢者』が取り出すのは、一冊の書。

危機感の全く感じられない高い声が、面白がるように弾んでいる。

エンゲルス・バッキオス著『神話・物語録』

『賢者』が掲げる書の名である

「ううむ、俺が字を読めないと知っての処遇だろうか、……
そも本を手で取れないのだが？」

言い、デンザロスは鋏を持ち上げ、ひとはさみ。己の鋏をアピール。
知らないわけがないだろう？という蟹の面差し。

その蟹の上で『鴉』が背中を歩き回る。

『無貌』の喘ぐような祈りの声——恍惚と陶醉の声が聖堂に低く流
れている。

嫌になるほど神秘的なBGMだ。

知ってるよ！ と弾んだ表情の『賢者』が、ただ一人、小児の如き
快活さで場にある。

「相変わらずの蟹っぷりだなあ！ デンザロス。1000年経って

も君が蟹のままであれしいよボクは」

「貴様に喜ばれるために、俺は蟹であるわけじゃあないんだがな」

——というよりも蟹以外に変化するわけなからう？

とんだホラーだ。と肩をすくめる蟹。

この場合はすくめるのは甲羅であるが。

場が温まってきたことを察知したのか『人形師』が、手を軽く上げる。

それに呼応するように『人形師』の自律人形が動き出し、『人形師』の肩を揉み始めた。

同時に、海王の触手を磨き始める者、猫と長耳族と蟹と有角人に茶を出す人形も現れる。

「続き」

「ガァー」

と『人形師』と『鴉』の先を促すような声。

静観するように『智慧』と『四つ耳』は出された茶を飲む。

蟹は出されても飲めないのに目前に出されている茶碗を見る。

鋏を傾げる。

その後、『人形師』の方をじと目で見つめる。

『人形師』は、気にするなサービスだ、と腕を振り。

蟹は、改めてその茶碗に眼を向ける。

そしておもむろにそれを鋏で叩き潰し。破片が飛び散り。茶が流れ出る。

「そうだねいい加減、話をはじめようか」

有角の女性は、息を吸い、どこかゆるい、ふざけた雰囲気収める。

場に突如として緊迫の空気が現れる。

遠く鳥の鳴き声、猫のあくびの音。

割れた湯飲みを片付ける人形の作業音が、ざっ、ざっ、と響いている。

……

……

「なにかが蠢いている」

そして、生まれた言葉は、宙に漂ったまま動かない。

必要以上に不明確で、抽象的な言葉であったから。

だが、有角人の表情は深刻である。この上なく真面目である証だ。
なによりも、『賢者』にとってそれはとても珍しい表情だ。

楽観と狂気を母に生まれたかのようなこの有角人のシリアスな表情。

つられるように、『鴉』は羽を広げ、『智慧』は厳しい表情で場を見据える。

『海王』の触手が急に激しくうねりを帯び、

『無貌』の詠唱はいつしか止まり、『人形師』が拵えた造られた被造美の人形は整列する。

『大蟹』は鋏をシャン、と鳴らし、『四つ耳』がにゃ、と呟く。

「なにか、とは？」

皆を代表して、質問するのは蟹。

皆とはいっても、要領を得ていないのは蟹だけであつたようだ。

『賢者』は、角を撫でながら事も無げである。

「敵だよ、敵」

「……まさか」

信じられない。と蟹。

真実だよ！ と有角美人

「嘘をついてもしょうがないだろう？ とはいえ確かに確証はないんだけどね」

「ならば、……なぜ」

「幾つかの推量材料から簡単に導かれたことさ」

ふむ、続ける。とこの場にいる者の眼差しが『賢者』に集まる。

ひとときわ強いのは蟹の眼差し。

要領をえないが聞き捨てのならない発言である。

敵、敵には最大級の警戒を、それが蟹の生き方でもあつた。

「まず第一に、ここ数年、あるいは数十年、音信一切不通の何をしているのか、全くわからない奴が、私たちの仲間内に出てきたこと」「そののどがおかしいのだ？」

蟹の疑問。

「おかしいでしょ、『鴉』の情報網に引っかからないでことだよ？
蟹の旦那さんよお！」

「む……確かにそれはおかしいな」

でしょー！ と『賢者』。

前言撤回、『賢者』の深刻な表情は最初だけであつたようだ。

補足しておけば、基本的になにをするのも自由だが、強大な力を持つのが地軍という存在である。

なにをしでかすかわからず、なにかを企みかねない存在も多い。

無条件に善を至上とするような存在は、実のところ地軍にはそう多くない。

誰もが皆、個人的な欲望、個人的な問題意識や意図から旧神と戦つたのだ。

そこに絆はある。しかし無条件の信頼はない。

彼らは強大な力を相互に監視し、時に牽制している。

いまこの世界に生きるものに、その高すぎる力を振るい、欲望を果たそうとする者が出ないように、

『智慧』や『鴉』といった存在は、

誰が何処にいるのか、何をしているのか、それらの情報を出来うる限り集めて、管理しているのだ。

例えば、『死の悪魔』や、堕神であり元旧神の『大嵐』 元天使『

白焰』などは特に厳しい監視を受けている。

そういった監視があるほかに、地軍という存在は、近くに行けば顔を合わせ、定期的に歓談する程度には仲間意識をもっている。

つまり、数十年といったスパンで連絡が取れなくなること、位置がわからなくなることなど通常ならば、まずありえないのだ。

もしそれがあり得るとしたら、それは恣意的に味方から身を隠し続けているということに他ならない。

有角の『賢者』の話を助けるように、長耳族の『智慧』が口をはさみ、情報を補足する。

「こちらで把握してる限り、音信不通なのは四名『吸血鬼』『図書館』『百腕』『首なし』」

「さて、初めて聞く」

慌てたような蟹の声。

「そりゃあんまり外に出ないような連中は知らないだろうねっ！」

知らないのも当然だろう？ と言うのは『賢者』

「しかしそれだけでは、「敵がいる」などとは……、発想を飛躍させているのではないか？」

「やあやあ、それだけじゃあないさ、ないんです！　ないんです！　」

癪に触るようなテンションの高さ。

「うざいぞ」

思うに留まらず蟹は、口から泡と一緒に心の中で思ったことを条件反射的に呟いていた。

「うん、ごめんねー！　そこで問題はこれさ！　この本。ブック！　ブック！」

テンションの上がり方は留まるところを知らない。

数秒前の蟹の言葉をてんで意に介していないその様は。

蟹が己の言葉が通じているのか不安になる程である。

とはいえこれが『賢者』の平常運転である。恐ろしいことに。

——全く進歩していない……

と蟹が考えるのにも無理はなく、『賢者』のともすればお寒いような一人舞台は、止める者もおらず、そのまま続く。

『賢者』が先ほどかざした書を再び、かざす。

「エンゲルス・バッキオス著『神話・物語録』！」
「バッキオス！」

蟹は驚く、それは純粹な意味での驚きである。

つまり昔の知り合いが作家になったことに素直に驚く元同級生の体だ。

その驚きの理由は簡単。

エンゲルス・バッキオスとは歴とした魔将の名であるからだ。

その二つ名は『図書館』

その本体は図書館、意志持った巨大図書館の魔将である。

独自のコミュニケーション方法をもった、かつての地軍の本拠地でもあった魔将。

蟹の驚きには、図書館が図書館自ら本を作るという行為への奇妙な感慨が多分に含まれているのだ。

そして音信が不通であると『智慧』の報告した魔将の内の一人である。

「ううむ、まさか『図書館』が本を書くななんてなあ」

少しずれたところのある、蟹は素直におどろいている。
心なしか、鉢が震えているように見えるのもそのためだ。

「うむ、本を生む図書館、書き手要らずの画期的な図書館じゃあないか」

蟹は、暢気にそう言って、何か問題でも？と

本を手に持ってぶんぶん振り回している『賢者』の方を見た。

しかし声が放たれたのは横合い、『智慧』からである。

「……問題お有りよ、音信不通の『図書館』が書く本よ？」

頭が痛い、といった様子の『智慧』。顔色が著しく悪い。

『智慧』は頭痛の持病を持っており、古い時代にもよく頭痛を催していた。と蟹は記憶している。

その持病はなぜかこうやって皆で集まるときによく発症するようで、蟹はその度に純粋な心配の念を送っていたのだ。

「この中に書いてあることが問題なのにな」

助け船のように、声が外から飛んでくる。

リユーレアーが円柱の傍で丸くなりながら蟹を見ている。

知っているのかリユーレアー！ と蟹は彼女を見やった。

「カニさんが洞窟で眠り込んでいる最中に読んだにゃ、ベストセラ―だからにゃ」

「この内容はねえ、僕たちのこと！ 僕たちの特徴、僕たちだけしか知らないような時代の話、それが沢山載ってるのさ」

「……つまり？」

信じたくないが。

「利敵行為！ それ以外のなにものでもないね！」

「本当か？」

「ええ、信じたくないことだけど本当よ、この本のせいで、私たちの活動の幅が狭められていることは間違いないわ」

「最近僕たちの知名度もぐんぐん上がっているところさ！ 嬉しいね！」

ありふれた教会の説法だけではなく、それまで埋もれていた魔将たちが沢山のストーリーを持って紹介されてるのさ、

本を読める層を中心に、ベストセラーだけあってかなりの速度でこの話が広がっているのは確かさ！」

君なんて元の姿だったら、本を読んだ人には一目で正体ばれちゃうね、今だったら。

「……」

沈痛なデンザロスの沈黙。

図書館が乱心したのか、あるいは

「なにものかが彼の意識に干渉しているか、だね」

僕はその可能性が確かだと思っているよ。と『賢者』

「なら、『図書館』は敵の手に落ちた、と？」

「うん！　と言いたところだけど、そうは言い切れないね、残念ながら、いや幸運なことかなこれは」

「どういうことだ角付き」

「簡単なことさ鋏持ち！　この本が完璧じゃあないってことさ」

ごほん、とわざと咳き込み、胸を張って、角を威嚇するように上げる。

そして蟹の方を見下ろしながら、笑顔で会話を続ける。

広くもないが狭くもない聖堂に、潮と緑の空気が風と共に流れ込んでくる。

一瞬の沈黙のあとの嬉々とした『賢者』

「例えば、僕たちのこの列伝も、全てのことが細かく書いてある訳じゃないし、

書かれている伝説にしたって、量はあるけど、その大半は僕たちに全く関係ない伝説だからね。

それと、僕たち自身のことじゃなくて、僕たちに関わるかもしれないという程度の伝説。

間接的に、婉曲的にしか関わらない話。象徴的な意味で、もしかしたら僕たちことかもしれないという程度の話。

そんなのも多いのさ。むしろそっちのほうが大半だね！」

「つまり完全ではない？」

「イエース！ おふこーす！ 『図書館』は広い意識を持っているからね、うん。

多分主要な意識は乗っ取られたか、相手の支配下に入ったんだろうけど、

その全てが入った訳じゃあないんだよ！

元々面積に比例するように意識も広い奴だしね。

自分の記憶を製本して、記憶のスペアにしてる奴だよ？

意識のスペアだってあってもおかしくないし、

少なくともただで乗っ取られるとはボクには思えないね！」

「情報が部分的だったり、示唆的だったり、概略的なのは、抵抗の証である？」

「そうじゃなきゃこんな半端な内容で出さないよ！ これはこっちがかなりやりにくくなる以上、

つまりこれまで以上に人目につきにくくなることを考えると、間違はなく僕たちに対する嫌がらせだからね！

効果を半減させる意味なんてないんだよ」

しばしの空白。

蟹は情報を改めて咀嚼し、整理する。

『賢者』は、席に座り、茶を飲んでいる。

『鴉』が、デンザロスの甲羅の上でいつの間にか寝ていた。

『智慧』は、なにをするでもなく目を瞑っている。

『四つ耳』は件の書を手にとって読んでいる。

『無貌』は沈黙したまま、地に跪いて、頭を垂れている。

『人形師』と『海王』がチェスを指して遊んでいた。

人形を介して、駒の感触で場を判断しているらしい『海王』が優勢であるようだ。

「厄介な……」

蟹が再び口を開いたのは、数分後のことであつた。

鋏は、力無く地面に横たわっていた。

「うん、厄介なとき、このことを話し合うために僕たちが集まる

必要があつたわけなんだ!」

「だから貴方の頼みは渡りに船だったのよデンザロス。こういう時でもなければ私たちは皆、集まる機会もないのだから」

「背後に、蠢く者、か……見立ては?」

「多分墮神じゃあないかなあ、迷宮を造らず、地上を逃げ回ってる元旧神連中」

「隙を突かれたか、あるいは正面切つてやられたか」

「もしかしたらそのどちらかもしれないよ!」

「で、俺はどうすればいい」

「うん!　これを」

渡されたのは手紙。書状。

「君は冒険者として生きるんだろう?　それも中央迷宮に行くっていうじゃあないか!」

これ幸いなさ!　とテンション高めな『賢者』　眼鏡がずり落ちている。

そもそも——なぜコイツは先ほどから語尾を強めているのか?

わからん俺にはわからん。

蟹の懊悩を尻目に、角を振り回すように話続ける『賢者』

「この手紙をね、渡して欲しいの中央迷宮に、エミダリにいる『騎士』に、

あとはあ！ 内に籠もって出てこない魔将連中に会うことがあるならあ！、話したことを伝えてくれるとボク嬉しいな！」

『賢者』は笑って蟹を叩き。

その衝撃で『鴉』は目を覚ます。

「オワツタカ！ オワツタカ！」

カー！ カー！と『鴉』の鳴き音。

話を改めて聞いたらしい『海王』は触手を上下に振り、理解を示し。『人形師』は立ち上がり、己に従う美麗の侍女人形群を連れて、聖堂の奥、地下にある寝室へと入っていく。

『四つ耳』は、飛び上がり、身体を伸ばして、己の耳を二三撫でて、にゃあ。と言いながら今度は毛繕いを始めている。

『智慧』と『賢者』も連れだって地下室へと歩き始める。

よろしくお願いね。お願いするよ！とこちらを一瞥する二人も、多分『人形師』と同じように、それぞれの寝室に下りていったのか、予め蓄えてあるらしい食事を摂りに向かったのだろう。

と、途中で『賢者』が振り向いた。

「ああ、そうだ連絡は『鴉』とか、『人形師』の人形で行うことにするからね、あしからず！」

そして地下へと降りていった。

ただ一人、蟹は先ほどの会話に思いを馳せている。

（『吸血鬼』『図書館』『百腕』『首なし』）

仲間の名と姿を思い浮かべる。

思いとともに湧くのは想い。

黒く、溶岩のように、蟹の底で湧くのは醜い怒りの情念。
暗いそれを、面には出さない。
努めて深く深く底に仕舞う。

『智慧』にしろ『賢者』にしろ、似たような気分だろう。
かつて地軍として、共に戦った我ら四六名。
姫を頂点としたあの輝かしい時代を共に過ごした仲間。

全員が親友とは言えぬ、全員が朋友とも言えぬ、所詮、危機の前に
手を結んだ同盟者のようなものなのだから。
だが、苦難を、危機を、喜びも、悲しみも共に乗り越えたことも確

かなのだ。

そこに絆はあるのだ。太くなくとも、蟹にも、皆にも絆はあるのだ。少なくとも蟹はそう信じていた。

蟹も、猫も、巻き貝や、長耳族にも、それに似た考えはあるはずなのだ。

ならば一体どうして、仲間に危害を加えているかもしれない存在を看過することが出来るのか。

蟹は、ふと見ると、『無貌』が傍に立っていることに気付く。

のっぺらとした、まるで張り付けたかのような顔のパーツ。部品、表情。

一切の変化を見せず、静止したままの表情で、人形のような瞳をこちらに向けている『無貌』

「偽りの向こうにこそ神はありけり、

神を気取りし地獄の蠅の如き面罵必定の落ちたる偽神。

宿りし思いを捧げるには高く、甲殻を震わせるには低いものなり。

汝、迷宮と霧中の幻影を思うことなかれ、見るな、祈るな、心を燃やすな。

信じろ、そしてなすべきことをなせ」

言っていることが、蟹に全てが理解できたわけではない。

彼の発言は高踏を飛び越えて、印象を飛び越えて、

狂気の入り交じった思考の断片をそのまま撒き散らかすようなものだから。

ただ蟹は、そこにあった心を、感情を静かに汲み取った。

溢れ出る感情のまま、行動することは危険だ。鋏は持ち上げたら振り下ろさなければならぬ。

機会を考えるべきなのだ。理性持つ存在として、この狂気の神秘主義者はそう言っているのだ。

蟹の心配、もしかしたら死んでいるのかもしれないかつての仲間を想う心。

蟹の不安、もしかしたら操られているのかもしれないかつての仲間を想う心。

そういった、逸る心を見抜いての発言。

狂気の住人にまで心配されるとはどれほどわかりやすい蟹なのか己は。

そう自嘲めいた考えを浮かべつつ、『無貌』へと感謝を捧げるデンザロス。

「うむ、すまんな迷惑をかけた」

「おお神は空にいない。届かない、己の祈りの届かない。ああ、ああ、この世の奥深きに私は行きたい」

そう言って、『無貌』は外へ出て行った。
祈りの続きを行うのだろう。

それをぼうと眺めていた蟹の甲羅にポンツ、と乗る毛深い物体。

「まあそんなにヤッカスんにゃ、どうにかなるにゃ！」

ことを見守っていただろうリユーレアーと

「オチツイタ！ タノシイコトカンガエロ！カンガエロ！」

と蟹を突つつく『鴉』が後には残った。

見れば『海王』の触手もゆらゆら揺れて、蟹の身体を慰めるように揺さぶっていた。

「むう、余計なお世話ばかりする連中だなあ」

気を取り直した蟹が想うのはこれからのこと。

想像するのは冒険者。

想像するのは千年前となにもかもが違うこの世界。

そこで生きる己の姿。それを想う。

この世を再び生きると決めた己には、迷いも不安も必要ない。

蟹はそう考えて、これからさきの旅のことだけに心を巡らせるのだ。

不安はある。とはいえおいおい解決していくだろう。こちらには頼りになる友人が沢山いるのだ。

無用な心配は要らない、性格には問題のあるやつらばかりだが、蟹は信頼している。

だから、蟹は己の楽しみに素直にまっすぐに集中するのだ。それが流儀というものなのだ。

そして、いつしか聖堂には、

蟹の低い重低音の声と、猫の笑い声。

鴉の鳴き声と、狂信者の深い祈りの音のみが流れ始める。

その音は、どこか暖かった。

回想 同窓会 敵意（後書き）

九烈士

『賢者』フィネイルウアーサトナス

旧ダフドクロア南方域（現クローア防衛国）出身

精霊種の一民族である有角人の学者。

冷たい印象の理知的な美人だが、その性格は極めてアップー。しかしその知謀は間違いなく地軍随一である。

地軍の知恵袋の一人であり、万学博士の異名を取る。

元々は、魔王領に接していた東方の大国ダフドクロアの大学府学長であり。

同時にダフドクロアの儀式大家として、

魔王率いる軍勢を、三度一人で食い止めた紛う事なき英雄である。

遙か西方シーベネシアから、モレサス、エミダリアと、

破竹の快進撃を続けてきた『有角姫』の前に最後に立ちふさがった相手でもあり、

彼女の指揮した三万の軍勢は、『有角姫』率いる一五万の軍勢を三日食い止め、

一度は『有角姫』に死の恐怖を味合わせたとされる。

その会戦ののちに躊躇なく『有角姫』に帰順。

以降は、面白そうという理由のみで天上戦争にまで文句一つ言わずに付き従った。

地軍においては、『魔王』『人形師』らとともに作戦立案を担当。同時に『四つ耳』や『鍛冶』『小鬼』ら三工人の魔具開発にも協力。また天上戦争においては、後衛として多くの戦闘に参加。戦争を通して、神四柱を屠ったとされる。

新暦においては『知恵』の神として信仰される。

元々『智慧』と渾名されていたキュリエルがいるので、この辺りの渾名の変遷は後の世の多くの神父候補をテストで苦しめることとなる。

現在は、世界中を気の向くまま、旅をしているとも、南方の島に密かに隠れ棲んでいるとも伝わる。

『智慧』キュリエルⅡロンリエ

大森林の出身とされる。

太古から続く有力長耳族氏族の族長の娘であったと伝わるが、詳細は不明。

歴史の面舞台に現れたのは旧暦6030年頃。

ティオニソス反逆帝の一代帝国において宮廷魔法士としてであった。その時には既に永き時を生きた長耳族——高位長耳族であったとも伝わる。

ティオニソス帝が崩御し、その後長らく歴史の面に姿を表さなかつ

たが。

『有角姫』ネーベンハウスの『英雄進撃』と共に再び姿を表す。一説によれば『有角姫』の教育役を務めていたとも、『有角姫』の才能を見込んだとも伝わるが真偽はわからない。

天上戦争では、地軍随一の儀式大家として活躍、神秘大家であったとも伝わる。

その世界理解は『大猿』に並び、また治癒刻印に、再生刻印に優れ、多くの傷ついた魔将や烈士を救った。

新暦においては『平和』の神として厚く信仰される。

また医療や、病を司る神であり、魔導と魔法の理を見守る神とも伝わっている。

現在は大森林の奥深くで隠棲しているとされる。

船上にて 蟹と少女 騒がしい奴ら 照れるものたち

2

船の上には、塩の匂い、海の匂いが立ちこめている。

帆は風を搔き、幾つかの船舶用の魔具が、かなり立てるような音を奏でる。

紋章と貯蓄の機巧に、予め蓄えられた【力】が、紋章に【力】を送り、それが決められた推進力として発現しているのだ。

発現する力は爆発か、あるいは風か。

ともあれ、指向性を持ったエネルギーを、船舶は自ら放ち、帆の喰らう風の力とともに推力としていたのだった。

大陸中央の内海。

船の所在地、巨大な船体が泳ぐ場所。

そしてこの船が、恐ろしく速い速度で海を駆ける理由もそこにある。

エンジンの音。機巧の音。紋章の音。海の波音。さざ波の潮騒。

白い渡り鳥の鳴き声。その遙か頭上に棚引く白い雲は、空を覆う天蓋そのもの。

だが合間合間に空の青が顔を覗かせている。

主役は私だ。と自己主張を忘れないのは太陽。

何時も通り、ともすれば忌々しい程に元気なその日射しの下、蟹は回想に耽っていたところであつた。

とはいえその回想も、既に終わり、周囲の客から不審な、あるいは驚きと恐れ之眼で見られながらも、

彼は甲板で、悠然と愛すべき海の風に当たっている所である。

彼の生まれ育った海ではない。

あれはもっと南東の海である。

それでも海は、彼——大蟹デンザロスことペンタに気持ちよい感慨を想起させるのだ。

それは慣れ親しんだお袋の味を他国の定食屋で味わうような。

あるいは、遠く異国で自らの家と同じ形の家を見つけたような。

遠国、異なる文化圏の雑踏の中で、自らの母の匂いと寸分違わぬものを嗅いだような心持ち。

胸がくすぐったくて、弾むような、笑みがこぼれるような、思わずハミングしながら鋏を振り回したくなるような。

そんな心持ちを蟹は味わっていた。

近くで、初めて乗るらしい船の動きに感動しているのは元村娘のルナール・ジュール

肩まで伸びる金の髪を、揺らし、彼女は鼻歌を口ずさみながら、甲板の手すりにもたれかかって、蟹の隣で、こちらも楽しそうに嬉しそうにしている。

「海、いいわね……」

「いい……」

ああ、と声を出して潮の匂いを嗅いでいる少女と蟹。

それを訝しげに見る、周囲の客。

眼を細めて太陽と潮の香りに想いを馳せている二人には、しかし関

係のないことではあった。

蟹と少女が昨日に泊まった宿を出て、
ワインランド都市共和国首都ワインランドに着いたのは正午ほどであった。

少女ルナーレもかつて二度しか訪れたことない街（二度とも親の商用に供して）
いや都市と言った方が正しいだろう。

内海西南の湾岸全てを管轄下に置いた商業都市、中央都市同盟の末席に名を連ねた都市国家であるワインランド。

南にロートランド公王国を、西にタンボルグ山、タンボルグ辺境国。

西と南を通りやってきた旅人や商人を、内海を隔ててエミダリ、そして内海の南湾岸沿いに東の都市国家へと送る役割を持ち。、
時には、それらの国家から出先の交易商人、仲買が集まる都市であり。

また北や東から西、南を目指す旅人も、一度や航路あるいは陸路の途中で寄る港湾都市。

それこそが人口4万、時期によれば人口七万にも膨れあがるワインランドである。

宿場街ポートニアからワインランドまでは、徒歩で行けば丁度、日が暮れるほどの距離がある。

馬で行くのなら、3〜4時間と言ったところか。

ここで疑問に思われることがあるかも知れない。

ルナーレとペンタの一人と一匹も、馬を使ったのと同じ速度で街道を行ったということになるではないか、と。

これはその通り、馬ではないがルナーレはある乗り物に乗ったのだ。便利で、無料で、速く、なにより人が乗るのに適した構造を持っている者。

果たしてそれはなんだったのか、

——蟹である。

距離の近いということ聞いたデンザロスは、海と聞いて、いて

もたってもいられなくなり、

自分で歩くと言うルナーレを、
無理矢理、自らの背中の上に載せて、しがみつかせ、その荷物ごと
街道を爆進したのだ。

横歩きで、弾丸のように高速で疾駆する蟹。

それにしがみつく少女、というシュールな絵面が道の隅を往き。
その蟹の爆速のかいあってか、九時に宿を出た少女と蟹は、見事、
正午にワインランドに到着したのだった。

久方ぶりに都市を訪れる少女の顔はいやに暗い。

消沈した様子で何事かをぶつぶつと呟き、
速度と比例するようにもたらされた危険に、未だ想いを馳せていた。
とうに都市に着いたことにも気付かず、蟹にしがみついている美麗
な少女（髪を張り付かせてまるで魔獣のようだ！）
と大きな蟹の魔獣。その奇妙な二人組は大きく目立っていたが、
人間の世界に疎い蟹は、その眼差しに一切の頓着をせず、少女もそ
れどころではなく、速度の恐怖から放心したままだ。

その少女が気を取り戻したのは、それから三〇分ほどしてからで、

エミダリ行きの定期船がある船着き場に着いた頃であつた。

「ばっ、ばかじゃないの！ なになんかの恨みでもあんの！

死ぬかと思つたわよ、死ぬかと思つたわよ、あああああああ
あ！……！！！」

神よ生きていることに感謝します。感謝します、ううう、今度やつたら茹でて食べるかんね！！

と嘆く少女を後目に、蟹は、通りすがりの屋台からもらったチキンレッグを口に運んでいるところであり、さらに言うのなら、船が到着し、待っていた者たちが乗り込み始めるところであつた。

喋る蟹は目立つ。なのでなるべく喋らないようにしよう、という方針を昨晚初めて定めた、どこか抜けている蟹と少女。

蟹（すごく目立つ）の荷袋から取り出した旧金貨（ものすごく目立つことに二人は気付いていない）

を払って、蟹の前に行くように少女（少し野暮だが華のある美貌、当然目立つ）が船に乗り込む。

こうして少女は生まれ育った故郷から、
海で隔たった危険と浪漫が溢れた都市へと本当の意味で旅立ったのだ。

そして今、蟹と少女は甲板にいる。

「あー」

と少女。

「あー」

と蟹。

蟹はブクブクと泡を吹いている。

鉄を海にかざし、己の故郷に思いを馳せながら潮の満ちた空気。海の空気を楽しんでいた。

「ねえ」

「なんだ？」

「あんたの生まれたところもこんなところなの？」

「うん？ ……うむ、どうだったかな、もっと綺麗で穏やかな、それこそ真珠のような、太陽の光の反射する様はまさにそんな感じだった、と思う」

「やけに曖昧ね」

「……長く帰ってないからな」

「ふーん」

そして少女は興味をなくしたように、遠く、海と陸、空と海の境界線を眺める。

何か悩んでいるような不安な様子である。

少女の隣、同じように甲板に立ち、隙間のある柵から海を眺めていた蟹は、思いついたように、それでいて独り言のように、少女に声を掛ける。

「今度、行ってみようではないか」

「へえ……へっ?!」

何を言われたのか分からないというように少女。

蟹の黒い瞳は何も語らない、しかしそこには優しさと、なによりも強い意志が煌めいている。

「な、なに言ってるんのよ! 何処にあるか知らないけどそんな近くにないんでしょ?!」

どこか慌てたように言うのは少女。

「そうおかしな話でもあるまい? 冒険者なのだ、大陸中を用事で駆けることもあるだろう」

「……えと、じゃあエミダリについても一緒にこうやって旅したり仕事したりしてもいいのよね?」

どこか探るように、子犬が主の心情を探るような上目遣いで、少女はおずおずと聞く、

「ん? 何を言ってるんだお前は、少女ルナーレ。」

俺一人では荷袋も開けられないし、文字も読めないのだぞ?

当然ではないか! そもそも冒険者とは仲間を作る者なのだろう? 俺でも知っていることだ」

そう平然と返すのは蟹。

「……そ、そう」

どこか嬉しそうに少女、不安そうな様子は既に払拭されていた。
大海にただ一匹、生を受けた稚魚のような不安は、
しかし、少女の不安など何でもないといった様子の蟹に、綺麗に拭
い浚われたのだ。

心なしか、その不安から解放された表情には笑みらしきものが浮か
んでいる。

「そうね、あたしたちは仲間……でいいのよね」

「うむ、当然だろう？」

言葉を切って、何かを考えるような蟹。

「ふむ、そういえばはつきりとは言ってなかったなルナーレ。
冒険者志望のデ……ペンタだ。これからもよろしく頼む」

少女も納得したというように頷いた、そう、冒険者になるのだ、己
は。と

ルナーレの胸に既に別れへの不安はなかった。
心のどこかから湧いた不安。

都市に着くまでの約束しかしていなかったという事実、から出てき
たような不安は、
しかし小さいことだ！と隅に迫いやられ、目の蟹は鉄を少女の前
にかざしていた。

まるでそんなことを考えていた少女が考えすぎであるといったように。

少女は今度こそ、満面の笑みを、堂々と浮かべる。

「ルナーレ、ルナーレ・ジュールよ、……こ、これからもよろしくねペンタ」

「うむ頼むぞ」

蟹の鋏に、少女の手が合わせられる。

ここにいるのは一つの命と命、二つの冒険者志望だけだった。

「で、どうなのだ？」

「そう、まあそういうことなら、……そ、そうね、まあ確かに行つてあげてもいいかもしれないわね」

どこか照れた心持ち。

それを隠すように、己の朱く染まった頬を隠すように、顔を蟹とは反対側に背けながら少女は言う。

なぜそんなに偉そうなのだ？ と蟹はない首を傾げながらも、まあいいか、と彼もまた海の方を眺める。

蟹の視界が移ったのを確認したのか少女もまた、海を眺めるように背けた顔を元に戻すのだった。

少女は、新たに一つ、将来の夢を増やしたばかりの幼女のように、海を眺めながら純朴に微笑んでいた。

母なる海へとつながる、蒼い海、そのさらに内側にある内海は、小さな波の音の他には、なにも音を語らない。

どこか遠くから鳥の鳴き声。

そして甲板から響く、粗野な歌声や話し声、階下の船内からもれる食卓歓談の笑い声。

どれも静かな海を決定的に壊すには至っていない。

なにかの魚が跳ね、銀の鱗が陽を弾く。

「で、どこなのよアンタの故郷は」

気を取り直したように、少女が訊ねた。

「ふむ海、いや、海のような湖のような河のような」

「要領を得ないんだけど？」

「インザーディオ サヴォーナ」

蟹は唄うように、こじやれた調子で笑う。

「サヴォーナ河?!」

「生まれてこの方、そのサヴォーナ以外にサヴォーナなるものを知らんな、俺は」

「大陸の南東の端っこじゃない!」

「長旅の目的地には丁度いいだろう?」

笑う蟹に、呆れる少女。

それでも少女の心は、一時、まだ見ぬサヴォーナを思い浮かべる。

この世の楽園と、古の詩人が歌にした地。

限りなく透明な水、深い水底には、色とりどりの魚、蟹、貝、水草が生えている。

その様は、如何なる造園師の作庭にも負けない幽玄玄妙。万凜光輝の精髓である。

神の自然さが潜む、素朴かつ風光明媚な佇まい。清流はそのまま掬って飲める程に清浄で、

川のせせらぎは、教会の賛美歌よりも聖鍊されている。

柔らかな岩。独特の形の緑、河に集い囲むようにそびえる花と草。

花草に潜む虫の合奏曲。呼応するような蛙の鳴き声、鳥の鳴き音。

天に月あらば、水面に月あり。

空に日あらば、水面に日あり。

水面の月は、銀を越えて金色。

水面の日は、金を越えて銀色。

そう讃えられるは、水影に映る月光と落日の、朱の美しさが伝わる
河畔。

世界の縮図であり、楽園の縮図そのもの。

古き詩人の愛した地。

それこそがインザーディオ、サヴォーナ

いつしか少女は時を忘れて、蟹の故郷を幻視する。

そしてそこに己と蟹が、冒険者として訪れる姿も。

3

午後の三時を回ったところで、少女は空腹を訴え、蟹は、一人甲板でそれを待っていた。

あのような危機感の薄い少女が、

荒くれ者や素性の解らない不審者をたらふく抱え込んでいるこの船で一人にさせていいのか？という疑問が湧かなかったわけではない。

しかし少女の

「大丈夫なんだから！　　というかこれから冒険者になるんだからっ、これくらい出来ないとおかしいでしょ」という言葉と、なによりもその剣幕に押されたので、彼は一人ここにいた。

「おお！　これか」

「ああ、これこれ」

ふと海を眺める蟹の後ろから声が響く。

「……？」

身体を動かして、蟹が見たのは二人の男。

見かけない顔だ、蟹にとって見かけたことのある顔の方がこの世界では圧倒的少数ではあるが。

「ホントかよ」

「マジだって、ぜってえマジ、こいつの荷袋の中にたんまり光るゴールドデンブラボーが」

彼らは蟹と少女が乗船するときに、その一部始終を見ていた者たちだった。

なにしろ少女と蟹は、目立つ。

多くの乗船者が、蟹と少女のことを見ていた以上、彼らの財産や彼ら自身を獲物と考えた粗暴者が現れたとしても不思議ではない。

しかも相手は蟹。そして少女。

一見、あまり強そうでないことが、その粗暴を加速させる。

「なんだ、物盗りの類か」

蟹は鋏で己の脚を搔き、甲羅を一瞬震わせる。

黒い瞳を揺らした後に、興味なし。といった意図を込めた溜息をこれみよがしに吐く。

蟹は己の口内と口周辺と下腹に、己の言語を意志へと変換する、意志変換紋章を働かせている。

もう一つ、1000年の時を経て眠りから覚めた蟹への餞別として送られた紋章が、実は蟹には埋め込まれていた。

空気のふるえ、独自の周波、揺れを感知し、分析して、言語へと変換する、言語通訳紋章がそれである。

この二つの紋章を、誰かと会話するとき、あるいは意志疎通の必要が予測されるとき。

蟹は、己の魂の内の【力】を引き出し、口内の紋章群にそれを這わせて発現し、会話を可能としている。

声をそのままでは放つことの出来ない蟹の苦肉の策であり、現代の言語を理解出来ない蟹への友人たちの心遣いである。

つまり蟹の言葉は、この二人組に伝わり、

二人組の言葉は、蟹に伝わる。　そういうわけである。

「うおおおおお！　喋ったぞこいつ」

「お、おお、やっべえなマジこれ」

「ふむ、蟹が喋ったくらいで何を驚く」

「いやいやこりゃ驚くのも無理ないって、おおおお俺あ感激だなあおい」

「いやあ、すごい魔獣だな！ これ！」

「ほおお、蟹が喋るのは珍しいのか？ うん？ 魔獣でも言葉を解するものはあまりいないか、ほおお」

どこか嬉しそうな調子で、蟹は二つの鋏をぶんぶんと振り回す。

思いのほか長い鋏は、人の太股よりも厚く、内側は鋭く光る刃を形作っている。

「やべえな、蟹って喋るのか」

「マジすげえよアンタ」

心なしか機嫌よさそうに、蟹は、澄ました態度を取っている。

「で、なんのようだ？」

「いやあなんだったかな」

「うん、確かゴールデン」

「おおおそうだぜ兄弟、この俺、ハッシさまが思い出したぜ！」

「おお流石だなあ兄弟、この俺ボッシが聞いてやんぜ！」

「寸劇ならばあちらでやってくれないか？」

蟹が鋏で指し示すのは海。

「おいしい、この蟹意外とクール！」

「ふふん、俺はこう見えても仲間内で一番クールだよね生息域が！
って言われた蟹だからな！」

蟹が鋏を掻き鳴らす。

ハッシと名乗った男が、ニヤリと笑い。

ボッシと名乗った男が、舌で己の唇をなめ回す。

「さあてお遊びはこれぐらいにしとこうぜえ！ 蟹ちゃんよお」

「おめえの荷袋の中にあるもんよこしてくれないかあい」

飢えた狼さながらの、モデルを捉えた画家さながらの、嫌らしい笑
みを浮かべて、粗暴者が蟹に凄む。

「ふゝむ、……なあ」

「ああん？」

「これはまさか俺は恐喝されているのか？」

「おいしい聞いたかよ！」

「恐喝されてんのか？だってよ！」

ゲハハハハと粗雑な笑い。

「頭のワリィ蟹だなあ」

「いやいや兄弟、頭はいいんじゃないか！　喋るし」

「うん、そうだな兄弟、じゃあなんだ？」

「なんだろう」

むむむ、と唸る二人は、何処か憎めない。
蟹も呆れたように、その光景を見ていた。

やがて、蟹は諦めたように、おもむろに二人に近づき、鋏を動かす。

「ふむ、お二人さん、これを見てくれないか」

「あん？　なんだよカニさん」

「おおお、大したことなかった……ら」

二人は見た。

蟹の鋏が、二人の粗暴者の身に付けていた剣を挟み込み。

そして、それがまるで飴細工のように、
スウィットと折れ曲がり、

まるで千歳飴のように、
バツンツと千切れ落ちる光景を。

「おお、おおお？ おおおおおつ おおおおお！！」

「兄弟、兄弟、しっかりしろ、おい兄弟」

「こんなもので、俺を相手にするつもりだったのか？」

蟹は凄む。円らな黒い瞳をぎらつかせて（精一杯）

意外とリーチのある、恐ろしい切れ味の鋏を、二人の男に突きつけた。

「ううう、外道がつ！ おおお新金貨五枚したんだぞこれ！」

「おお兄弟、そんなにうなだれて、糞この蟹野郎！ 人非人！！」

「ううむ、正しく俺は人ではないが」

——ここまで言われると相手が夜盗崩れの悪漢でも心が痛むなあ。

おいおいと男泣きをしていたハッシを名乗る男は、
しばらく経ってから涙を止め、男たるものの涙を流すべからず！
と言って、立ち上がり蟹の方を見据えた。

短く借り上げられた赤髪、それなりに己の命を削ってきたのか、
身体を張って生きてきたのか、
その身体には、小ささまざまな傷がついている。
同じような髪型、体型で、同じような身なりをしているもうひとり
の男はボッシというらしい。

「双子か？」
と蟹が聞くと。

「ノー！ 俺が兄弟と出会ったのは、酒場が初めてだよ」とハッシが応えた。

とりあえず、蟹の荷袋のことは忘れたようだ。
しかしかなり特異な思考形態をしているようで、蟹にとっては安心できない。

それよりも気になる文言が、あった。それは、

「酒場？ ……もしかして貴様らは冒険者なのか？」

「ふっふ！ そうともよ、Dランク冒険者の『紅金兄弟』ハッシさまたあ、俺のことよ！ おおお！」

「それで俺が、同じく『紅金兄弟』ボッシさまよ！ 通称知能担当のボッシ。盗んだお宝は数知れねえぜ！」

「夜盗崩れではなかったのだな……」

職業の貴賤善悪はともあれ、
活力だけはこの世界で再び眼を覚ましてから見た人間の中でも随一であろう兄弟を、蟹は感心したようにじろじろ眺める。

——ふむ。大した生命力だ。

己の脳天を掻き毟りながら、にわとりさながらの雄たけびを上げて

いる二人組。

——だが、この騒がしさ……嫌いではないな

「そんなに見るなよ蟹公、照れるぜ」

「おお流石兄弟！ 謙虚だねえ！」

基本的に物事を推し進める方が、赤い髪のハッシを名乗る男で、それを補佐している……のか？ ともかく補佐しているのがボッシらしいということ蟹は認識する。

「ふうむ、冒険者か、ではお前らは俺の先輩ということになるのかな」

その言葉に驚くのは兄弟。

「おお、なんだ、おお、もしかして蟹さん」

「ペンタだ」

「ペンタ……はっ、鳥みてえな名前だなこの野郎」

「兄弟、脱線脱線」

「ん、おお！ おうお前この蟹野郎、なんだお前は冒険者になるつもりなのか？」

蟹は、何を当然のことをを、と胸の代わりに腹殻を張り、兄弟に応える。

「当然だ！」

「蟹なのにか」

「勿論だ！」

「甲殻類の分際でか、この野郎」

「人間如きでもなれるのだ、俺がなれぬという法もあるまいよ」

「字とかどうすんだよ！」

「誰かに書いてもらうよ」

「というか兄弟！あんたも字かけないぜ！　という言葉に。」

「お、おおそうだったな！」と兄弟の漫才めいた会話。

それを横目に、蟹は、自らを誇るように、俺も冒険者だと悦に入っ
たかのように、誇らしげな様子。

「蟹よお、気に入ったぜその根性！」

「甲殻類だからといって舐めないでもいい」

「オーケーオーケー、おめえも今日から兄弟みてえなもんだ、てめ
えを馬鹿にする奴がいたらぶつとばしてやんよ」

——兄弟兄弟、さっきまであんたが一番蟹ばかりしてたぜえ！　ば
っかおめえ細けえこたあいんだよ！

「ふむ、知己が少なくてな、その申し出ありがたい。兄弟の方は勘
弁願いたいがな！」

「なんだいノリの悪い蟹野郎だぜ、わびさびとか仁義ってえもんが
わかってねえ」

「兄弟はそんな講談本ばっか読んでやすからね、大した盗人だぜ！」

「まあこれも何かの機会だ、聞きたいことがあるのだからいいか？」

蟹は鉢を掲げ、海と船を遮っている柵の方を向く。

呆れと興味、相反するような感情を持ち併せ、蟹は聞く。

とはいえ、その心に嫌はなく、騒がしい生命、犯罪者の欲望。どこか憎めない人間の心地を味わい、一種楽しげだ。

穴蔵で寝ていたのなら起こりえなかった出会い、見ることの叶わなかった人間観察の機会。

その出会いから、蟹はむしろこの上なく上機嫌であった。

「おいしいともさ、俺らにわかることなら是非聞きな！ペンタ」

「へっへ、兄弟マジテンションあがりっぱなしっすね」

——あたぼうよ！　へへ。　お前らは何時もこんなテンションなのか？　あたぼうよ！

蟹は甲羅を抑える。彼なりの頭が痛いというジェスチャーである。この場合は、蟹味噌が痛むとも言えいいのか、蟹の魂が痛むと言えいいのか。

「ああ、それでは聞きたいんだが——」

質問するのは、先ほど兄弟が述べたランクについて。

本当にこいつら聞いて大丈夫なのか？という疑問がないわけではない。

蟹の心配の通り、

兄弟の説明は、いたく要領をえず、
あちらこちら迷い脱線する様は疲れ果てた蜜蜂のようであったので、
ここでは割愛しておく。

無軌道とは限りを尽くせば、描写に困るものなのだ。

説明の結果、蟹が得た情報はこうであった。

曰く、冒険者はFからAのランクがある。

迷宮都市ごと、地域ごとに名前が違い、北方では初心者冒険者から
最高位冒険者。

南方では第六位冒険者から第一位冒険者。となっているらしい。

冒険者になるには、迷宮管理組合に行き、そこで受付登録を済ませ
る必要がある。

これは意外と簡単で、さくさくと進むらしい、余程の不適格者でな
ければまず受かるとのことだ。

そして受付を通れば晴れて初心者冒険者だ。

これは簡単な身分証明になる。

ただし実のところ初心者冒険者、エミダリではFランク冒険者は冒
険者見習いみたいなもので、

軍で言うのなら新兵を越えない程度。

そこでは未だ懷疑と試練の眼差しが都市から、行政から、組合から、
軍から、与えられ続ける。

とのことである。身分証明の証としては正直、心許なく、迷宮と酒場の利用許可のようなものらしい。

真の冒険者とは即ち下級冒険者。Eランクからである。

Eランク冒険者を目指してFランク冒険者は迷宮を駆け、地域を駆け、戦い採取し、努力して酒場に己の位置を作っていく。らしい（相当の意識であり、蟹が己の理解能力を限界まで働かせた結果の要約であることは疑いえない）

いやに濃密で、錯乱した時間を、
二人の粗暴で、欲望に素直だが、どこか憎めない冒険者二人と過ごした蟹。

この奇異な邂逅も、しかし彼らに用事があると言うことで、終わりを告げようとしていた。

「ってわけさ！」

「兄弟流石！」

「ふむ、それはいいのだが、お前たちは『紅金兄弟』という渾名を持っているのだろうか？」

だが、渾名を持てるのは、上位の冒険者や特別な業績をもった冒険者が、その名で広く呼ばれて、

それが審査の上で組合に認められて初めて正式な『称号』として認定されると先ほどおまえたちから聞

いたが」

「うぐぐ」

「あつ、だめだぜカニさんよお兄弟は自称ってことにコンプレックスもってんだからさ」

「……自称なのか」

「当然だぜえ、称号持ちはちゃんと組合や行政の側の書類に記載される特別な連中だからな」

「うぎぎぎぎ」

きよ、きょうだい！ うぐぐぐ

ハッシは口から蟹のように泡を吹いて、白目のまま、船内へと通じる扉へとふらふら向かっていく。

ボッシが、それを追い、蟹はそれを大人しく見送っている。

——まるで台風一過であったな。

そう独りごちながら、蟹は、鋏を手のように振り上げ、左右に大きく振る。

船上で出会った奇妙な二人組、縁があればまた出会うこともあるだろう。

なぜなら——

「俺も、冒険者になるのだからな」

どこか愛らしい風情を漂わせて、

人の半分程の高さのある蟹は、その鋏を手のように振り続ける。

それは遊びを終えた童子の別れ時に、不思議とそっくりである。

蟹、人、なんのその、そんな違いなど些末と切り捨てて、船は目的地へと進み続ける。

日も大分落ちてきた。見れば白い渡り鳥が羽を休めるように、甲板の縁に泊まっている。

渡り鳥、白い鳥、虹色の鳥、白、白、赤、白、白、赤、虹、白、黒。

カラフルな鳥の群れの中に一匹の鴉。

場違いなそれが、カーと鳴く。

「……おまたせ」

「ん？ おおルナ！」

蟹が声を掛けられ振り返ると、そこいたのは少女ルナーレ。
いやにげっそりとした表情。

内海は徐々に朱に染まりつつ、春の夕方特有の妙に肌寒い風が、蟹
と少女を包み込む。

少女は風を嫌い、己のマントの前を紐で締め、それから逃げるよう
に身を丸めた。

向くのはいよいよ陽が落ちつつある春の一日の終わり。
既に法の月、四つめの月。

とはいえ陽の落ちるのは、夏に比べれば幾分はやい。

「いやに遅かったな」

「ええ、ちよつとね」

言う少女の顔は陰っている。

「何かあったのか？」

「あったわよ」

「まさか……」

身体をいのように弄ばれて！ と蟹は口に出した瞬間に、少女は、蟹の腹部を思いつき蹴り上げた。

ガズンッ、という鈍い音。

「ぐっ、ちよつと痛かったではないか！」

「あ、あんたがデリカシーのないこと言うからでしょ、この蟹っ！」
「むう、では」

「ちやんとご飯食べたわよ、というかガキじゃないんだから大丈夫よ。」

それに食堂なんかは色々な立場の、色々な仕事の人が集まるからむしろ安心できたわよ」

「といって、意外と緊張していたルナーレであった」

「う、うるさわねっ！」

凶星なのか。と

子供が首を傾げるように、ミミズクが小首を傾げるように、蟹が甲羅と鋏を斜めに傾け、少女を見る。

「うう……ええ、認めるわよ！
案外、人が一杯いて怖かったわよ！ ええ認めればいいんでしょ？
！」

「ううむ、そこまでは言っていないのだが」

「うっさい！」

ぷんぷんと怒るルナーレと、ううむ初めてのリアクションだ、どうすればいいのか。
と悩むように身体を落ち込ませる蟹。

どちらかというとき余りよくない空気を払拭するため、
ますます水面を朱く染め上げている巨大な夕陽を背景に、
蟹は、話題を変えようと考えてる。

「う、うむ、それでは何故こんなにも時間がかかったのだ？ 2時間
は余裕で経過してるぞ」

「……………わよ」

「ん？」

「……………えないわよ」

「すまんが聞こえないのだが」

「言えないって言ってんの！！」

いやに激しい剣幕で、蟹はきよろきよろと首の代わりに鋏を振り回

す。

空気は払拭されるどころか、より重くなっている。

—— 一体これはどうしたことから？

そして何故、少女は言えないのか。

恥ずかしいことなのか？

急に起こったことなのか？

少女。言わない。他者に知られるのが恥ずかしい？

分析。分析中です。

蟹は、蟹味噌に走る擬似的な脳神経を働かせに働かせた。

魂と意識が、励起し、加速の極限に達したエンジンのように、その思考速度は上昇し続け。

そして閃く。蟹がこの答えを思いつく可能性は実のところ、恐ろしく低かった。

だが閃いたのだ、人間の構造に決して詳しい訳ではない蟹は見事に閃いたのだった。

それこそ神の思し召しか！（既に蟹自身が始末している神か、蟹の友人ではある神しかこの世界にはいないが）

急に訪れた閃きに、鋏をガチンッ！ 打ち鳴らして蟹は叫ぶ。

「そうか分かったぞ！ 分かった！」

「……なによ」

「せい……グッ」

少女が渾身の力で蟹の腹部を蹴り上げた。

外甲殻に比べて柔らかいとはいえ、それなりに強固な蟹の腹部を揺るがす振動の大きさが、

少女の激情、もしくは羞恥の感情の大きさを如実に表していた。

「さいてー！！！」

しばらく経って、

少女と蟹は落ち着いたのか、二人でまた海を見ている。

驚く程に悪化した空気も、今は奇跡的に回復していた。

夕陽はいよいよ半分近くが、内海の底に沈みつつあり、

太陽に晒された鏡面のような海のキャンパスは、限界まで黄紅（おうこう）の光が殖え満ち広がる。

一面を覆う、陽と海と陸。

光が織り成す、大自然のグラデーションは、如何なる一流の画家でさえも再現不可能な神秘の美。

印象派を越えて、写実派を越えて、真に迫る、迫力の情景が二人の眼前にある。

それは圧巻の景勝。きゅうきなまうぜん究竟超然。実に素晴らしい絶景であった。

感動に打ち震えているのは、

この光景を初めてみたらしいルナーレと

もう一人は、郷愁により想いを遙か彼方、己の始原にさまよわせていたらしいデンザロスであった。

多くの旅人は、そのような光景は見慣れているといった風情で、精々が少し綺麗な日常の風景といった様子で、己の話に添える一輪の花程度にしか感じていないようである。

だが時折、数人の巡礼者らしき旅人。

未だ幼い幼女。少女。見るからに山育ちといった亜人が、デンザロ
スたちと同じように

息をのみ、心を打ち震るわせ、祈るように、その光景を見ていた。

あるのは、神秘。？々しさを感じる、風景。

少女はただ一言。

「……きれい」

と零しただけであった。

「いやあ思いのほか速かったなあ」

「ええ、もう着くんだから、ホントに早いわよね」

「ふむ、これも紋章機巧の力という奴か」

「凄いわね紋章と【力】ってやつは」

少女が人ごとのように呟く。

蟹がそれをめざとく聞きつけて、率直に聞く。

「何故ひとごとなのだ？」

「え、だってあたしつかえないもの、魔導なんて」

……

……………？

「……………えっ？」

「……………えっ？」

ひゅー、と吹くのは風の音。

「ルナーレお前、魔導も使えないのか?!」

「ちょ、ちょっと待ってペンタあんたもしかして使えるの?!」

「当然であろう、むしろ使えないのか？」

「いや普通は使えないわよ、というかなんでそんなこと黙って」

——聞かれなかったからな（シャキーン）

鋏を輝かせ、ニヒルな調子で蟹が呟く。

この突飛な行動は、彼の動揺の現れか、元々の性格か、その両方か。

「……はあ」

と溜息を吐き、氣勢が削がれたらしいルナーレ。

蟹は、未だに少し愕然としている。

「いやそうか、それでは意外と大変というか、本当に冒険者などできるか？」

驚きの余り物言いが率直になる。

「な、なによ今更、……で、出来るわよ？ ホントよ？」

「いや気概は疑ってないが、うん。」

というよりもよく考えれば使えるなら最初あった時、使ってたよな……うん」

「な、なによっ！ ベ、別に……そんな言い方しなくてもいいじゃない。」

一緒に冒険者になるってさっき言ったばかりなのに……」

どこかいじけたような少女、背後、ようやく夕陽が降りきったところであった。

「いや、すまんな前提が崩れたというか。てっきり使えるものとも思い込んでいた俺が悪いのだ」

「むゝ」

「むゝ？」

少女は慌てたように、背筋を伸ばす。

そして腰に提げていた、ようやく重みに慣れてきたらしき剣を、おもむろに構える。

「ん?!」

「なんでいまちょっと後ろに引いたのよ!!」

別に何もしないわよ、ただ。

「ただ、魔導が使えなくても出来ることがあるのを見せたくなっただけよ!」

「ほう、それはまたなぜ？」

「う、うるさいわね、魔導が使えなくてもあたしには剣があるんだから、冒険者になるのも問題ないのよ!」

そう言って、血気盛んに剣を素振りし始める少女。

剣法における基礎の基礎。素振り。

見返すように、あるいは主人に失望されないように必死に芸をおこなう子犬のような体のルナーレ。

ふっ、ふっ、と己の身体に合っていない大きめの長剣を振り回す一四歳が、甲板で、蟹と戯れる。

蝸牛が30cm進む程の時間が過ぎる。

ふう、ふう、と汗を拭い。

どうだ、と言わんばかりに蟹を見詰める少女。

「いや、うん筋は悪くないと思うぞ、うん剣筋も綺麗だ」

ばああと顔が明るくなる少女。

ただし、と付け加える蟹は本当に空気を読むことが出来るのだろうか

「そのなんだ、言いたくないが、

……剣が身体に合っていないと、思うぞ、……剣の重みところどころ身体を引っ張られていたような」

「うがー！ー！！ あんたなんのよさっきからもう！！ なに？！

なんか文句あんの?!」

蟹をぼこぼこ叩く少女。

金剛よりも堅いだろう彼の甲羅には傷一つ付かない。

ただし、蟹の苦手な衝撃は、どしどしと彼の身体にぶつかってきているのだが。

やがて疲れたのか、少女はぜいぜいと息を激しく吐きながら、顔を俯かせている。

「……そうよ、私は所詮、村娘だもん、面倒になったんでしょ?!」

「うむ」

うつむいた顔を思わず上げて、裏切られたように顔を大きく歪める少女。

己の窮地を救い、燻っていた己を停滞した境遇から助け出し、一緒に旅をする仲間として、確かに絆を感じ始めていた矢先のことだ。

少女は愕然として、口をパクパクと開いて、そしてまた俯く。

その感情は大きく揺さぶられて、一滴、一滴、しょっぱい露が彼女の顔から流れる。

表情は伺えない。

蟹は、少女を一瞥し、せっかちなこの少女に呆れを感じ、そして己がまだまだ信頼されていないことを知ったのだった。

つまりは見切りの早い者とも思われているのは蟹にとってもしやくだった。

——これぐらいで、見捨てるとそう思われている、そういうことなのだから。

「面倒だ」

強調するように、しっかりと言葉を作る蟹。

少女は肩を大きく振るわせた。

「……教えなければならぬことが沢山できてしまったではないか」

「つ……っえ？」

「ふむ、俺が魔導を教えてやってもいいが、俺は細かい【力】操作が苦手であ、古い知人に連絡を取らなけれ

ばならないなあ」

「……なっ、なに言ってるのよ?!」

「闘法、身のこなしも古い知り合いの伝手を辿らなければなあ、ああ面倒だ面倒だなあ」

チラッと蟹は少女を左顧する。

少女はびくつ、と身体を反応させ、急いで、顔を拭って、蟹と向き合う。

恐れをねじ伏せ、誤解を恥めるかのような挙動。

そして少女の脳に、蟹の言葉の意味が及んだとき、喜びとさらなる己への恥ずかしさから、少女は顔を赤らめて、柔らかに破顔した。

その朱くなった頬を隠すように、彼女は既に暗く、どこか得体の知れない不気味さを潤沢に讃えている海に頭を動かす。

蟹は、その少女の行動を、その眼でしっかりと確認しながら、なにも知らないように、なにも気付いていないかのように、それとなく言葉を作った。

「それに冒険者の知識やら、都市の仕組み。

職業も、武器も、薬も、施設も、役割も、なにかも知らないのは俺も一緒だ。

いやむしろその辺りは、少しでも勉強していたルナーレには負けるかもしれん」

海を見ながら、耳をそばだてるのは少女。

「二人で一緒に、……その、なんだ。

ん……冒険者のなんたるかを学んで行こうではないか」

潮騒。海の匂い。月の光。

月明は幽かなれど、肌を染めるには十分で、月代は今日も変わりなく己の裸身を降り注ぐ。

照らし出されている海は月輪を眩しく思うこともない。

その形は仙美あふれる半輪。

波光は揺らめき、陽炎のように淡く月の影を風ぐ。

白む月は清明そのもの、星明かりさえも月下を輝かせ、

山紫水明は、玄趣極まりない水墨画の一部と化している。

仰げば尊く、俯けば等しく、

永遠に、そして永久に、泰然とそこにある者。汝、その名は「自然」である。

夜が地を墜ち、鳥が賢しく狩りをして。

蜂が怒って回りに回り、花が夜に潜み。

日が空を登り、魚が愚かに逃げまどい。

蝶が笑って舞いを舞い、種が世に出る。

それら全ての自然さと同じように、蟹と少女は笑い合う。

そんな自然的一幕。

そんな一幕であったのだ。

少女と蟹が、お互いに笑い合うその様は。

そんな一幕であったのだ。

船は進む、どこか気恥ずかしい空気も、

その全てを置いて、自然の如く、船は進んだ。

対岸が見える。

すぐそこだ、もう後一〇分もせずに、大陸中央域エミダリ地方へと船が接岸する。

蟹と少女は、既に定位置と化している甲板の柵の前に二人で立ち、遙か向こうに消え去りつつある夜の海を見送るように眺めやる。

黙々とした空気。

「そういえば友人の話なのだがな」

「なによ」

「この世界の発展を押し留めているのが魔導っていう話なんだが」

「おかしいんじゃないのその人？」

「うむ、頭が常時弾け気味なのは認めるがな一応学者だ」

あんたの交友関係が怖い、とルナーレの不審な眼差し。

いやいや、蟹の一匹や二匹、学者の一匹や二匹、友人にいるものだ
よ。とペンタ。

「で、この世の当然の原理を使わないでどうやって発展するの？」

「いやそいつが言うには科学で発展するらしい」

「カガクウ？」

うむ、と蟹。大きな甲羅の上には荷物、そして立っているのに疲れ
たのか少女。

月を仰ぐように座る少女に、海を睥睨する蟹。

「そうだ、そいつが言うらしいのは、世界の現在の文明を発展させ
たのは魔導や魔法。」

所謂【力】によるが、その実これは枷であるらしい」

ワケガワカラナイ、と少女ルナーレ。

蟹ことデンザロスこと、ペンタは続ける。

「『この技術には限界があるのだよ、デ……ペンタ』というのはそ
いつの一つの口癖だった。」

その限界とは、【力】とは、その技術体系が、決して個人の主観を

越えないということにある。
だそうだ」

「いいことじゃない、一人の人間の研鑽が、人を何処までも高みに押し上げていくってことでしょ？」

「一概にそうとも言い切れないらしい、例えばこの船は、魔導により造られているが、

これは儀式大家と呼ばれる卓越した個人を数名集めて、船に器を作り出し、紋章の構成を考えてそれに対応させる。

そうやって製作されている技術なわけだ。

実のところ、このプロセスは非常に遅く、なによりも個人の感覚と才能に頼りすぎている技術だ。

時間という限界、一人の人間に出来ることの限界。それを越えることがこの技術はできない。

一つのアイデアが生まれても、実現に時間がかかる。そもそも特定の人間がいなければ達成できないという不完全な技術。

いや、その特定の技術を誰もが修めることのできない時代があるという可能性。それが【力】であるという話だ」

「で、代わりに科学を使うの？」

「ああ、この世の法則、裏切らない物質の規則、極めて客観的な自然のプロセスは、

原理さえ解明されれば、確実で、一定の速度で、誰もが使える技術を生み出すことが出来る。

そしてそれは才能や修行あるなしに関わらず多くの人間が関与できる形態、だ。

勿論、学習、知識の洗練、教育陶冶の錬磨というものは欠かせない

が、

それにしたって、卓越した儀式大家一人が生まれる可能性に比べれば。

卓越した知識人、学者の生まれる可能性の方が圧倒的に高い。

たった一人の人間、個々に焦点を置いた【力】というものに対して、科学は数により進み洗練されていく、というのがそいつの持論だったな」

「ふーん。中々面白いけど、色々と不確定で、現実味のない話ね」

「ああ、そいつも言ってたよ。

【力】というものの有用性が後少しでも悪く、その汎用性、その使用可能人数もっと少なければ、多分間違はなく、科学の世界は訪れていた。と、ただ、なまじ技術としても武力としても有効なこの【力】の前に科学が発展することはないだろう」

という推論だ、どうだ暇つぶしになったか？

と問いかける蟹。

蟹に座り、脚をぶらぶらと動かしていたルナーレは何処か気怠げだ。

「そうね暇つぶしにはなったかしら」

「そうか。それはなにより」

気付けば船が、港湾へと寄せていた。

ここは既にエミダリ地方。

内海北方に二つある港湾都市の、西側。

通称――エミダリ西部港湾。

ここに至り、古都にして、旧都である、迷宮としエミダリは徒歩で三時間という直近だ。

蟹と少女も、降り口から、そそくさと、その街に降りる。

交易の盛んな街にありがちな夜も眠らない大きな喧噪。

どこかわくわくとした表情の少女と蟹。

蟹は鋏をぶつけて、あっちへふらふら、こっちへふらふら。

少女も、流れの屋台に興味を注いでいる最中であつた。

「ん？」

「どうした？」

ルナ、と呼びかけるペンタ。

曖昧に言葉を濁して少女は、一つの方角を見ている。

「おかしわね、いま確かに裏路地に」

「裏路地がどうかしたか？」

ざっざっ、と蟹の足音。鋏の鳴る音はシャキン。

甲羅の偉容、繁華街の酔っ払いを掻き分け、今夜のお宿を探す二人は目立っている。

蟹が現在、少女の誰何に応えるように停止していることも、その状況に拍車を掛けていた。

「いますごく綺麗で背の高い金髪の女の人が、路地裏に居てこっちを見てたんだけど……」

うーん。と唸る。

蟹も件の路地裏を見ているが、しかし……

「なにもいないぞ？」

「だから唸ってるんでしょ！」

「幽霊か何かだったりしてな」

カカカ、と笑う蟹に、物怖じするところは徹底してあり得ない。

平然と鋏を掻き鳴らしている、八つ脚の甲殻類。

「ゆ、ゆうれいなんて居るわけないでしょっ！」

「グールとか」

「うっ」

「ゴーストとか」

「ううっ」

「スケルトンとか」

「うううっ」

「ルナよ、お前…… 幽霊が怖いのか？」

「っ……は、はあ?! ま、まさかそんなわけないでしょっ!!」

ふざけるのも大概にしてよね、と蟹から降りて、少女はそそくさと現場から立ち去り始める。

その露骨さには、蟹も呆れながら笑っている。

蟹が蟹らしい強靱で鋭い顎を震わせ、動かし、笑って、少女を追いかける。

楽しげな二人。

それを遠く見据える影が一つあった。

高い建物に影のように寄り添って、蟹と少女を見詰めるのは金髪の女性。

いよいよ夜も更け始める。

金髪の女は、懐から鉄仮面を取り出して、そして無造作に宙へと跳

躍する。

路地と路地の合間。薄暗い闇へと溶けるように落ちて消える金の影。

あとには何も残らず。

どこからか少女と蟹の楽しげな笑いが聞こえるのみであった。

船上にて 蟹と少女 騒がしい奴ら 照れるものたち（後書き）

魔軍三六将

『鬼王』ケップタイオス

タレンコイア山稜、ティンダロス連邦の出身。

言わずと知れた鬼^{オーガ}の王。

その性質は、凶暴にして残虐。

ただし卑怯は好まないという由緒正しき戦闘狂である。

正々堂々と敵を殺し、女を犯し、街を燃やし、強者と戦うことに命を掛ける。

気っ風のよい鬼^{オーガ}の全氏族長。

脳味噌は鬼族らしい筋肉一色、粗暴で、短絡的だが、自称鬼族史上最も頭のよい鬼族。

書物でたき火をする趣味がある、野人極まりない下劣な亜人である。

亜人の連合国であるティンダロス連邦の総軍団長でもあり、

『英雄進撃』の最中にあった『有角姫』ネーベンハウスと戦場で幾度も激突した。

バーラ砦の決闘と呼ばれる一晩の死闘。

『有角姫』と『鬼王』のその戦いを、最終的に『有角姫』が勝利し、その後その強さに惚れ込んで感激したケップタイオスは潔く軍を退く。

この時に意気投合した二人は、ダーナ（オーガの言葉で『終生の絆』）の誓いを結び、

以降二人は、宿敵にして、親友にして、同盟者にして、契約者にして、義姉弟という関係になったのである。

天上戦争においては、『有角姫』が天上の旧神に喧嘩を売ったと聞いて、

いても経ってもいられず魔王領に駆けつけ『有角姫』に助力。

以降『有角姫』の股肱の臣として、ほぼ全ての戦闘に参加。

己の姉となった『有角姫』のため『死』ファイニを撲殺。

その他にも多くの天使を縊り殺した。

新暦においては『神官』至高神に最もよく仕えた亜人と言うことで、一般の民衆にも広く知られている数少ない魔将の一人である。
現在も『有角姫』に荷物持ちとして付き従い、世界中を回っていると考えられる。

『鴉』

出身不明。

かつて地上に落ちた墮神に飼われていた一匹の鴉が変質した姿。
己の飼い主の骸を喰らい類い希な理解力と記憶力を獲得。
以降世界中を旅していた。

名前はなく、ただ『鴉』と呼ばれる存在である。

脅威の神秘大家であり、己の魂と存在を無限に分割できる異能が特徴。

戦闘能力こそ高くないが、諜報、監視、連絡、策動のあらゆる分野で活躍する。

無数の『鴉』は世界中に散らばっており、記憶は共有され、常に相互に伝達される。

地軍には気がついたら参加していた。

その動機は不明。

己の主が墮神であったことと関係があるのかもしれない。

天上戦争においては、その異能により活躍。

というよりもこの『鴉』がいなければ天上戦争における勝利は有り得なかったといってもよい。

新暦においては『神僕』忘却と記憶を差配する、神の使いとしてごく一部で崇められている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7090w/>

異世界を舞台にした冒険者と人外の迷宮物

2011年10月9日00時23分発行